

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集

高 知 城 跡

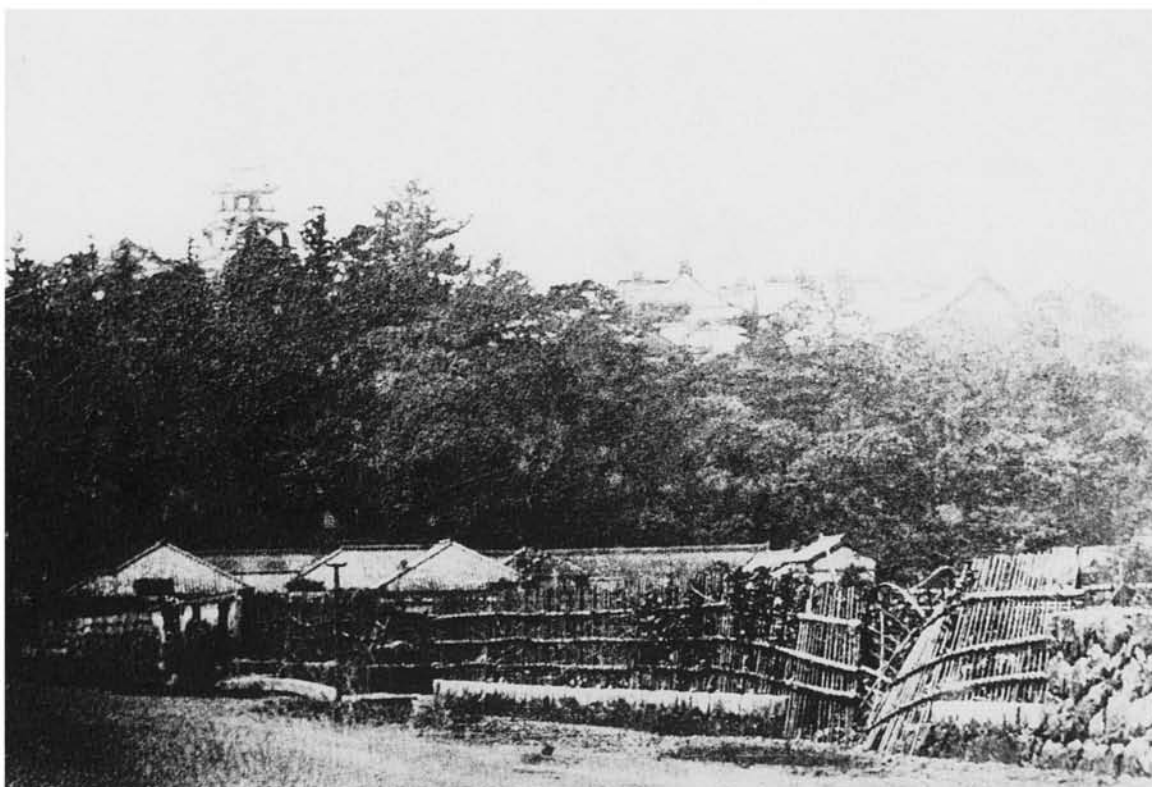
伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書

1 9 9 5・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



明治初年ごろの高知城本丸前



明治初期の追手筋と高知城

(高知市民図書館蔵)

序

高知城は、観光県高知のシンボリック的存在として、毎年県内外からの大勢の観光客をお迎えしております。また、高知県民の日常生活の中においても、散歩やジョギング、小学校の遠足や写生会、そして花見など、日々訪れる人は絶えません。斯様に身近な印象の強い高知城ではありますが、その地中には山内時代から長宗我部時代にまで溯る貴重な文化財が包蔵されております。

この度の調査は、高知市立動物園跡地の史跡整備事業に際し、遺構の遺存状態等を把握することを目的とし、その結果を整備計画に活用することを前提に、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施したものであります。当初、良好な遺存状態は予想されておりましたが、これに反して中近世の種々の貴重な新資料が出土し、大きな成果をあげることができました。

本書が歴史学及び考古学等、学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この度の調査に際しまして多大な御協力を賜りました高知城管理事務所をはじめとする関係者、ならびに調査、整理作業に従事していただきました皆様に心より御礼申し上げます。

平成7年3月31日

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 原 雅 彦

例 言

1. 本書は史跡整備事業に伴う、高知城跡の発掘調査報告書である。
2. 高知城跡の所在地は高知県高知市丸ノ内である。
3. 調査対象面積は2,100㎡、発掘調査面積は930㎡である。調査期間は平成6年7月4日～10月6日である。
4. 発掘調査及び整理作業は財団法人高知県文化財埋蔵文化財センターが実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査員	森田尚宏	(財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター・調査第2係長)
同	宮地早苗	(同・主任調査員)
同	寺川 嗣	(高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班・社会教育主事)
同	曾我貴行	(財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター・調査員)
調査総括	明神睦起	(同・調査課長)
調査事務	井上幸雄	(同・総務課長)
同	三浦康寛	(同・総務課主幹)

5. 本書の執筆・編集は宮地早苗、曾我貴行がおこなった。執筆分担は以下のとおりである。
宮地 第II章、第IV章-(4)~(7) 曾我 第I章、第III章、第IV章-(1)~(3)、第V章
6. 遺構等についてはそれぞれSD(溝状遺構)、SK(土坑状遺構)、SX(石列状遺構、礎石)、P(ピット状遺構)、TR(トレンチ)等の略号で表記し、遺構番号は各調査区での通し番号である。
7. 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とし、これに一部は1/1(銭貨)、1/4(軒丸瓦・軒平瓦・火鉢・大型の陶器)、1/6(丸瓦・平瓦・大型の陶器)の縮尺とした。図版及び挿図中の番号は実測図の番号と一致している。
8. 出土遺物の色調については「新版標準土色帖1994年版」の名称を使用した。
9. 図1は国土地理院1:25,000地形図「高知」を使用した。
10. 遺構測量ならびに遺物の取り上げは任意座標でおこない、挿図中の標高は海拔高を示す。
11. 出土した肥前系陶磁器の一部については、村上伸之氏(石田町歴史民俗資料館)から数多くの有益な御助言、御教示を賜った。記して衷心より謝意を表したい。
12. 巻頭写真図版の掲載に際しては、所蔵機関である高知市民図書館資料室の御快諾をいただき、種々の御配慮を賜った。記して衷心よりの謝意を表したい。
13. 発掘調査においては田上浩氏(高知市教育委員会派遣職員)の御協力を得た。また発掘調査及び報告書作成に際しては、財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター、高知県立歴史民俗資料館、高知県教育委員会の諸氏から御助言・御協力を賜り、整理作業では財団法人高知県文化財埋蔵文化財センターの整理作業員の皆様の御協力を得た。
14. 発掘作業においては、共運工業有限会社、ならびに高知市及び近郊の方々の献身的な御協力を得た。次に御芳名を記し、厚く御礼申し上げたい。
池田久利 島津忠利 島津清代香 松本千代 中平 教 上田佳津子
川中典代 谷岡正章 和田 誠 小松和則 石川康人
15. 遺跡の略号は「94-13KC」とし、出土遺物の注記等にはこれを使用した。
16. 出土遺物等は財団法人高知県文化財埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 I 章 調査に至る経過	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	2
第 III 章 調査の概要	6
(1) 高知城跡の概要	6
(2) 伝御台所屋敷跡の概要	7
(3) 伝御台所屋敷跡の既往の調査	7
(4) 調査の方法	7
第 IV 章 調査の成果	10
(1) I 区の調査	10
(2) II 区の調査	36
(3) III 区の調査	37
(4) IV 区の調査	68
(5) V 区の調査	74
(6) VI 区の調査	76
(7) VII 区の調査	79
第 V 章 総括	85
(附) 高知城跡基準点一覧	

挿 図 目 次

図 1	高知城跡と周辺の遺跡	3
図 2	高知城跡調査対象地位置図	6
図 3	調査区配置図	8
図 4	I 区的位置	10
図 5	I 区全体図	11
図 6	I 区 T R 土層断面図	11
図 7	I 区出土遺物 (土師質土器)	12
図 8	I 区出土遺物 (焼塩壺・須恵器・青磁)	13
図 9	I 区出土遺物 (陶器)	14
図 10	I 区出土遺物 (陶器、播鉢)	15
図 11	I 区出土遺物 (陶器、甕)	16
図 12	I 区出土遺物 (磁器、蓋・碗)	17
図 13	I 区出土遺物 (磁器、碗)	18
図 14	I 区出土遺物 (磁器、皿)	19
図 15	I 区出土遺物 (磁器)	20
図 16	I 区出土遺物 (瓦)	21
図 17	I 区出土遺物 (瓦)	22
図 18	I 区 S X 1 (石列状遺構、礎石 1・2)	23
図 19	I 区 S D 1	24
図 20	S D 1 出土遺物	25
図 21	S D 1 出土遺物 (瓦)	26
図 22	S D 1 出土遺物 (瓦)	27
図 23	I 区 S K 1・3	28
図 24	S K 1 出土遺物	29
図 25	S K 1 出土遺物	30
図 26	S K 1 出土遺物	31
図 27	I 区 S K 2	32
図 28	S K 2 出土遺物	33
図 29	S K 2・3 出土遺物	34
図 30	S K 2 出土遺物 (瓦)	35
図 31	II 区的位置	36
図 32	II 区全体図	36
図 33	II 区 P 1	36
図 34	III 区的位置	37
図 35	III 区土層断面図	39~40
図 36	III 区全体図	38
図 37	III 区出土遺物 (土師質土器)	41
図 38	III 区出土遺物 (土師質土器)	42

図39	Ⅲ区出土遺物	43
図40	Ⅲ区出土遺物	44
図41	Ⅲ区出土遺物	45
図42	Ⅲ区S D 1	46
図43	Ⅲ区S D 1 出土遺物	47
図44	Ⅲ区S K 1	47
図45	S K 1・2 出土遺物	48
図46	Ⅲ区S K 2	48
図47	Ⅲ区S K 3	49
図48	S K 3 出土遺物 (土師質土器)	50
図49	S K 3 出土遺物	51
図50	Ⅲ区S K 4	52
図51	S K 4 出土遺物 (土師質土器)	53
図52	S K 4 出土遺物 (土師質土器)	54
図53	S K 4 出土遺物 (土師質土器)	55
図54	Ⅲ区S K 5	56
図55	S K 5 出土遺物 (土師質土器)	57
図56	S K 5 出土遺物	58
図57	Ⅲ区P 1～8	59
図58	P 1～11 出土遺物	60
図59	Ⅲ区P 9・10・12～18	61
図60	P 12～24 出土遺物	62
図61	Ⅲ区P 19～27	63
図62	Ⅲ区P 11・28～35	64
図63	P 25～35 出土遺物	66
図64	Ⅳ区の位置	68
図65	Ⅳ区T R 1	69
図66	Ⅳ区T R 2～4 平面図	71
図67	Ⅳ区T R 2～4 断面図	72
図68	Ⅳ区出土遺物	73
図69	Ⅴ区の位置	74
図70	Ⅴ区T R 1・2 東壁土層断面図	75
図71	Ⅵ区の位置	76
図72	Ⅵ区T R 1 南壁土層断面図	77
図73	Ⅵ区T R 2 南壁土層断面図	78
図74	Ⅶ区の位置	79
図75	Ⅶ区全体図・土層断面図	80
図76	Ⅶ区出土遺物	81
図77	Ⅶ区P 1	82
図78	Ⅶ区S K 1	82
図79	Ⅶ区S D 1	83

表 目 次

表 1	高知城跡と周辺の遺跡一覧表	2
表 2	III区ピット状遺構計測表	67
表 3	VII区ピット状遺構計測表	84
	土師質土器観察表 1	89
	土師質土器観察表 2	90
	土師質土器観察表 3	91
	須恵器・瓦質土器観察表	92
	焼塩壺観察表	92
	陶器観察表	93
	磁器観察表 1	94
	磁器観察表 2	95
	土錘計測表	95
	土製品計測表	96
	石製品計測表	96
	銭貨計測表	96
	金属製品計測表	97
	軒丸瓦計測表	97
	軒平瓦計測表	98
	丸瓦計測表	98
	平瓦計測表	98

図版目次

- 巻頭図版 明治初年ごろの高知城本丸前・明治初期の追手筋と高知城
- P L. 1 I区調査前状況・I区トレンチ北壁断面
- P L. 2 I区北半部遺構検出状況・I区完掘状況
- P L. 3 I区S X 1礎石・石列状遺構・I区S D 1検出状況
- P L. 4 I区S D 1完掘状況・I区北半部完掘状況
- P L. 5 I区S K 2半截土層断面・I区S K 1完掘状況
- P L. 6 I区S K 3完掘状況・II区遺構検出状況
- P L. 7 III区調査前状況・III区完掘状況
- P L. 8 III区遺構検出及び完掘状況・III区完掘状況
- P L. 9 III区西壁土層断面・III区北西部トレンチ
- P L. 10 III区ピット状遺構及び遺物出土状況
- P L. 11 III区S K 3遺物出土状況
- P L. 12 III区S K 3遺物出土状況・同完掘状況・III区S K 4・5完掘状況
- P L. 13 III区S K 4完掘状況・III区S K 5完掘状況
- P L. 14 IV区T R 1・IV区T R 2～4
- P L. 15 IV区T R 2・IV区T R 3
- P L. 16 IV区T R 4・V区T R 1
- P L. 17 V区T R 2・VI区T R 1・VI区T R 2
- P L. 18 VI区T R 1下半部南壁土層断面・VI区T R 2下端部南壁土層断面
- P L. 19 VII区遺構検出状況・VII区完掘状況
- P L. 20 VII区S D 1完掘状況
- P L. 21 出土遺物1
- P L. 22 出土遺物2
- P L. 23 出土遺物3
- P L. 24 出土遺物4
- P L. 25 出土遺物5
- P L. 26 出土遺物6
- P L. 27 出土遺物7
- P L. 28 出土遺物8
- P L. 29 出土遺物9
- P L. 30 出土遺物10
- P L. 31 出土遺物11
- P L. 32 出土遺物12

第 I 章 調査に至る経過

高知城跡伝御台所屋敷跡は、高知城本丸の西側に位置する曲輪跡である。ここには昭和25年に高知市立動物園が建設され、平成4年の動物園移転までの42年間存続していた。動物園の移転後、この曲輪跡の史跡公園としての整備計画が高知県教育委員会によって策定される運びとなった。ついでには、整備に先立って当該箇所⁽¹⁾の城郭遺構の遺存状態を把握することが急務となった。こうして、平成5年度に高知県教育委員会主体による遺跡の確認調査が実施された。調査は、平成5年7月12日～10月15日の間おこなわれ、大方の予想に反して、動物園に伴う攪乱層下に近世の遺構が残存していることが判明した。その際の検出遺構は、石組み溝跡・石列状遺構・礎石・石垣等で、陶磁器・瓦及び魚介類を主とする食物残滓等の遺物が出土している。このような成果に恵まれたこともあって、当初の計画通り単年度で対象範囲全域の確認調査をおこなうことは困難となり、当該年度は主に伝御台所屋敷跡を構成する2つの平坦地形のうちの西側下段部分に関する資料を蓄積するに留まった。

平成5年度の確認調査によって、高知市立動物園跡の整備対象地には高知城に関連する遺構が残されていることは明確となった。整備計画は、これらの調査成果を公園整備の中に積極的に活かす方向で進められることとなり、そのうえでも平成5年度調査で十分には把握できなかった伝御台所屋敷跡の東側上段部分に関する地中情報の収集が不可欠であった。

以上の経緯に基づき、平成6年度の今次調査が実施されることとなった。調査は史跡整備を前提においた遺構内容の把握を目的とし、随時設計担当部局との協議を交えつつ実施するものとした。また、いうまでもないが、調査の性格上、遺構及び遺構面の必要以上の断ち割り・破壊は、極力回避することとし、完損した遺構及び遺構面には砂を充填・散布して保護に努め、併せて後世の調査のための標示に供することとした。発掘調査は高知県教育委員会の委託を受けて、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。また、調査には高知県教育委員会から調査職員1名の派遣による援助を受けた。発掘調査期間は平成6年7月4日～10月6日で、10月1日に調査成果の現地説明会を開催した。調査対象面積は伝御台所屋敷跡全域約2,100㎡で、発掘調査面積は930㎡であった。

註

- (1)近森泰子「高知城跡 御台所屋敷跡」『埋文こうち第7号』高知県教育委員会 1994年 同「高知城跡・御台所屋敷跡」『高知県埋蔵文化財センター年報3』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年

第II章 遺跡の位置と環境

高知城跡は、高知市の中央部にある大高坂山（標高42.8m）に所在する。高知市は高知県の中央部に位置し、東を南国市、北を土佐山村と鏡村、西を伊野町と春野町に接する、面積144.68平方キロメートル、人口約31万9千人を有する高知県の文化、産業、商業の中心地である。

市街の南部は土佐湾に面し、鏡川、国分川、舟入川、江の口川、下田川が注ぐ浦戸湾が内陸深く入り込み、自然の良港となっている。北部から西部にかけては標高400～600メートルの山地が連なり、東部には高知平野が広がっている。現在の平野部は、中世頃までそのほとんどが内海であったが、鏡川などの堆積や隆起、近世になってからの干拓により、ほぼ現在の状態になっている。

高知市に所在する遺跡は、高知市及び高知県教育委員会が実施した詳細分布調査（1992年）によると、その数約180遺跡に及ぶ。原始時代の遺跡については、内海が現市域平地部の大半を占めていたため、低地からの発見はなく、山地・丘陵部に限られている。以下に高知城跡を中心に周辺の遺跡について概観したい。

旧石器時代のものとしては、高知市域東部の高間原1号古墳より終末期のチャート製細石核が1点発見されている。

縄文時代についても現在のところ、住居跡の確認されたものはない。縄文前期初頭の長浜チドノ遺跡からは、羽島下層式土器の深鉢が検出されている。また、後期・晩期では、正蓮寺遺跡から土器片が、柳田遺跡からも平成4年度の調査により、土器・石器・勾玉などが出土している。

表1 高知城跡と周辺の遺跡一覧

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
☆	高知城跡(大高坂城跡)	近世(中世)	20	高知学園裏遺跡	弥生～古代	40	宇津野遺跡	縄 文
1	船岡山古墳	古 墳	21	カロート口遺跡	弥 生	41	秦泉寺別城跡	中 世
2	舟岡山遺跡	弥 生	22	福井西城跡	中 世	42	秦泉寺廃寺跡	古代～中世
3	鷺泊橋付近遺跡	弥生～中世	23	福井中城跡	中 世	43	吉 弘 遺 跡	古 代
4	ゲシカ端遺跡	弥 生	24	福井元尾城跡	中 世	44	松葉谷遺跡	古代～中世
5	神田南城跡	中 世	25	井口城跡	中 世	45	前里城跡	中 世
6	シルタニ遺跡	弥 生	26	鹿持雅澄邸跡	近 世	46	北秦泉寺遺跡	弥 生
7	鴨部遺跡	弥生・中世	27	嘉式保宇城跡	中 世	47	秦泉寺城跡	中 世
8	神田旧城跡	中 世	28	福井遺跡	中 世	48	宇津野2号古墳	古 墳
9	能茶山窯跡	近 世	29	万々城跡	中 世	49	宇津野1号古墳	古 墳
10	高座古墳	古 墳	30	初月遺跡	弥 生	50	秦泉寺新屋敷古墳	古 墳
11	高神遺跡	古 墳	31	尾戸遺跡	弥 生	51	吉 弘 古 墳	古 墳
12	神田遺跡	弥 生	32	尾戸窯跡	近 世	52	Hの岡古墳	古 墳
13	神田ムク入道遺跡	古代～中世	33	中島町遺跡	古 墳	53	秦小学校校庭古墳	古 墳
14	石立城跡	中 世	34	弘人屋敷跡	近 世	54	愛宕神社裏古墳	古 墳
15	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	35	帯町遺跡	古 墳	55	愛宕不動堂前古墳	古 墳
16	小石木古墳	古 墳	26	国沢城跡	中 世	56	土井の前古墳	古 墳
17	小石木遺跡	弥 生	37	安楽寺山城跡	中 世	57	淋谷古墳	古 墳
18	潮江城跡	中 世	38	東久万池田遺跡	古 代			
19	福井古墳	古 墳	39	西秦泉寺遺跡	古 代			

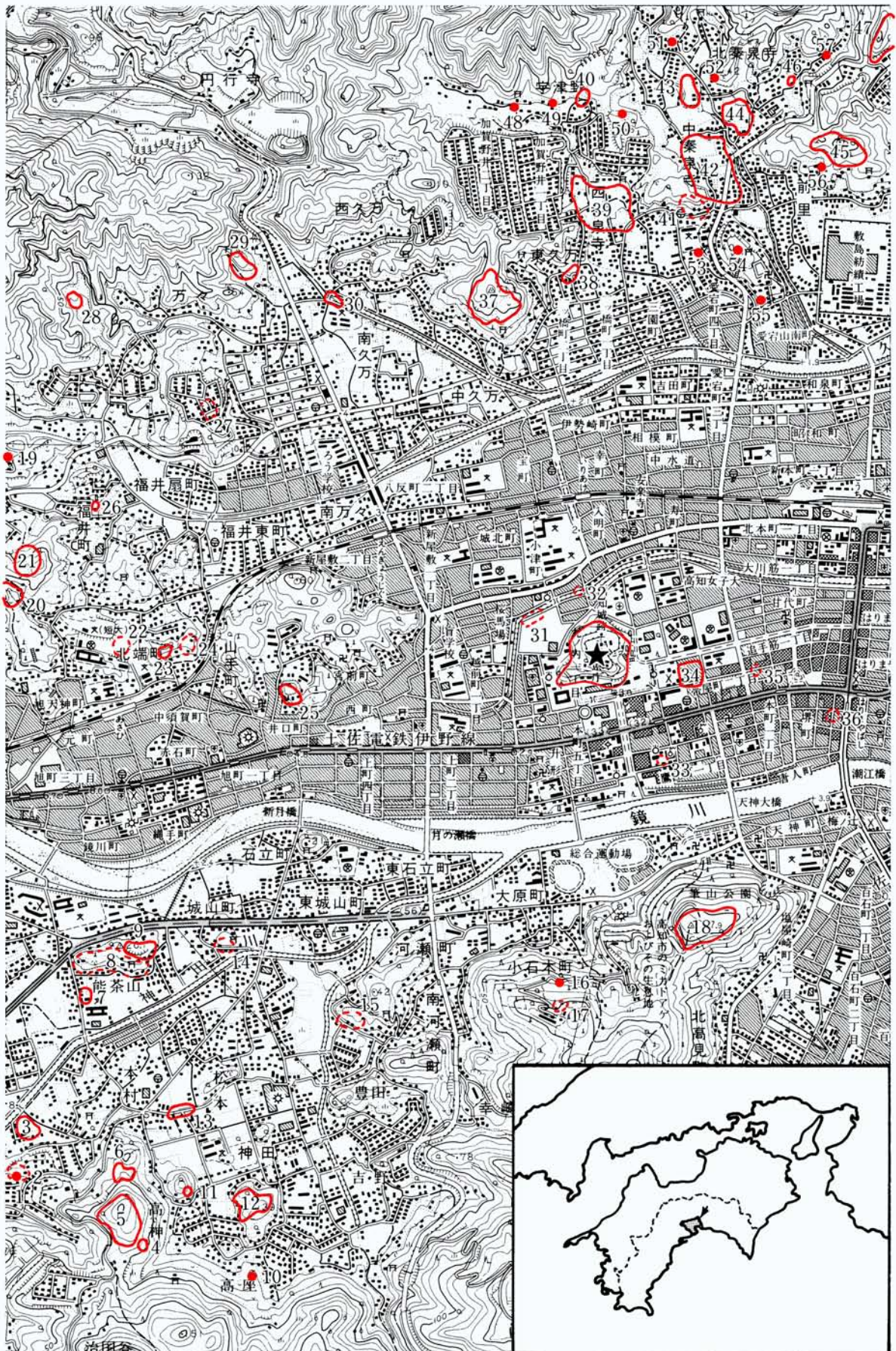


図1 高知城跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

弥生時代では、前期末の柳田遺跡が現在最も古く、鏡川と神田川に挟まれた自然堤防上で大篠式の壺などが検出され、集落の存在とともに、この周辺で祭祀が行われていたものと考えられている。中期から後期にかけては、かろーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。これらは山地、丘陵部に立地した遺跡である。この時期の注目される出土遺物として、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、また県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺より出土している。

古墳時代では、現在のところ前期のものは確認されておらず、そのほとんどが中期から後期のものとみられ、秦泉寺など北部から東部の山麓部にこの時期の古墳が集中している。また、西部から南部にかけての丘陵部では、塚の原古墳群が存在しており、発掘調査により、須恵器、装身具、鉄刀子などが出土している。

古代では『和名抄』によると、高知市は長岡、土佐、吾川の三郡にわたり、長岡郡の介良郷、大角郷、土佐郡の土佐郷、神戸郷、高坂郷、鴨部郷、朝倉郷、吾川郡の仲村郷の存在が記載されている。また、条里制地割が現在も残ると考えられる地域は、朝倉の海老が橋東北方、布師田の国分川右岸が挙げられる。寺院の遺跡は、白鳳期の瓦が出土する秦泉寺廃寺跡、五台山山頂にある竹林寺跡がある。

中世では、本調査地である大高坂城に関係する主な城館についてみたい。高知県に存在した城は約350近くあるが、そのほとんどは中世城館で占められている。高知市には43の城館跡がある。大高坂城は南北朝期、大高坂山にあった大高坂氏の居城であり、『佐伯文書』によると「大手」「一の城戸」「西大手」「西の城戸」を備えた堅固な城であったことが分かるが、その全容は定かではない。南朝方の主力であった大高坂松王丸の戦死以降、長宗我部氏が岡豊より移ってくるまでについては、資料等もなく不明である。長宗我部氏は四国平定を成した後、大高坂城を居城に城下を形成しようとするが、治水工事などに失敗し、居城を浦戸城へと移す。浦戸城は市城の南、浦戸湾を一望する高台に設けられ、長岡郡本山に拠点を持つ本山氏の出城であったが、長宗我部氏に敗れ、以降長宗我部氏の支配下の城となる。平成5年度に行なわれた発掘調査⁽²⁾によって石垣が検出され、天守台とともに市史跡に指定された。戦国時代の高知市周辺には、本山氏の勢力下の城跡が多く、朝倉城跡、神森城跡、久万城跡などがあげられる。西の朝倉城跡には、詰の郭、堀、井戸などが残っており、県の史跡に指定されている。東の天津城跡は天竺氏の居城であったが、津野氏に滅ぼされ、その後、長宗我部国親の手におちている。現在、北馬場、西木戸、本ノ丸、二ノ丸、三ノ丸跡が確認できる。

近世の遺跡は市内に10遺跡が確認されている。本調査地の高知城跡は、高知市の中心部にある大高坂山に立地する城郭跡で国史跡に指定されている。高知城は、関ヶ原合戦後に入国した山内一豊によって慶長6（1601）年から築城される。城の建物は享保12（1727）年に火災に遭うが再建され、現在、城の建築物は国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査⁽³⁾では、ピット・礎石・溝跡等の遺構、及び上段部に続く傾斜部分に石垣が、それぞれ検出されており、多量の瓦・陶磁器類が出土している。窯跡では、高知城の北西に土佐藩の陶器を焼いた尾戸窯跡がある。現在、宅地等になっており遺構などは不明である。その後幕末に至り、陶製地は鏡川南岸にある能茶山（標高26.1m）に移された。この地は良質の陶土が産出し、現在でも窯跡が頂上付近に

残っている。屋敷跡で発掘調査の成されたものとして、万葉集の研究で知られる鹿持雅澄¹¹⁾跡がある。調査によって土坑、掘立柱建物跡、能茶山焼の陶磁器、肥前系の磁器が検出され、現在、遺跡は県史跡に指定されている。寺社跡としては、五台山の西の山腹にある吸江庵がある。この地は僧夢窓（後に吸江庵）が鎌倉時代、土佐の臨済宗の道場として開いた寺であり、土佐国中世禅宗文化の中心となった。近世に入ると山内一豊の儀子である湘南により復興されるが、明治初年廃寺となる。現在、創建期のものといわれる石段・石垣が残り、吸江庵跡として県史跡に指定されている。昭和60年に発掘調査¹²⁾が行われ、溝状遺構、基壇状遺構が確認されると共に、近世陶磁器・土師質土器・瓦質土器・焼塩壺・瓦などが出土している。

以上簡単に高知市の遺跡について概観したが、各時代とも未だ不明な部分も多く、今後の調査により明らかにされるものと思われる。

註

- (1)藤方正治「柳田遺跡」『埋文こうち 第6号』高知県教育委員会 1993年
- (2)古成承三・森田尚宏『浦戸城跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- (3)近森泰子「高知城跡御台所屋敷跡」『埋文こうち 第7号』高知県教育委員会 1994年
- (4)廣田佳久『県史跡 鹿持雅澄跡発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- (5)山本哲也『吸江庵跡発掘調査及び新定高知市保護有形文化財』高知市教育委員会 1987年

参考文献

- 竹内理三編『日本地名大辞典 高知県』角川書店 1986年
 岡本健児編著『日本の古代遺跡 39 高知』保育社 1989年
 山本大編『高知県の歴史』河出書房新社 1991年
 山本大編『高知の研究1 地質・考古篇』清文堂 1993年
 山本大編「高知県」『日本城郭大系 第15巻 香川・徳島・高知』新人物往来社 1979年

第Ⅲ章 調査の概要

(1) 高知城跡の概要

高知城跡⁽¹⁾は、慶長6(1601)年、関ヶ原合戦の戦功により土佐に封ぜられた遠州掛川城主山内一豊によりその構築が開始される。築城は築城総奉行百々越前が中心となって遂行され、本丸・二の丸は慶長8(1603)年、三の丸は慶長16(1611)年にそれぞれ完成している。特に三の丸形成には高知城北西方向へ尾根上に続いていた中高坂山を削平し、その土砂を運んで盛土成形をおこなうという大土木工事が実施されたと伝えられている。こうして四層六階の天守を控え、二の丸、三の丸等の曲輪を階郭式に配置する平山城、高知城が完成する。しかし、享保12(1727)年、追手門ほかを残して大半の建築物は火災によって消失してしまう。それらは享保14(1729)年から宝暦3(1753)年にかけて再建され、旧状に復している。こうした災禍にも拘わらず、創建当初の姿を現代まで留めてきた追手門をはじめとする天守閣・本丸御殿・東西多聞等の建物は、昭和26(1951)年、国の重要文化財に指定され、また城跡全域は昭和34(1959)年に国史跡として指定を受けている。

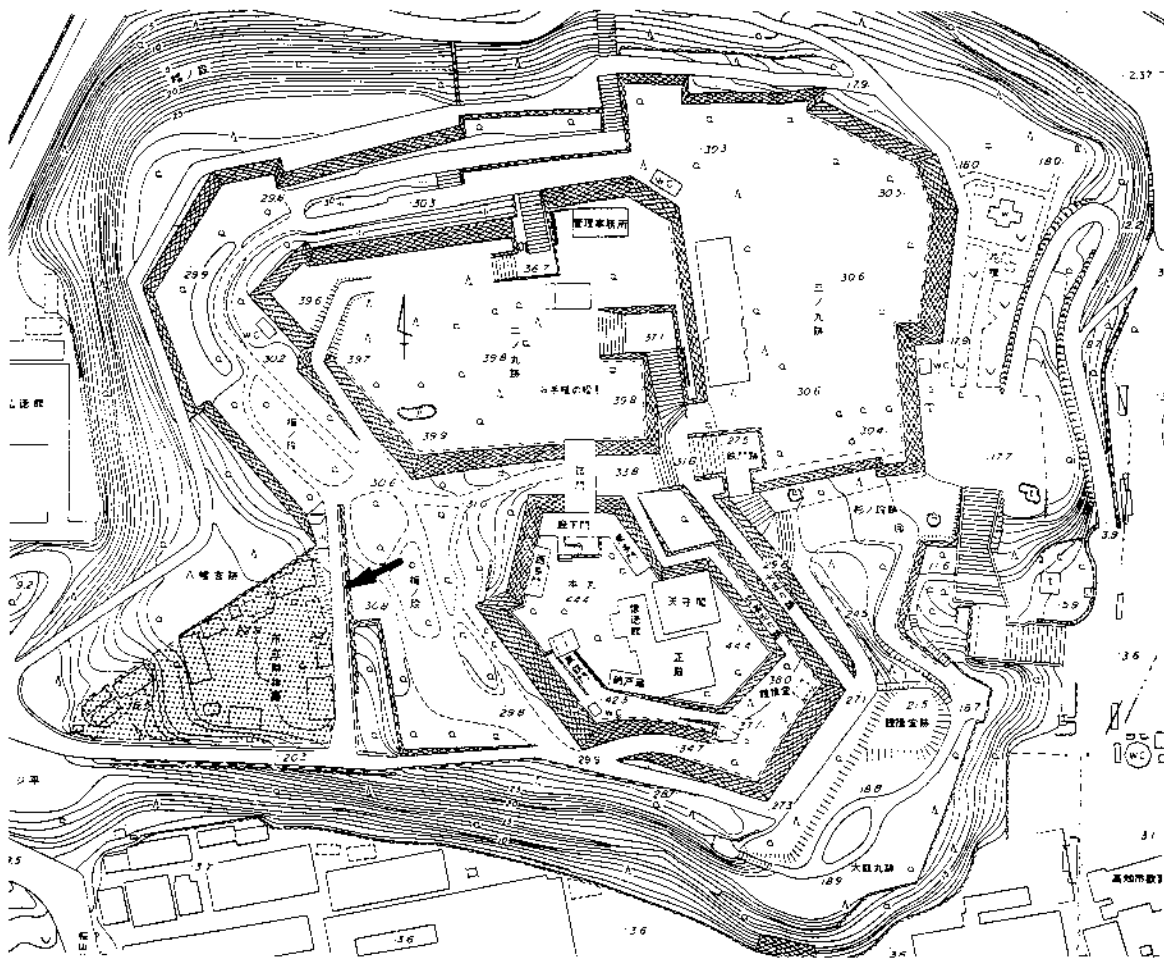


図2 高知城跡 調査対象地位置図 (S=1/2,000)

なお、二の丸・三の丸等に所在していた大書院・表御殿・奥御殿等の建物は、廃藩置県に伴い、明治政府により解体・撤去がおこなわれ、その跡地は一部の礎石や、庭跡を残し、植栽等によって公園化されている。

また、高知城跡の立地する大高坂山には、山内氏以前に2度、城郭として利用された記録がある。1つは南北朝時代の高坂氏による大高坂城であり、1つは長宗我部氏が築城を試みたものである。南北朝時代には、上佐における南朝方主力であった大高坂松平丸が居城としており、城をめぐる激戦が展開されたことが記されている。暦応3年（1340年）の松平丸戦死以後、戦国時代に至るまでは廢城であったとみられるが、高坂氏の子孫は続いており、戦国時代には本山氏に属した後、長宗我部氏に従っている。その後、天正16年（1588年）に、長宗我部元親が居城を岡豊から大高坂に移しているが、時を経ずして浦戸へと移転している。

高知城跡における、現状変更等に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、規模の大小を問わなければ、毎年のおこなわれている。過去のこのような成果をここで総括することはできないが、それらの多くは工事立会等で対応されており、そのような性格上、調査成果を公表する機会が十分に与えられているとは言い難い。近年、とみに増加傾向にある高知城跡関係の各種調査の成果を、そろそろ何らかの形で総括しておくべき時期に差しかかっているのかもしれない。高知城跡伝御台所屋敷跡に係る調査は、平成5年度に実施された確認調査を挙げることができる。

（2）伝御台所屋敷跡の概要

伝御台所屋敷跡⁽²⁾は、高知城本丸の西方下段部に位置する曲輪で、標高はおおよそ22mを測る。この曲輪は、明治6年に記録された絵図によれば、周囲をコケラ葺堀で囲まれ、平面形で不整多角形を呈する様子が描かれている。なお、曲輪内に建物は描かれていない。「御台所」という名称が曲輪の性格を表わすものだとすれば、どのように解釈すれば良いのか、また建物が存在しなかったとすればどのような機能を果たしていたのか等、伝御台所屋敷跡については不明な点が多い。なお、伝御台所屋敷跡には、昭和25年に高知市立動物園が開園し、平成4年に移転するまでの約40年の間、ここに存続していた。

（3）伝御台所屋敷跡の既往の調査

伝御台所屋敷跡の史跡整備に際し、同曲輪の遺構の遺存状態を把握することを目的として、平成5年度に確認調査⁽³⁾が高知県教育委員会によって実施されている。この調査によって、数々の攪乱を辛うじて免れていた。石組み溝跡・石列状遺構・礎石・石垣等の遺構群が検出され、また陶磁器・瓦・魚骨や獣骨等の食物残滓等の遺物が出土している。以上は主に近世の所産とされているが、一部これらの遺構面以下に異なる時代の遺構面が遺されていることも確認されていた。

（4）調査の方法

今次調査は、伝御台所屋敷跡全域を対象範囲としたが、前年度の調査に基づいて生じたいくつかの課題に一定の解答を得るべく、各課題にそった方針で調査区を設定し、それぞれの目的に応じた

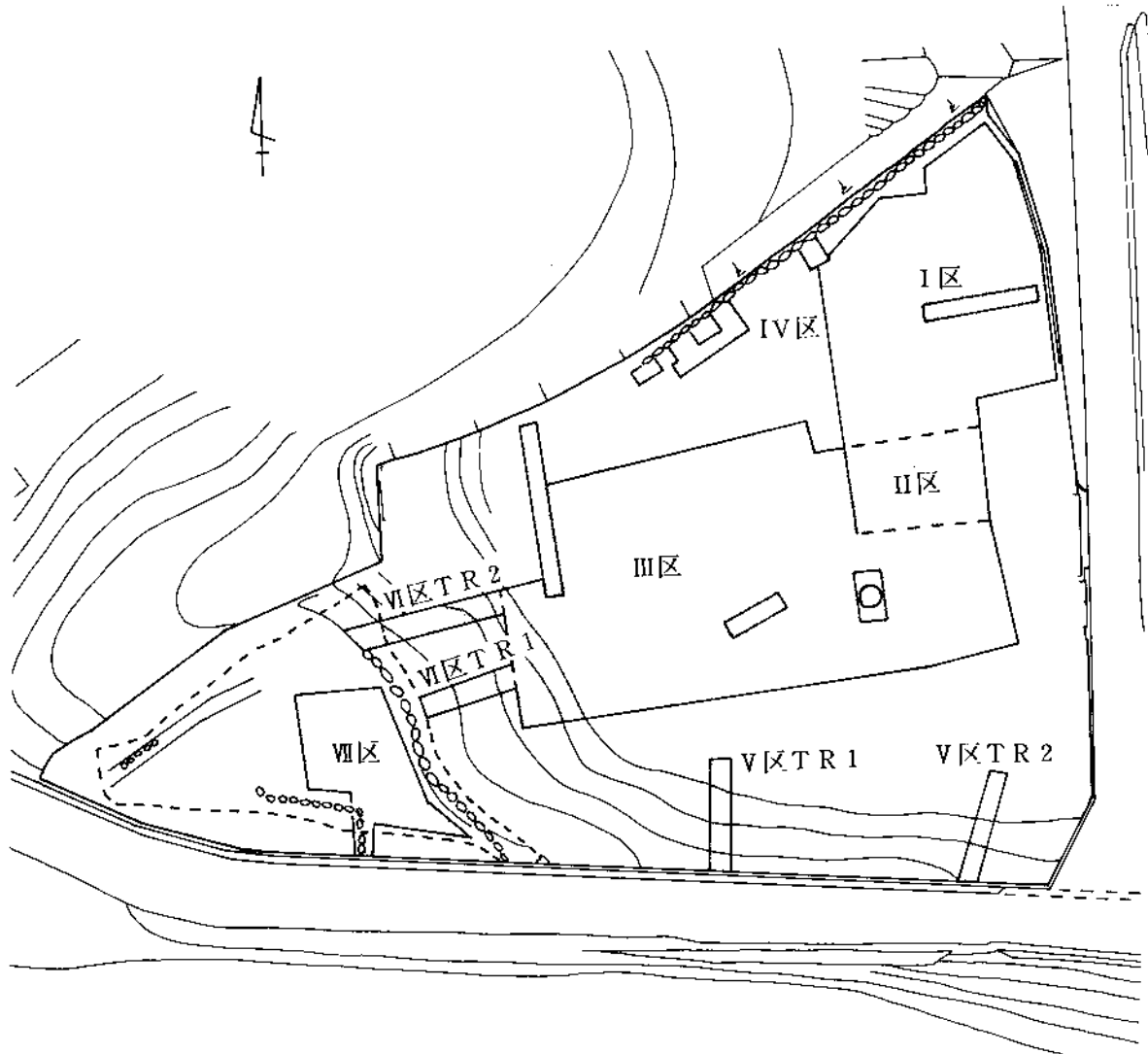


図3 調査区 配置図 (S=1/500)

調査方法で、これを実施した。調査区は以上の目的と調査手順上の理由とによって7箇所に分けて取り扱うこととし、各々をI区～VII区と呼称した。各調査区については後述するが、調査目的のみを列挙すると以下ようになる。

- I～III区：伝御台所屋敷跡東側上段部の遺構分布確認
- IV 区： " 北側石垣裏込め状態の確認
- V 区： " 東側上段部の南側斜面地山（岩盤）地形の確認
- VI 区： " 東側上段部と西側下段部間の遺構面・地山（岩盤）地形の関係確認
- VII 区： " 西側下段部石組み溝跡の追跡、下位の遺構面確認

調査区の面積はそれぞれI区：255㎡、II区：59㎡、III区：470㎡、IV区：25㎡、V区：22㎡、VI区：27㎡、VII区：72㎡で、発掘調査面積は合計930㎡である。

調査対象地の表土・攪乱層及び無遺物層は、重機（ユンボ）を使用して除去し、遺物包含層の掘り下げ、遺構検出、及び遺構掘り下げ等は人力によっておこなった。

遺構実測及び遺物の取り上げについては、平成5年度調査時に設定された任意座標を引き続き利用し、一辺4mの区画（グリッド）を最小単位として実施した。なお、調査後公共座標第IV系への取り付けをアジア航測株式会社に委託して実施した。

註

- (1)山本大編「高知県」『日本城郭大系15 香川・徳島・高知』新人物往来社 1979年
高知県教育委員会『史跡高知城跡 保存管理計画策定報告書』1982年
- (2)高知県教育委員会『史跡高知城跡 保存管理計画策定報告書』1982年
- (3)近森泰子「高知城跡 御台所屋敷跡」『埋文こうち第7号』高知県教育委員会 1994年
同「高知城跡・御台所屋敷跡」『高知県埋蔵文化財センター年報3』(財)高知県文化財埋蔵文化財センター

第IV章 調査の成果

今次調査では、上述のように7つの調査区を設定し、それぞれの調査目的に沿って各区の調査を実施した。本章ではこれらの成果を各調査区ごとに、I区から順に記述していくこととする。

(1) I区の調査

1. I区の概要

今次調査で最初に着手した調査区であり、調査区全体の中では北東端部に位置する。調査区東側は一部にコンクリート擁壁を施工した急峻な斜面であり、北東方に向かって上っている。また、調査区北側は石垣が築かれた斜面であり、北方に向かって急激に下っている。I区は平面形不整形形状を呈し、面積は255㎡である。

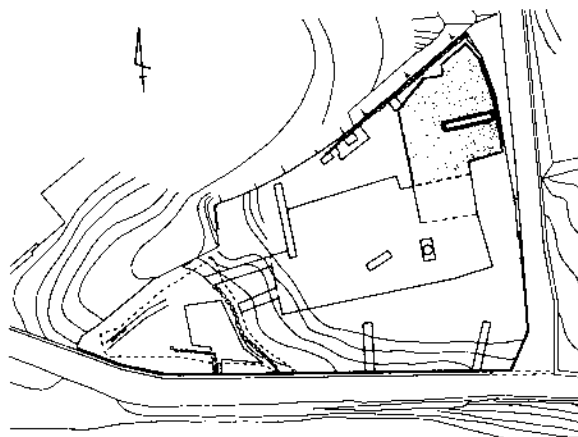


図4 I区的位置 (S=1/1,500)

2. 層序 (図6)

調査によって確認された基本層序は、第I層：表上、第II層：客土・攪乱層、第III層：橙黄色礫砂土（盛土層）、第IV層：橙黄色砂質土（盛土層）、第V層：橙色礫（岩盤）である。第I層は攪乱層上面部分で、植物根の自然攪乱及び腐植土壌の形成によって色調の変化している部分である。なお、地表面にも瓦等が散布している状態であった。第II層上面が近世～近代の遺構面となっており、後述する石列状遺構・礎石・土坑状遺構等の遺構群はいずれもこの面で検出された。第I・II層には瓦・陶磁器等の遺物が多量に含まれる。また、第II層～第IV層はいずれも客土とみられるものであるが、第III・IV層には遺物は殆ど含まれていない。以上から、客土搬入の時期は複数存在することが看取される。

3. 検出の遺構・遺物

I区では、第I・II層から大量の瓦と土師質土器・須恵器・陶磁器・焼塩壺等の遺物が出土した。また、第II層上面において、石列状遺構・礎石・土坑状遺構等の遺構を検出したが、これらも多くの遺物を伴っていた。ここでは、第I・II層出土遺物、遺構とその出土遺物、の順で記述していくこととする。

(1) 第I・II層出土遺物 (図7～17、写真図版PL. 29)

第I層からは、土師質土器67点、焼塩壺15点、須恵器2点、青磁5点、陶磁器168点、瓦2201点（重量355kg）等の遺物が出土しており、また第II層からの出土遺物は土師質土器1点、瓦9点であり、I区の遺構外出土遺物の総点数は2468点である。以上の中から、土師質土器26点、焼塩壺15点、須恵器2点、青磁3点、陶器24点、磁器55点、銅銭2点、鉄製品1点、瓦12点を図示した。な

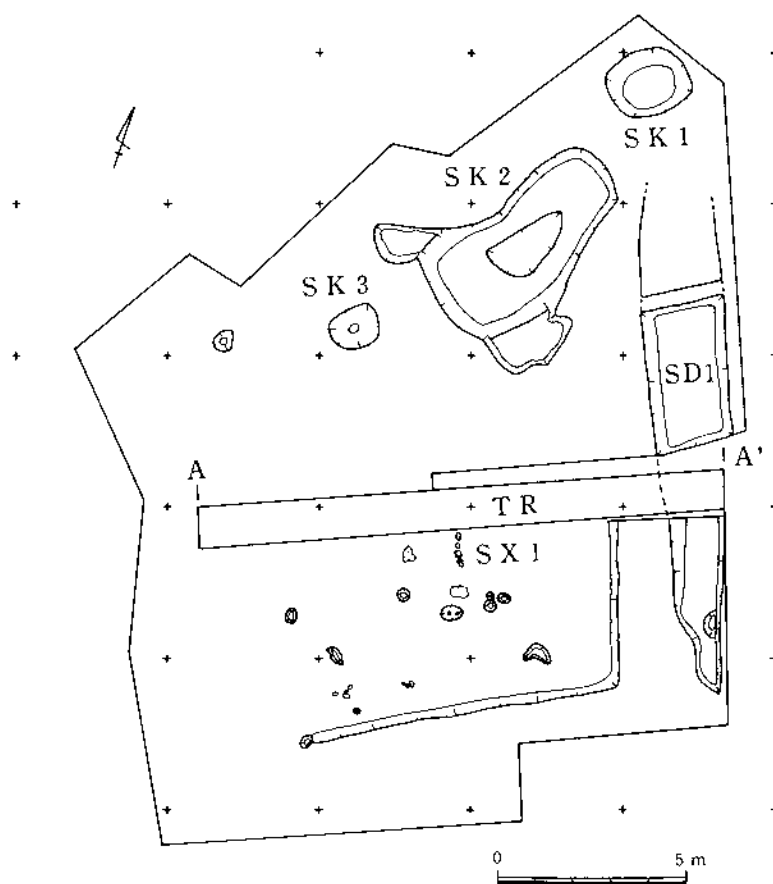


図5 I区全体図

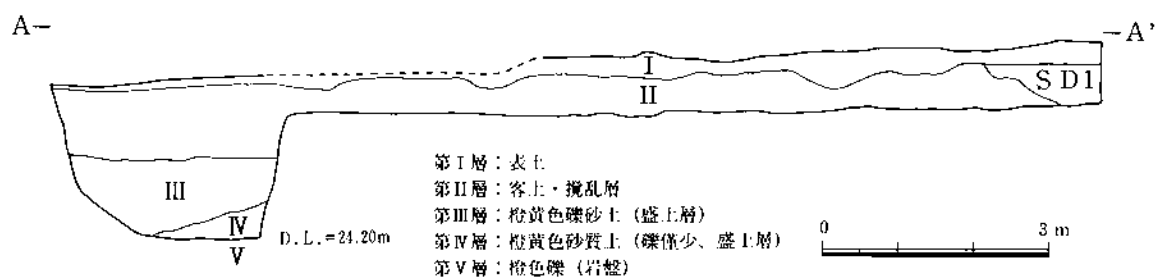


図6 I区TR土層断面図

お、瓦については代表的なバリエーションを構成するとみられるもの各1点ずつを掲載した。以下、順を追って記述する。

1～26は土師質土器である。6のみが第II層出土で、他はすべて第I層出土である。1は小型の坏に近い形態をなすが、2～16は皿とみられる。1は手捏ね成形とみられ、内面に布目圧痕が残るが、これ以外は底部に回転糸切り痕を有すものが多数を占める。なお、10のように底部切り離し後

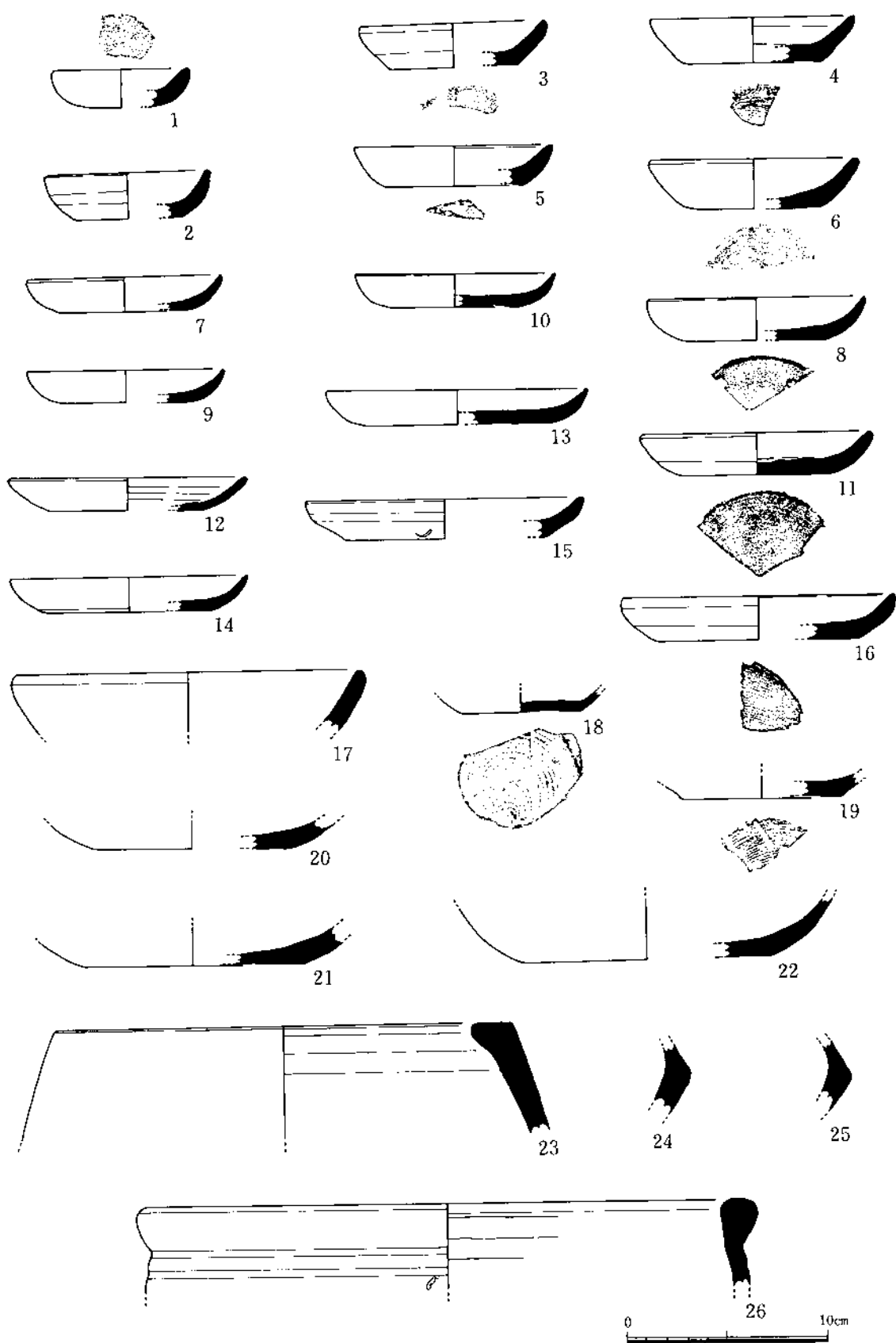


图7 I区出土遺物（土師質土器）

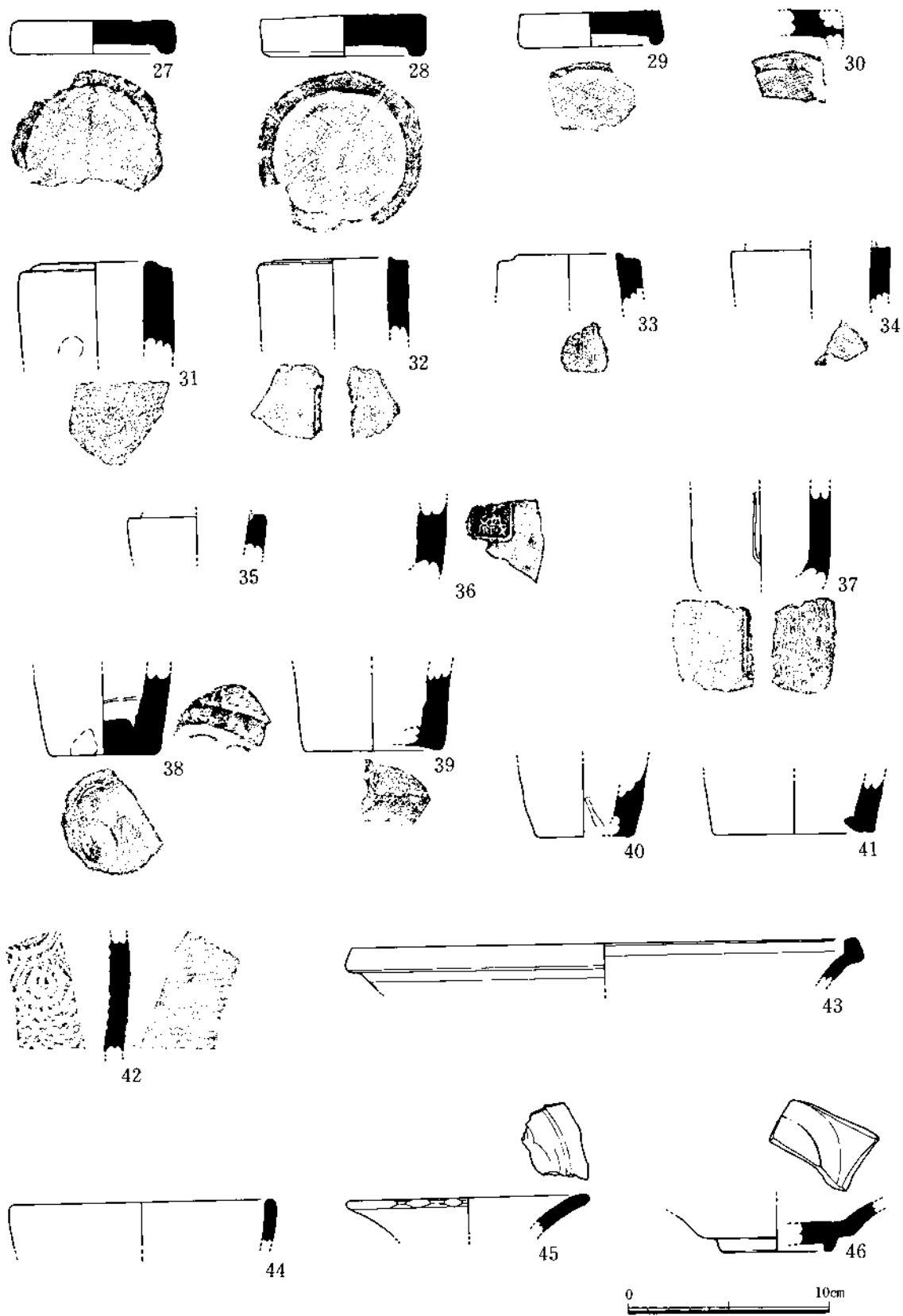


图8 I区出土遺物（焼塩壺・須恵器・青磁）

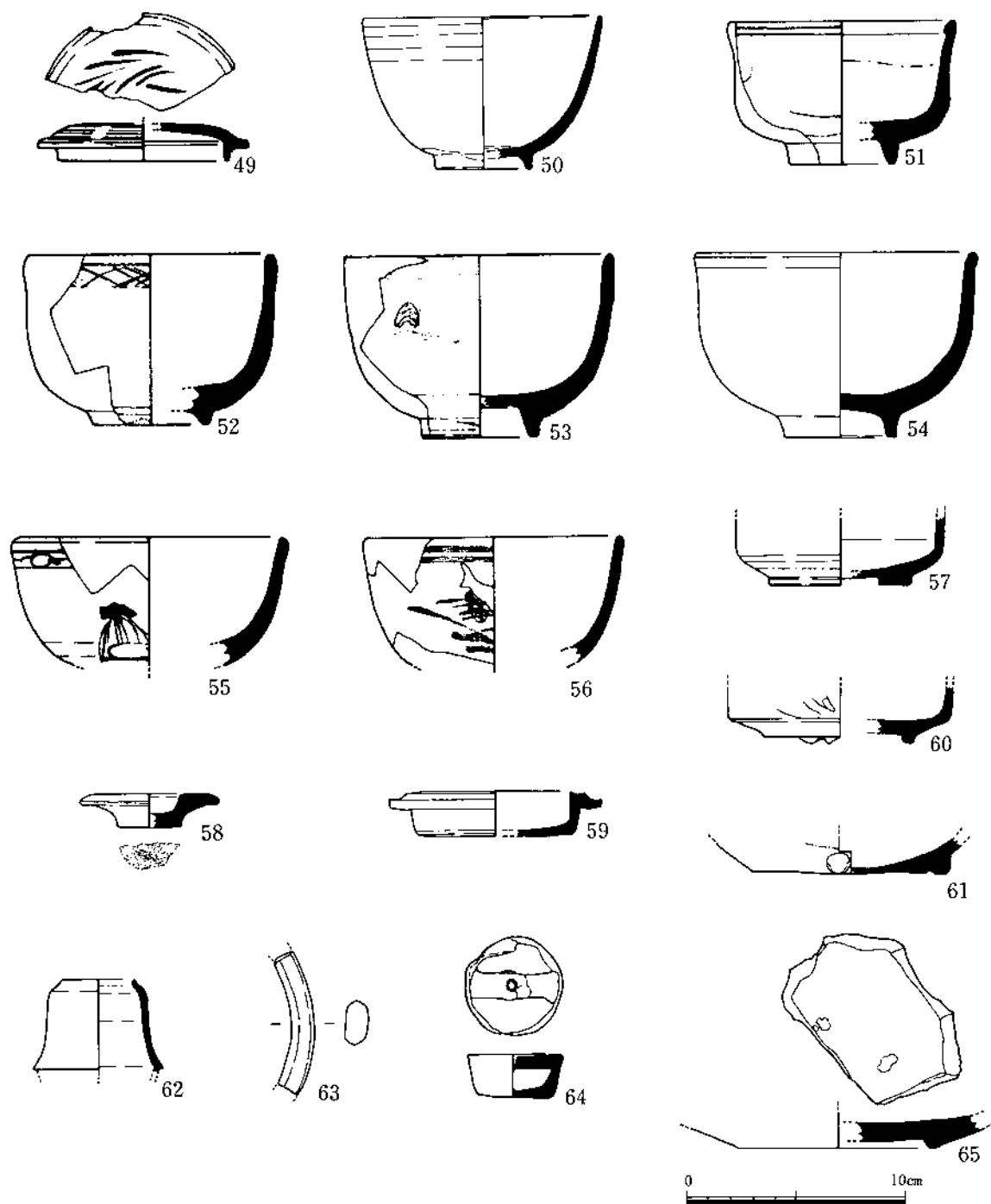


図9 I区出土遺物（陶器）

にナデ調整を施したものもある。15は外面に指爪先端部の押圧痕がみられる。17～22は坏ないし皿とみられるが特定はできないものである。殆どがロクロ成形によるものとみられる。23は外面にミガキ調整を施すもので、胎土はSK I出土の火鉢のそれに近似するが、器種不明。24・25は「く」字状に内折する土器片で、胎土は焼塩壺のそれに近似している。ともに器種不明であるが、同一個体の可能性がある。26は外面に沈線2条と斜位のへら描き文を施すやや大型の器種である。

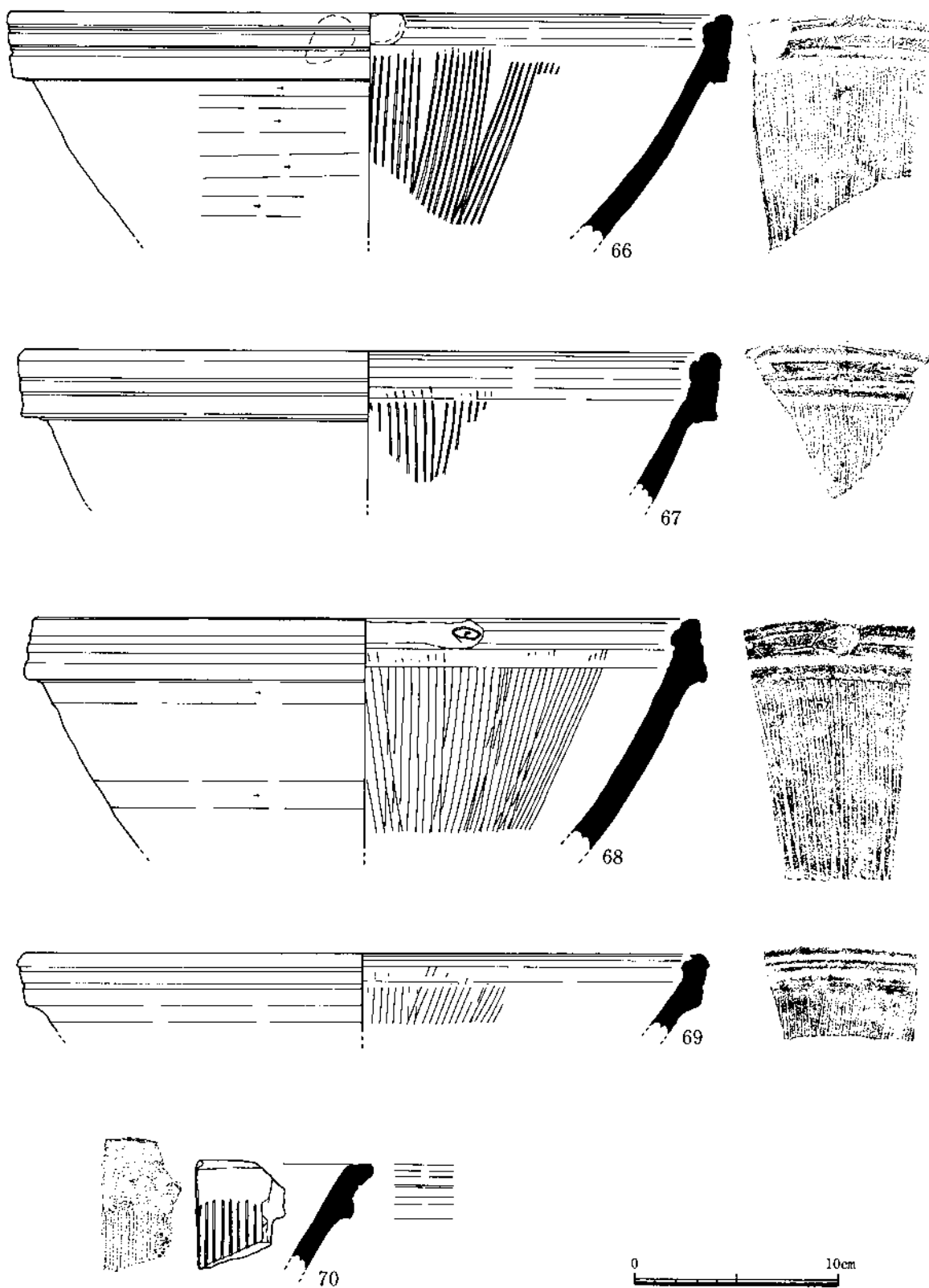


图10 I区出土遗物(陶器、青铜)

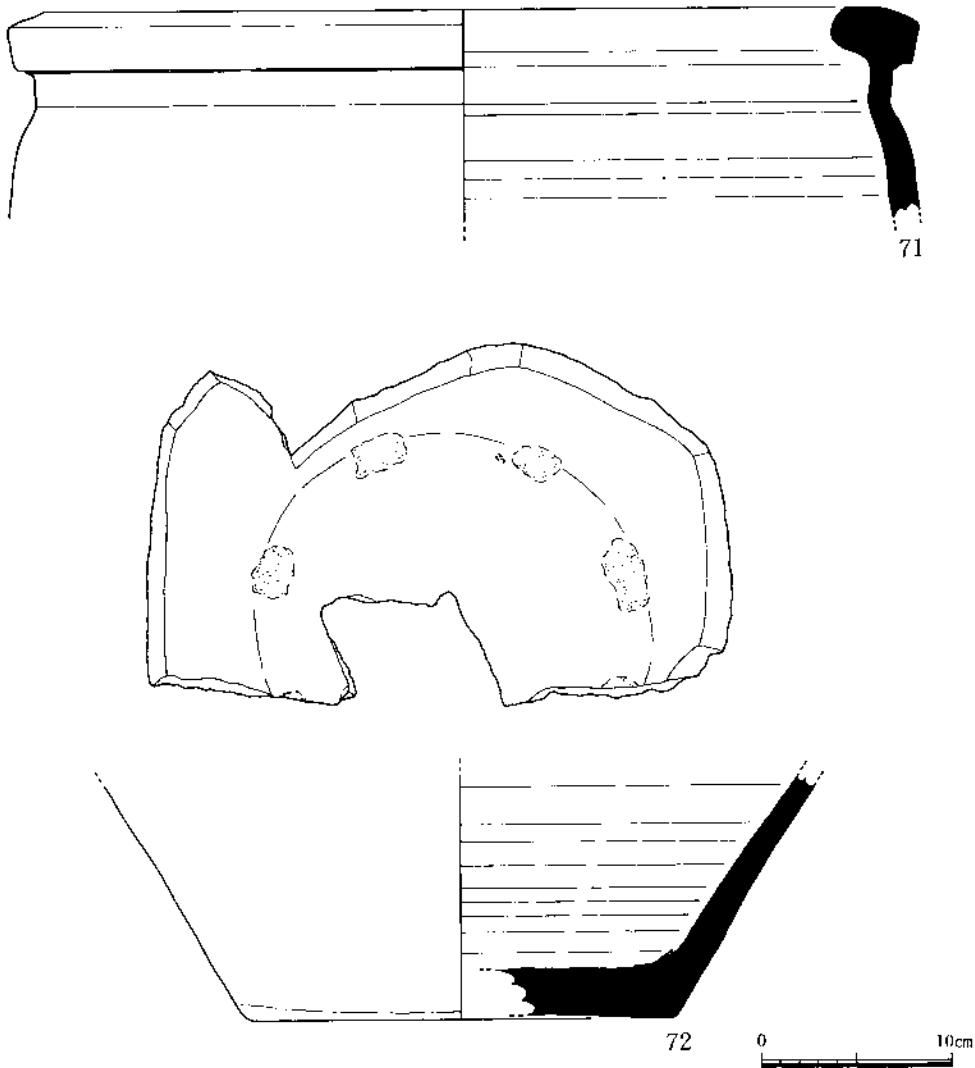


図11 I区出土遺物（陶器、甕）

27～30は焼塩壺蓋、31～41は焼塩壺身で、いずれも第I層出土である。27～30の蓋はすべて天井部の平坦な円盤状の形態をとるもので、天井部内面に布目圧痕を残す。31～35は焼塩壺の口縁部片で、口縁端部内周側に幅の狭い蓋受け部を突出させるものである。36・37は焼塩壺胴部片である。36は外面の隅丸方形区画内に「…伊織」銘を陰刻する。37の外面にも隅丸方形区画の一部が残っている。38～41は焼塩壺底部片である。38は底部内面に円形の粘土板を充填（貼付？）する成形法を採るもので、底が抜けた状態の41は同じ成形法によるものとみられる。また、31・32・34・37～39の内面には、布目もしくは蓆目等の押圧痕が残る。

42は須恵器甕の胴部片で、外面には平行タタキ目、内面には同心円文の当て具痕がみられる。第I層出土。43は須恵器こね鉢の口縁部片で、東播磨系とみられる。第I層出土。

44～48は輸入陶磁の青磁で、すべて第I層出土である。44は碗の口縁部片、47・48は碗の体部片とみられる。44は内外面無文。47は外面に鍋蓮弁文を有する。48は外面に線描き細蓮弁文を描く。

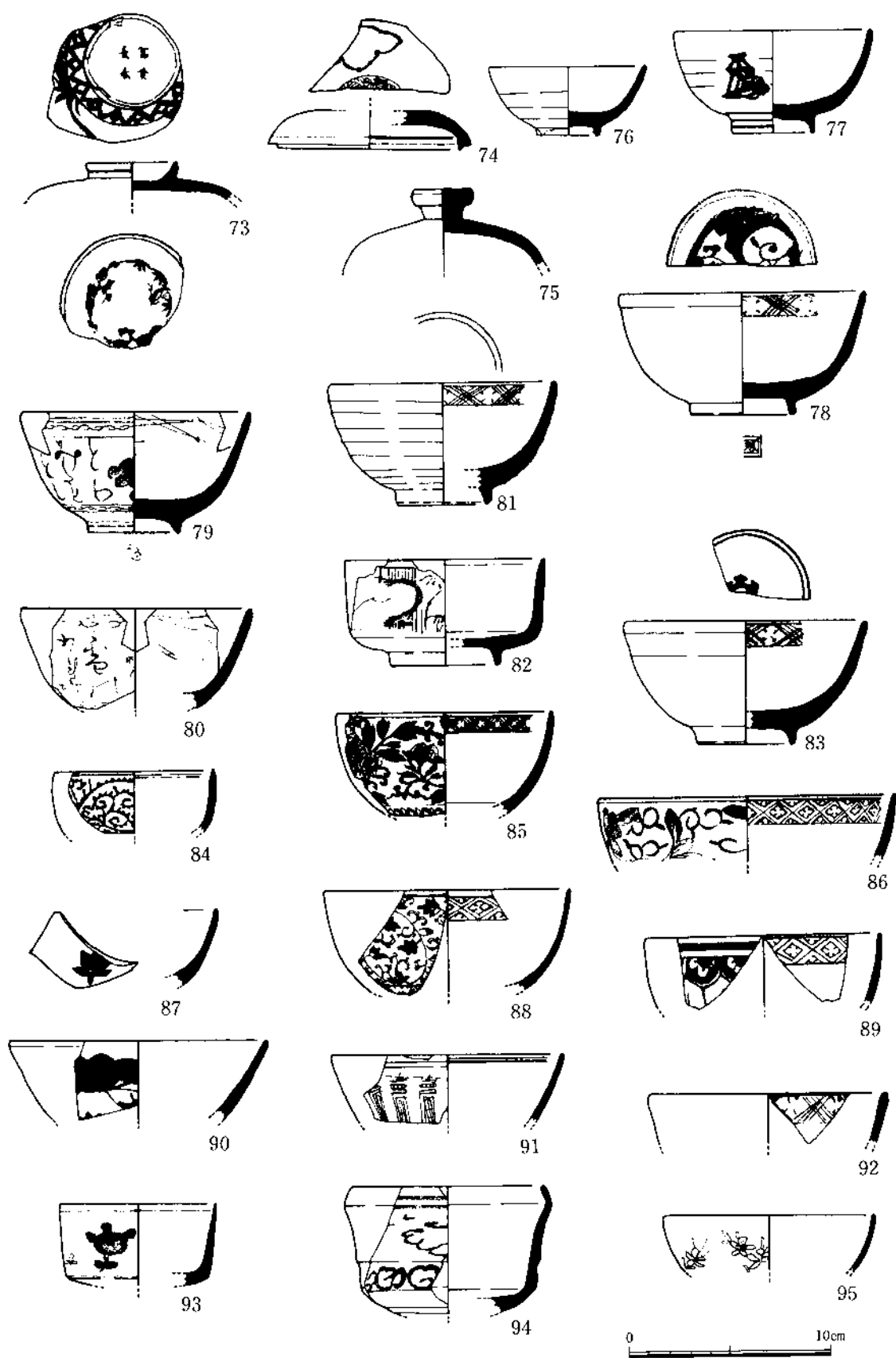


图12 I区出土遗物(磁器、盖·碗)

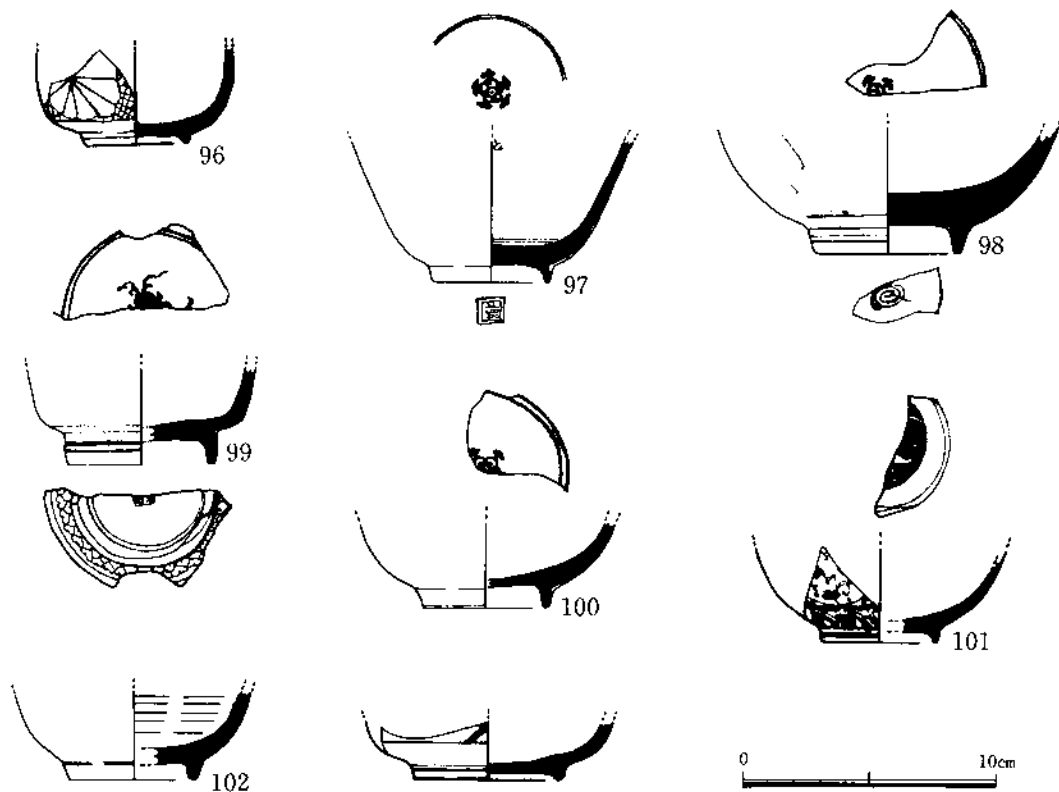


図13 I区出土遺物（磁器、碗）

45は稜花皿口縁部片、46は皿の底部片とみられ、ともに内面に線描き文を有する。

49～72は陶器で、すべて第I層出土である。49は蓋で、天井部外面に鉄絵の草花文？を描く。50～57は碗である。51は外面に界線3条と、内容不明の文様を描く。52は外面に斜格子文を描く。54は京焼系である。55は外面に鉄絵の植物文？・唐草文を描く。56は外面に草文？を描く。58～62・64・65は器種を特定できなかった。58・59は鉄釉を施す。60は外面にへら描き文を描く。62は薄手の器種で、上端部内面及び下端部外面段部以下は無釉である。63は把手である。64は灯明具の一種ではないかとみられる。65は碁笥底で、内面に2つの砂目積み痕が観察される。66～70は播鉢である。66～69は口縁部内外面に凹線状の文様が顕著である。68は口縁部内面に刻印？を施す。70は口縁部外面が二重突帯状を呈するものである。71・72は鉄釉の甕で、同一個体の可能性が高い。72は内底面に6個の砂目積み痕が観察される。

73～127は磁気で、すべて第I層出土である。73～75は蓋で、73・74は染付、75は白磁である。73は外面に草花文・蓮弁文、内面に松竹梅文を染付で描き、つまみ内部（高台内）に「富貴長春」銘を有する。74は外面に丸文を描く。75は頂部の平坦なつまみを有する。76～103は碗である。76・102は白磁、77・79・80・82・84～91・93・94・96・98・99・101・103は染付、78・81・83・92・97・100は外面に青磁・内面に染付の掛け分け、95は色絵である。77は外面に船文？を描く。78・81・83・92・97・100は、釉の掛け分け、外面無文、内面の四方禪文、及び見込の五弁花文という要素ではほぼ共通する。78・79・98・99は、高台内に「福」字銘をもつ。79・80は外面に梅花文・唐草文・和歌？を配し、内面に松葉文を描くもので、両者は同一個体の可能性がある。84は外面に

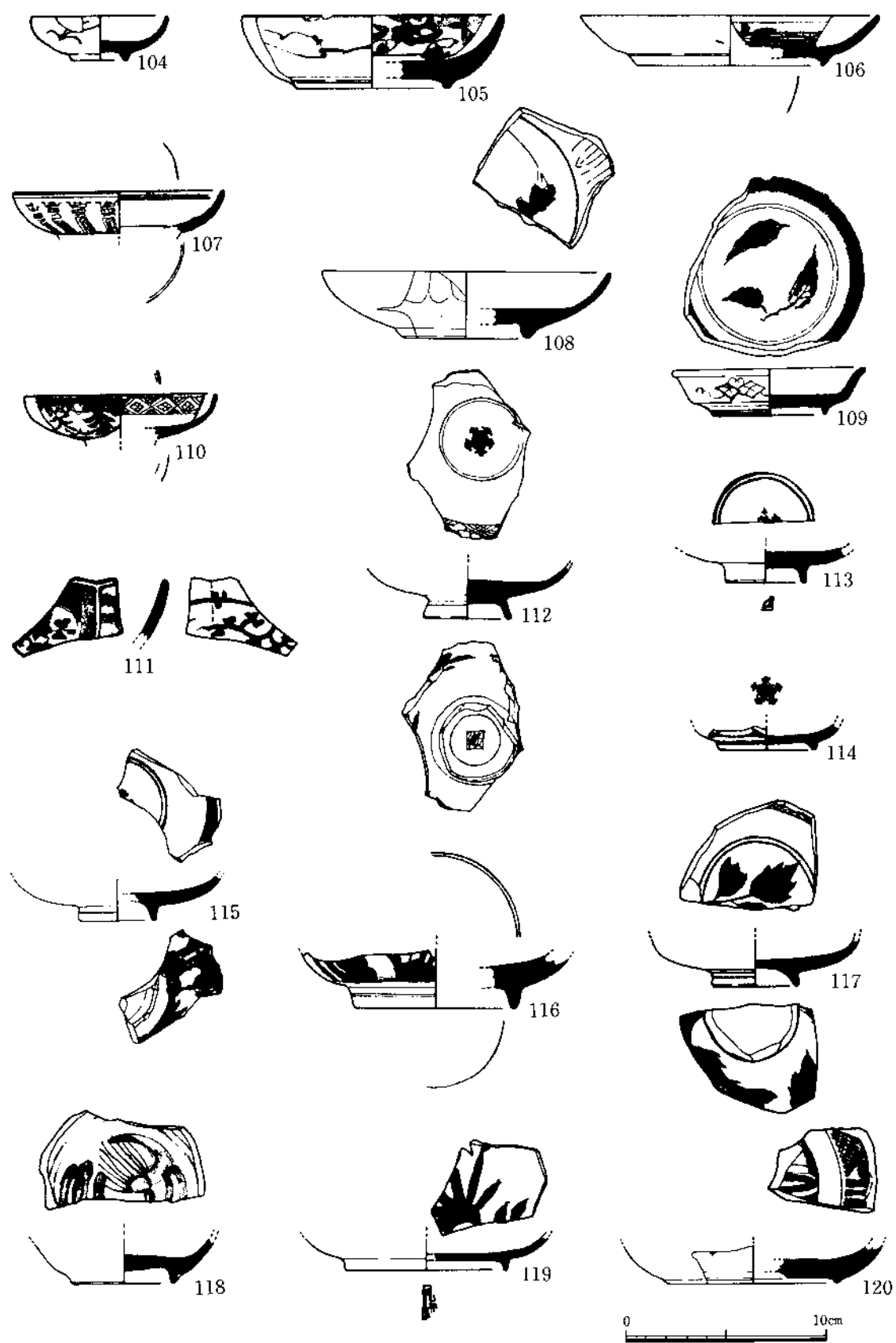


图14 I区出土遗物(磁器、皿)

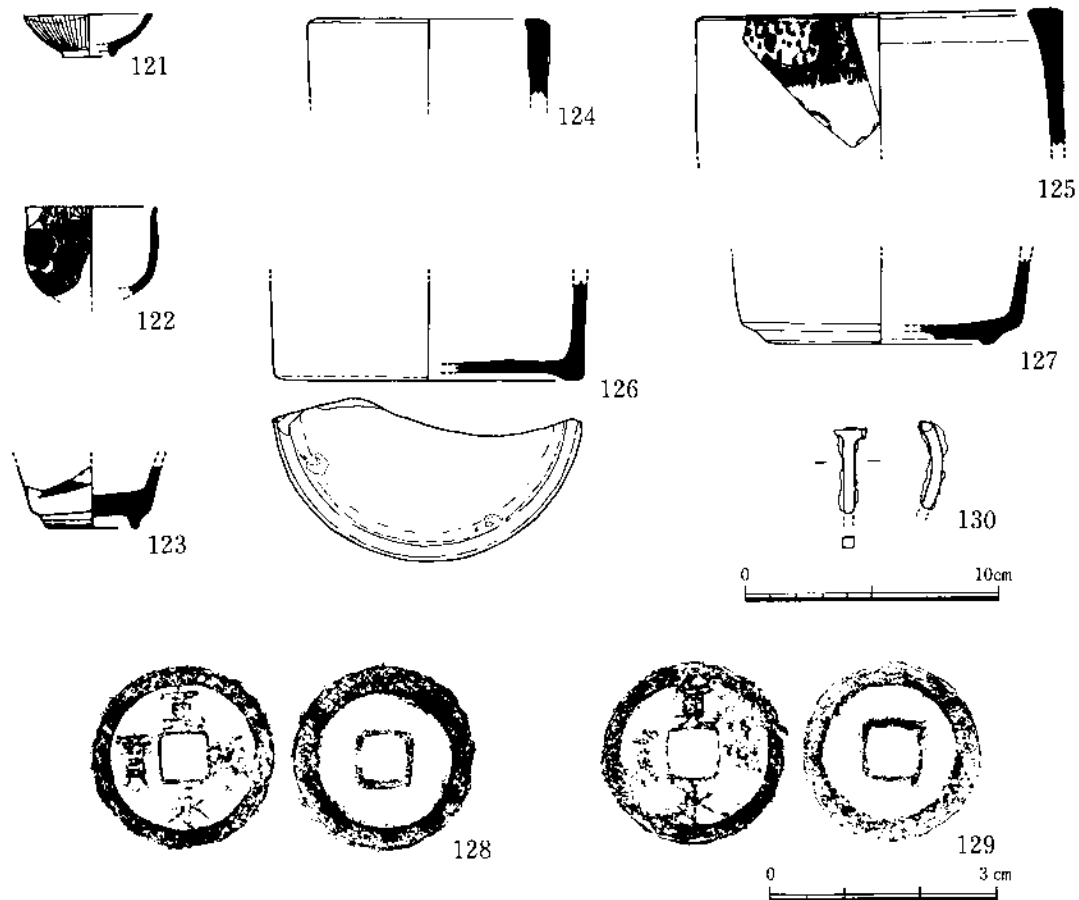


図15 I区出土遺物（磁器）

唐草文を描く。87は外面にコンニャク印判？の花文を施す。91は変形字文を外面に描く。96は外面に菊花文・網目文を描く。99は外面に波濤文、内面に昆虫文を有する。104は外面に草花文を描く染付の小型皿である。105～120は皿で、113が青磁と染付の掛け分けである以外は、すべて染付である。107は91と同様の変形字文を外面に描く。108は口縁端部に鉄釉の口鏝を施す輪花皿である。109は外面に菱文、内面に3枚の葉文を描く。110は外面に蔓草文、内面に四方禰文を描く。111は皿で、外面に唐草文、内面には区画内に草花文を描く。112～115は見込に五弁花文を施すもので、112はコンニャク印判によっている。112・113は高台内に「福」字銘を有し、いずれも渦福で、112は1重、113は2重の方形枠内に施される。118は内面に水草文？を描く。119は内面に花文を描き、高台内に「福」字銘を施す。120は内面を花文等を描くもので、高台内は蛇ノ目状に無釉部がある。121は白磁紅皿である。122・123は染付の猪口で、122は外面に松竹梅文を描く。124・127は青磁、125は染付、126は白磁である。126は底面に胎土目痕がみられる。

128・129は寛永通宝である。130は鉄釘の頭部とみられる。

131～135は軒丸瓦である。瓦当文様は、131が三葉柏文、132～135が三つ巴文である。巴文は

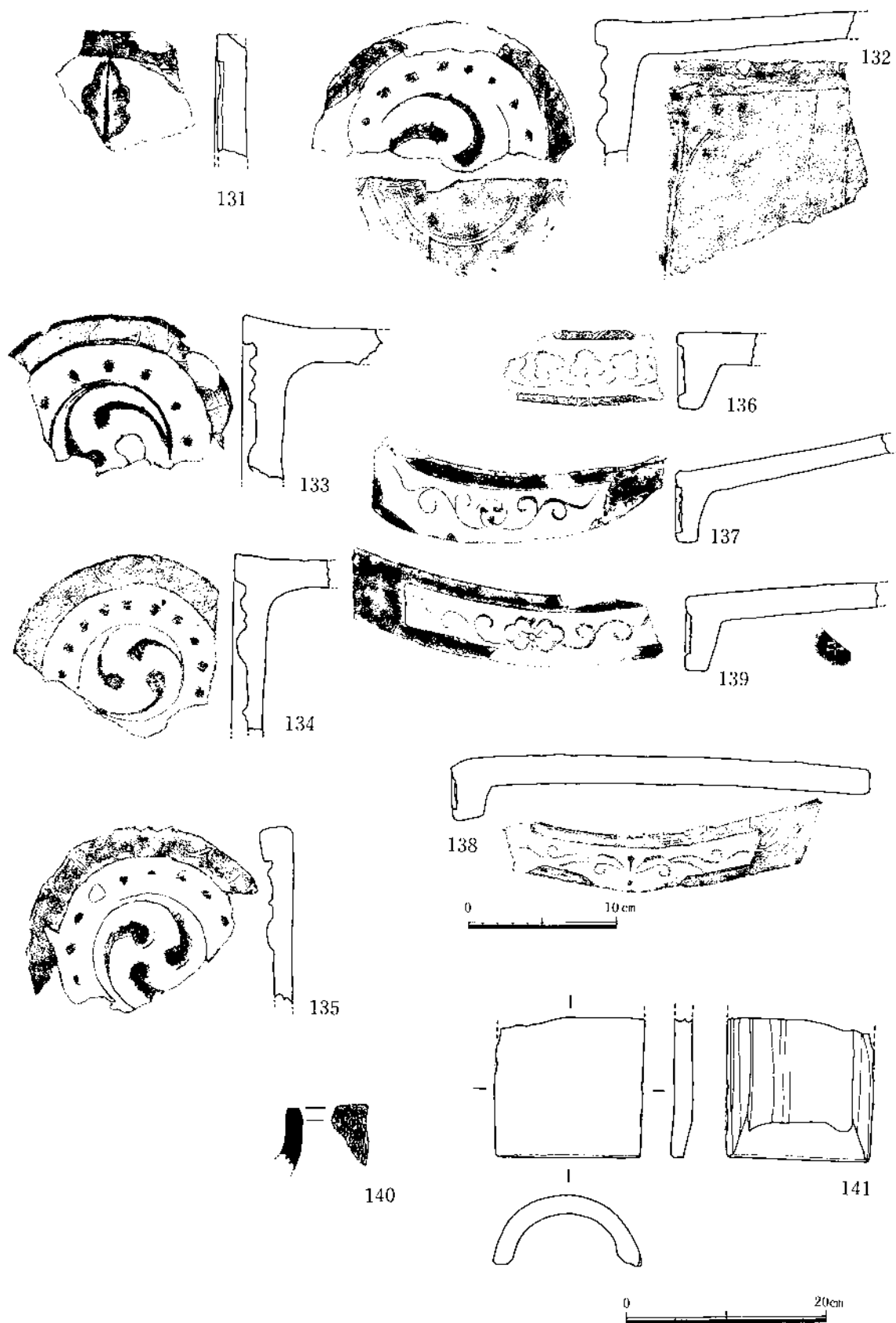


图16 I区出土遗物(瓦)

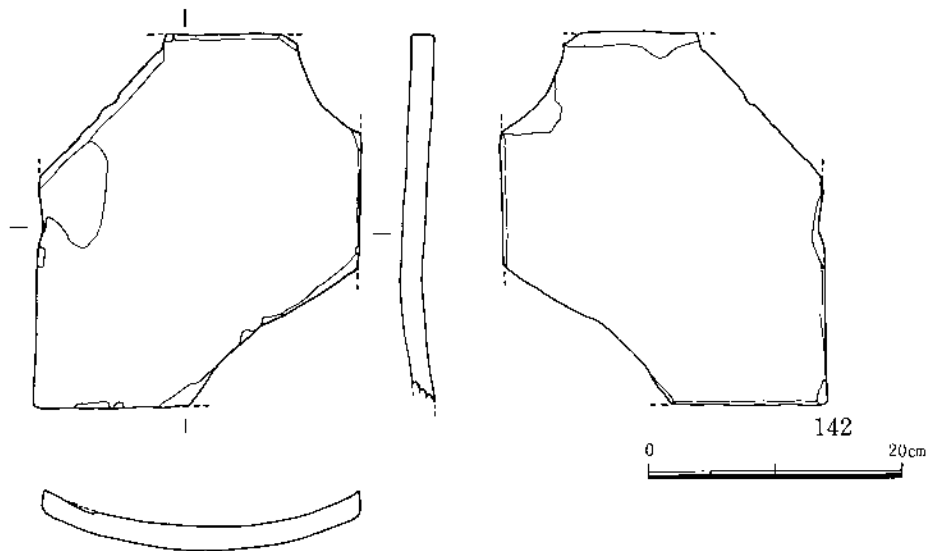


図17 I区出土遺物(瓦)

132・135が左巻き、133・134が右巻きで、133の文様面には木目圧痕が観察される。136～139は軒平瓦である。瓦当文様は、136が唐花・唐草文、137が三つ巴文・唐草文・138・139が唐草文である。137・139の瓦当面には木目圧痕がみられる。139の平瓦部凹面には「(ア)キ」銘が刻まれる。140・141は丸瓦である。140は凹面に磨目圧痕、凸面に沈線状凹み1条がみられる玉縁部片で、器表面橙色を呈する異質な焼成のものとして注目される。141は凹面に縦位の条線(圧痕)がみられる。142は平瓦である。

(2) 遺構

第II層上面において、石列条遺構と礎石2・溝状遺構1条・土坑状遺構3基・ピット状遺構等の遺構を検出した。ここでは石列状遺構と礎石2・溝状遺構・土坑状遺構3基について、その出土遺物と併せて記述する。なお、ここで取り上げなかったピット状遺構については、その殆どが遺物を伴わない時期不明のもので、近現代の攪乱坑の可能性が高いと判断されたものであることを付記しておく。

①石列状遺構・礎石1・2 SX1 (図18)

調査区ほぼ中央部・トレンチ南側に位置する。石列状遺構と2個の礎石を同一の構築物に関わるものとみなし、SX1として扱うものとした。南北方向に並ぶ石列状遺構の南方延長上に礎石1が長軸を東西方向を指向して設置され、石列状遺構西方に長軸を南北方向に指向した礎石2が置かれている。

石列状遺構は砂岩等の角礫5個を南北方向1列に並べたもので、石列上面はほぼ平坦に揃うように配慮されており、上面の標高は約23.7mである。また、石列東側の小口面の描くラインが直線に近づくよう意識されており、正面があるとすれば東側が正面側だと考えられる。構成礫の大きさは長軸長24～11cmで、地下部分の深さは非常に浅く、全て板状礫を平面積が最大となるように平面的

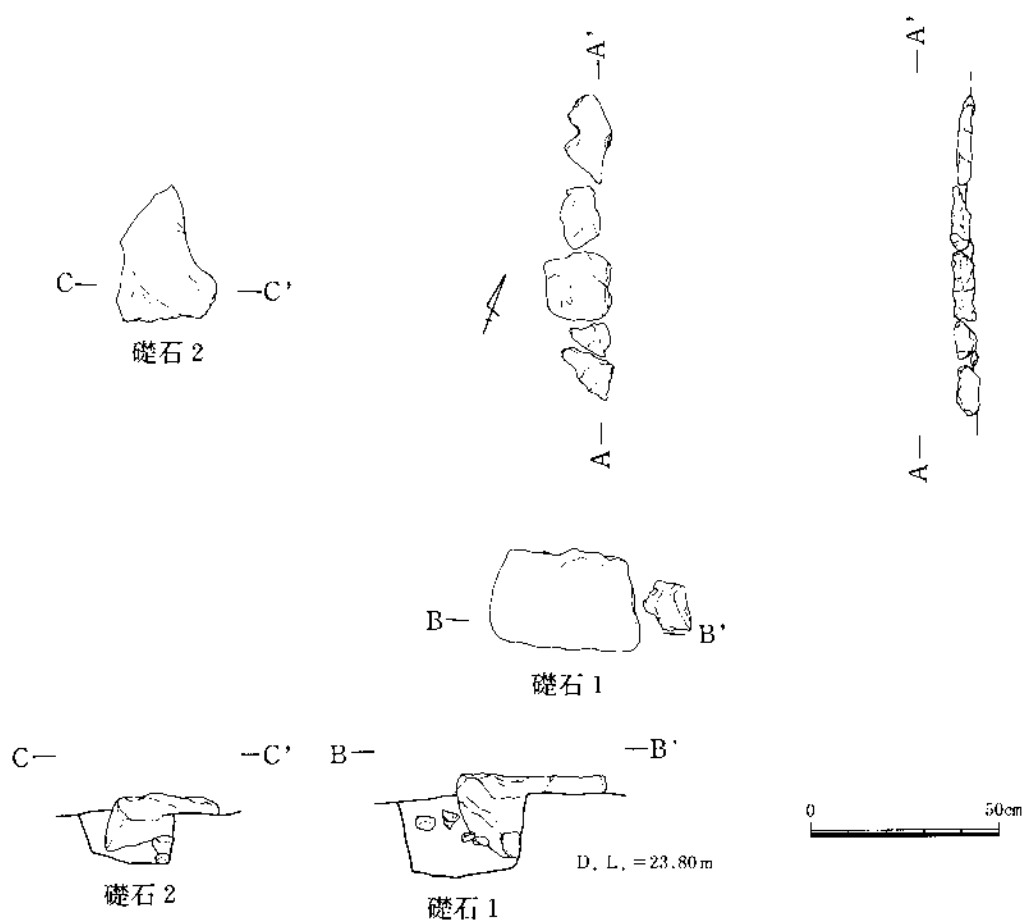


図18 I区SX1（石列状遺構、礎石1・2）

に設置している。礎は石列東側ラインを重視しながら、礎の大小・形態に応じて配列されており、上述以外に礎の置き方に関する規制はみられない。

礎石1は石英質砂岩の角礎で、上面は平坦である。法量は埋置状態で、長軸長41cm、短軸幅27cm、全厚22cmである。礎石上面の標高は23.73mである。なお、東側に隣接して長径16cm大の礎が存在する。

礎石2は砂岩の角礎で、上面は多少凹凸があるが、平坦になるよう意識して置かれたものとみられる。法量は埋置状態で、長軸長35cm、短軸幅27cm、全厚14cmである。礎石上面の標高は23.7mである。礎石基部の断ち割りをおこなった際、礎石直下部から備前焼片が出土している。

SX1の形成年代は、礎石2直下からの備前焼の出土により、近世初頭を遡らない時期と理解されるが、構築物の本来の姿は殆ど復元不可能であり、詳細な特定は難しい。

②溝状遺構SDI（図19）

調査区の東端部に位置し、更に調査区外東方に続いている。掘り方東側の形状は不明であるが、調査範囲でみると主軸はN-38°48'-Wを示す。検出した全長は10.32mであり、最大幅は2.16mで、北端部にある。そしてここから南端部に向かって幅を減じている。実際の北端部はSK1まで

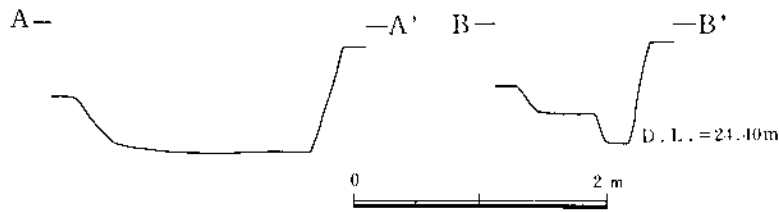


図19 I区SDI

の間にあるものとみられるが、完掘による確認はおこなっていない。南端部は調査区外へ伸びているために不明。検出面からの深さは最深部で84cmである。掘り方の断面形は逆台形状を呈する。床面北端の標高は23.44m、南端の標高は23.66mである。埋土は瓦・漆喰等を多量に含む暗褐色土である。

遺物は土師質土器6点、焼塩壺3点、陶磁器59点、瓦4261点(重量687.3kg)等が出土しており、土師質土器1点、焼塩壺1点、陶器3点、磁器4点、砥石1点、鉄製品4点、瓦9点を図示した。

SDI出土遺物(図20~22)

143は土師質土器坏で、底部に回転糸切り痕を留める。

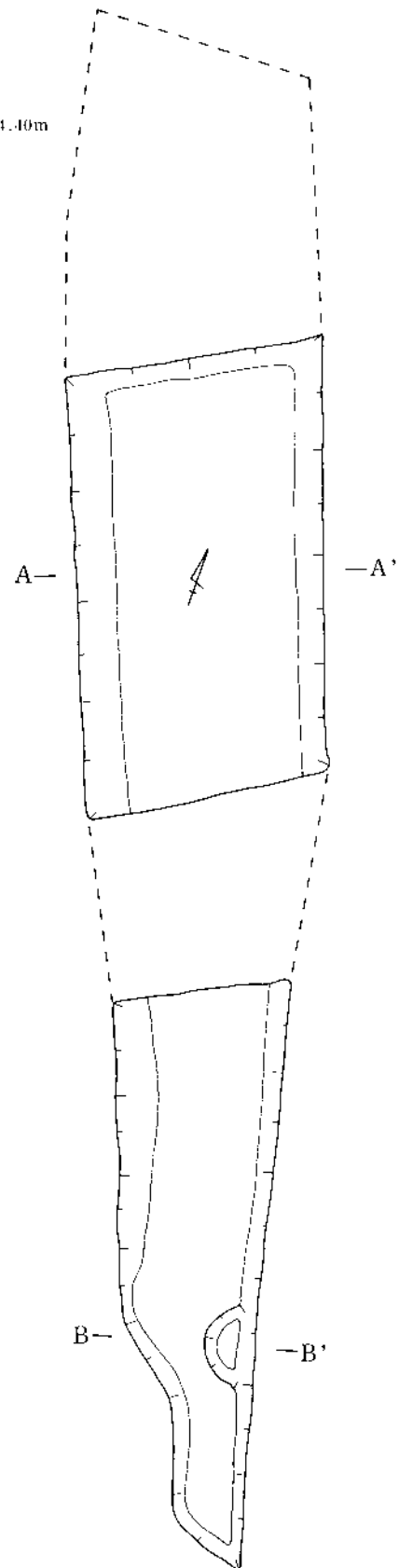
144は焼塩壺口縁部片である。

145~147は陶器である。145は口縁部にタールの付着があり、灯明皿(素焼き?)の可能性がある。146は鉢?、147は甕の胴部片とみられ、ともに備前と考えられる。

148~151は磁器である。148・149は皿、150は碗とみられる。148は内面に五弁花文をコンニャク印判で施し、149も内面に五弁花文を描く。151は外面(高台内)に二重の方形枠に入った「福」字銘を有する。

152は砥石で、石材は泥岩。側面に5箇所の凹みが見られる。

153~156は鉄製品で、153・155は釘かとみられる。



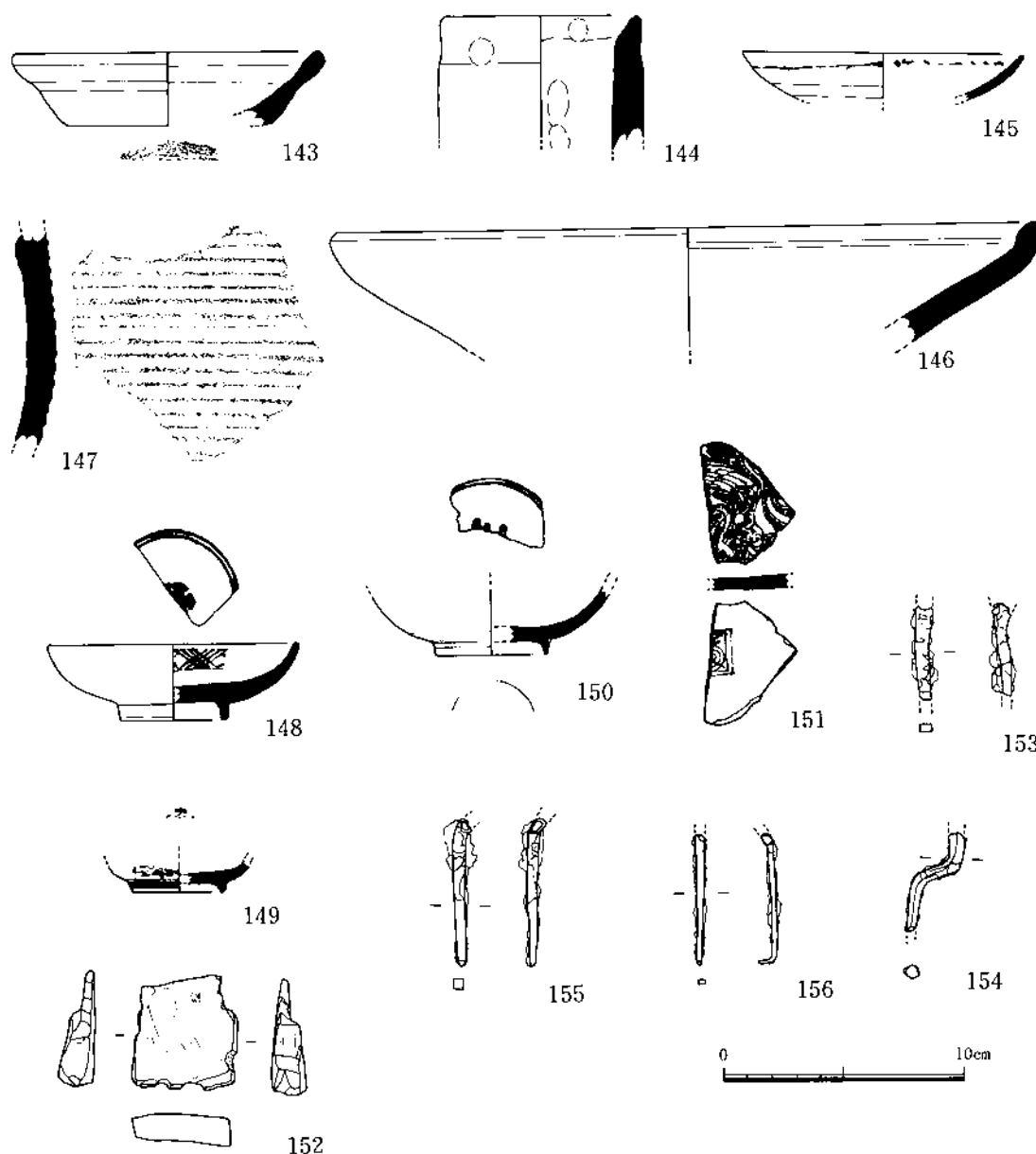


図20 S D I 出土遺物

157～160は軒丸瓦であ。瓦当文様は157・158が三ッ葉柏文、159・160が左巻きの三つ巴文である。159の文様面には木目圧痕が残る。161は軒平瓦で、瓦当部には唐草文を施す。また、平瓦部凸面に蓆目圧痕がみられる。162～164は丸瓦である。162・163は玉縁を有する上半部片で、いずれも2個の釘孔をもつ。162・164の凹面には蓆目圧痕がみられ、163の凹面には布目圧痕が残る。また、163の凹面には斜位の条線、164の凹面には横位の条線がみられる。165は平瓦片である。

③土坑状遺構 S K I (図23)

調査区の北東隅に位置する。掘り方の平面形は隅丸形状を呈し、長径2.1m、短径1.77m、検出面からの深さは1.26mである。掘り方の断面形態は立ち上がりの急な逆台形状を呈する。埋土は

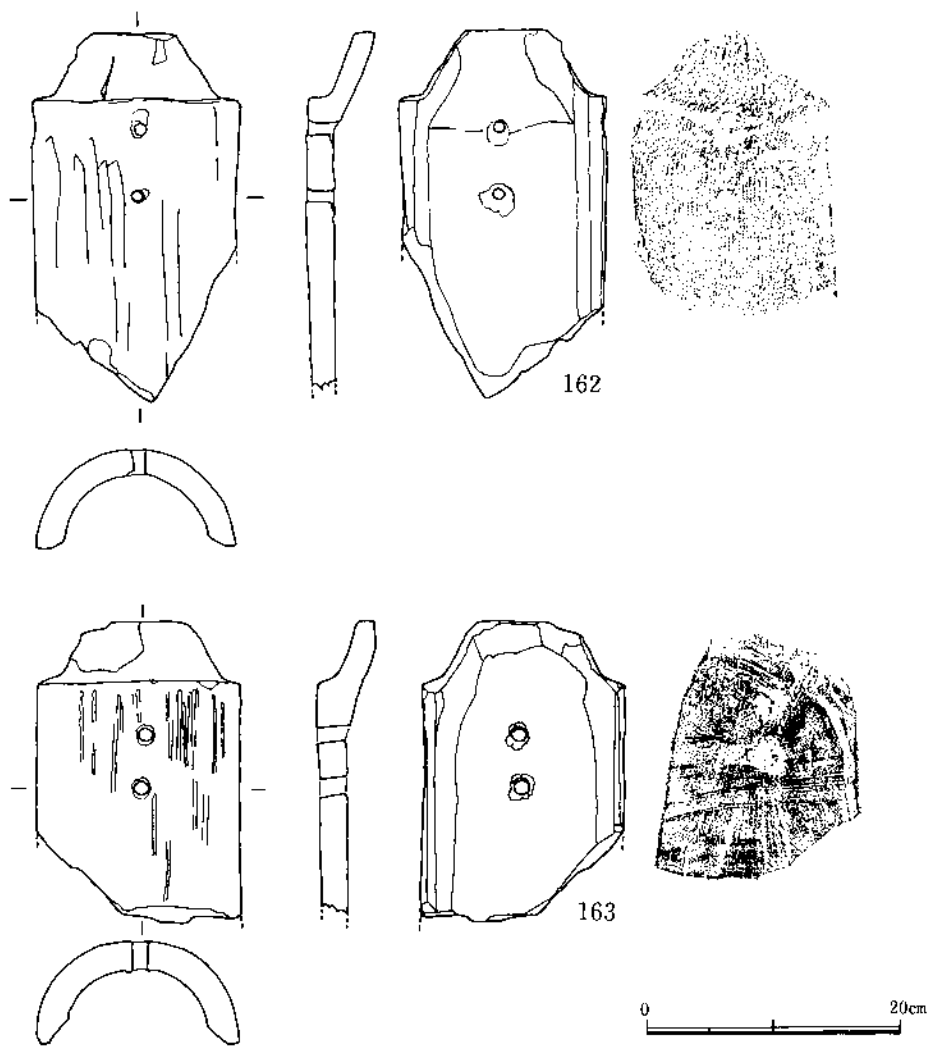
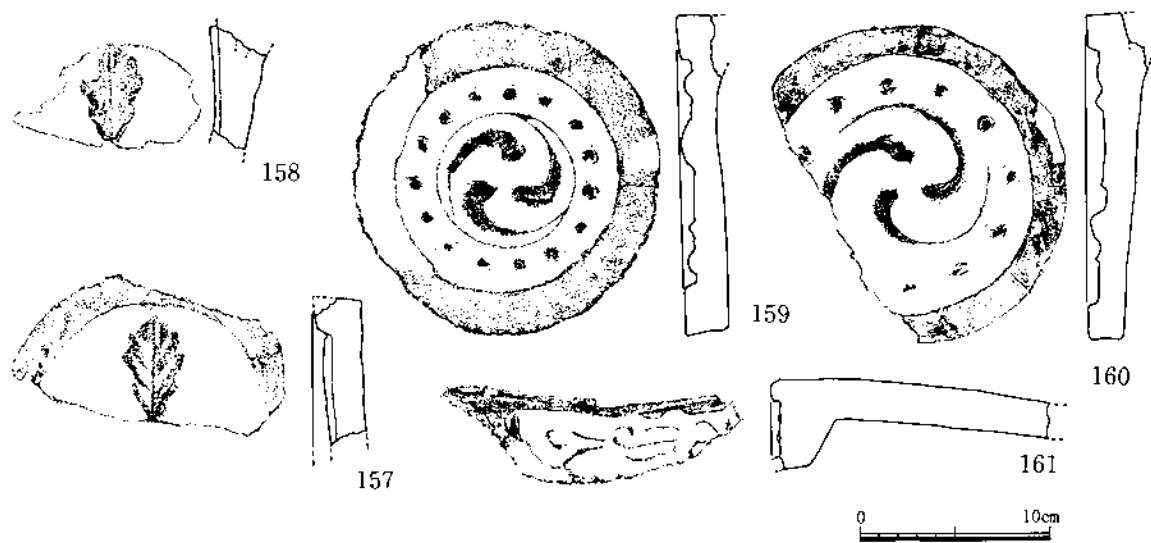


图21 S D I 出土遺物 (瓦)

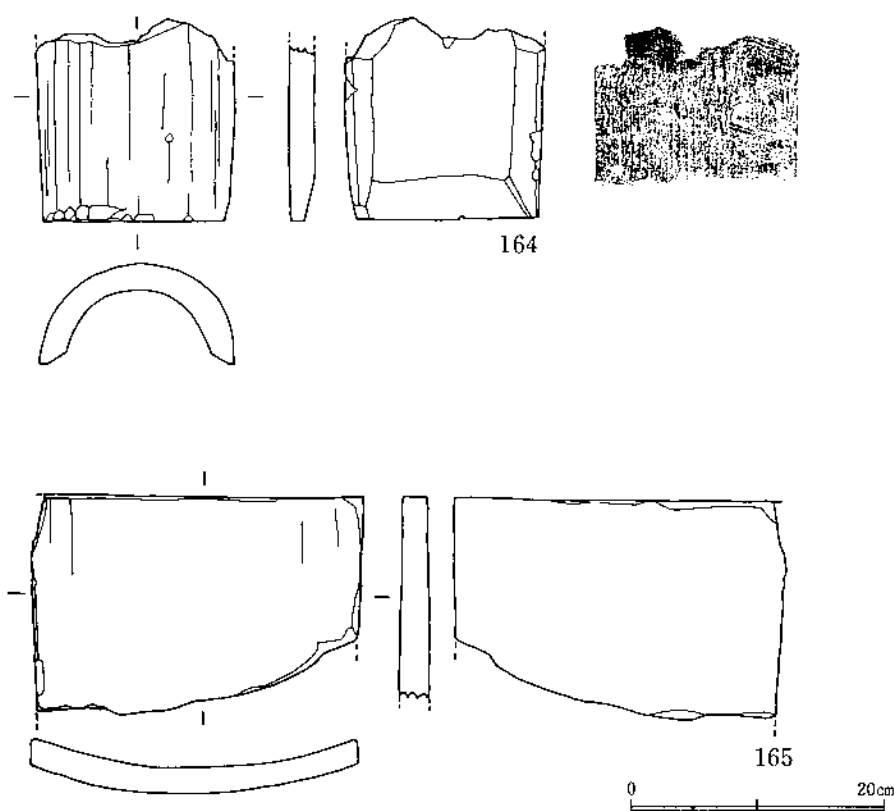


図22 S D I 出土遺物 (瓦)

(第I層：攪乱層)、第II層：漆喰・小礫層、第III層：暗褐色土、第IV層：暗黄褐色土で、第III・IV層には多量の瓦が含まれる。

遺物は土師質土器21点、土製品1点、陶磁器76点、火鉢片28点、瓦447点(重量72.1kg)等が出土しており、土師質土器3点、焼塩壺蓋1点、土製品1点、陶器3点、磁器7点、火鉢片2点、瓦3点を図示した。

S K I 出土遺物 (図24~26)

166~168は土師質土器で、166は皿、167は環の形態を呈す。168は口縁部外面に沈線4条を巡らす。

169は焼塩壺蓋で、内面には布目圧痕がみられる。

170は窯道具のハリではないかとみられる。

171~173は陶器である。171は碗、172は卸皿、173は備前大甕の口縁部片である。

174~180は磁器である。174~176は染付で、174は碗で、見込中心部に亀文?を描く。175・176は皿で、175は外面に瓔珞文、176は外面に七宝繫文を描く。177は青磁皿である。178は青磁・染付掛け分けの皿とみられ、内面に五弁花文、高台内には二重方形枠内に「福」字銘を描く。179はプリントにより丸・松竹梅・扇・雲・草花等を施文した色絵の皿で、在地の鹿兒焼かとみられる。180は白磁で器種は不明。

181は火鉢片である。外面はミガキ調整で光沢を有する。内底面にはススが付着する。

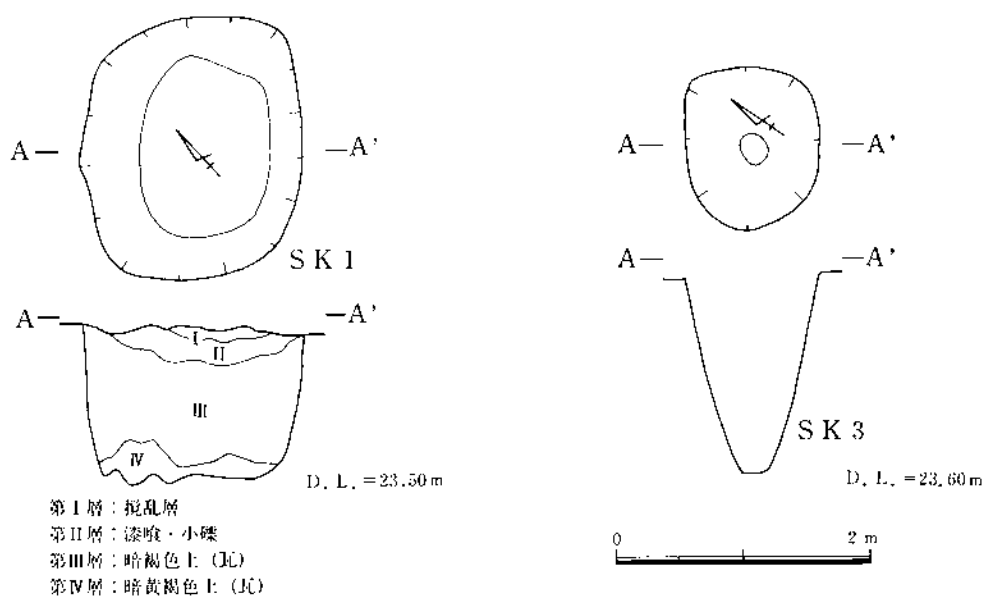


図23 I区SK1・3

182は三つ巴文の軒丸瓦で、巴文は右巻きである。183は丸瓦の上端部片で、凹面に蓆目圧痕がみられる。184は平瓦片である。

④上坑状遺構SK2 (図27)

調査区の北東部、SK1の南西方に位置する。掘り方の平面形は不整長円形を呈し、西側と南側に深さの異なる突出部がある。遺構の規模は長径5.85m、短径2.4m、検出面からの深さ1.35mである。掘り方の断面形態は逆台形状で、中央部は浅く一段凹む。埋土は第I層：黒灰色土（攪乱層）、第II層：暗褐色土（瓦）、第III層：灰白色砂質土（漆喰・瓦）、第IV層：赤褐色粘質土で、第II・III層に多量の瓦が含まれていた。

遺物は土師質土器11点、瓦質土器1点、陶磁器160点、火鉢片4点、瓦2582点（重量416.5kg）等が出土しており、土師質土器1点、瓦質土器2点、青磁1点、陶器5点、磁器8点、鉄釘5点、瓦9点を図示した。

なお、西側の突出部は最新の攪乱坑で、SK2の掘り方を切っていた。この部分から、クマとみられる獣骨1体分が出土している。種の同定はできていないが、各部の骨は殆ど揃っており、また、左半身を上にして横臥した状態で出土したことから、死体を埋納していたものと考えられる。

SK2出土遺物 (図28～30、写真図版PL, 29)

185は土師質土器の口縁部片である。

186は瓦質土器鍋で、口縁端部はナデにより細沈線状をなす。187は瓦質土器の獸面把手部で、ヘラ描きで獅子を描出し、目の部分は穿孔されて、左右に貫通している。

188は輸入陶磁の青磁碗で、外面に陽刻文を施す。

189～193は陶器である。189は碗で、外面に界線2条を描く。190は灰釉の皿で、肥前系かとみら

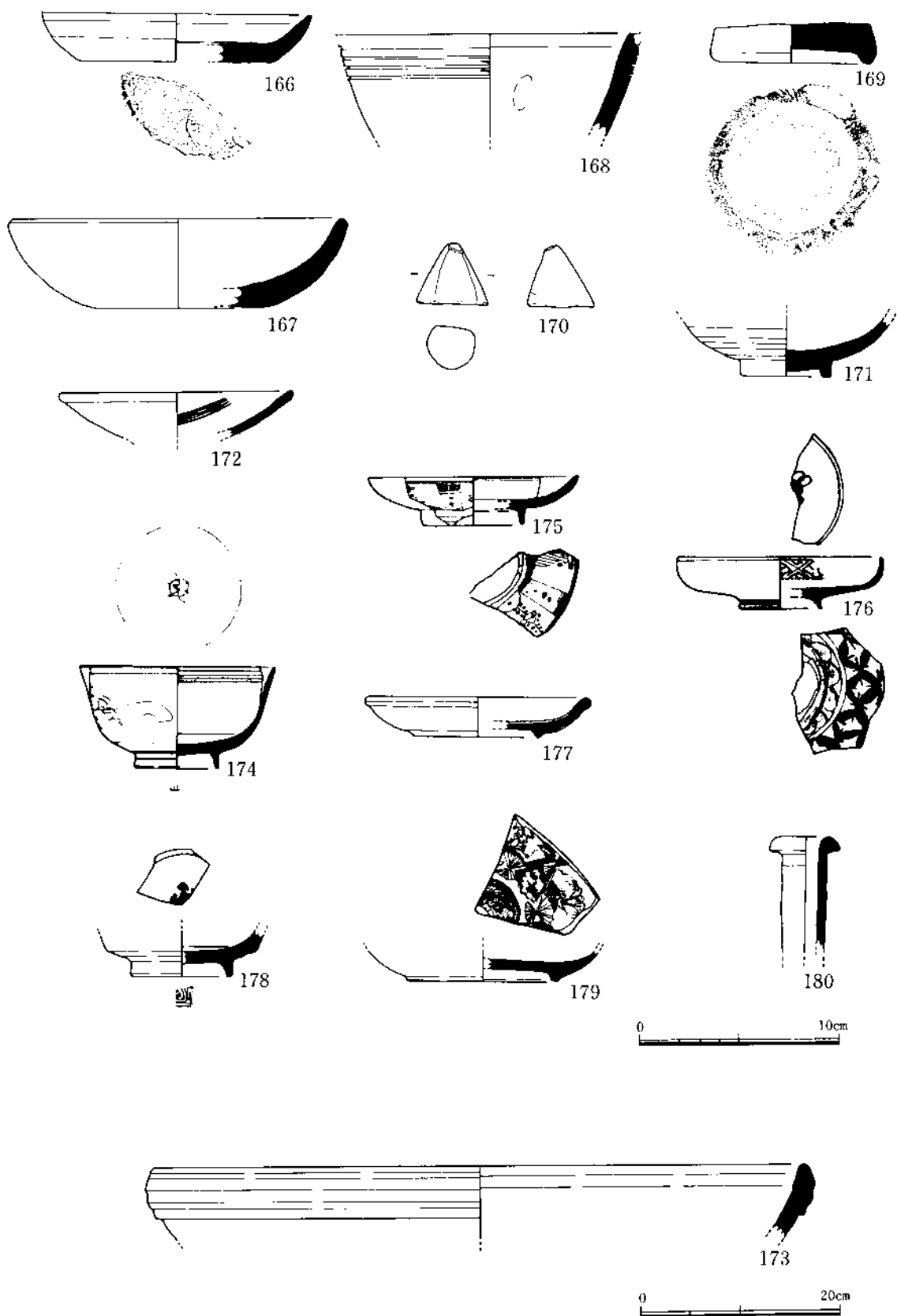


图24 SK 1 出土遺物

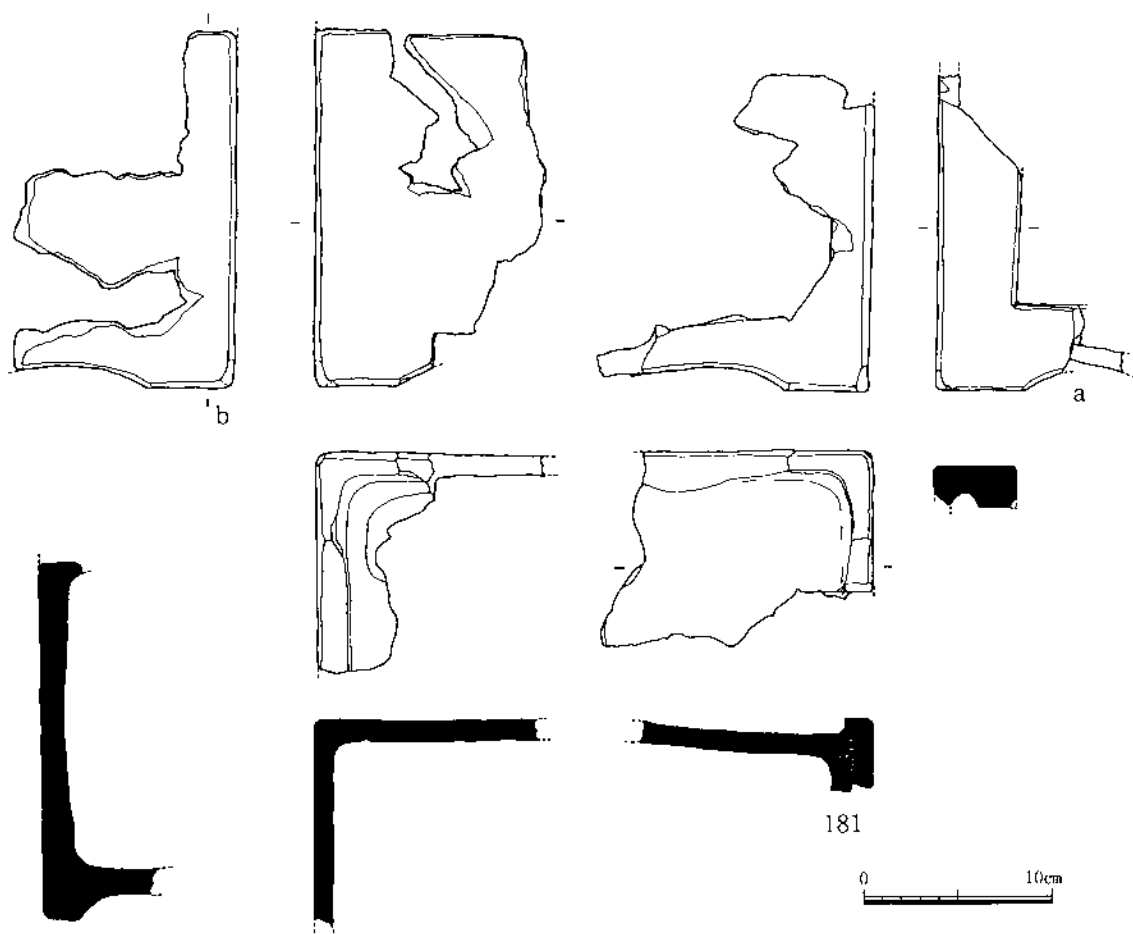


図25 SK1出土遺物

れる。191・192は鉄軸の片口鉢である。

194～201は磁器である。194は染付の蓋で、外面に丸文を描く。195・196は染付の碗で、195は内外面に菊花文を施し、196は外面に梅花文を描く。197は赤絵の皿で、外面には斜格子内に梅花文を描いている。198～201は染付・皿で、198・200・201は内面にコンニャク印判による五弁花文を施す。201は高台内部に二重方形枠入りの「福」字銘を有する。

202～206は鉄釘で、202以外は瓦留め用のものと考えられる。

209～212は軒丸瓦で、209・210・212は左巻きの三つ巴文、211は右巻きの三つ巴文を有する。209の丸瓦部には釘孔1が残存し、釘孔内には鉄片が付着している。210は文様面に木目圧痕がみられる。212は丸瓦部凹面に布目圧痕・横位条線が観察される。213～216は軒平瓦である。213は幅の小さい小型品（切隅瓦？）で、瓦当部に一つ巴文・唐草文を施す。214～216は瓦当部に唐草文を施すもので、215は平瓦部凹面に横位条線がみられる。217は丸瓦上半部片で、釘孔2個を有し、凹面には布目圧痕・縦位条線が観察される。また、玉縁部凸面に沈線1条を横走させる。

⑤上坑状遺構SK3（図23）

調査区の北半部、SK2の西方に位置する。掘り方の平面形は不整隅丸方形状を呈し、規模は長

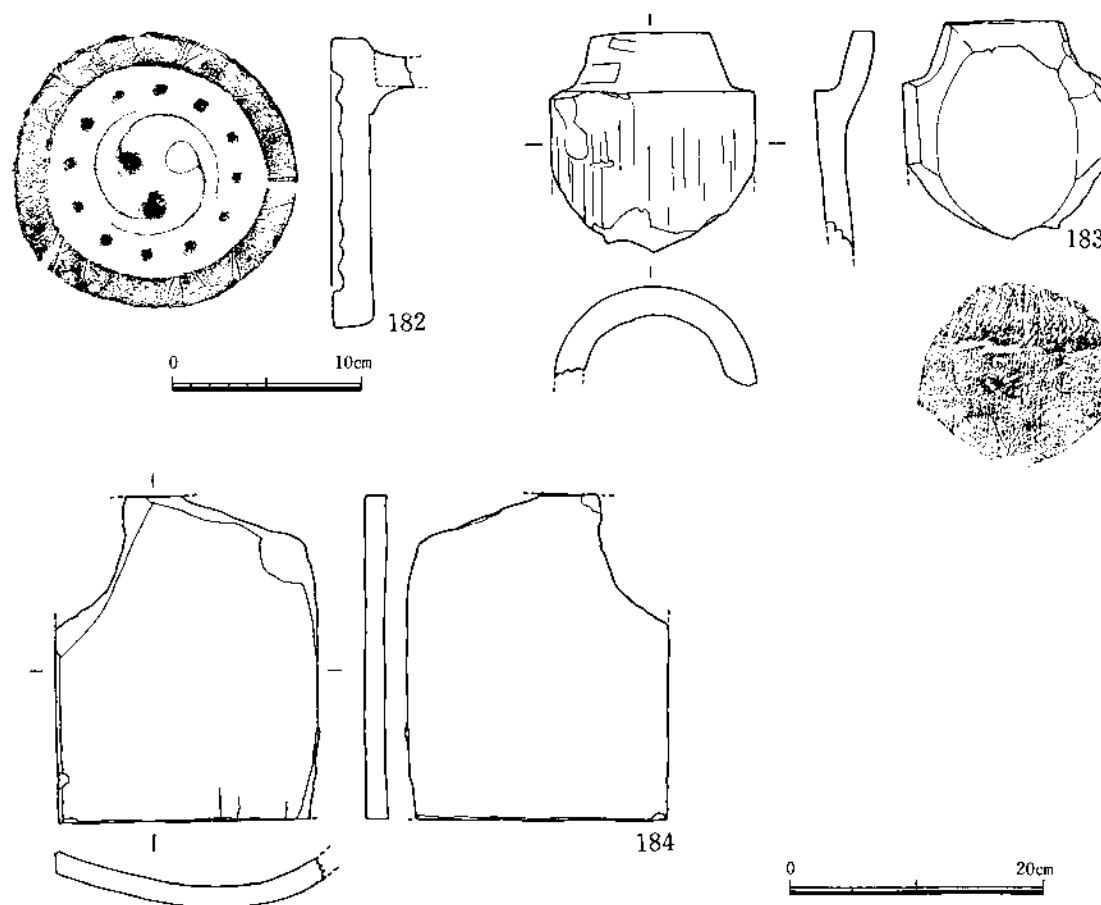


図26 SK I 出土遺物

径1.29m、短径1.07m、検出面からの深さ1.59mである。掘り方の断面形態は下底辺の短い逆台形状で、床面は非常に小さい。埋土は、多量の瓦を含む暗褐色土である。

遺物は土師質土器6点、陶磁器18点、瓦1168点（重量188.4kg）等が出土しており、磁器2点を図示した。

SK 3 出土遺物（図29）

207は色絵の皿で、外面に草花文、四方禪文等を描く。208は白磁の猪口で内面に「二十周年記念」「土陽新聞」と金文字で書かれている。土陽新聞は1878年創刊であることから、二十周年日は1898年ということになる。遺構の年代の上限を示す紀年銘をもつものとして、有効な資料といえる。

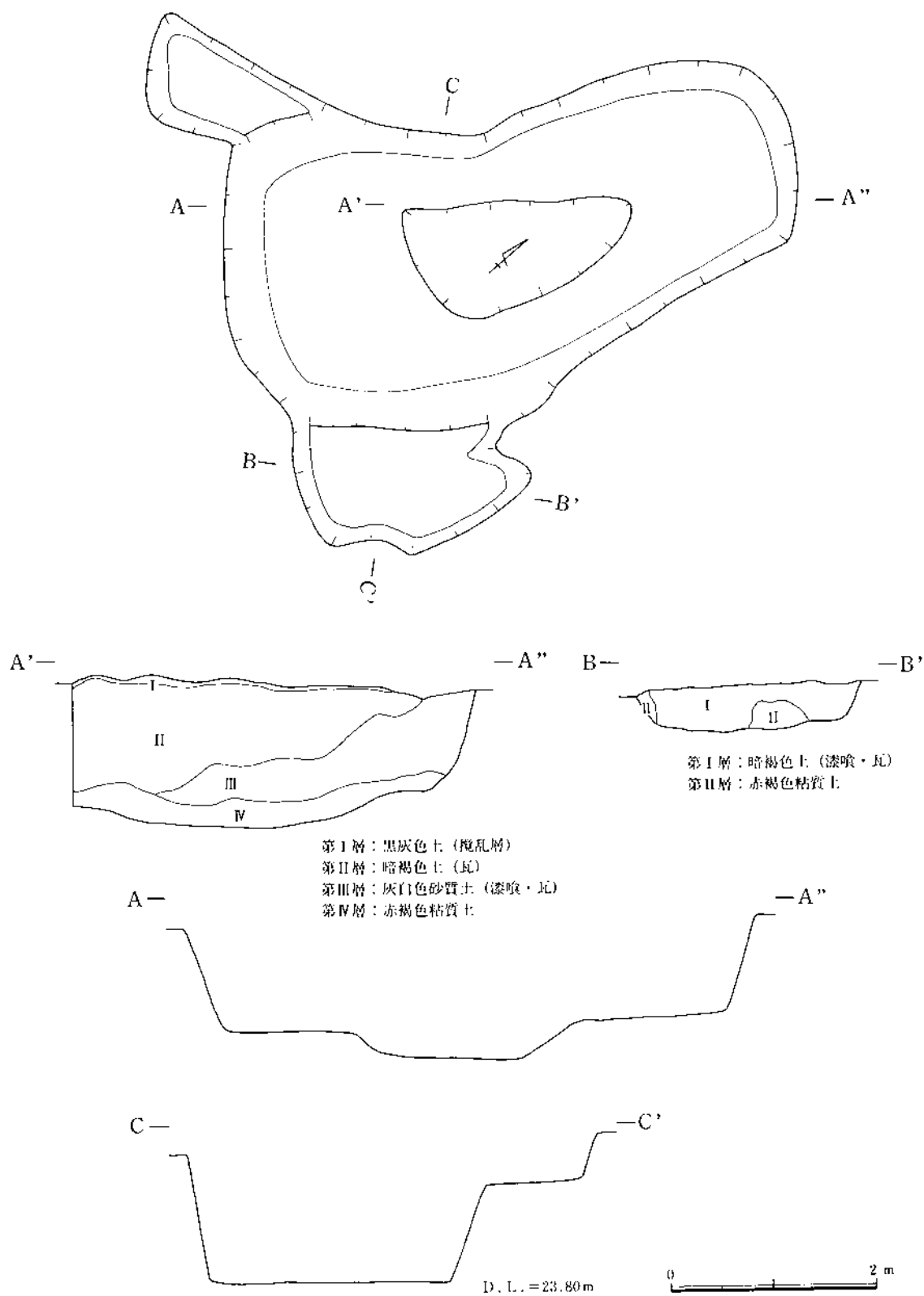


图27 I区SK2

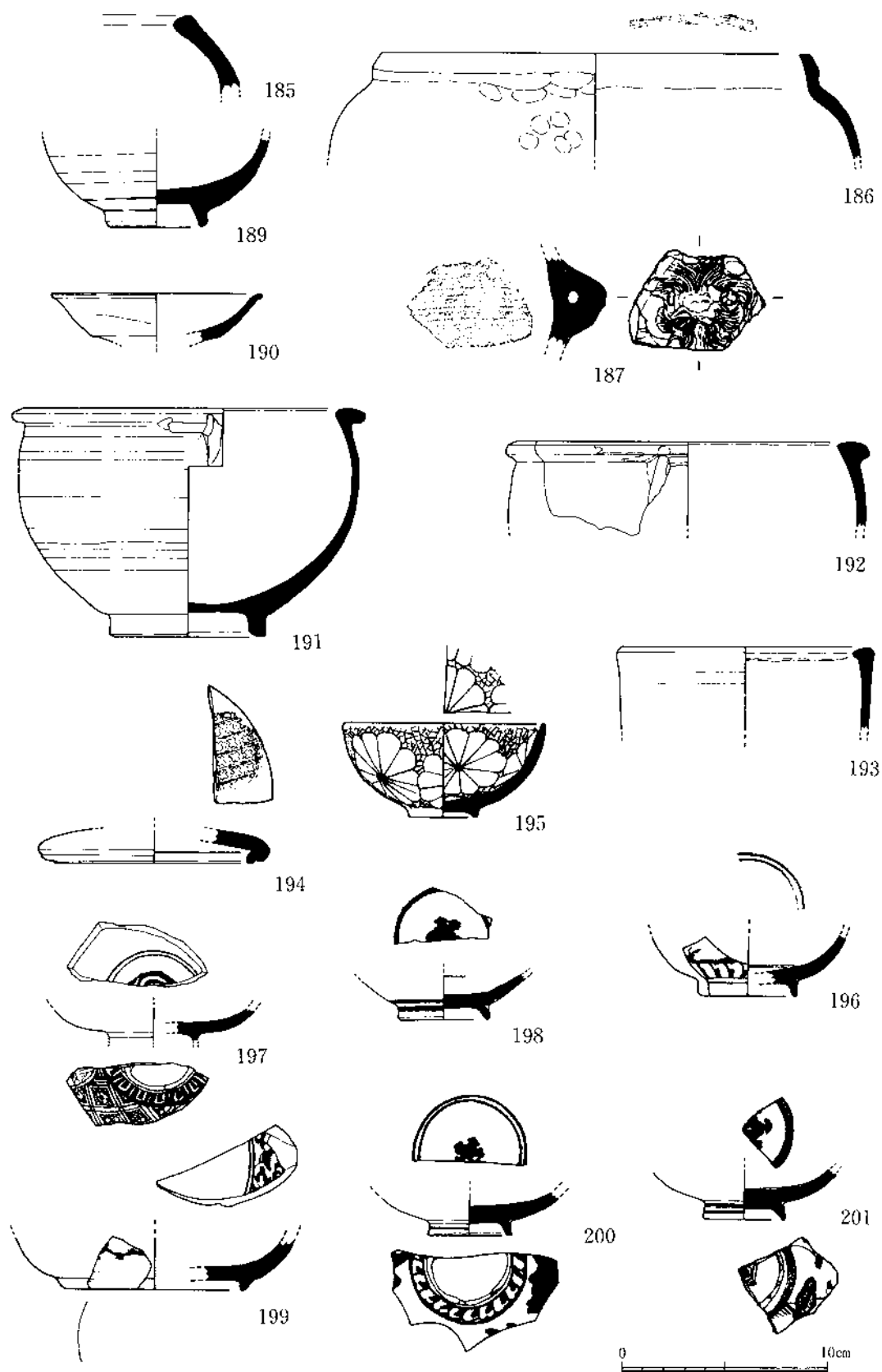


图28 SK 2 出土遗物

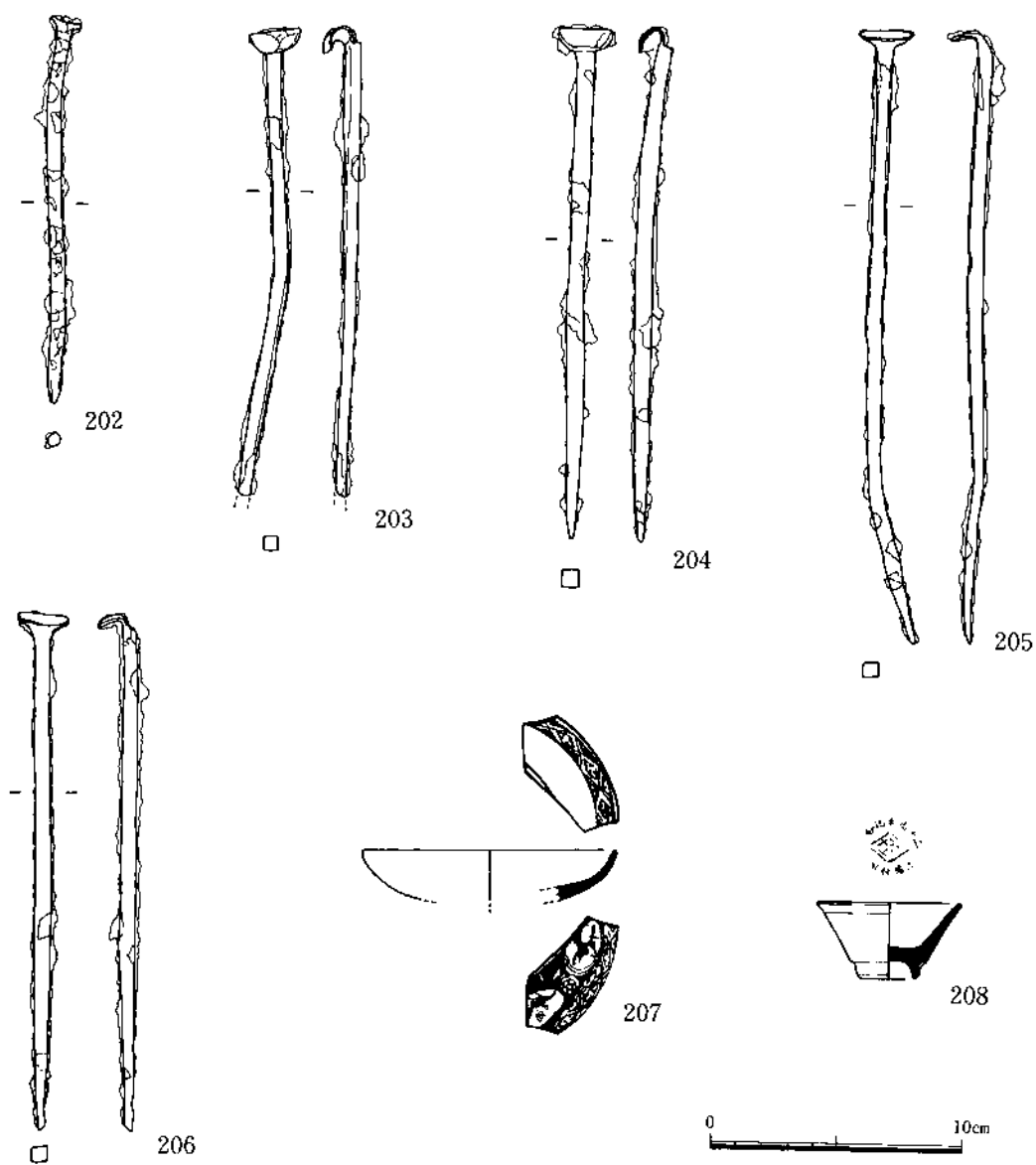


図29 SK 2・3 出土遺物

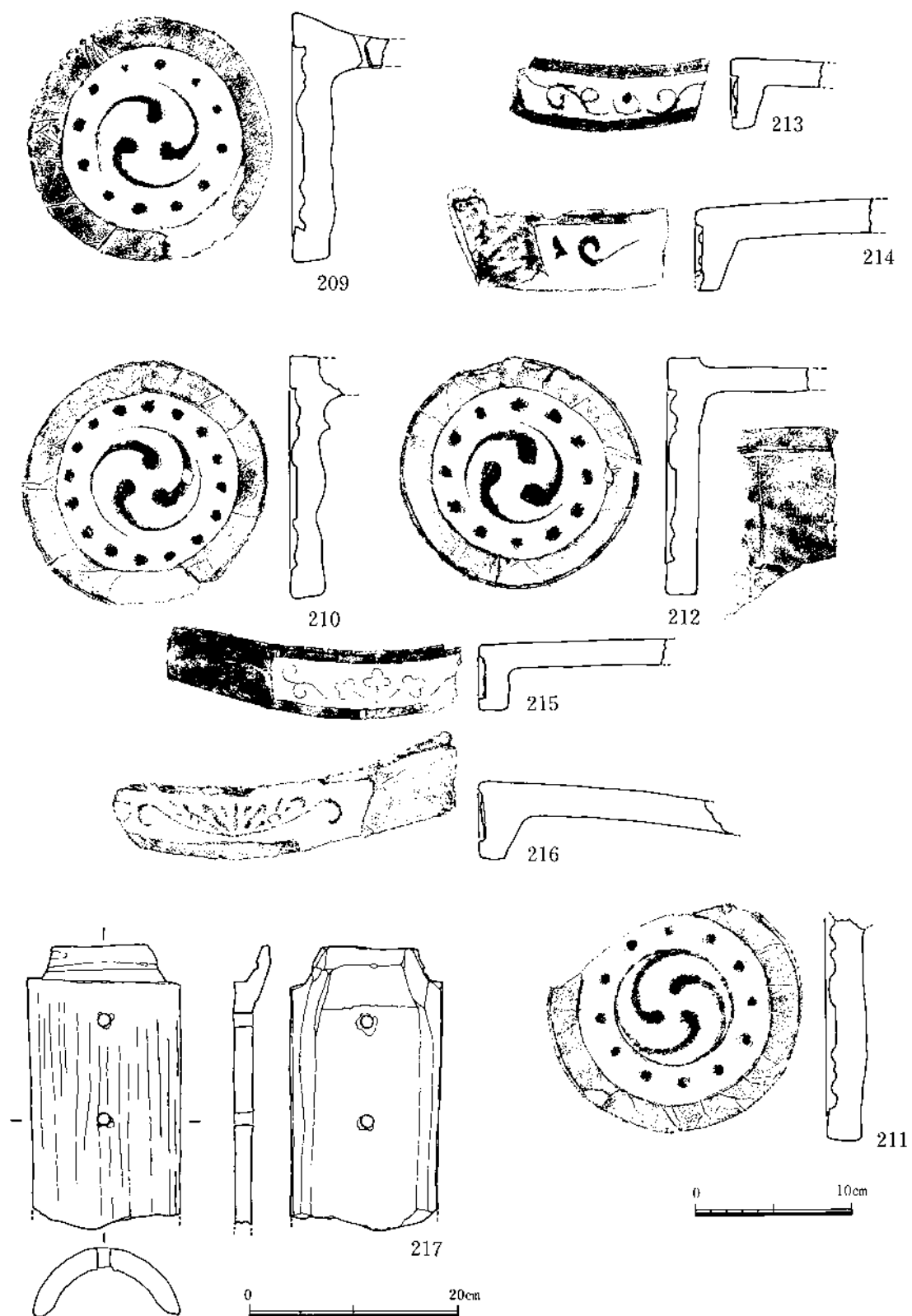


图30 SK 2 出土遺物 (瓦)

(2) II区の調査

1. II区の概要

I区の南側に当たる調査区であり、調査区全体の中では東半部に位置する。I区とIII区との間に位置する平面形ほぼ方形の調査区で、面積は59㎡である。

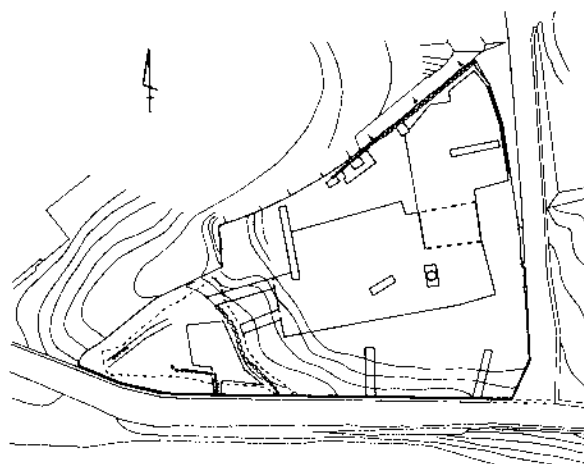


図31 II区的位置 (S=1/1,500)

2. 層序

この調査区は北辺・東辺部では、表土の攪乱層を除去すると橙色の地山(岩盤)面が現れる。北・東辺のごく僅かな範囲を除くと、II区の大半部分はコンクリートや一抱えもあるような礫を投げ込んだ攪乱坑で占められる。なお、この攪乱坑については、表層部若干を掘り下げたのみで、断ち割り調査は実施していない。遺物は表土層から陶磁器片が出土した。遺構はピット状遺構1基を検出している。

3. 検出の遺構・遺物

II区では、岩盤面上でピット状遺構1基を検出し、表土層から陶磁器片2点が出土した。ここではピット状遺構についてのみ記述する。

(1) ピット状遺構 (図33)

調査区の南東隅部で検出した。平面形は不整形で、規模は径18cm、検出面からの深さ8cmである。掘り方の断面形態は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

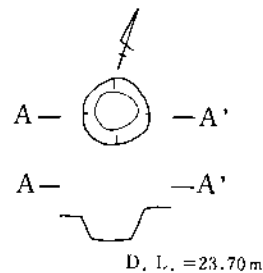
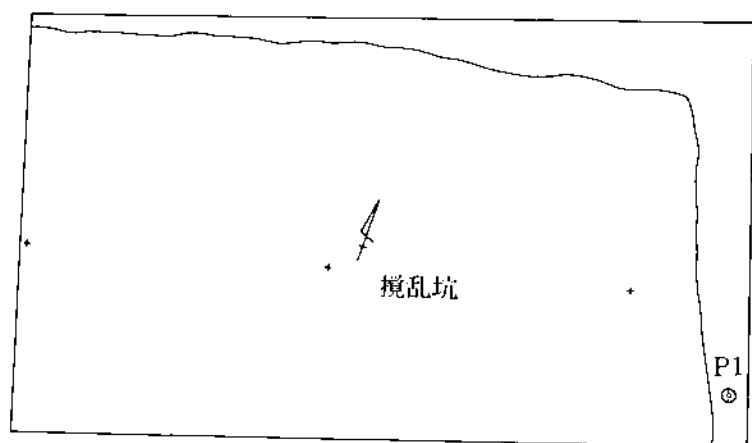


図32 II区全体図

図33 II区P1

(3) III区の調査

1. III区の概要

今次調査において面積最大の調査区であり、「御台所屋敷跡」のほぼ中央部分に相当する。南・西側はそれぞれの斜面肩部までを範囲とし、北側は調査手順・北側石垣への影響等を勘案して、斜面までの間に一定の空隙を残した。また、北東部はII区と接する。III区は東西に長い平面形不整形形状を呈し、面積は470㎡である。

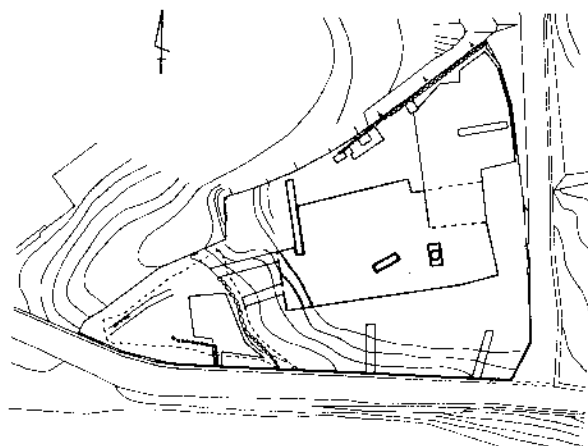


図34 III区的位置 (S=1/1,500)

2. 層序 (図35)

基本層序は、西端部分で観察されたもの (A-A') を代表させる。ここでみられた層序は、第I層：表土 (攪乱層)、第II層：赤褐色土、第III層：褐色土、第IV層：明褐色土である。この中で、第III・IV層が中世の遺物包含層である。第IV層はかつての中世の遺構面であったものが自然攪乱等の影響によって包含層化したものとみられる。従って検出遺構には第IV層上面で検出できたものと、第IV層下面 (岩盤面) で検出したものとの二者が存在する。第IV層上面で検出した遺構の中には近世以降の所産のものが含まれていることが予想されるが、下面検出のものはほぼ同一面に存在していたものと理解できよう。上記の層序が確認されるIII区南西～中央部分に関しては上述したような所見が適用され得る。しかし、南西部遺構群と若干の間隙をもって展開している北部～東部の遺構群については、先の層序は認められず、表土 (攪乱層) 直下が遺構検出面となっている。また、北部～東部では後述するように近世初頭の一括資料を伴った遺構群が検出されている。

III区北西部に設けたトレンチは北側斜面に向かっての土層堆積状況確認のためのものである。ここでの土層堆積状況 (B-B') は、斜面部分に対しての複数回の客土搬入 (盛土) がなされた様相を示している。これによれば平坦地形の拡張を意図した行為とみられるが、その実施年代は明確には捉えられていない。

3. 検出の遺構・遺物

III区では、第I～III層から土師質土器・焼塩壺・須恵器・瓦質土器・陶磁器・土錘・石鍋・石硯・瓦等の遺物が出土した。また、第IV層上面及び岩盤上面において、溝状遺構・土坑状遺構・ピット状遺構等の遺構を検出した。ここでは、第I～III (IV) 層及び北西部トレンチ出土遺物、各遺構とその出土遺物、の順で記述していくこととする。

(1) 第I～III (IV) 層・北西部トレンチ出土遺物 (図37～41)

第I層からは、土師質土器20点、須恵器1点、陶磁器10点、土錘1点、石硯1点、瓦2点が、第II層からは、土師質土器60点、陶磁器6点が、第III (IV) 層からは土師質土器445点、焼塩壺10点、土錘3点、須恵器9点、瓦質土器3点、陶磁器105点、石鍋1点、瓦90点がそれぞれ出土しており、

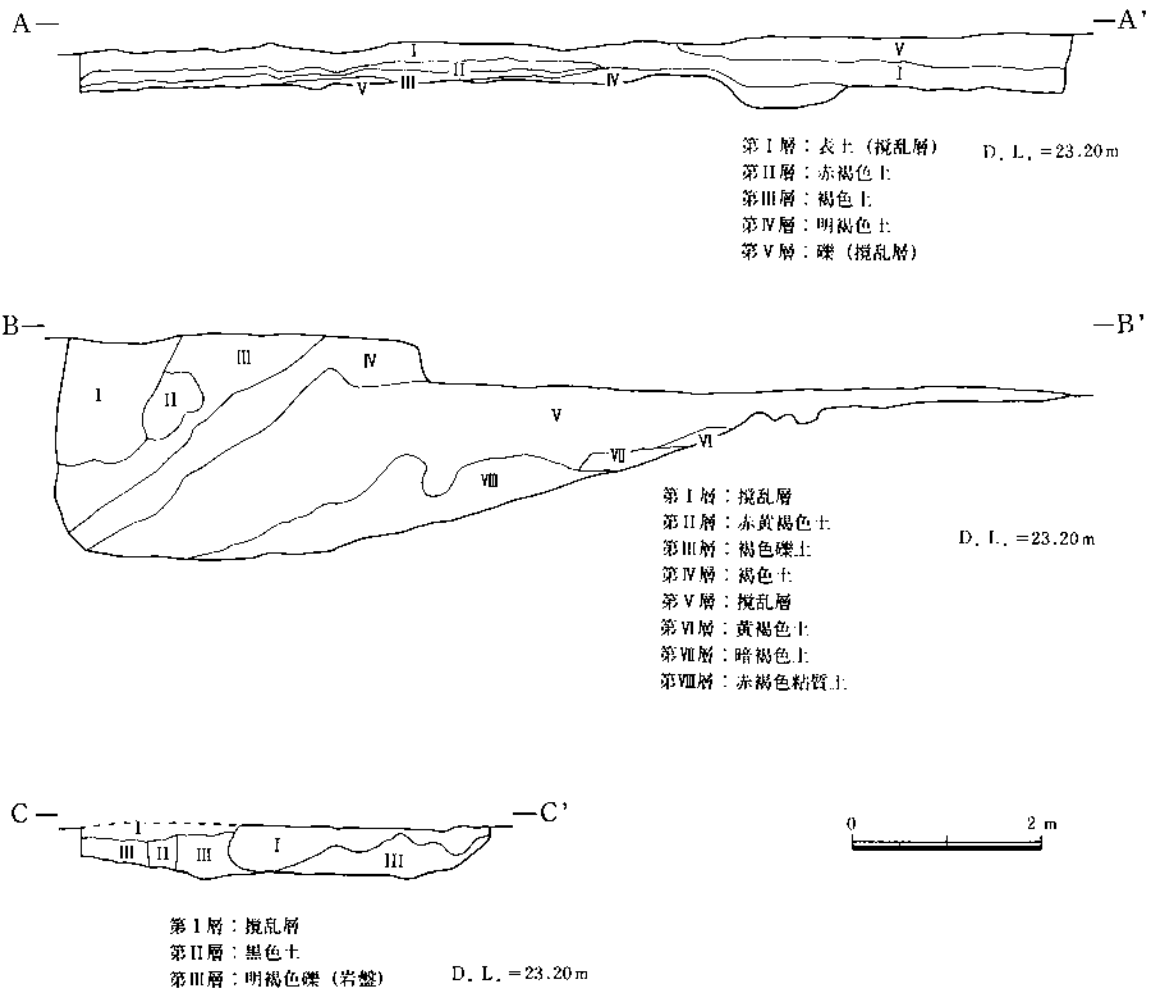


図35 III区土層断面図

III区の遺構外出土遺物の総点数は767点である。これらの中から、土師質土器42点、焼塩壺4点、土錘3点、須恵器1点、瓦質土器7点、陶器7点、染付1点、磁器4点、石硯1点、石鍋1点、煙管1点、瓦1点を図示した。以下、順に記述する。

218～259は土師質土器である。218～237は坏もしくはこれに近似する形態のものである。228は手捏ね成形であるが、これ以外は全てロクロ成形とみられ、回転糸切り痕の観察されるものが多い。また、219～223・230・232・234・235は内底面中央部に明瞭な凹みを有する点で共通する一群である。238～240・242は皿形態の器種であるがこれ以外は器形の特定できないものである。238～258はロクロ成形によるものが殆どである。239はスス・タールの付着がみられ、灯明皿の可能性はある。241・243は内面に縄目状の圧痕がみられる。247・249・253・254・257は内底面中央部に凹みのある一群である。259は注口部をもつ鉢の口縁部片とみられる。219・225・227・229・231・238・239・241・242・244・245・247・250～252・254・258は第I層出土、236・255は第II層出土、218・220～224・226・228・230・232・234・235・237・240・243・246・248・249・253・256・257は



图36 III区全体图

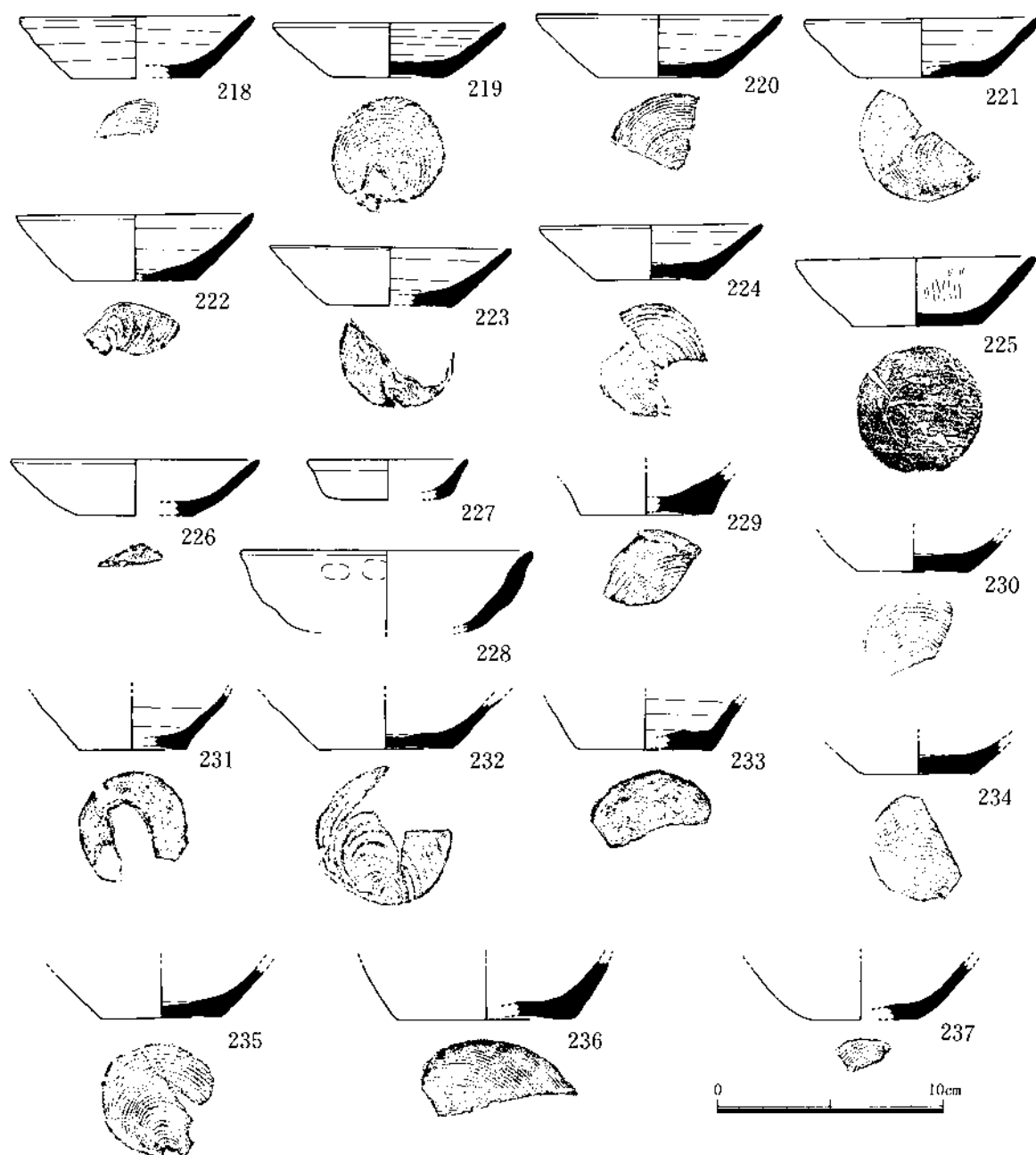


図37 III区出土遺物（土師質土器、杯）

第III層出土、233・259は北西部トレンチ出土である。

260は焼塩壺蓋、261～263は焼塩壺身である。260は内面に布目圧痕がある。261は際立って器厚の厚い個体である。いずれも第I層出土。

264～266は土錘である。全形の判るものは264のみであるが、264と265・266とは形態のうえでは異系統のものであることが窺える。265は第I層出土、264・266は第III層出土である。

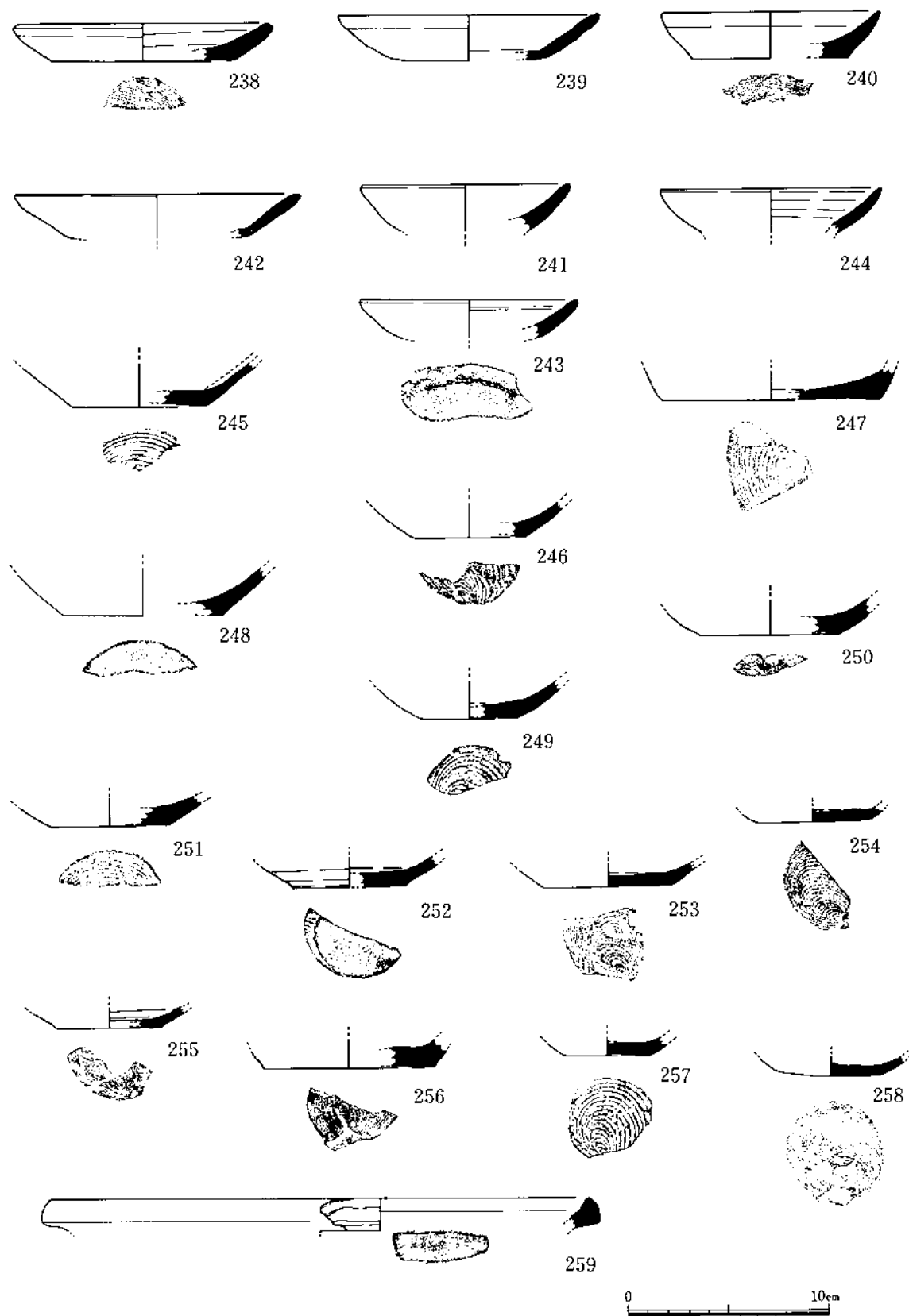


图38 III区出土遗物 (土師質土器)

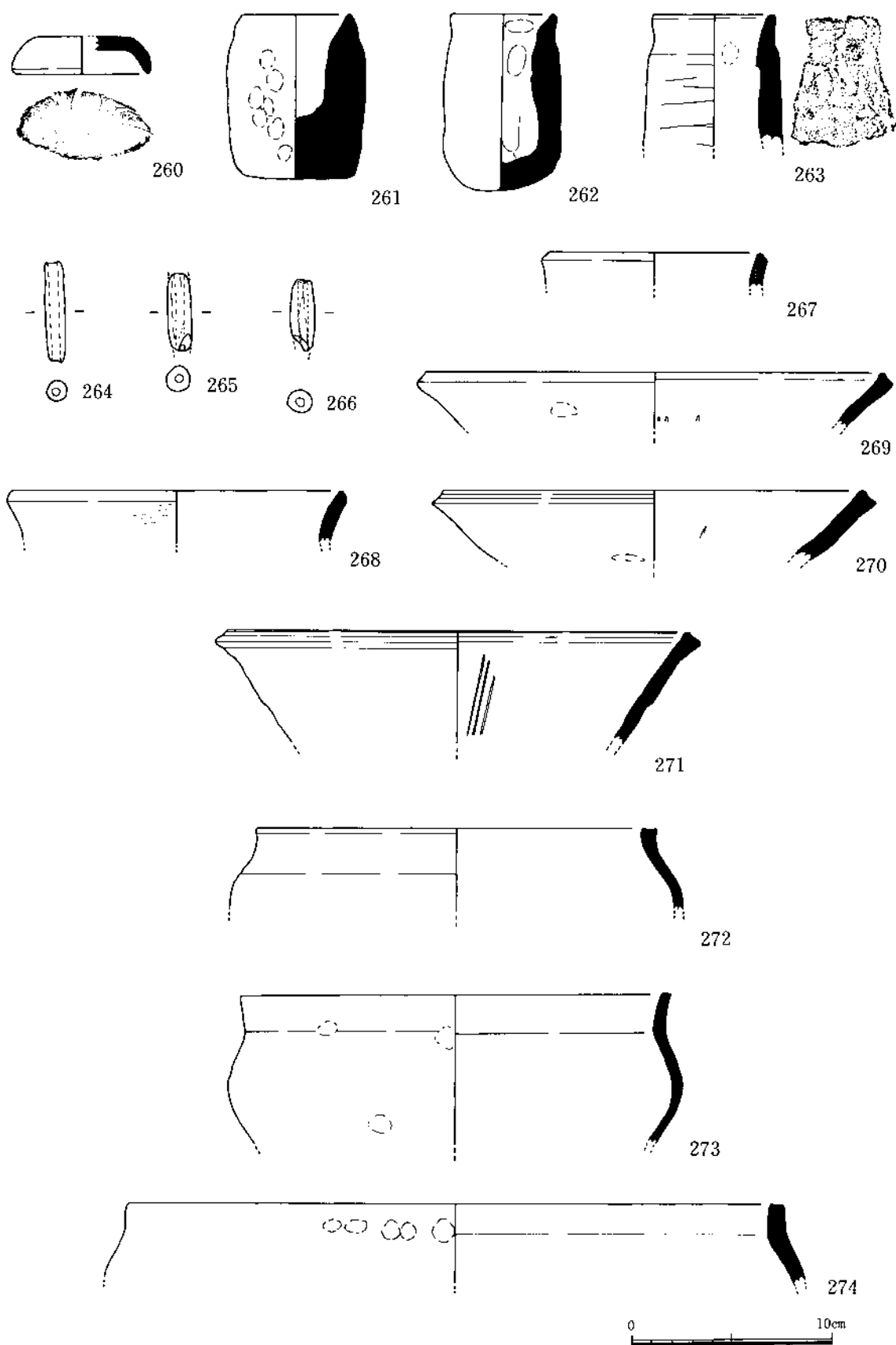


图39 III区出土遗物

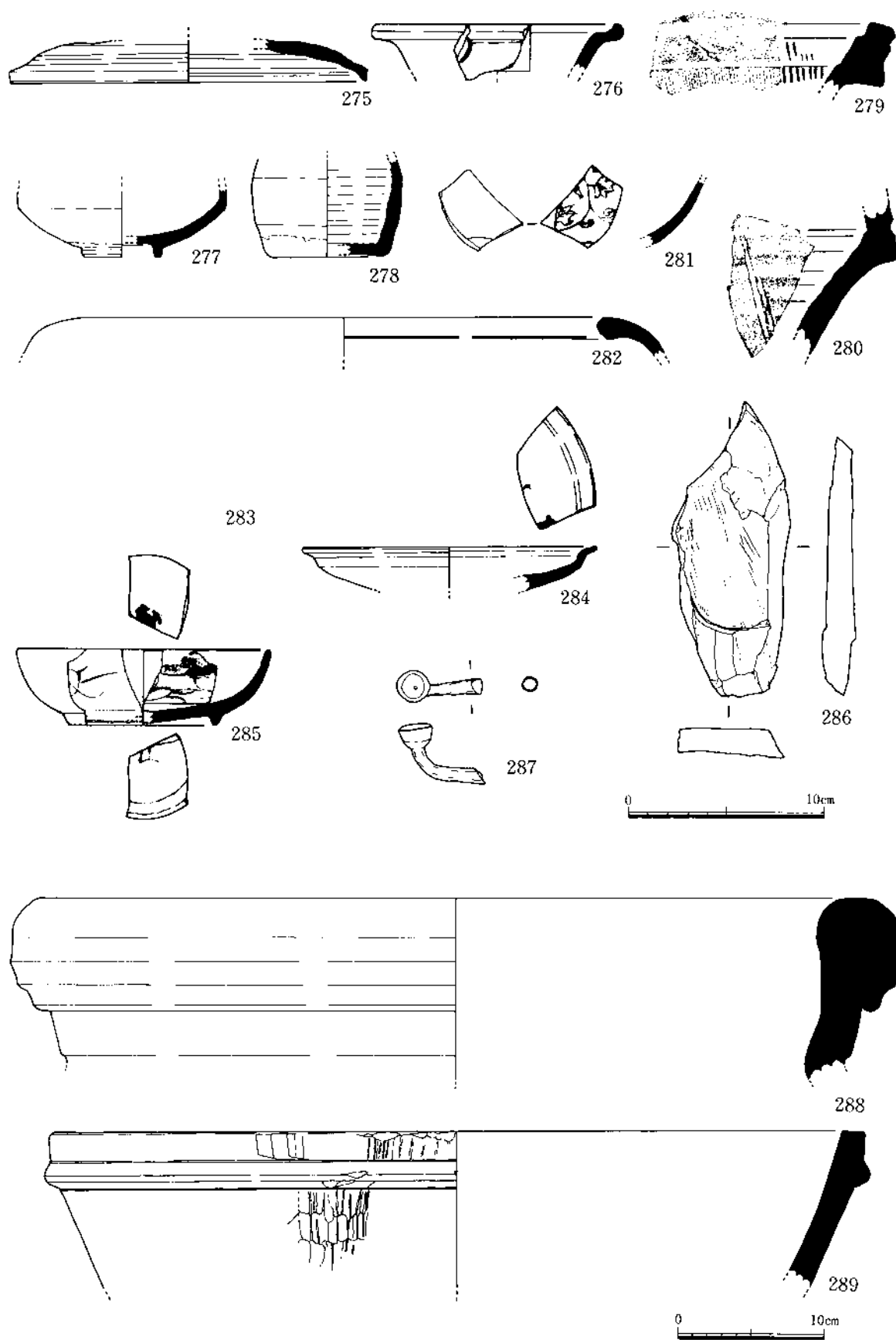


图40 III区出土遗物

267は須恵器とみられるが器形は不明。瓦質土器の可能性もある。第I層出土。

268～274は瓦質土器である。268?・272～274は鍋、269～271は播鉢である。269～274の外面には指頭押圧痕が明瞭である。268～271・273は第I層出土、274は第II層出土、272は第III層出土。

275～280・288は陶器である。275は蓋とみられ、備前焼の可能性はある。北西部トレンチ出土。276は灰釉の片口鉢の口縁部片とみられ、瀬戸・美濃系と考えられる。277は碗、278は鉄釉を施すものであるが器形は不明。279・280は播鉢で、280は備前焼の可能性はある。288は備前・甕の口縁部片である。276・278～280・288は第I層出土、277は第II層出土である。

281は輸入陶磁の染付・碗で、第III層出土。

282～285は磁器である。282は白磁?で第II層出土。283～285は染付である。283は内外面に菊花文を描く。284は皿、285は内面に草花文・五弁花文（コンニャク印判）を施す皿である。283・284は第I層出土、285は北西部トレンチ出土である。

286は石碗で、粘板岩製である。海部は欠損している。第I層出土。289は滑石製石鍋で、西北九州産とみられる。第III層出土。

287は煙管・雁首部で、銅製である。第III層出土。

290は軒丸瓦で、三葉柏文を施文する。第I層出土。

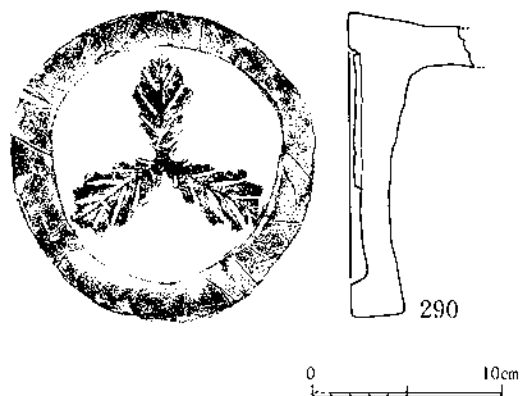


図41 III区出土遺物

(2) 遺構

第IV層上面及び岩盤上面において、溝状遺構1条、土坑状遺構5基、ピット状遺構約300基等の遺構を検出した。ここでは、溝状遺構1条、土坑状遺構5基、ピット状遺構35基について、その出土遺物と併せて記述する。なお、遺物の出土したピット状遺構の計測値については、表2にまとめた。

① 溝状遺構SDI (図42)

調査区の西半部に位置する。主軸はN-8°54'-Wを示し、南端部近くではピット状遺構に切られたような形となっており、また北端部では殆ど不明瞭な浅い窪みとなって終わっている。検出した全長は6.26mであり、溝状部幅は8.32cmである。検出面からの深さは、溝状部の最深部で54cm、南端付近のピット状遺構部で74cmである。掘り方の断面形態は逆台形状を呈する。床面北端の標高は22.85m、南端の標高は22.47mである。埋土は暗褐色土である。

遺物は土師質土器31点、青磁1点、磁器2点、銅銭1点が出土しており、土師質土器5点、青磁1点、銅銭1点を図示した。

S D I 出土遺物 (図43)

291~295は土師質土器である。291・292は、皿、293~295は坏とみられる。いずれもロクロ成形とみられ、293・294は底部に回転糸切り痕を留める。

296は輸入陶磁の青磁・碗で、外面に線描き直線文1条が巡る。

297は永楽通宝で、渡来銭とみられる。

②土坑状遺構 S K I (図44)

調査区の西端部に位置する。掘り方の平面形は不整形形状を呈し、長径1.55m、短径0.52m、検出面からの深さ51cmを測る。掘り方を断面で見ると、北側から南側に向かって緩く傾斜していく形状を呈する。南端部にはピット状部が存在する。埋土は褐色土である。

遺物は土師質土器37点、須恵器2点、土錘2点、陶磁器4点が出土しており、土師質土器5点、須恵器1点、土錘2点を図示した。

S K I 出土遺物 (図45)

298~302は土師質土器である。どれもロクロ成形とみられ、300~302は底部に回転糸切り痕を留めている。298・300は坏とみられる。

303は須恵器で、壺かと考えられる。

304・305は土錘でいずれも紡錘形のものである。

③土坑状遺構 S K 2 (図46)

調査区の北東部に位置する。掘り方の平面形は不整形を呈し、長径94cm、短径83cm、検出面からの深さ39cmを測る。掘り方の断面形態はほぼ逆台形状を呈する。西部・東部・南東部に

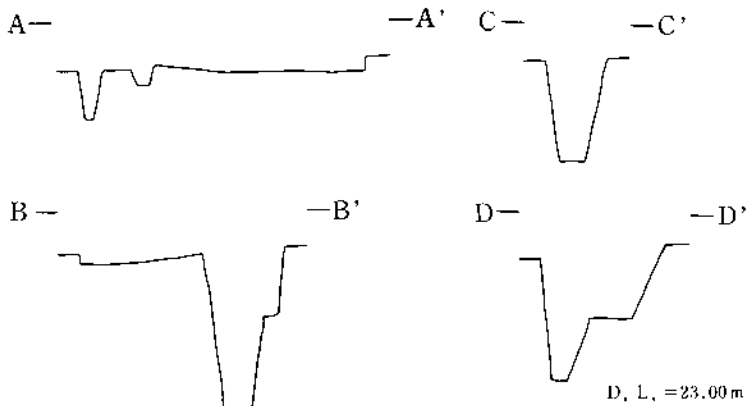
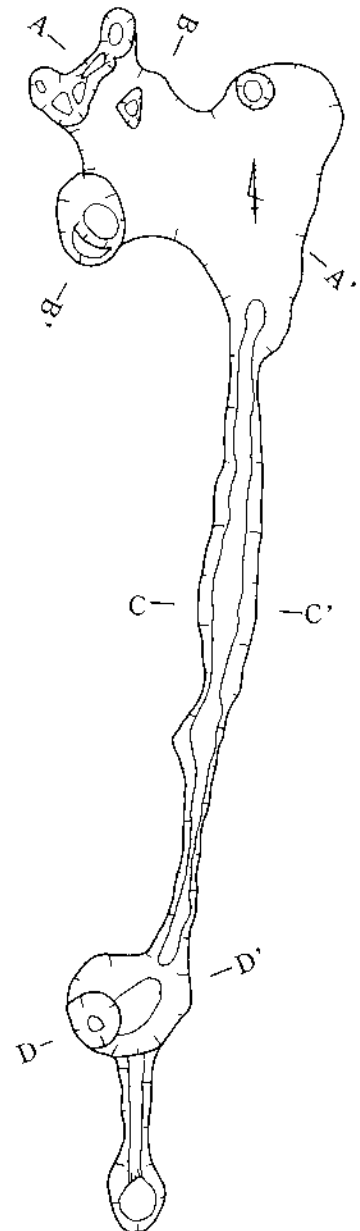


図42 III区 S D I



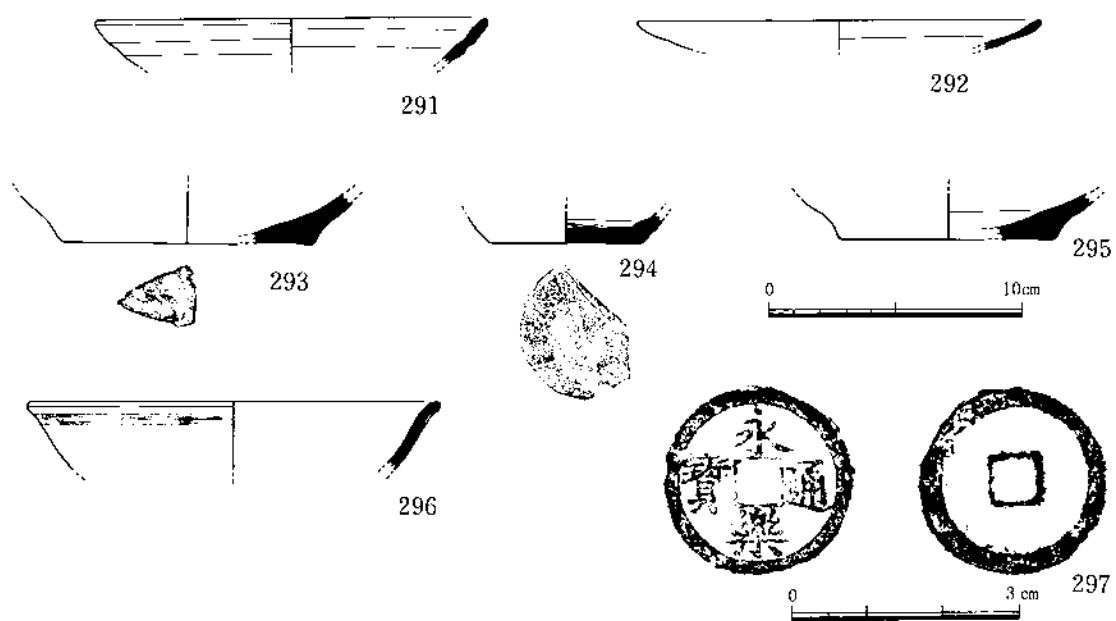


図43 SD 1 出土遺物

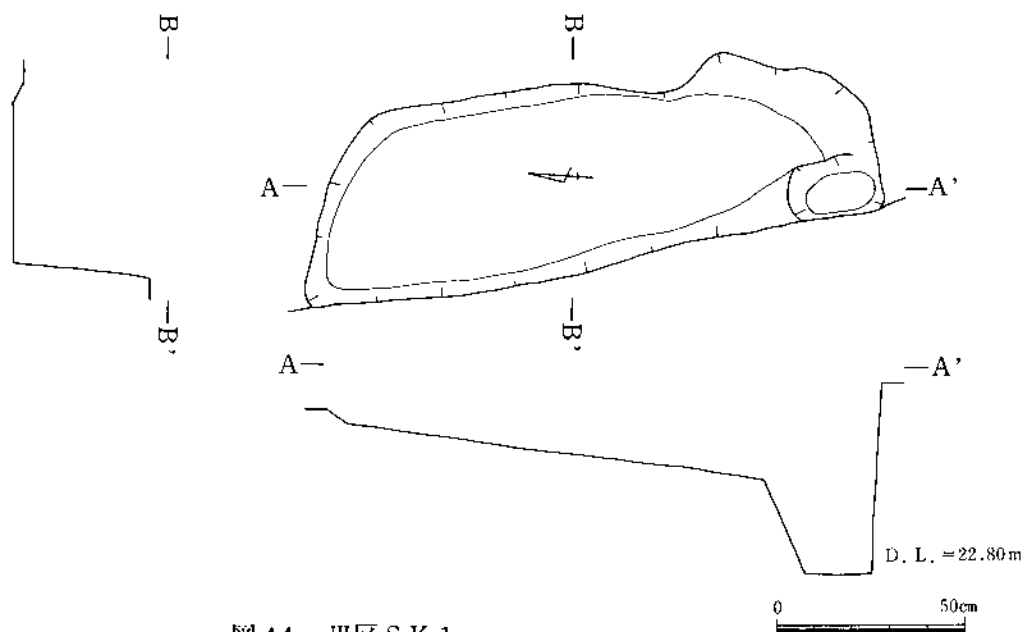


図44 III区SK 1

ピット状の落ち込み部がある。埋土は暗褐色土である。

遺物は土師質土器 1 点、陶器 1 点が出土しており、土師質土器 1 点を図示した。

SK 2 出土遺物 (図45)

306は土師質土器・坏とみられ、底部に回転糸切り痕を有している。

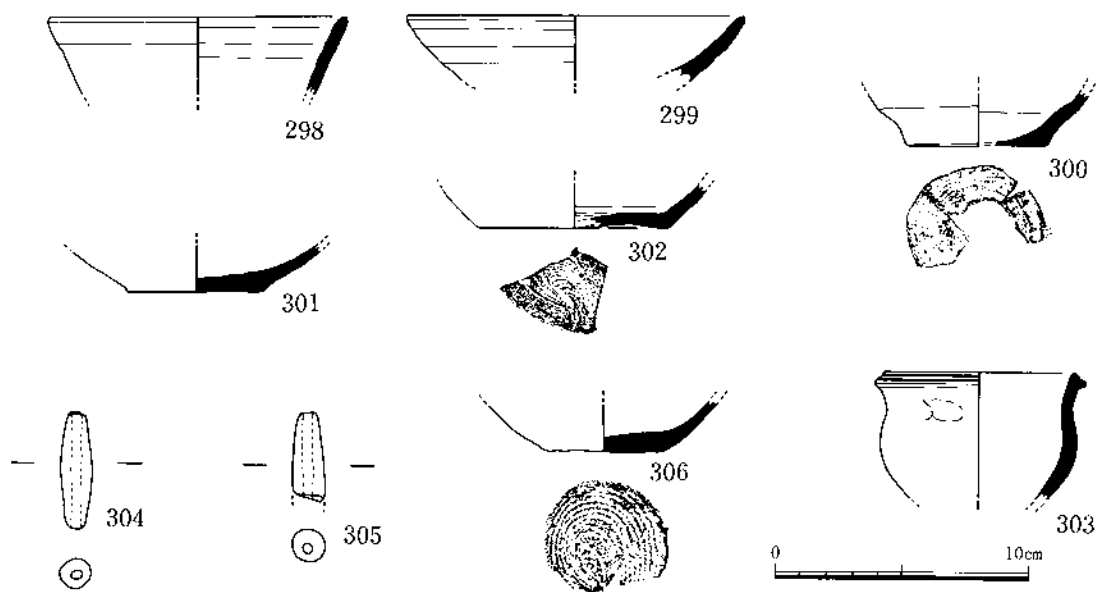


图45 SK 1·2 出土遺物

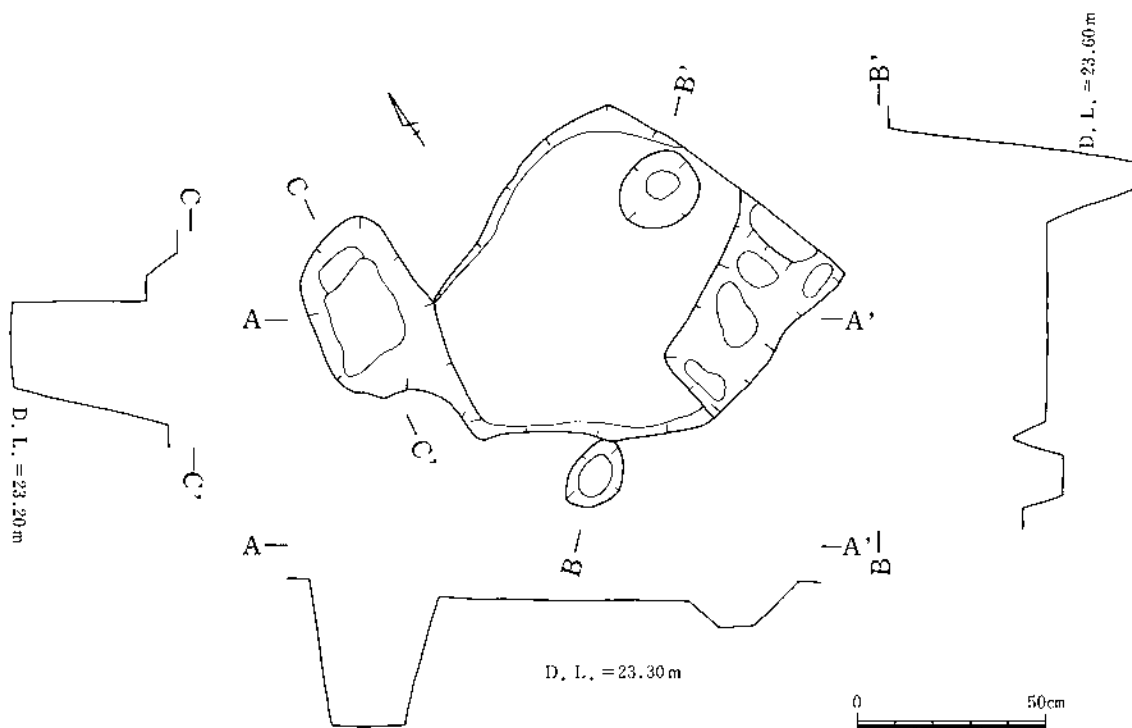


图46 III区SK 2

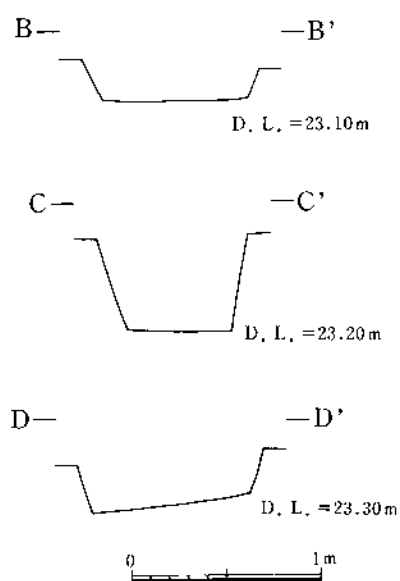


図47 III区SK3

④土坑状遺構SK3 (図47)

調査区の北端部に位置する。掘り方の平面形は、長方形の西半部に不整舟形状の東半部が付いた形状を呈し、長軸長6.04m、最大幅0.96m、検出面からの深さ62cmを測る。西半部の掘り方の床面は、断面でみると西から東へ下るスロープ状をなしている。埋土は黒色土である。

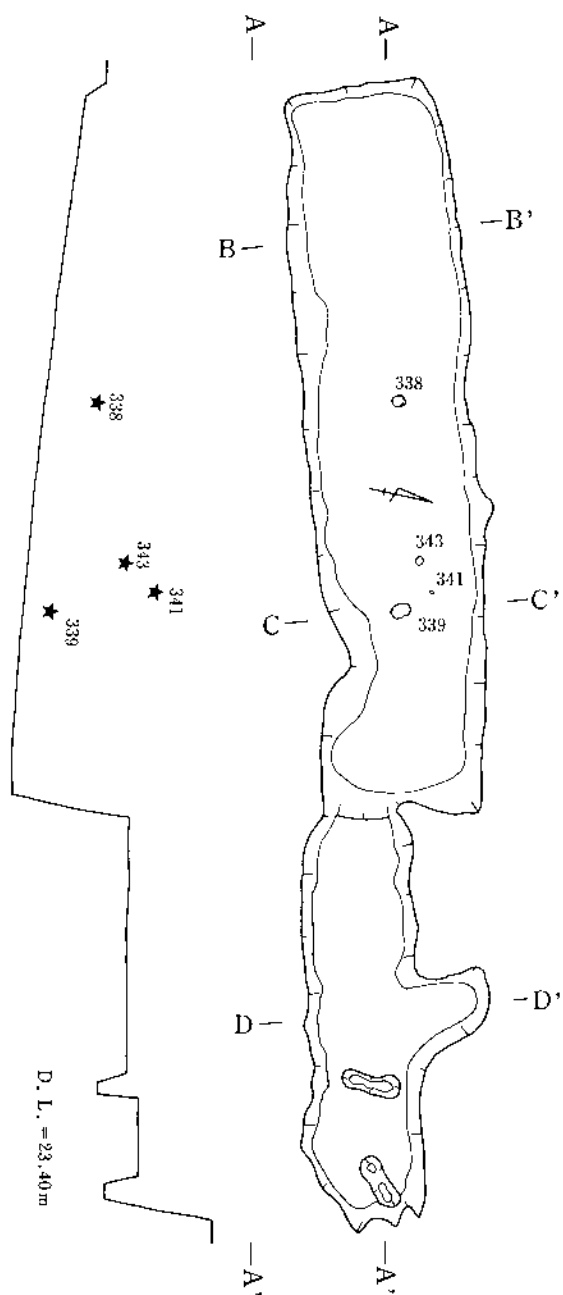
遺物は土師質土器228点、焼塩壺3点、陶磁器9点、瓦5点が出土しており、土師質土器31点、焼塩壺2点、陶器5点を図示した。

SK3出土遺物 (図48・49)

307～337は土師質土器で、すべてロクロ成形とみられる。307～324は環形の形態をなすものである。307～315・318～323・327～337は底部に回転糸切り痕を留めるが、316・317は静止糸切り痕の可能性もある。307～315・318・320・321・327～331・335は内底面中央部に明瞭な凹みが認められる。309～312・319～322・328・331・332・334・336には、黒斑またはススの付着が観察される。

338は焼塩壺蓋、339は焼塩壺身で、いずれも手捏ね成形とみられる。

340～344は唐津で、いずれも灰釉を施す。340～342は碗である。343・344は胎土目積み段階の皿で、343は内面に鉄絵の直線文を描き、胎土目積み痕4個がみられる。340～342も同じ胎土目積み段階のものとみられる。



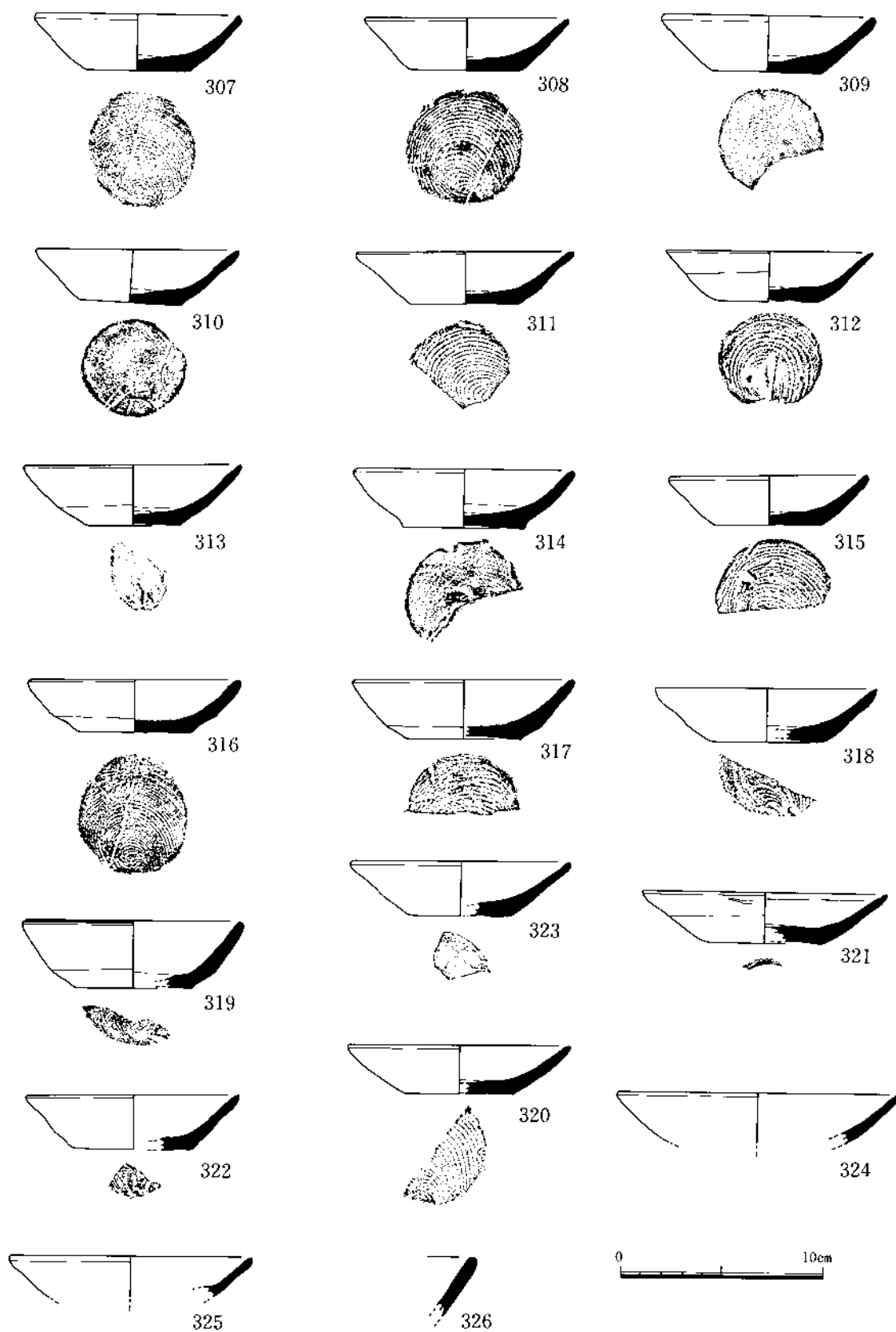


図48 SK 3 出土遺物 (土師質土器)

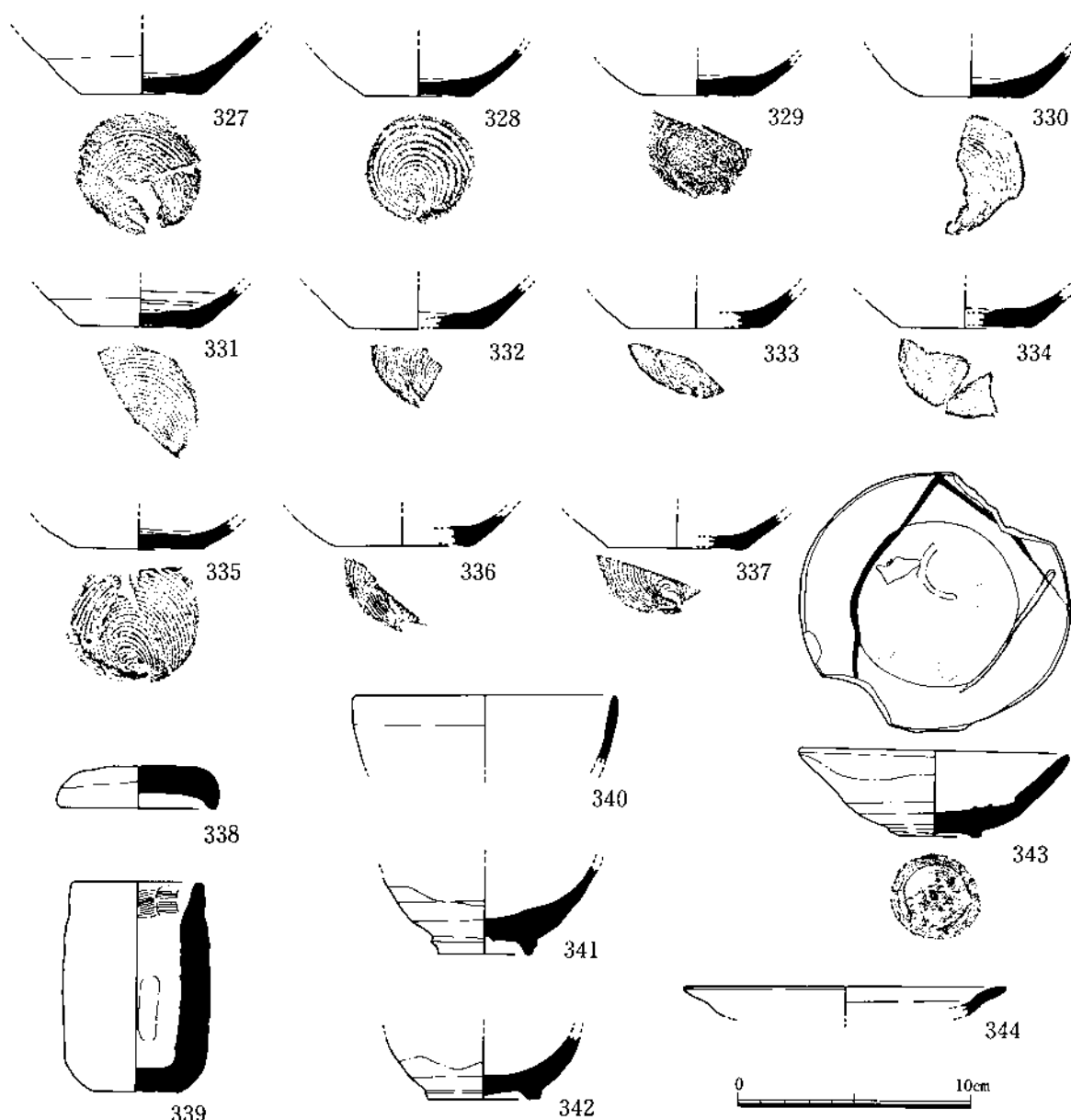


図49 SK 3 出土遺物

⑤土坑状遺構SK 4 (図50)

調査区の北東部に位置し、南西側でSK 2に接している。掘り方の平面形は不整楕円形状を呈し、長径2.18m、短径1.76m、検出面からの深さ1.08mを測る。掘り方の断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒色土である。

遺物は土師質土器895点、瓦質土器1点、青磁1点、陶磁器4点、(瓦14点)が出土しており、土師質土器58点、(青磁1点)を図示した。

SK 4 出土遺物 (図51~53、写真図版PL, 29)

345~402は土師質土器で、すべてロクロ成形である。345~380は坏形を呈する。381・383を除き、底部にはすべて回転糸切り痕が認められる。内底面中央部に凹みを有するものは、345~348・351

～362・364・367・370・374
 ・380・384・385・388・389
 ・391・392・395・396・399
 があり、凹みの不明瞭なもの
 も含めれば大多数を占めてい
 るといえる。また、347・349
 ・356・365・390・394・395
 ・400・401は器表面に黒斑状
 のものが認められる。

403は青磁・碗で外面に印
 花文?を施す。

⑥上坑状遺構 S K 5

(図54)

調査区の北東部、S K 4の

北側に位置する。掘り方の平面形は不整長方形?状を呈し、長径2.9m、短径1.22m、検出面からの深さ82cmを測る。掘り方の断面形態は東側が急に立ち上がる船底状を呈する。埋土は黒色土である。

遺物は土師質土器607点、須恵器1点、陶磁器9点、(瓦59点)が出土しており、土師質土器28点、陶器3点を図示した。

S K 5 出土遺物 (図55・56)

404～431は土師質土器で、すべてロクロ成形である。404～407・409・411等は坏形の形態であるが、408・410・412～419は皿状の形態をとっている。特に413～419は全体の形状・器厚・口縁部形状・ロクロ回転方向等に共通部分が多く、同工品の可能性が高い。また、内底面中央部に凹みを有するものは404・422・424・425・429・431等があるが、量のうえで支配的といえるものではない。405・406・417・420・422は器表面に黒斑状のものが認められる。

432～434は陶器である。432は唐津の鉄釉・碗である。433は唐津の灰釉・皿で、内面に砂目積み痕1箇所が認められるが、形態的には胎土目段階からの移行期のものと位置付けることができる。434は鉄釉を施すものである。

⑦ピット状遺構 (図57・59・61・62)

ピット状遺構は、図示可能な出土遺物を伴ったもの35基を抽出し、個別の遺構平面図・断面図を掲載した。それぞれの遺構の平面形態・各計測値については表2に示した。よって、以下、図示した出土遺物についてのみ記述していく。

○P 1 出土遺物 (図58-435)

435は土師質土器・皿である。

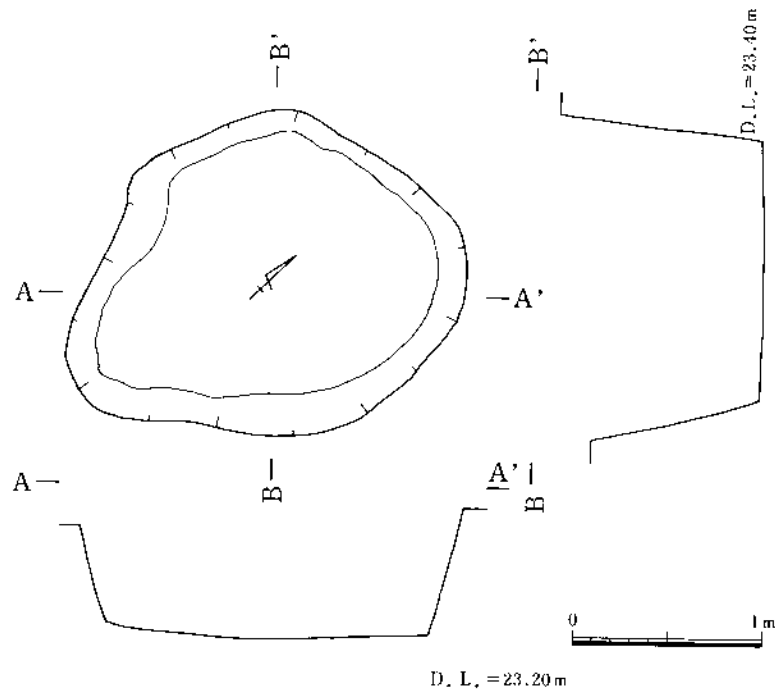


図50 III区 S K 4

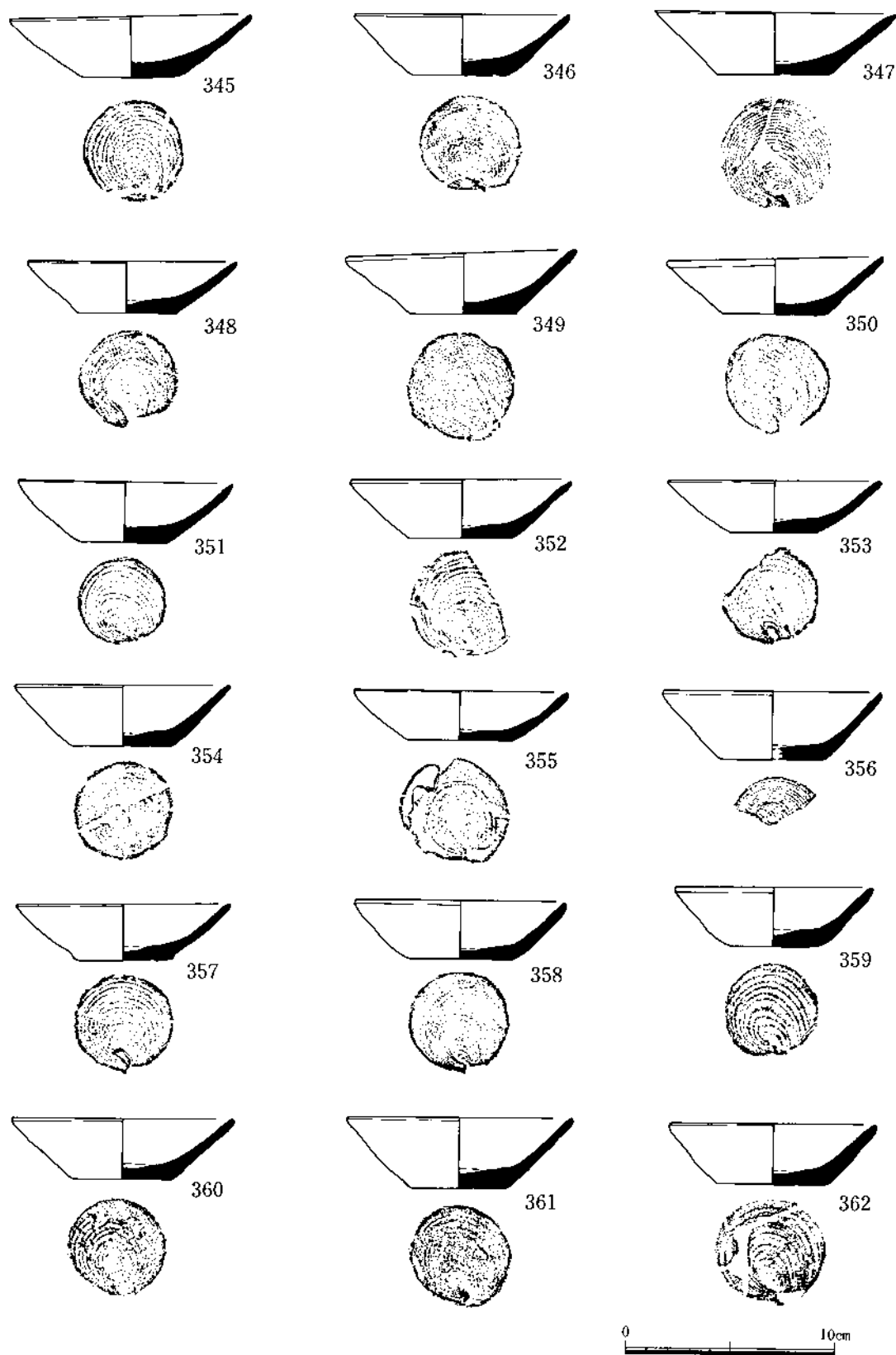


図51 SK 4 出土遺物 (土師質土器)

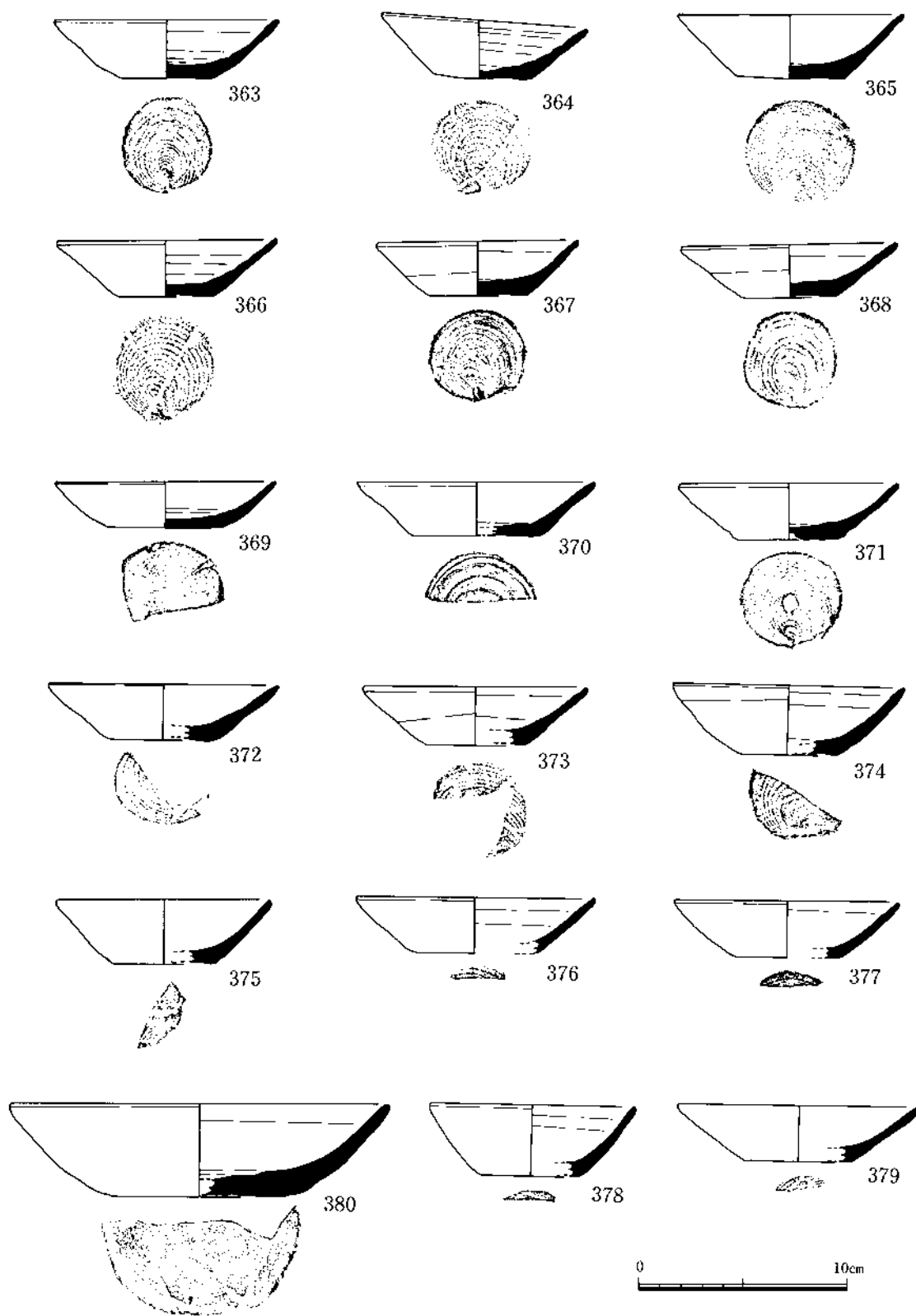


图52 SK 4 出土遺物 (土師質土器)

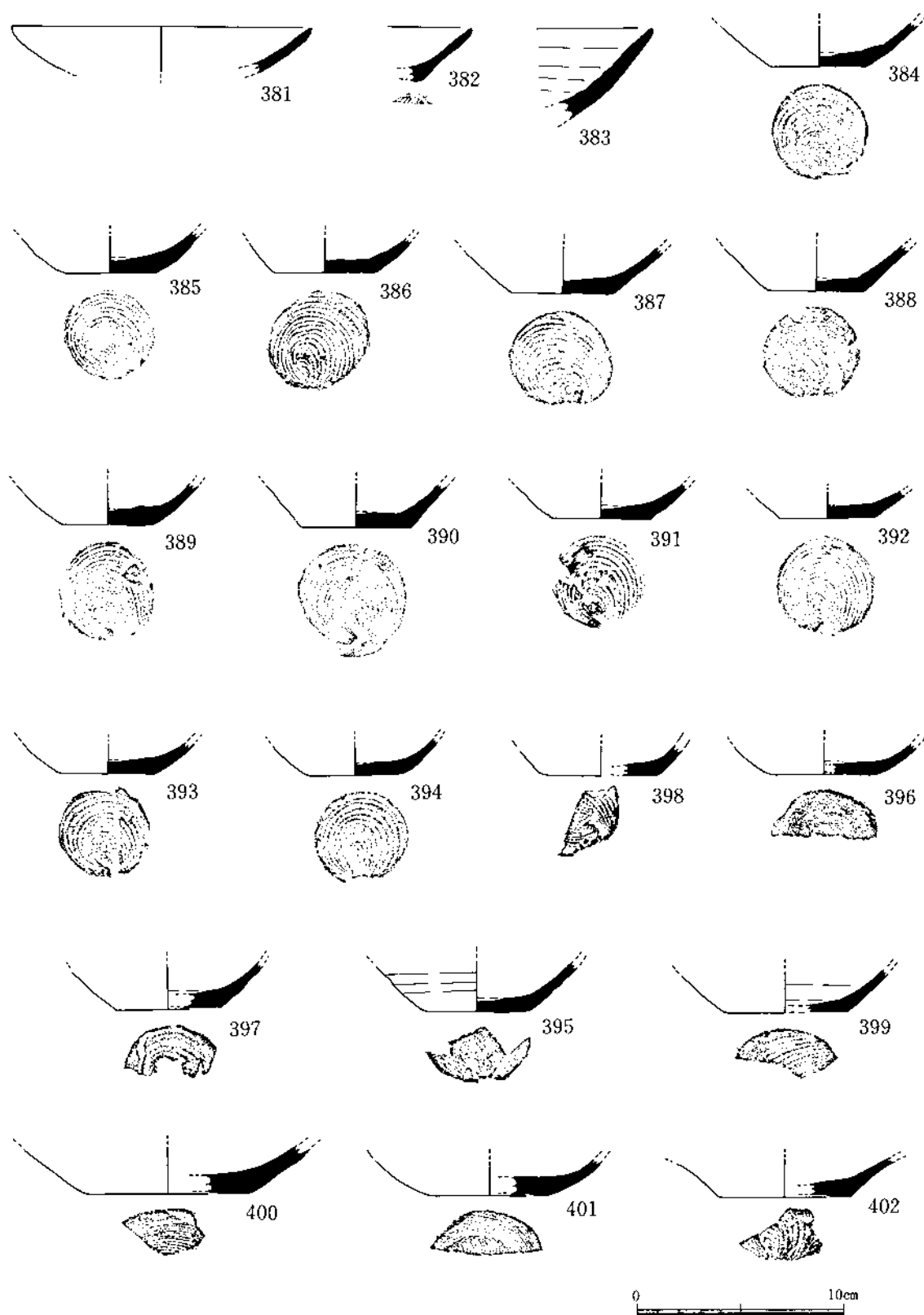


图53 SK 4 出土遺物 (土師質土器)

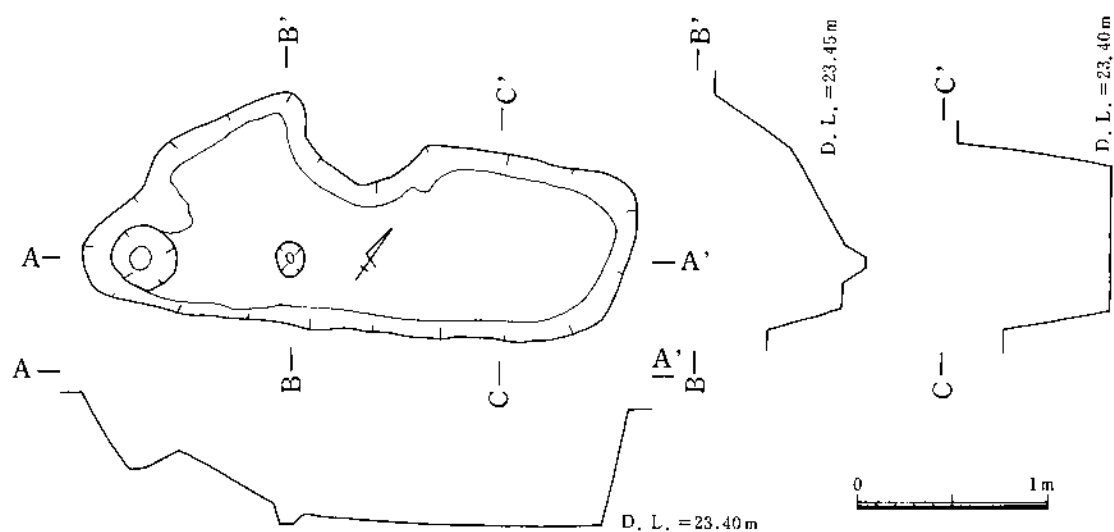


図54 III区SK 5

○P 2 出土遺物 (図58-436・437)

436・437は土師質土器・底部片で、436は底部に回転糸切り痕が認められる。

○P 3 出土遺物 (図58-438)

438は土師質土器で手捏ね成形かとみられる。

○P 4 出土遺物 (図58-439・440)

439・440は土師質土器・皿で、いずれも回転糸切り痕を有する。

○P 5 出土遺物 (図58-441)

441は土師質土器・坏である。

○P 6 出土遺物 (図58-442~449)

442~449は土師質土器で、442~445は坏である。442~444・447~449は回転糸切り痕を有する。444は底面中心に小孔が認められる。

○P 7 出土遺物 (図58-450)

450は土師質土器・坏である。

○P 8 出土遺物 (図58-451)

451は土師質土器・坏で、底部切り離しは回転糸切りによっている。

○P 9 出土遺物 (図58-452)

452は土師質土器・坏で、回転糸切り痕を有する。

○P 10 出土遺物 (図58-453)

453は陶器で、灰釉・皿である。

○P 11 出土遺物 (図58-454~456)

454~456は土師質土器で、いずれもロクロ成形。455・456は回転糸切り痕を有する。

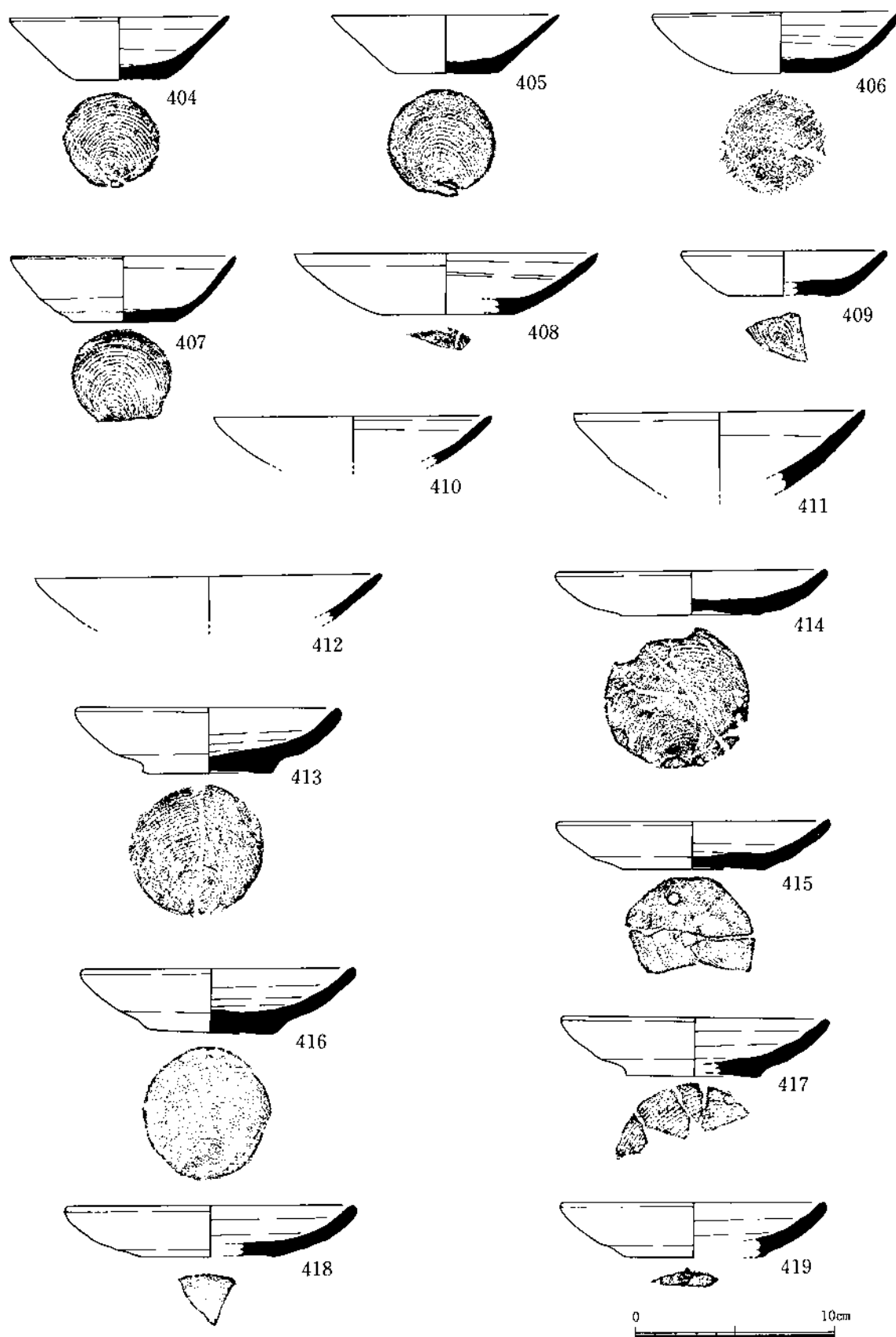


图55 SK 5 出土遺物 (土師質土器)

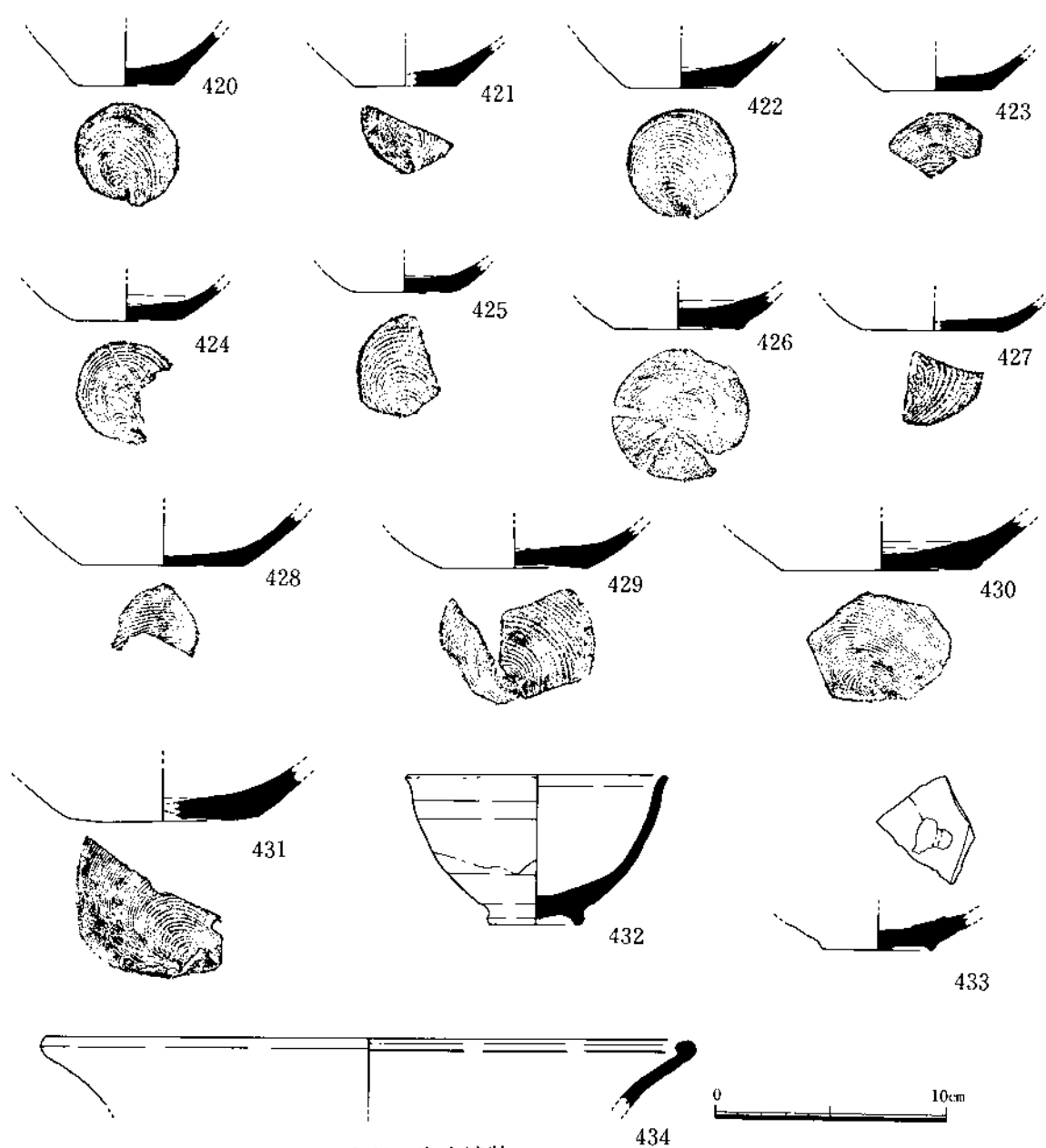


図56 SK 5 出土遺物

○P12出土遺物 (図60-457)

457は土師質土器・坏である。

○P13出土遺物 (図60-458)

458は青磁・碗で、外面に線描きの細蓮弁文を施す。

○P14出土遺物 (図60-459)

459は土師質土器・坏で、底部には回転糸切り痕を有する。

○P15出土遺物 (図60-460~462)

460・461は土師質土器である。460は回転糸切り痕を留める。461は坏である。462は瓦質土器・播鉢で、外面には指頭押圧痕が顕著である。

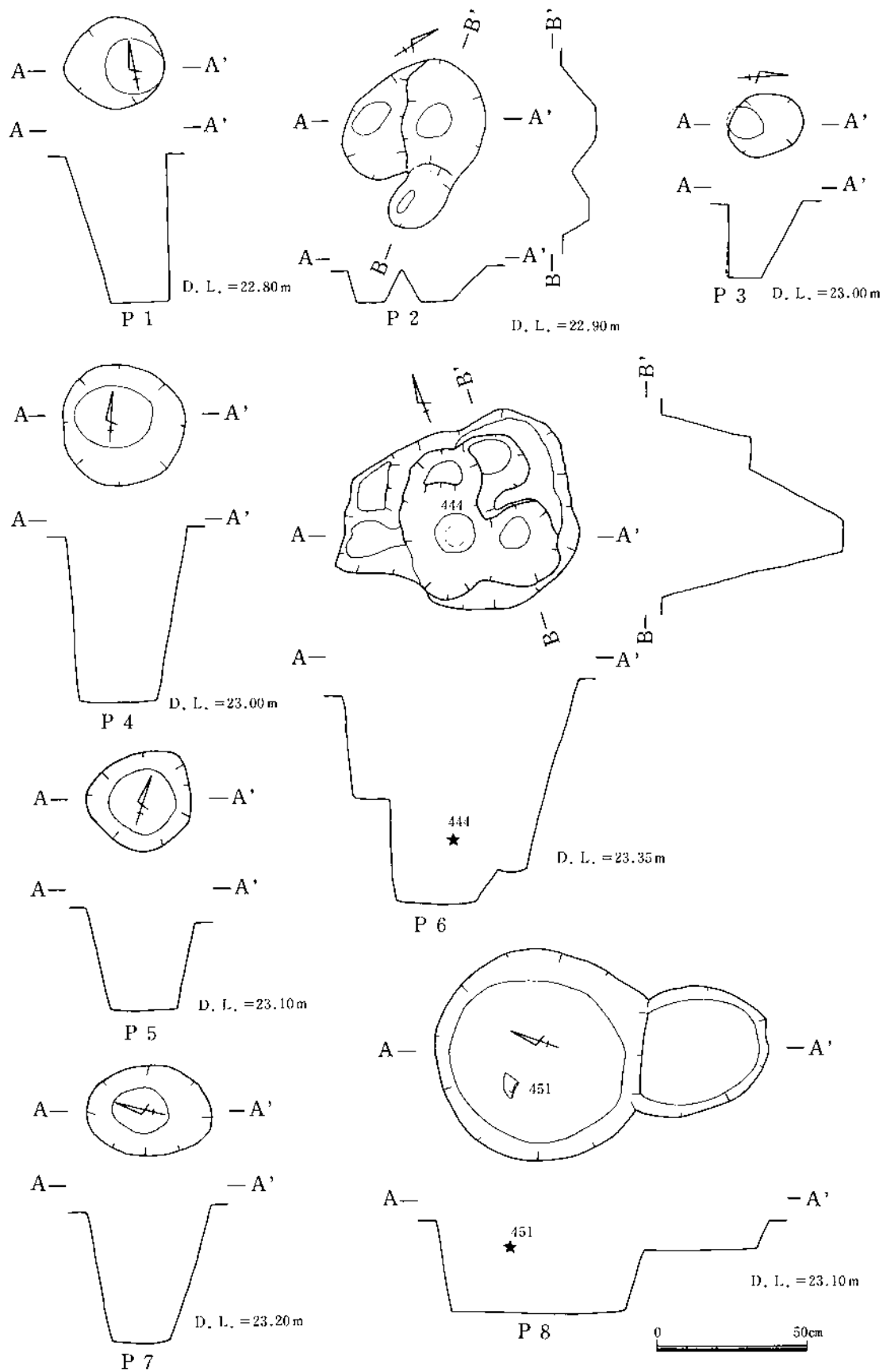


图57 III区P 1 ~ 8

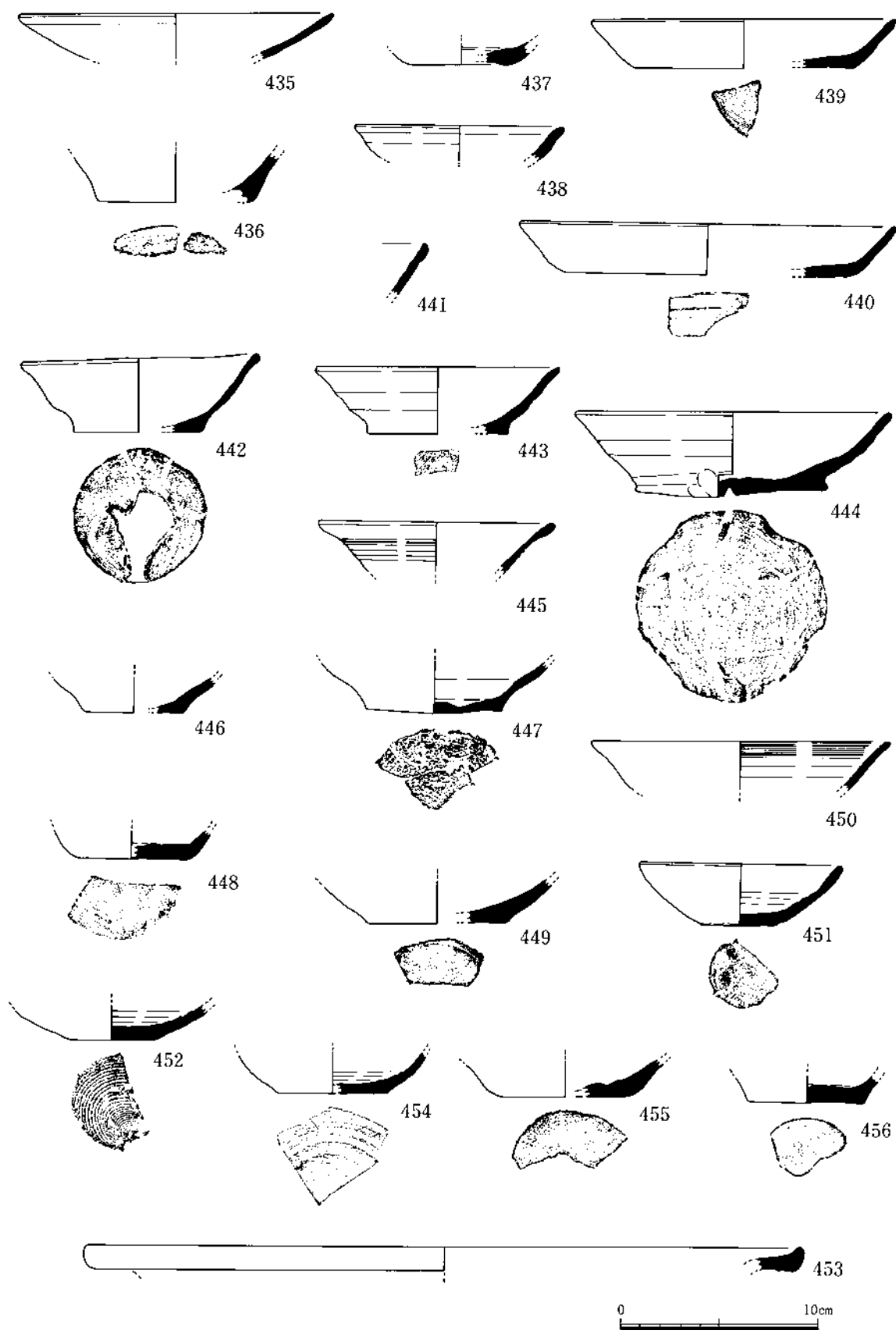


图58 P 1 ~ 11 出土遺物

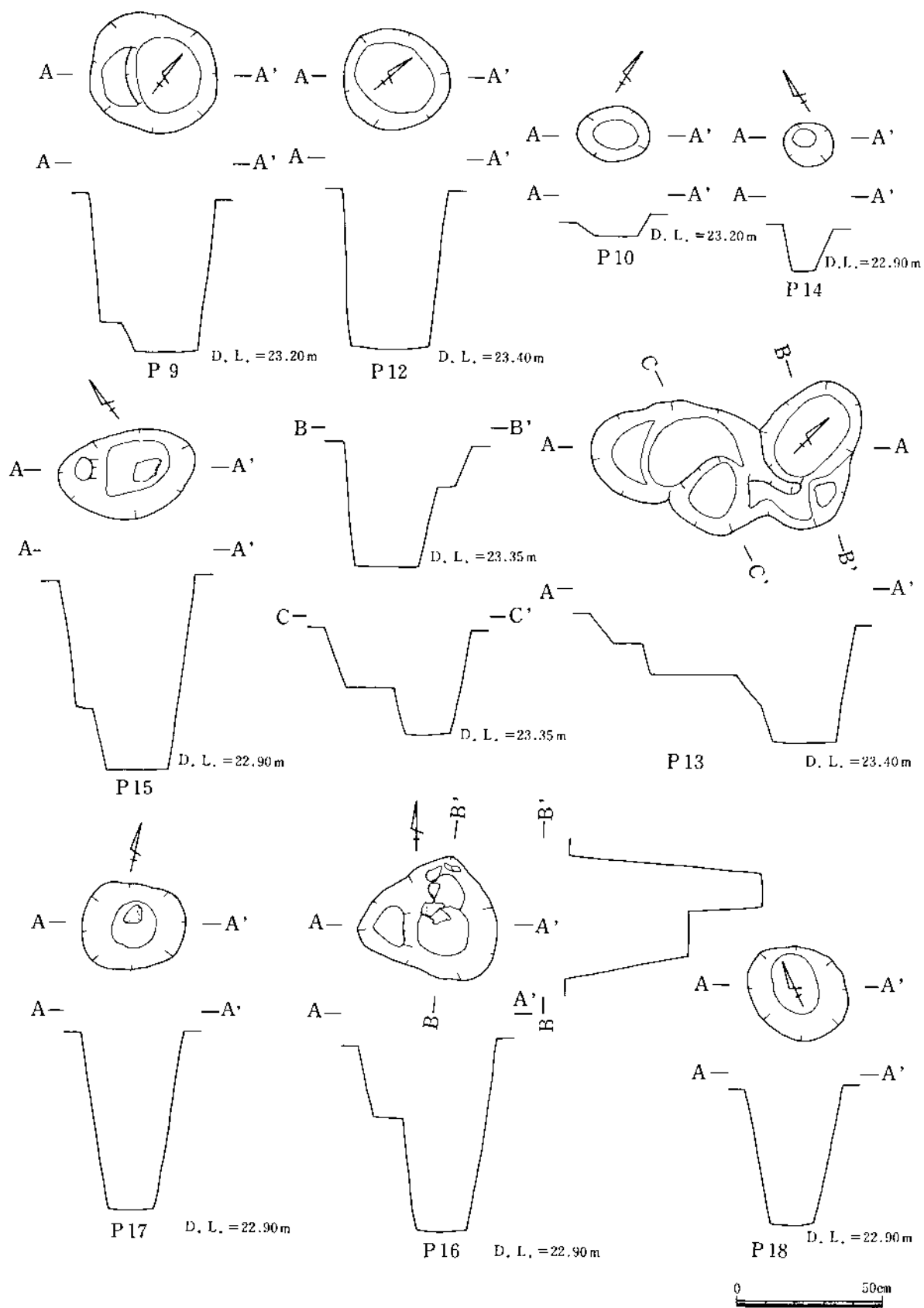


图59 III区 P 9 · 10 · 12 ~ 18

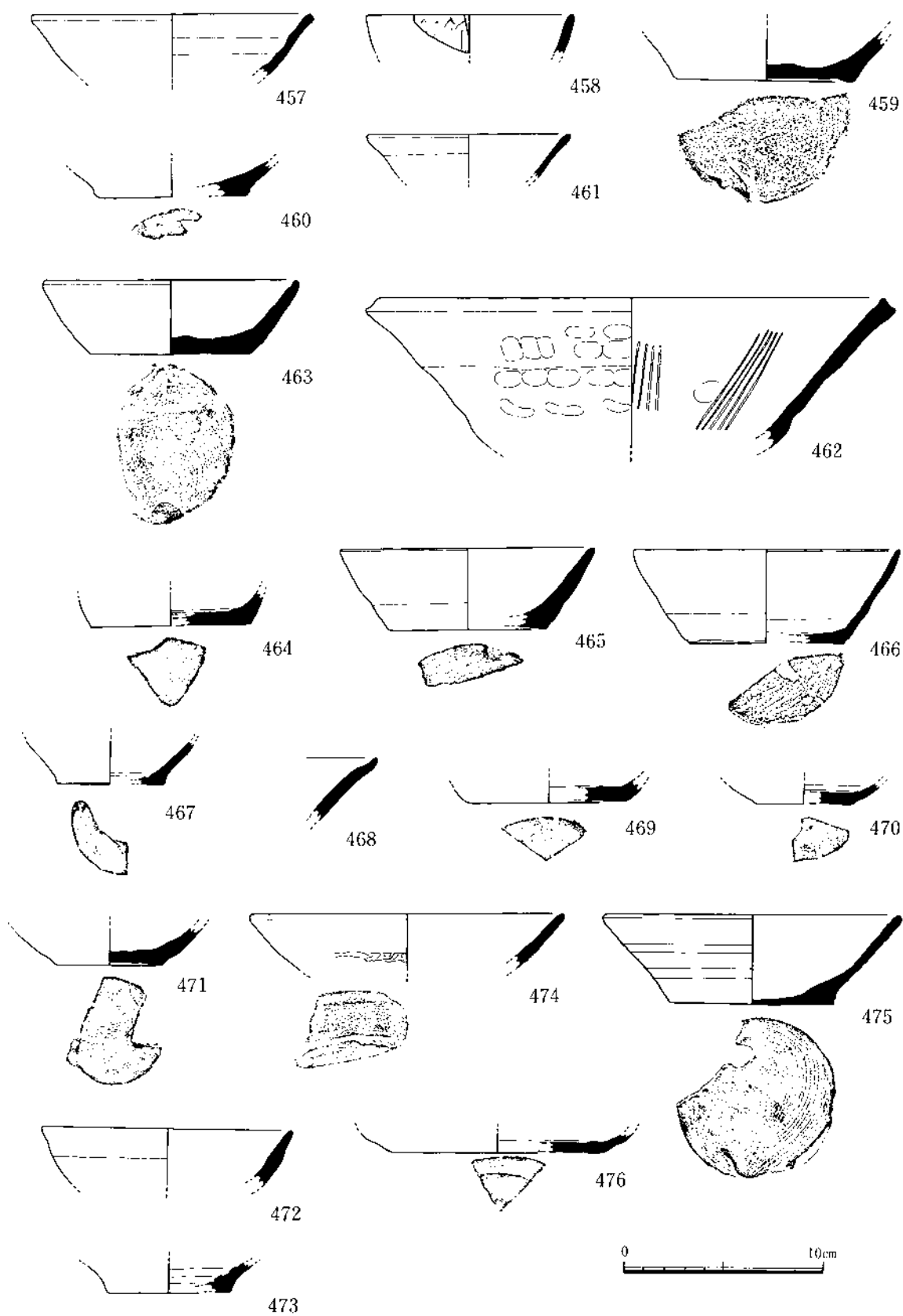


图60 P12~24出土遺物

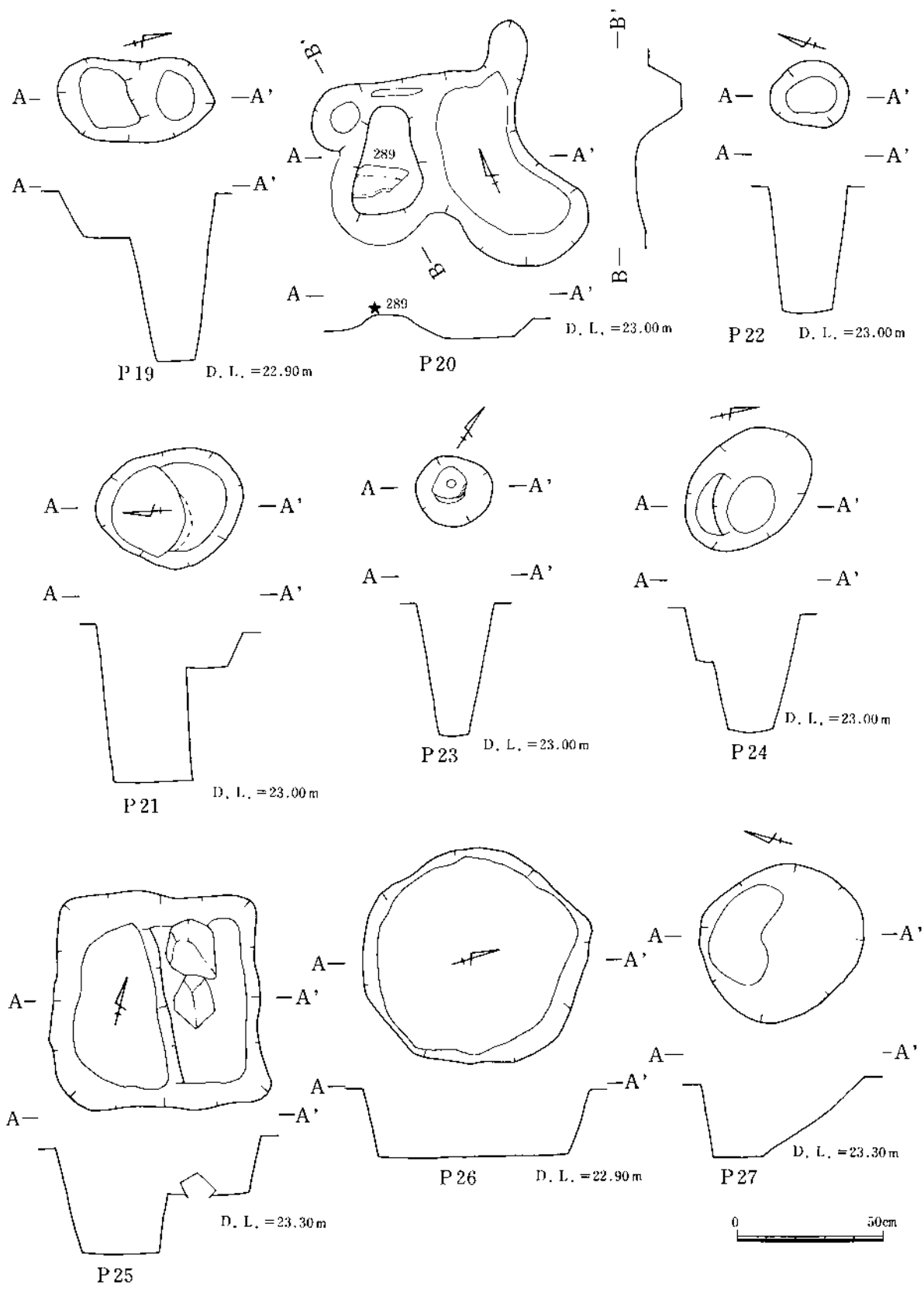


图61 III区P19~27

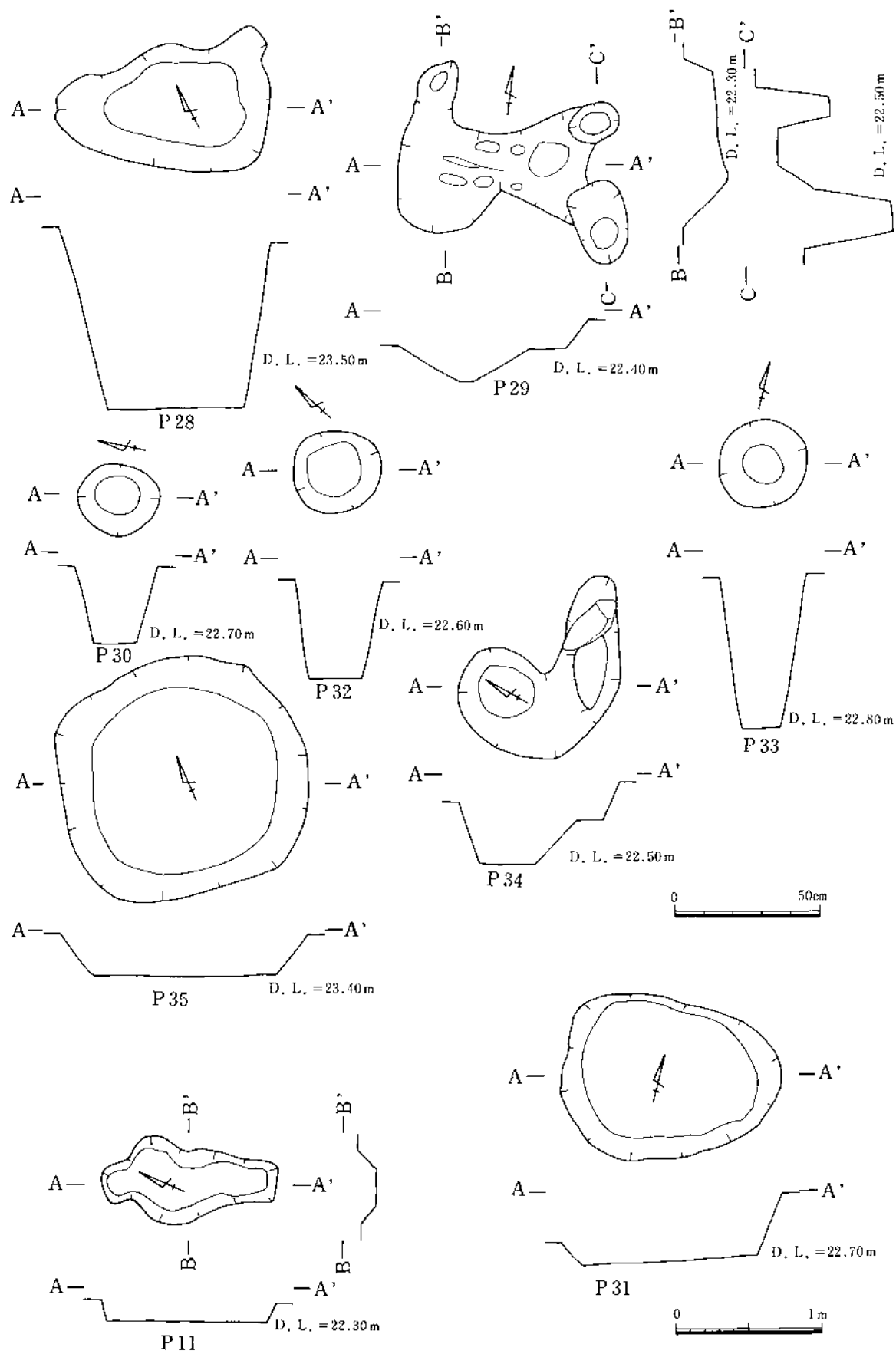


图62 III区 P11·28~35

○P16出土遺物（図60-463・464）

463・464は土師質土器で、ともにロクロ成形。464は回転糸切り痕を留め、タール（スス）の付着が認められる。

○P17出土遺物（図60-465）

465は土師質土器・坏で、底部に回転糸切り痕を有する。

○P18出土遺物（図60-466）

466は土師質土器・坏で、底部に回転糸切り痕を有する。

○P19出土遺物（図60-467）

467は土師質土器・坏で、底部に回転糸切り痕を有する。

○P20出土遺物（図60-468・469）

468・469は土師質土器で、469は回転糸切り痕を有する。

○P21出土遺物（図60-470）

470は土師質土器で、回転糸切り痕を有する。

○P22出土遺物（図60-471～473）

471～473は土師質土器で、471・473は回転糸切り痕を有する。

○P23出土遺物（図60-474・475）

474・475は土師質土器・坏で、いずれもロクロ成形である。

○P24出土遺物（図60-476）

476は土師質土器で、底部切り離しは回転ヘラ切り？とみられる。

○P25出土遺物（図63-477～479）

477～479は土師質土器で、477・478は坏である。478にはスス・タールの付着がみられる。479は回転糸切り痕を有する。

○P26出土遺物（図63-480～482）

480は土錘で、紡錘形を呈すものであろう。482は須恵器で、内底面はきわめて平滑で、靱に転用された可能性がある。481は瓦質土器で、底面にスス・タールの付着が認められる。

○P27出土遺物（図63-483）

483は土師質土器で、内底面中央部は凹む。

○P28出土遺物（図63-484）

484は陶器・播鉢で、備前焼かとみられる。

○P29出土遺物（図63-485・486）

485・486は土師質土器で、486は回転糸切り痕を有し、内底面中央部は凹む。

○P30出土遺物（図63-487）

487は土錘である。

○P31出土遺物（図63-488～490）

488・489は陶器である。489は播鉢で、備前焼とみられる。490は鍋の鐳状の土製品である。

○P32出土遺物（図63-491）

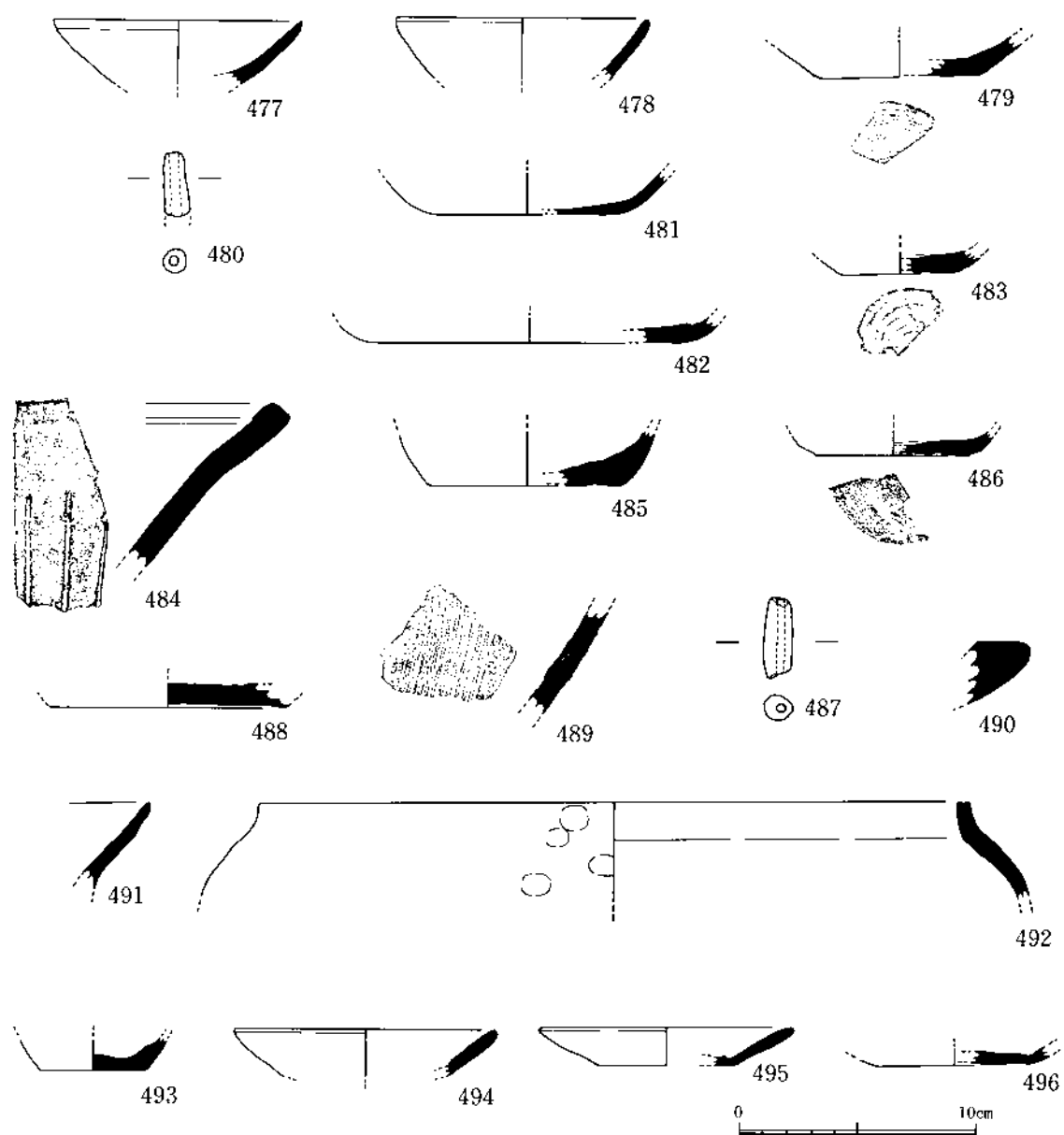


図63 P25～35出土遺物

491は土師質土器・坏である。

○P33出土遺物（図63-492）

492は瓦質土器・鍋で、外面には指頭押圧痕が顕著である。

○P34出土遺物（図63-493）

493は土師質土器で、回転糸切り痕を留める。

○P35出土遺物（図63-494～496）

494～496は土師質土器で、494・495は皿である。494・495はロクロ成形・496は手捏ね成形である。

Ⅲ区 ピット状遺構計測表

ピット No.	平面形	径(m)	深さ(m)	出土遺物	ピット No.	平面形	径(m)	深さ(m)	出土遺物
1	円形	0.30	0.51	土師質土器	45	隅丸方形	0.24×0.22	0.55	土師質土器
2	不整形	0.56×0.50	0.12	土師質土器	46	隅丸方形	0.38×0.34	0.39	青磁
3	楕円形	0.26×0.20	0.26	土師質土器	47	隅丸方形	0.26×0.24	0.24	土師質土器
4	円形	0.40	0.58	土師質土器	48	隅丸方形	0.16×0.10	0.15	土師質土器
5	円形	0.34	0.35	土師質土器	49	不整形	0.54×0.40	0.34	土師質土器
6	隅丸方形	0.74×0.30	0.64	土師質土器	50	円形	0.26	0.13	陶器
7	楕円形	0.42×0.30	0.64	土師質土器	51	不整形	0.42×0.36	0.60	土師質土器
8	瓢形	1.10×0.42	0.34	土師質土器	52	楕円形	0.26×0.14	0.08	丸・平瓦
9	隅丸方形	0.46×0.38	0.54	土師質土器	53	隅丸方形	0.38×0.28	0.62	土師質土器
10	楕円形	0.24×0.20	0.08	陶器	54	瓢形	0.80×0.34	0.09	土師質土器、瓦質土器
11	不整形	1.22×0.50	0.20	土師質土器	55	隅丸方形	0.36×0.30	0.52	土師質土器
12	円形	0.36	0.55	土師質土器	56	隅丸方形	0.14×0.12	0.19	土師質土器
13	不整形	0.88×0.40	0.60	青磁	57	隅丸方形	0.40×0.32	0.21	土師質土器
14	円形	0.16	0.16	土師質土器、瓦質土器	58	不整形	2.40×0.32	0.19	土師質土器
15	楕円形	0.46×0.30	0.56	土師質土器、瓦質土器	59	隅丸方形	0.32×0.28	0.56	土師質土器、須恵器
16	隅丸方形	0.48×0.40	0.67	土師質土器、陶器	60	隅丸方形	0.34×0.28	0.22	土師質土器
17	隅丸方形	0.36×0.30	0.62	土師質土器	61	隅丸方形	0.34×0.30	0.78	土師質土器
18	隅丸方形	0.34×0.30	0.48	土師質土器	62	隅丸方形	0.30×0.26	0.43	土師質土器
19	隅丸方形	0.54×0.26	0.59	土師質土器	63	隅丸方形	1.96×1.28	0.68	土師質土器、磁器、丸・平瓦
20	不整形	0.60×0.48	0.15	土師質土器	64	瓢形	0.66×0.18	0.31	丸・平瓦
21	楕円形	0.50×0.40	0.54	土師質土器	65	瓢形	0.48×0.20	0.40	土師質土器
22	隅丸方形	0.26×0.22	0.43	土師質土器	66	不整形	0.24×0.16	0.13	土師質土器
23	円形	0.24	—	土師質土器	67	不整形	0.72×0.70	0.33	土師質土器
24	楕円形	0.50×0.26	0.42	土師質土器	68	隅丸方形	1.08×1.02	0.20	土師質土器
25	隅丸方形	0.72	0.40	土師質土器、丸・平瓦	69	隅丸方形	0.96×0.78	0.18	土師質土器
26	円形	0.74	0.17	土師質土器、土鍬、瓦質土器	70	隅丸方形	0.28×0.22	0.41	土師質土器
27	隅丸方形	0.56×0.50	0.27	土師質土器、陶器	71	隅丸方形	0.30	0.12	土師質土器
28	不整形	0.72×0.42	0.63	土師質土器、陶器、砥石	72	不整形	0.66×0.30	0.14	土師質土器
29	不整形	1.30×0.58	0.44	土師質土器	73	楕円形	0.32×0.22	0.36	土師質土器、平瓦
30	円形	0.26	0.31	土鍬	74	不整形	1.04×0.52	0.20	土師質土器
31	隅丸方形	1.50×1.12	0.26	土師質土器、陶磁器	75	不整形	0.78×0.70	0.15	土師質土器、陶器、軒丸瓦
32	隅丸方形	0.30×0.28	0.44	土師質土器	76	不整形	0.30×0.26	0.13	土師質土器
33	円形	0.30	0.52	土師質土器、瓦質土器	77	楕円形	0.34×0.30	0.35	土師質土器
34	不整形	1.36×1.00	0.37	土師質土器	78	隅丸方形	0.24×0.22	0.27	平瓦
35	隅丸方形	0.84×0.80	0.15	土師質土器、磁器、丸・平瓦	79	瓢形	0.46×0.16	0.40	土師質土器
36	隅丸方形	0.22×0.10	0.16	土師質土器、丸・平瓦	80	隅丸方形	0.34×0.28	0.20	土師質土器
37	不整形	0.54×0.32	0.19	土師質土器	81	不整形	1.64×0.20	0.33	土師質土器、陶磁器、丸・平瓦
38	円形	0.22	0.28	土師質土器	82	隅丸方形	0.80×0.68	0.11	土師質土器、丸・平瓦
39	楕円形	0.40×0.30	0.33	陶器	83	隅丸方形	0.56×0.54	0.11	平瓦
40	不整形	0.96×0.40	0.65	磁器	84	不整形	1.10×0.22	0.25	平瓦
41	円形	0.50	0.68	土師質土器	85	隅丸方形	0.40×0.20	0.06	土師質土器
42	円形	0.42	0.50	土師質土器	86	不整形	1.52×0.18	0.52	土師質土器
43	不整形	0.46×0.22	0.13	土師質土器、瓦質土器	87	隅丸方形	0.50×0.36	0.20	土師質土器
44	不整形	0.68×0.30	0.38	土師質土器、瓦質土器					

(4) IV区の調査

1. IV区の概要

IV区は今次調査の最後に調査を実施した調査区であり、調査区全体の中では北端に位置する。調査面積は約25㎡である。

この調査地は、昭和25年に動物園が建設されたおりには、動物の檻、売店等が建てられたところである。北側は八幡宮跡へ約5m程の段差があり、垂直に近い石垣が長さ約25m、高さ約5mにわたって築かれている。石垣の西端は自然の地形を利用して終わっているように見えるが、雑木等が茂り確認は難しい。

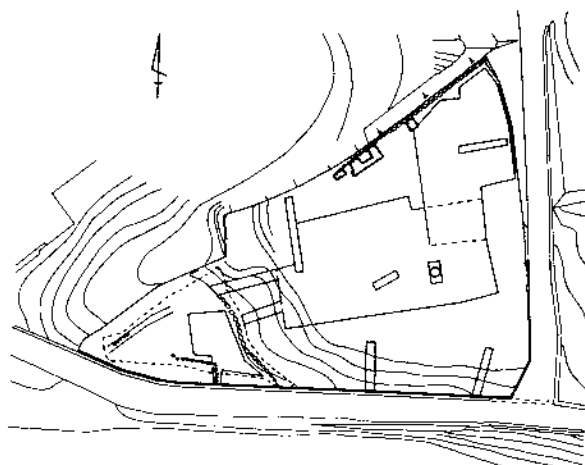


図64 IV区の位置 (S=1/1,500)

IV区の調査の目的は、石垣の裏込めの状態と西端部分の状況の確認である。調査方法としては、裏込めの状態を確認するために4本のトレンチを設定した。トレンチ設定は調査地の木々の根の張り方を考慮して決めた。トレンチ (TR) 2~4は、天場石から約3mの間隔をおき石垣に平行して幅約1m、長さ約8mの溝を掘り、この溝から石垣に向けて幅約1mのトレンチを2mの間隔で3本入れた。この東方に約5mの間隔をおいてTR1を設定した。作業は裏込め付近からは手掘りで進め、石垣の崩壊の危険もあるので深さは1mで止めた。また、石垣の裏込めの断ち割り調査は実施していない。

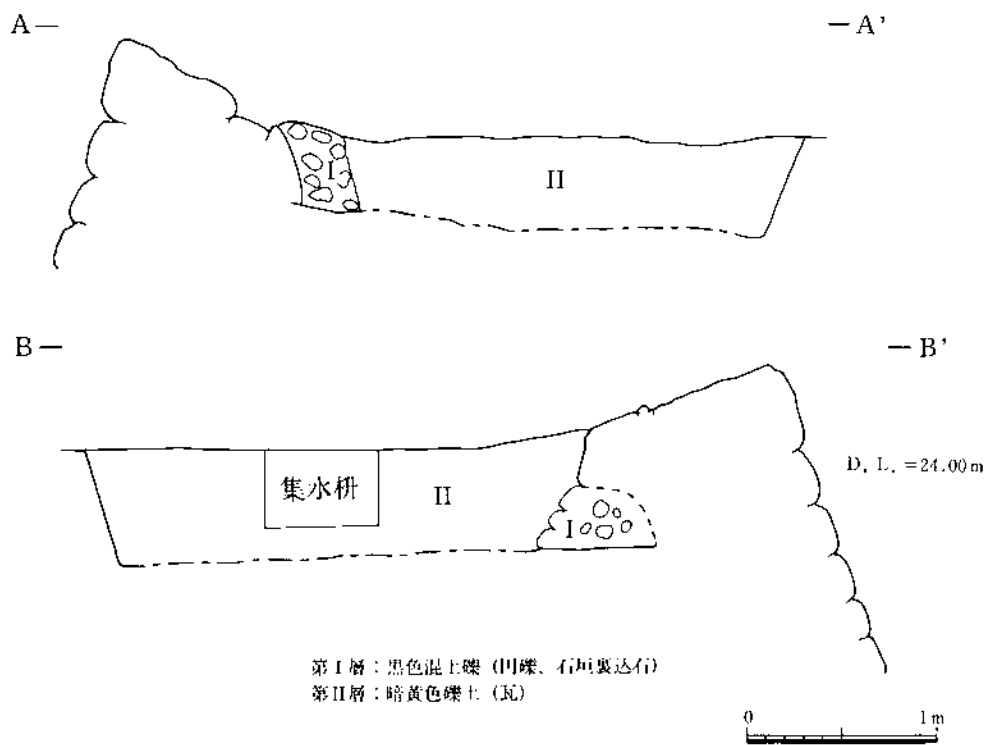
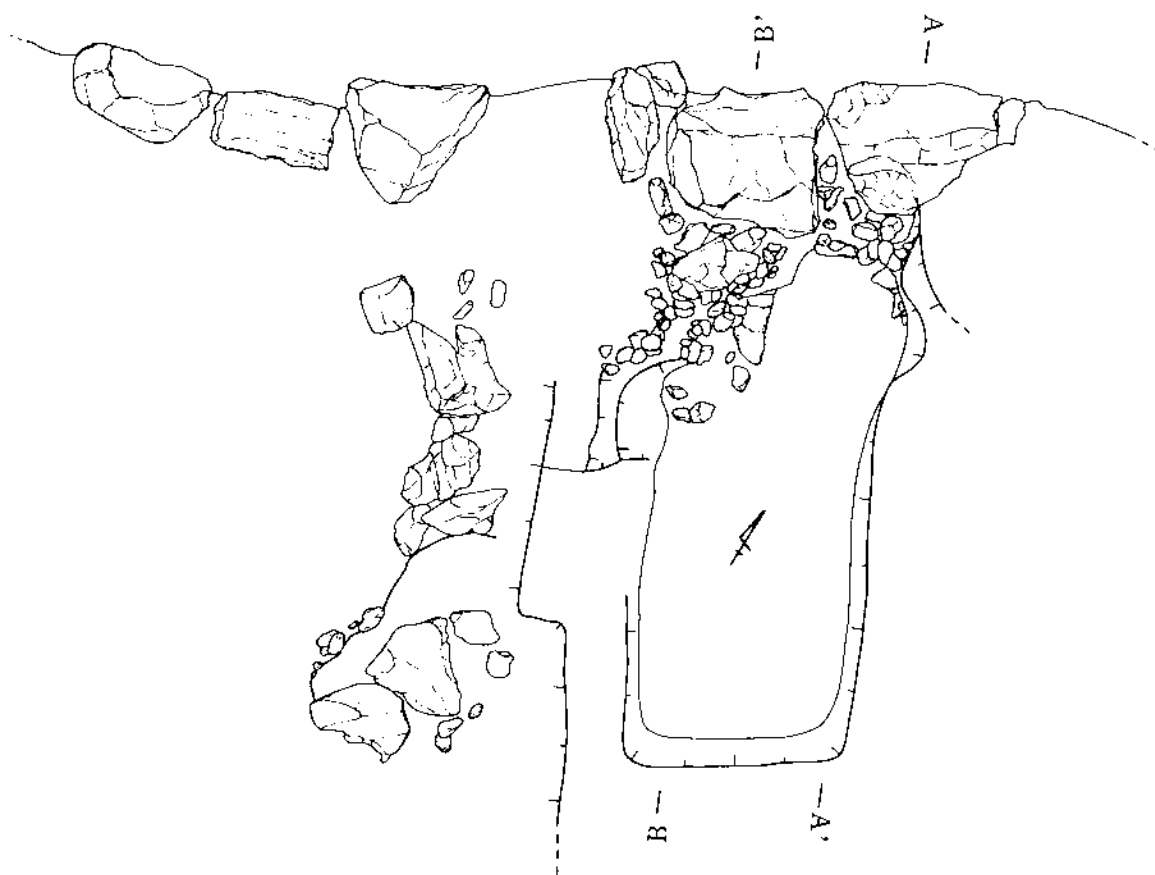
2. 各調査区の成果と出土遺物 (図68)

調査によって確認できた基本層序 (図65、66、67) は第I層：黒色混土礫で円礫、角礫を含む石垣裏込石である。第II層：暗黄色礫土で中に瓦等が混在している。本調査地では地山の確認はできていない。

出土遺物は陶磁器、土器片、瓦片、鉄釘などがあり、そのうち図示できたものは11点あった。その中で、トレンチ以外から出土した遺物で図示できたものは次の3点である。

497は肥前系の青磁の猪口であろう。外面には約1mmの厚さで青磁釉が、内面には薄く透明な釉が施されている。文様は内面口縁付近に呉須で四方襷文が描かれ、見込みには2重以上の界線がある。年代は不明である。498は鉄銭と思われるが両面ともに付着物が多く、文字の識別はできない。507は軒丸瓦の瓦当部である。丸瓦部は殆ど残っていない。型押成形で、文様面に布目圧痕が見られる。文様は珠文9個 (本来12個?) と、右巻きで尾部が接して円をなす三つ巴文が描かれている。外区外縁部分は型押し後に面取りされ、全面にはナデ調整痕が残る。また、瓦当面に銀化部分が見られる。

以下にはTRの番号に従って調査成果の記述をおこなう。



第I层：黑色混上礫（田礫、石垣裏込石）
 第II层：暗黄色礫土（瓦）

图65 IV区TR1

(1) TR 1 (図65・68)

調査区の東端に設定した、幅1m、長さ3m大のトレンチで、深さ1mまで掘り下げた。表土下約30cmあたりより、裏込めが現れる。第I層は天場石の石尻から始まり、裏込め石は長径10～15cm程の円礫が多く、礫土に混じって土師質土器片、須恵器片、陶磁器片、瓦片などが検出された。その中で図示できた遺物は2点である。

499は龍泉系の輸入青磁碗である。内外面に貫入が入り、文様は外面に線描きの連弁文が描かれ、鏝はないが、花卉中央部に盛り上がりがある。内面は無文である。時期は13世紀末～14世紀頃のものと思われる。500は陶器の壺と思われる。ロクロ成形によるナデ痕が内外面に残る。外面には灰白色の灰釉が施されているが、内面、高台部分は無釉である。文様は外面底部付近以上に縦方向にへら描き文が入れられている。産地、年代は不明である。

(2) TR 2 (図66・67・68)

TR 1の西側に設定した、幅1m、長さ3m大のトレンチで、深さ1mまで掘り下げた。トレンチ東壁近くに木があり、根が裏込め内に入り込んでいる。裏込めは厚さ約0.8～1m程で、裏込め石は長径10～15cm程の割り石が多く、礫土に混じって土師質土器片、陶磁器片、瓦片などが検出された。その中で図示できた遺物は1点である。

501は備前の播鉢と思われる。内外面にロクロ成形によると考えられる回転ナデ痕が残り、内面には8条以上を単位とする播目が刻まれている。時期は近世のものであろう。

(3) TR 3 (図66・67・68)

調査対象地の中央付近、TR 2に隣接して設定した、幅1m、長さ3m大のトレンチで、深さ1mまで掘り下げた。裏込めは天場石の石尻から0.1～0.3mの幅で、裏込め石は長径3～5cm程の礫が多い。礫土に混じって土師質土器片、陶磁器片、瓦片、鉄釘などが検出された。その中で図示できたものは5点である。

502は肥前系の陶器皿と思われる。ロクロ成形で高台は削出し三日月高台である。釉薬は内外面に鉄釉を施すが、底部付近は無釉である。文様は見込みに植物文の鉄絵が描かれている。高台部とその内部に釉の、また畳付に砂粒の釉着が見られる。時期は17世紀頃の砂日積段階の絵唐津ではないかと考えられる。503は肥前系の染付皿である。畳付部は無釉であり。文様は外面の高台付近に連弁文、胴部から口縁に唐草文が描かれ、高台側面に2本の界線、高台内には1本の界線と「富○長○」の銘がある。内面には口縁付近に四方禪文、見込みに2重界線とその中に松竹梅と思われる植物文様が描かれている。時期は18～19世紀のものと思われる。504は肥前系の染付碗である。畳付は無釉であるが、砂粒が釉着している。文様は外面胴部に残存状態からは判別できないが文様が描かれている。高台脇と高台ぎわ、高台内にそれぞれ界線があり、また高台内には「卍」の銘がある。内面は無文であるが見込みに2重界線とその中にコンニャク印判の五弁花文が描かれている。時期は18世紀後半のものと考えられる。505は白磁の皿と思われる。内外面には細かな貫入が見られ、高台付近は無釉である。産地、年代は不明である。506は軒丸瓦の瓦当部である。丸瓦部は殆ど残っていない。型押し成形で、文様面に布目斥痕が見られる。文様は、扁平な珠文13個と、左巻きで尾部が1カ所のみ接している三つ巴文が描かれている。外区外縁部分は面取りされ、型押し後に

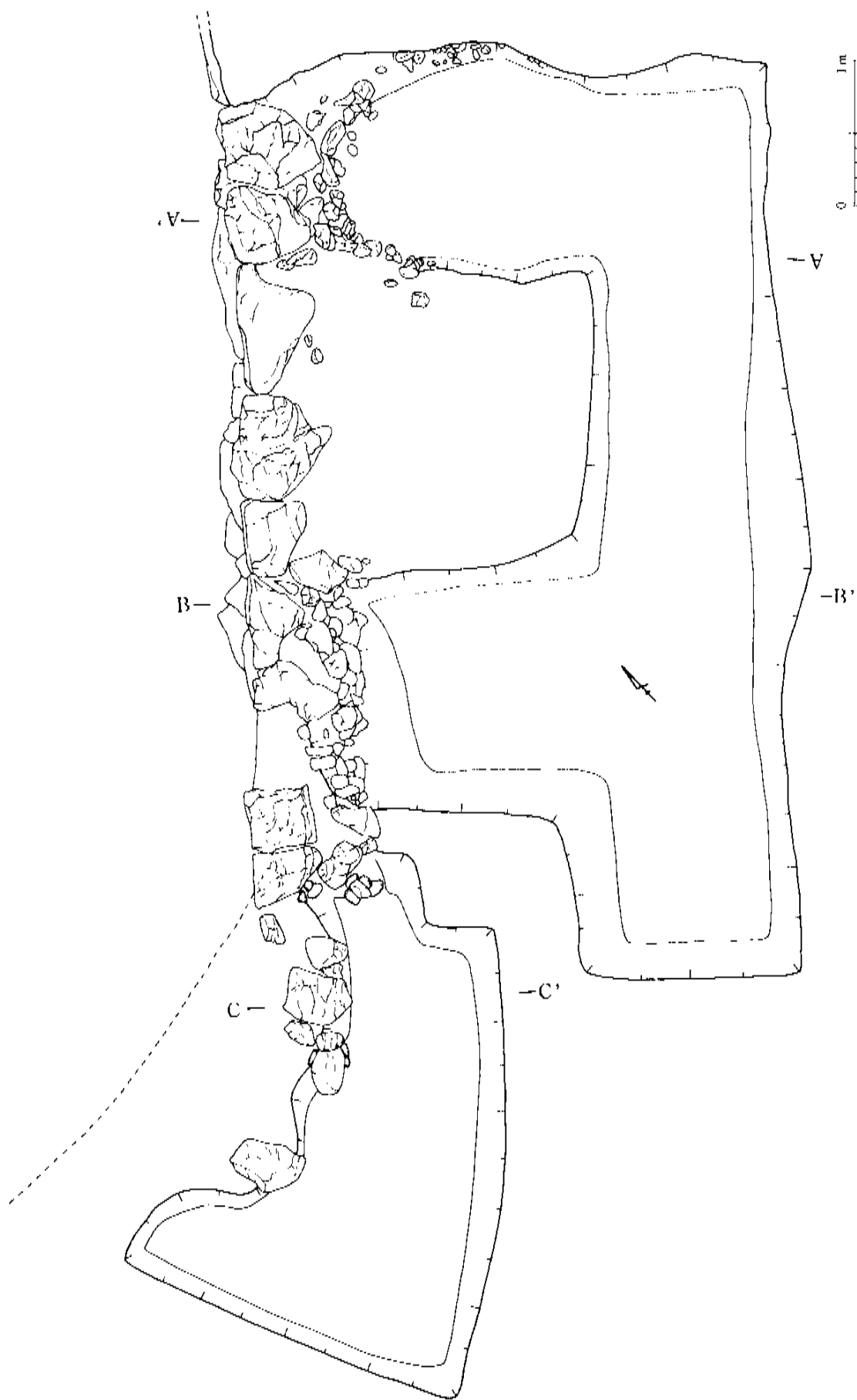


图66 IV区TR 2~4 平面图

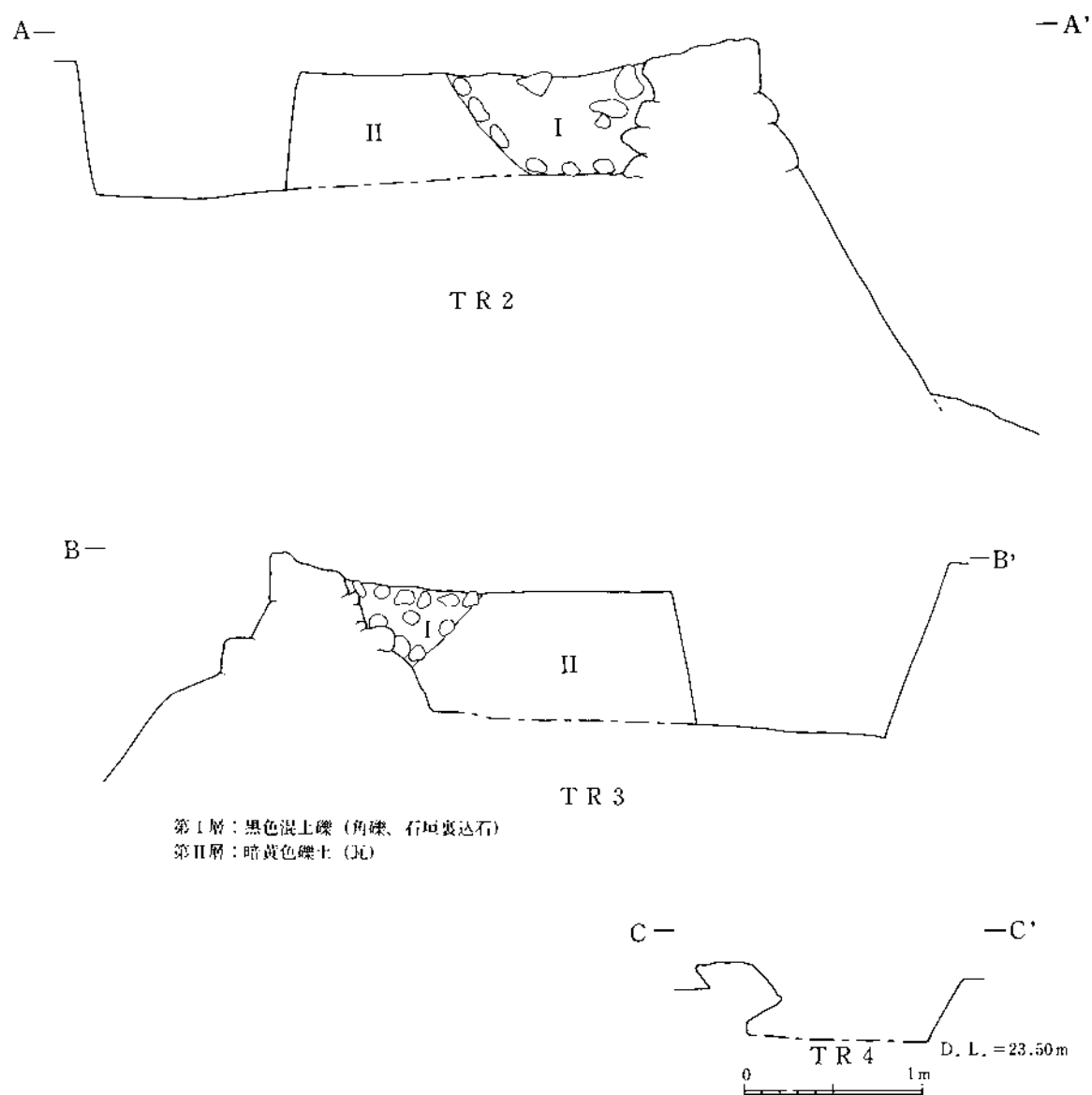


図67 IV区TR 2～4 断面図

成形したものと思われる。外面は縦方向の、また、内面には横方向のナデ調整が残る。瓦当面と外面には銀化部分も見られる。

（4）TR 4（図66・67）

TR 4は石垣の西端部分の状況の確認のため調査対象地の西端に設定した。西端の天場石の左右1mを石垣の延長ラインに沿って、幅2m、長さ1m大で、深さ0.5mまで掘り下げた。TR 4の付近で裏込めは無くなっていることから、西端の天場石以西には石垣は存在しないものと考えられる。また、西側ほど裏込めの厚さが薄くなっていることから、原地形の起伏に従って工法の調整がなされ、省力化が図られているものとみられる。

遺物等の出上はなかった。

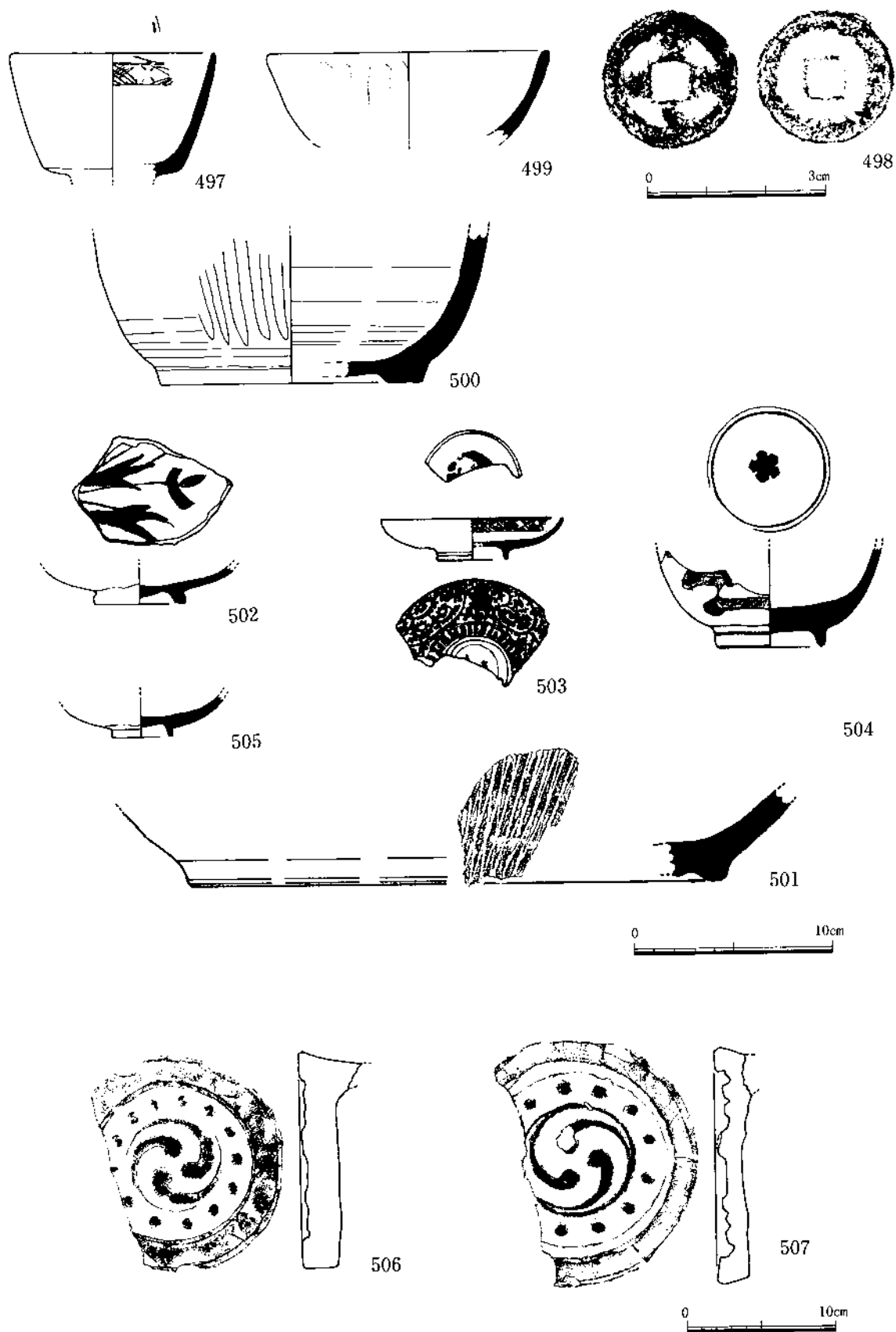


图68 IV区出土遗物

(5) V区の調査

1. V区の概要と調査方法

III区の南側斜面に設定したトレンチ2本をV区とする。調査区全体の中では南端に位置し、調査面積は約22m²である。

調査対象地上段部の南端は、現在の登山道に向かい、なだらかな勾配をもって落ちている。この斜面一帯には草木が茂り、荒地のような状態である。動物園建設時には動物の檻がこの付近に建てられた。

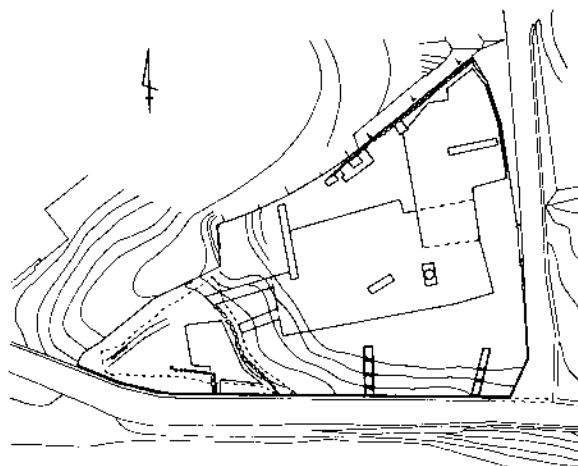


図69 V区的位置 (S=1/1,500)

調査の目的は、この斜面の地山の深度の確認である。トレンチ (TR) はIII区の調査前 (TR 1) と調査後 (TR 2) に入れた。この2本のトレンチは、調査区内の南端まで達するよう、斜面に直交する形で設定し、大きさは幅約0.8m、長さ約8mである。

2. 調査の成果

2本のトレンチ間で、土層の堆積状態に大きな差異はみられない。両トレンチとも、地山面までの堆積は比較的薄いと見える。以下、個別に記述を行う。

(1) TR 1 (図70)

斜面西端近くに設定した、幅1.4m、長さ7.6mのトレンチで、約0.8mの深度まで掘り下げをおこなった。堆積土層は、第I層A：攪乱層、第I層B：表土で、第II層は岩盤（地山）である。第I層Aは近現代の攪乱層で、コンクリート基礎等の埋設に伴い掘削された部分である。第I層Bは旧来(?)の表土層で、腐植土により形成される。岩盤上面ラインの傾斜はほぼ一定で、目立った傾斜変換点等は存在しない。また、第I層A・Bと岩盤面との間は不整合面となっている。以上の状況から、当該箇所はある時代に岩盤成形がなされ、現状の法面が形成されたものと理解される。形成の時期は動物園建設時、あるいは斜面下方の登山道敷設時の可能性が高い。なお、既往の地山地形の復元は、今次調査範囲だけでは難しい。

(2) TR 2 (図70)

斜面の東端近くに設定した、幅0.8m、長さ8.3m大のトレンチで、深さ約0.4mまで掘り下げた。基本層序は第I層：攪乱層、第II層：地山である。第I層には礫土に混じって木の根、ビニールパイプ等が入っていた。第II層の地山は黄褐色の軟質礫である。地山は斜面落ち際と斜面中腹部に確認できたが、一定の層としては捉え難い。この付近一帯は整地が繰り返し行われたと考えられる。

遺物等の出土はなかった。

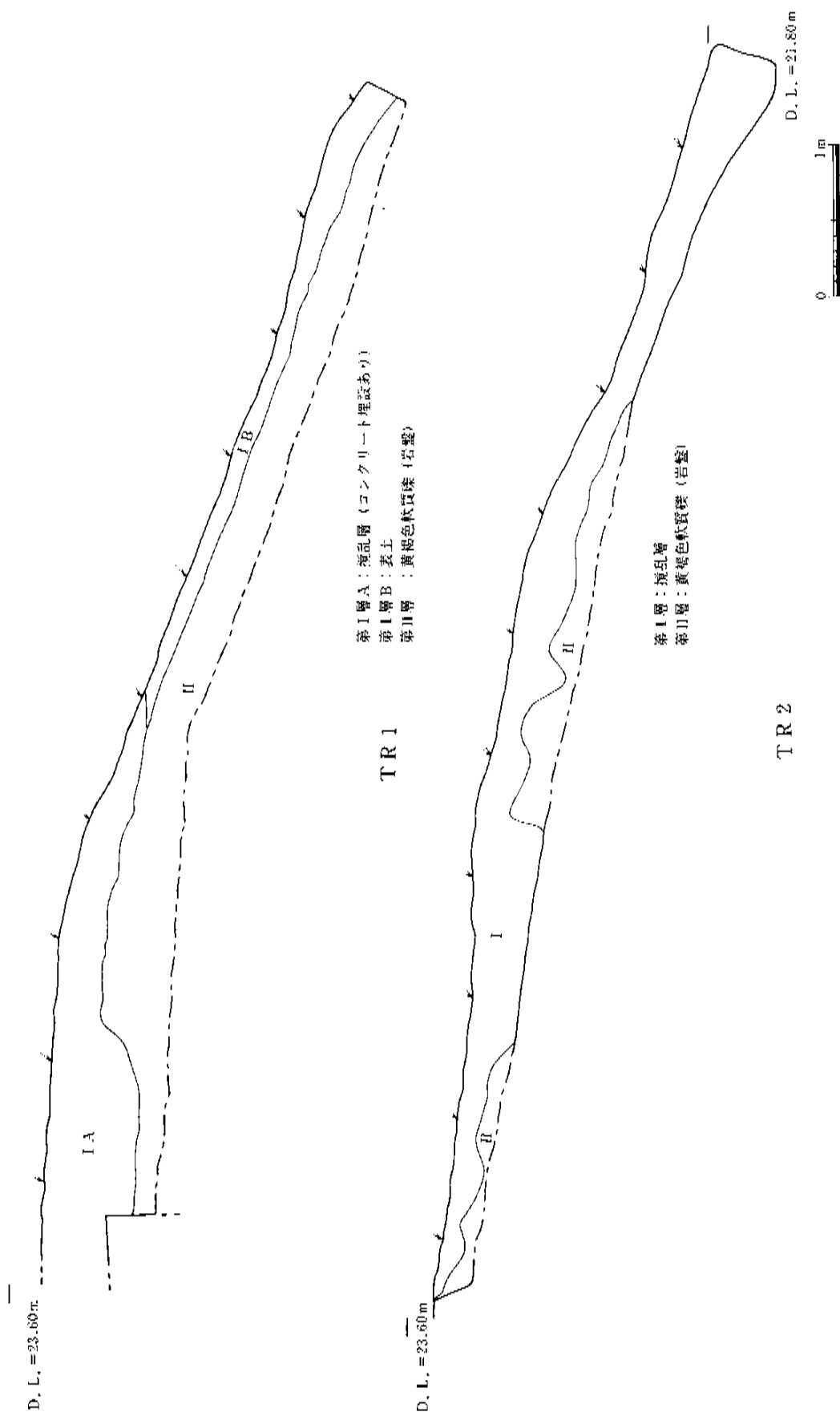


図70 V区TR1・2 東壁土層断面図

(6) VI区の調査

1. VI区の概要と調査方法

VI区は、III区とVII区との斜面部分に設定したトレンチ2本を指し、面積は約27㎡である。本調査区は上段部と下段部にまたがる傾斜地で、高低差は6m程、上段西端から急勾配をもって下段に落ちている。

この調査地は、平成5年度の調査で下段近くから石垣が検出されている。この石垣は江戸時代後期のものとされている。

調査は上段部(III区)から下段部(VII区)への地山地形の続き具合の確認を目的とした。調査方法としてはIII区西端から下段部に向かって、幅約0.8m、長さ約17m大のトレンチ2本を設定し、南側をTR1、北側をTR2と呼んだ。

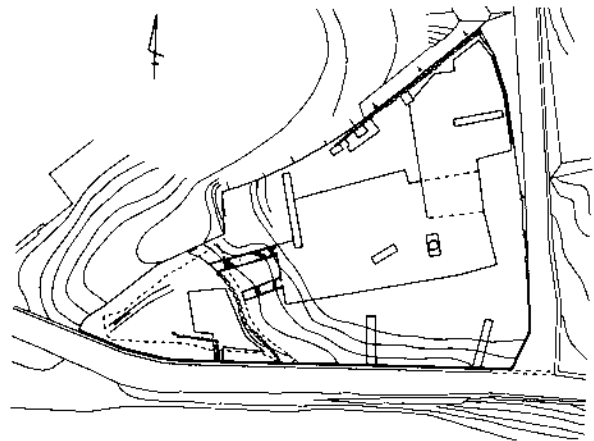


図71 VI区的位置 (S=1/1,500)

2. 調査の成果

調査によって確認できた基本層序は、第I層：攪乱層、第II層：黒色粘質土、第III層：黄褐色礫である。第I層には、礫土に混じって、木の根、砂利、セメント塊、瓦片などが含まれていた。遺物は土師質土器、須恵器、陶磁器、瓦片が少量出土したが、図示できるものはなかった。以下にトレンチごとに調査の成果の記述をおこなう。

(1) TR1 (図72)

斜面の南端近くに設定した、幅0.8m、長さ15m大のトレンチである。地山の状態はIII区西端より4m付近と斜面中間部、及び下段石垣付近で確認できた。III区西端から3m付近まではなだらかな傾斜で落ち、第I層下に第III層(地山)が現れる。この第III層はIII区の地山に続くものと考えられる。III区西端より4m付近からは、地山は部分的に見え隠れし、再び地山が現れるのは、III区西端より9m付近から下段石垣にかけての約6mの間にかけてである。この層は下段に続くものと捉えてもよいのではないかと考える。この地山を利用して石垣を築き、同時に削平して下段の平場を造成したものとも考えられる。またこの調査区は攪乱が著しく、原地形の姿を捉えることは難しい。遺物は土師質土器片、陶器片、瓦片が少量出土している。

(2) TR2 (図73)

斜面の西端近くに設定した、幅0.8m、長さ17.2m大のトレンチである。III区西端から4m付近までは黒色粘質土が堆積し、地山の確認はできていない。地山が捉えられるのは、III区西端から10m付近より石垣までの約7mの間である。この部分にはTR1と同様に石垣が築かれ、その際に併せて下段の平場造成が行われた可能性がある。III区からの地山の続き具合は確認できていないが、上段部北西側は、大量の盛土で造成がなされているのではないかと考えられる。遺物は土師質土器片、須恵器片、陶磁器片が少量出土した。

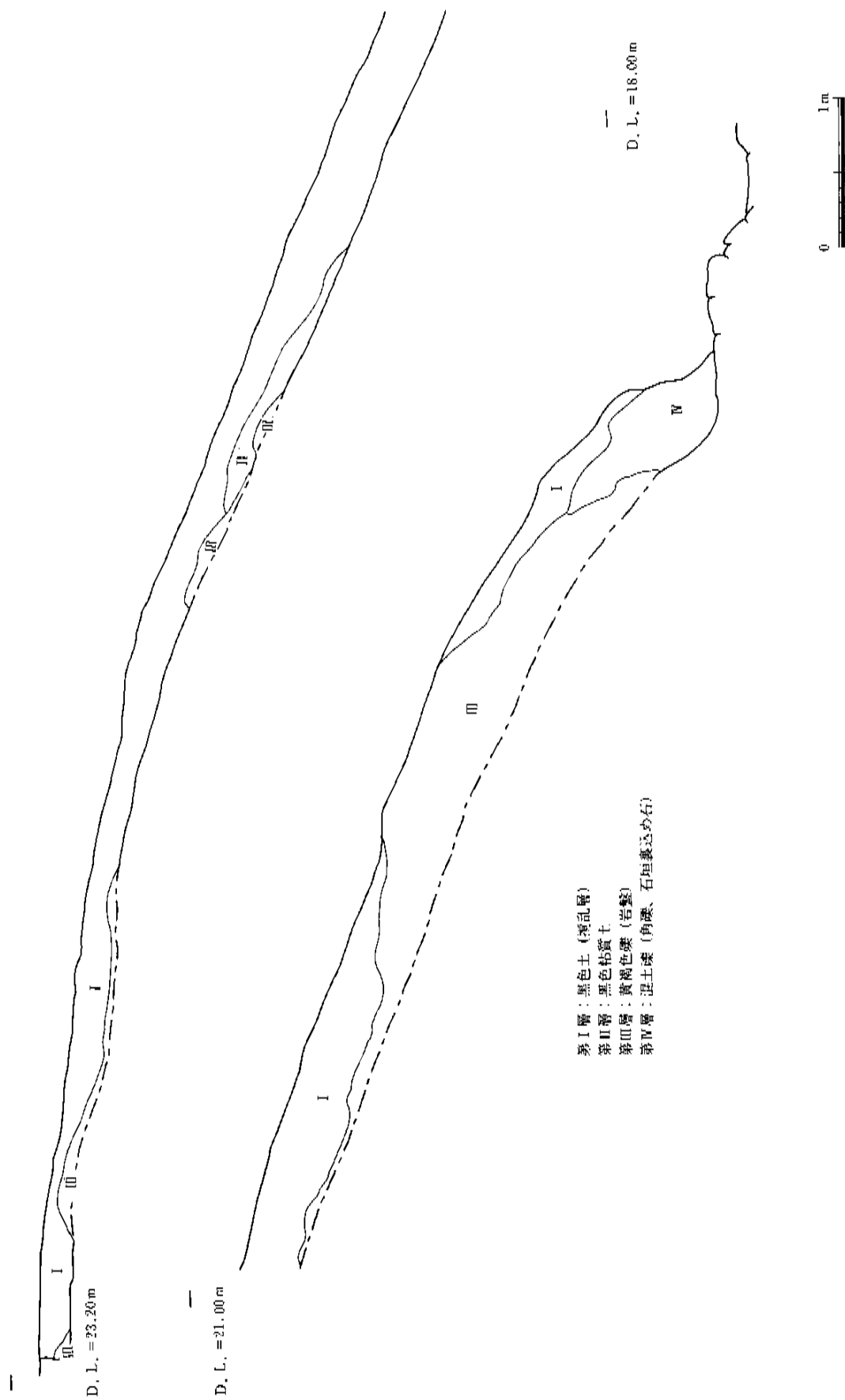


图72 VI区 TR1南壁土层断面图

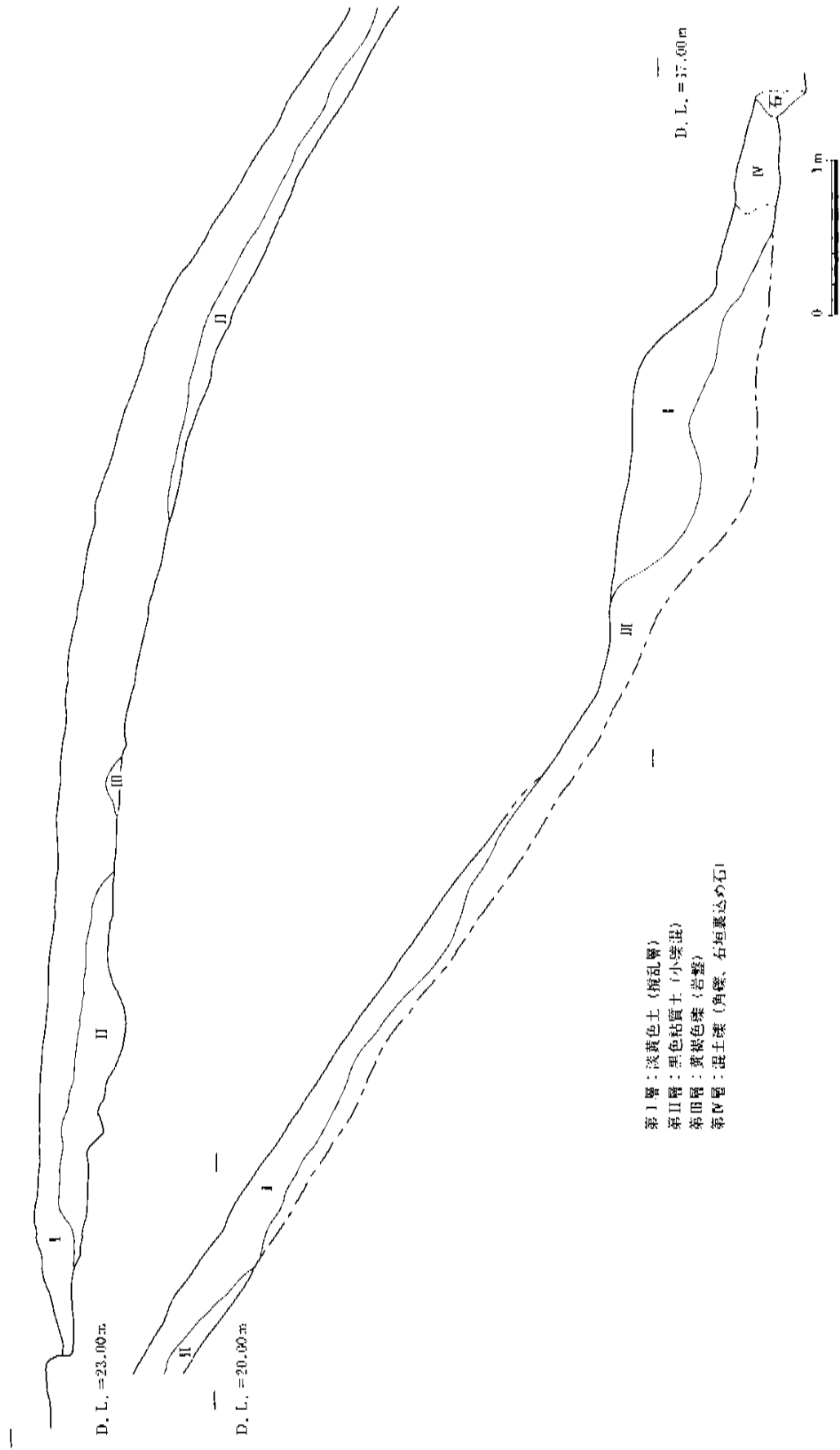


図73 VI区 TR2南壁土層断面図

(7) VII区の調査

1. VII区の概要

VII区は『御台所屋敷跡』の下段の中であり、本調査区全体の中では西端に位置する。調査面積は72㎡である。調査前の地形は平成5年度の調査で検出された遺構、石列、石垣等が地表面に残されていた。下段は上段から約6.4mの段差をもって落ち、その斜面下方には石垣が築かれていた跡が残る。下段の平場は地山を削平して整地され、整地面南側に石組の排水溝、北側には石列状遺構、また、遺物としては魚貝類、動物の骨等が確認されている。

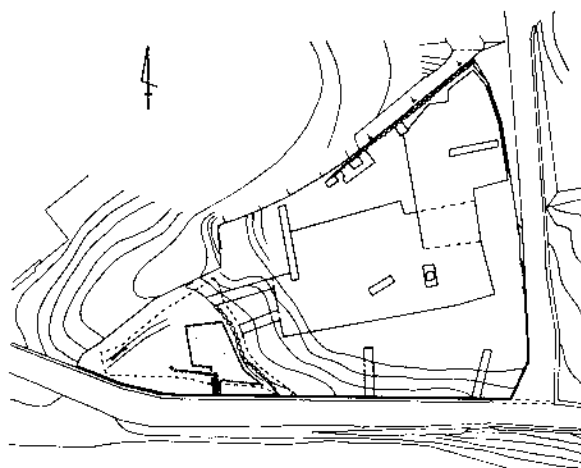


図74 VII区的位置 (S=1/1,500)

今回の調査では、以下の2点について確認することを目的とした。第1点目は、昨年度検出した南側の排水溝の続きを調査区内において確認すること。第2点目は、昨年度のトレンチ調査において、現遺構面より約0.8m下位で確認されていた遺構面の広がりを確認することである。

2. 層序 (図75)

調査により確認できた基本層序は、第I層：整地層である。土色は灰黒色で小石、漆喰、瓦片が混在していた。この第I層から、大量の瓦、少量の陶磁器、須恵器が出土した。細片も含めた出土遺物の総数は、瓦が950点、その他が57点あった。第I層上面は昨年度の遺構検出面であり、整地面と考えられる。この整地面の下約0.8mに地山面を確認した。地山面では23基のピット状遺構を検出し、また、この面から北側へ0.8m上がった整地面で土坑状遺構1基とピット状遺構2基を検出した。

3. 検出の遺構・遺物

VII区では第I層上面で土坑状遺構1基、ピット状遺構2基、南側の石組の排水溝の続きの石2点、さらに第I層下面の地山面でピット状遺構23基を検出した。出土遺物は、遺構及び整地層から土師質土器、須恵器、陶磁器、瓦片が認められた。以下、遺構とその出土遺物、そして各層出土の遺物の順で記述する。

(1) 遺構

検出できた遺構の中で、土坑状遺構1基、ピット状遺構1基、石組の排水溝の遺構について記述する。ピット状遺構は25基検出されたが、そのうち、遺物を伴うものが3基あった。その中で土師質土器片を伴ったもの1基を取り上げた。またここで取り上げなかったピット状遺構については、殆ど遺物を伴わない時期不明なものが多い。石組の排水溝の遺構は新たに検出した石と昨年度検出分の一部も含め取り上げた。

①土坑状遺構SK1 (図78)

調査区の東部に位置する。平面形は不整の長方形で中央付近はトレンチにより切断されている。長軸長8.50m、短軸幅1.00m、検出面からの深さは0.40mである。掘り方の断面形は箱形である。埋土は、黄茶色の礫土である。

遺物は土師質土器片、須恵器片、磁器片、瓦片が出上している。その中の1点を図示することができた。遺構の時期の特定は難しいが、中世から近世のものと考えられる。

SK1出土遺物 (図76)

509は青磁の底部である。残存状態からは器種の判断は難しいが、碗ではないかと思われる。髷付、高台内は無釉である。16世紀あたりの龍泉系輸入青磁ではないかと思われる。

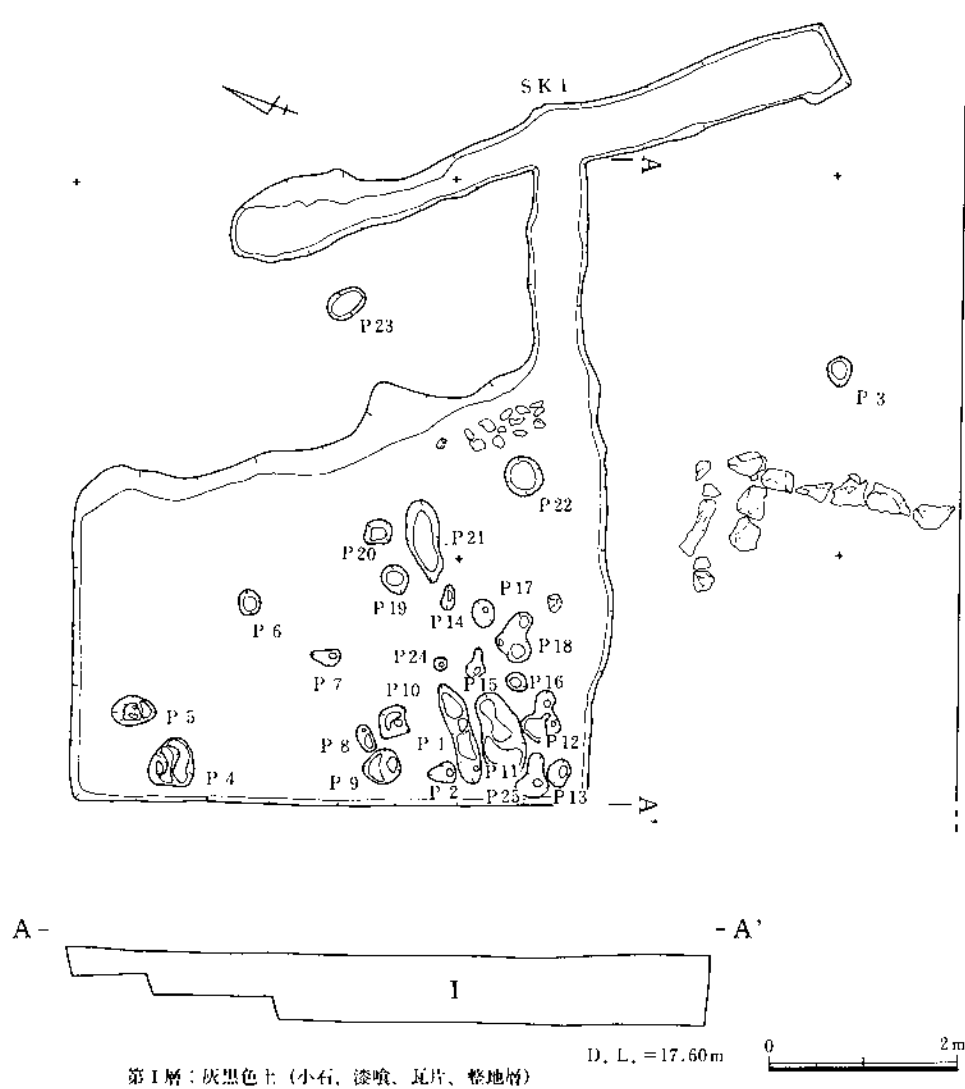


図75 VII区全体図・土層断面図

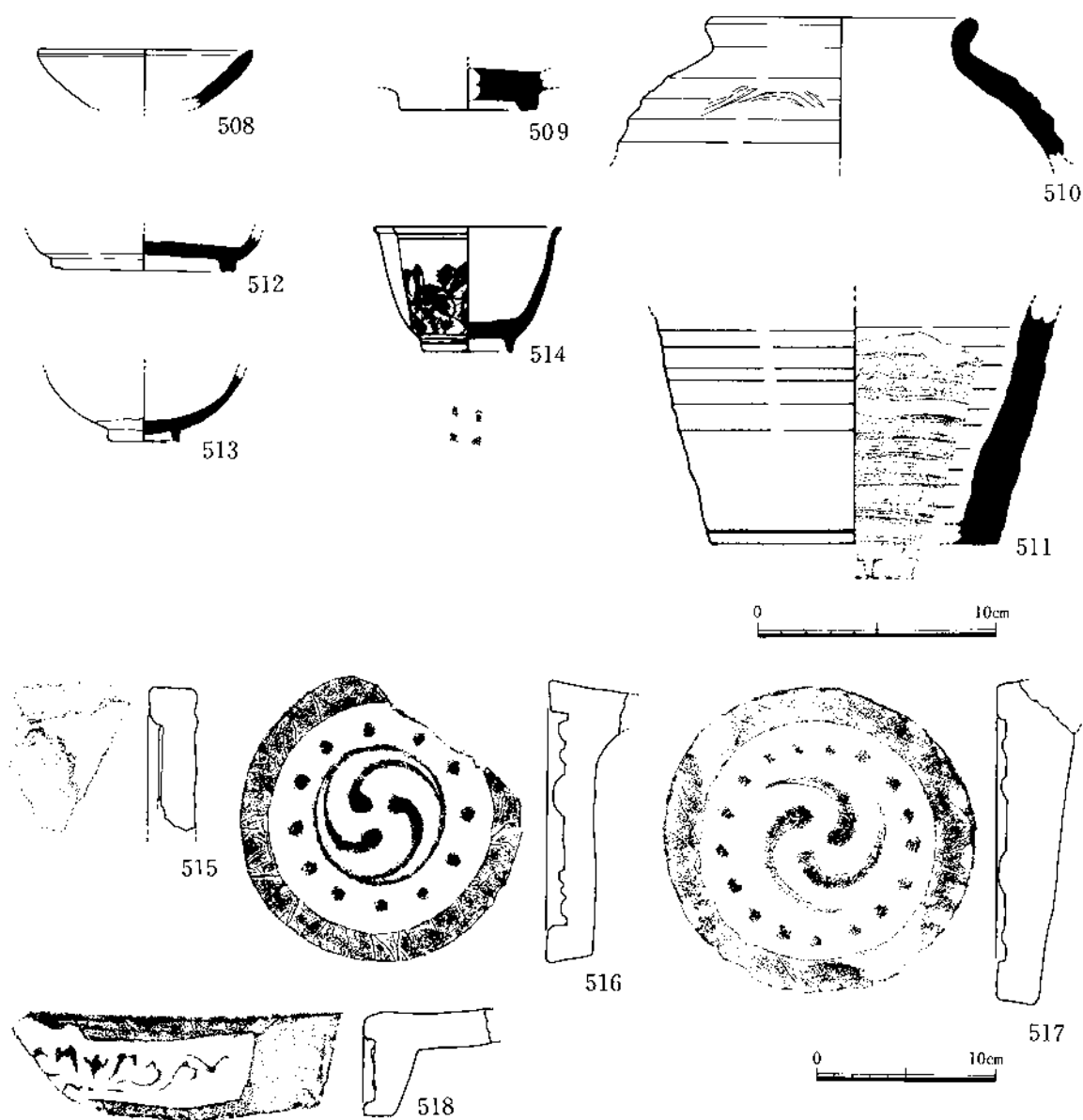


図76 VII区出土遺物

②ピット状遺構P 1 (図77)

調査区の西部、整地面より0.8m下がった遺構面の南隅に集中するピット状遺構の1基である。掘り方の平面形は不整の舟形で、長径1.10m、短径0.20m、検出面からの深さは0.44mである。掘り方は、中央部に深さ0.22mの台状部があり、これを挟んで深さ0.44mの2カ所のピット状部分がある。埋土は黄茶色礫土である。

遺物は土師質土器片1点が出土したが、図示はできなかった。遺構の時期の特定は難しい。

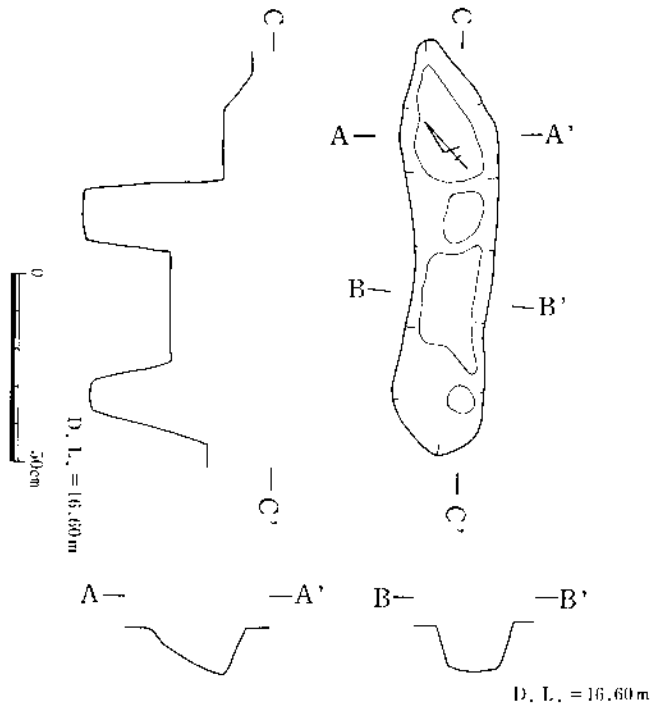


図77 VII区 P 1

③石組の排水溝 S D 1 (図79)

調査対象地の南部に位置し、平成5年度調査により確認された遺構の南端からフェンスまでの間、南北0.5m、東西0.5mの部分进行调查した。この部分で石列の続きの石を2個確認した。いずれも石材は石灰岩、平面形は不整形で、長径0.4m、短径0.2mほどの角礫である。検出面より0.1mの高さを残して埋められている。遺物等の出土はなかった。時期の特定は難しい。

(2) 遺物 (図76)

VII区では第I層より、多量の瓦片と、少量ではあるが土師質土器片、陶磁器が、また、遺構からは土師質土器、須恵器、陶磁器、瓦片が出土している。その中で図示できたものは10点である。以下に第I層出土遺物を器種別にその内容を記述する。

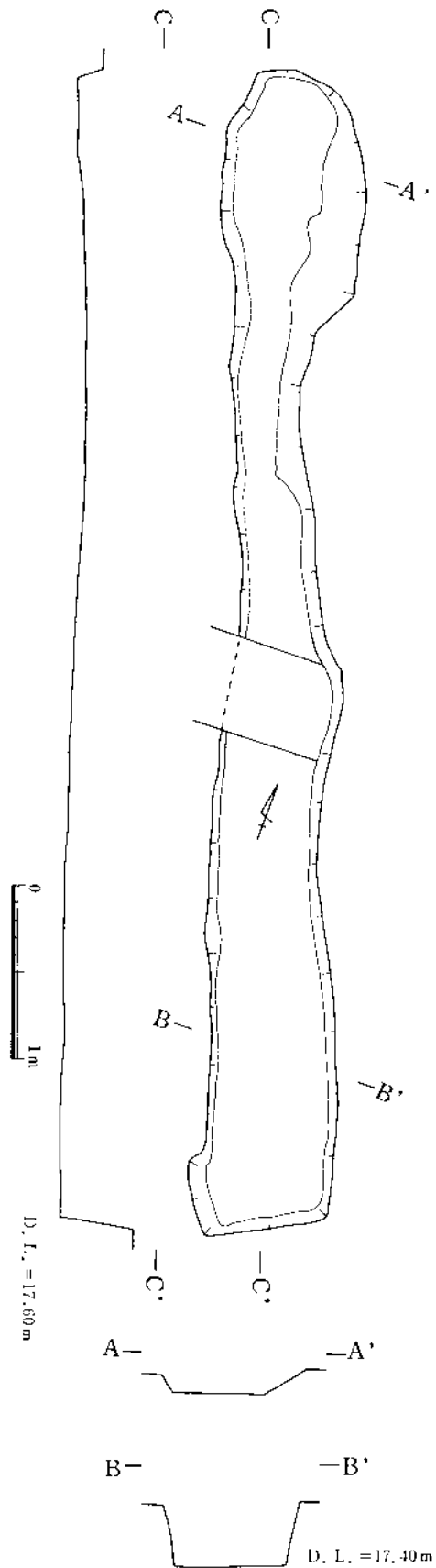


図78 VII区 SK 1

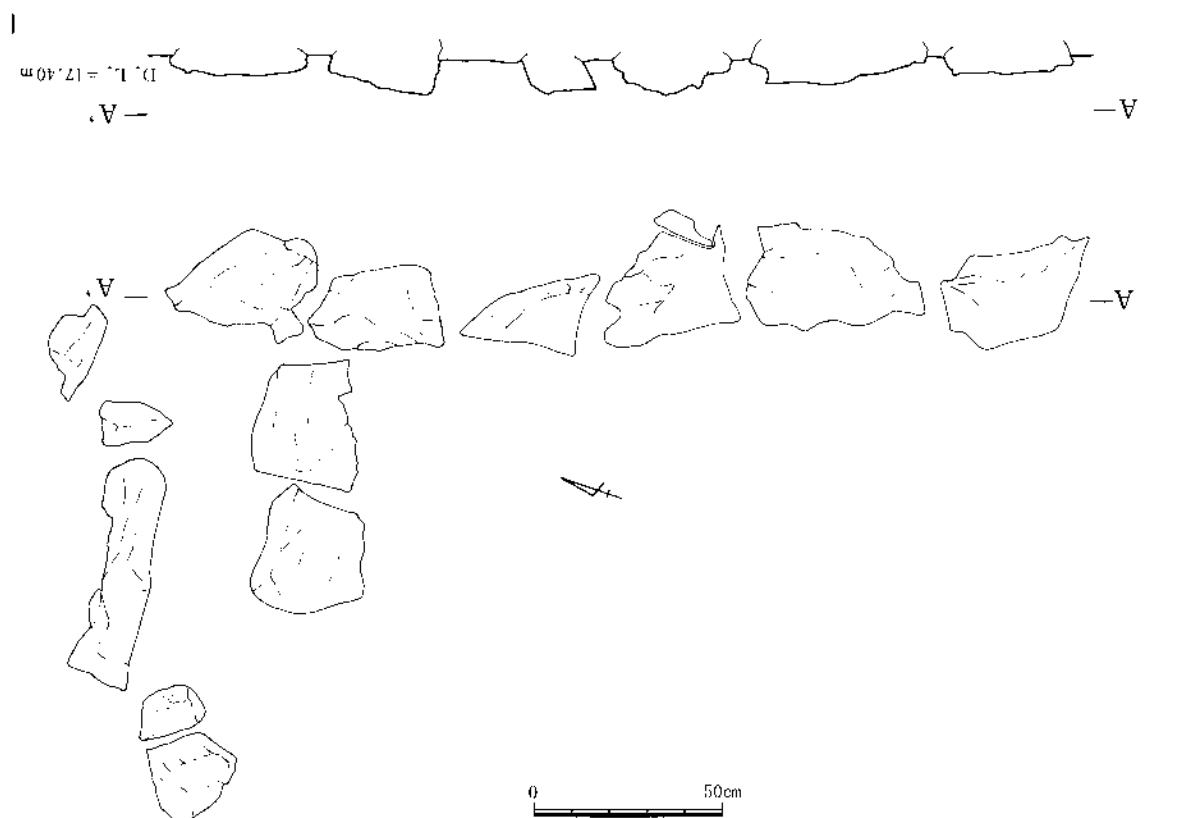


図79 VII区 S D 1

①土師質土器

508は土師質土器の坏と思われる。内外面には右回りと思われるロクロ成形による回転ナデ痕が残る。口縁端部は尖り、外面には浅い沈線状の凹み1条が巡る。時期は近世のものと思われる。

②陶器

510は備前焼の壺である。外面には4段以上の凹線を巡らし、凹線間に3条の平行なへら描きの波状文が入られている。内外面にロクロ成形によると思われる回転ナデ痕が見られる。511は備前焼の壺の底部である。底部は平底であり、植物茎部(?)の圧痕が残る。内外面は回転台成形と思われる横ナデ痕が見られる。外面は不規則な凹線が巡らされ、底部際には浅い沈線(?)が1条入っている。内面には左右断続した横ナデ痕が残る。510と同じ器種と考えられる。時期は14世紀～15世紀あたりのもと思われる。512は備前系の壺または瓶と思われる。内外面にロクロ成形と思われる回転ナデ痕が残る。高台内に2次的な研磨が見られる。時期は不明である。

③磁器

513は白磁の碗の底部である。高台部分は無軸である。産地、年代は不明である。514は肥前系の染付の猪口ではないかと思われる。髷付は無軸である。口縁から胴部に焼け歪みがあるが、口縁は外反している。文様は外面に植物文、口縁下に2条、高台際に1条、高台外面に2条の界線が描かれている。内面は無文である。また、高台内に「宣明年製」の銘が入っている。時期は18世紀後半のものと思われる。

④瓦

515～517は軒丸瓦の瓦当部である。515は型押しによる三ツ葉柏文が描かれている。葉脈の表現はない。側面、裏面にはナデ調整痕が残る。丸瓦部は殆ど残っていない。516は珠文12個、右巻きで尾部が接して円を描く三つ巴文が描かれ、型押し成形による布目圧痕(?)が見られる。周縁部は型押しの後に調整され、全面にはナデ調整痕が残る。丸瓦部は殆ど残っていない。瓦当面、側面の一部に銀化部分が見られる。517は珠文17個、左巻きで尾部が離れた三つ巴文が描かれている。巴文の先端部は尖ったもの2個と丸いものが1個であり、頂部は面を成している。また、文様面には木目圧痕が残るが、摩滅している。周縁部は型押し後に調整されており、全面にはナデ調整痕が残る。518は軒平瓦の瓦当部である。平瓦部は殆ど残っていない。型押し成形による唐草文が描かれている。周縁部は型押し後整形が成されている。全体にはナデ調整痕が残る。

表3 VII区 ピット状遺構計測表

ピットNo.	平面形	径 (m)	深さ (m)	出土遺物
1	不整形	1.10×0.20	0.44	土師質土器
2	隅丸方形	0.28×0.20	0.12	丸・平瓦
3	隅丸方形	0.30×0.24	0.74	丸瓦
4	隅丸方形	0.52×0.44	0.34	
5	楕円形	0.44×0.30	0.20	
6	隅丸方形	0.26×0.22	0.29	
7	不整形	0.30×0.14	0.26	
8	隅丸方形	0.26×0.14	0.16	
9	不整形	0.40×0.34	0.37	
10	隅丸方形	0.32×0.26	0.46	
11	不整形	0.80×0.42	0.39	
12	不整形	0.54×0.30	0.29	
13	楕円形	0.30×0.20	0.38	
14	不整形	0.26×0.12	0.16	
15	不整形	0.32×0.18	0.21	
16	隅丸方形	0.20	0.21	
17	楕円形	0.28×0.24	0.14	
18	不整形	0.52×0.30	0.29	
19	隅丸方形	0.28×0.24	0.35	
20	隅丸方形	0.26	0.17	
21	不整形	0.90×0.34	0.12	
22	円形	0.40	0.37	
23	楕円形	0.40×0.28	0.13	
24	隅丸方形	0.12	0.15	
25	不整形	0.48×0.20	0.76	

第V章 総括

今次の調査では、I～VII区に関して上述のような調査成果が得られた。本章では、その中の幾つかの点に関して若干の所見を記し、まとめとする。

(1) I区遺構群について

I区では、整地層とみられる第II層上面において、石列状遺構・礎石・溝状遺構・土坑状遺構等の遺構を検出した。石列状遺構・礎石(SX1)の年代・性格等の不明なことは既に述べたとおりである。一方、主にI区の北半部分に集中している溝状遺構・土坑状遺構(SD1、SK1～3)等の遺構群は、大量の瓦(総重量1364.3kg)をはじめ、漆喰・釘等の建築材、及び土器・陶磁器等の遺物を伴っていた。これらの遺構群の埋土は、土よりも瓦・漆喰等の建築材の方が量的に上回っており、SK2は特にその傾向が顕著に現われていた。埋土の堆積状態は、SK1・SK2については数層に区分できているが、各層の包含する遺物に明瞭な変化はみえず、きわめて短期間に掘削・投棄(埋没)がおこなわれたものと理解される。このように、瓦のみでなく、漆喰や瓦釘、更には建材とみられる粘土塊までもがごく限られた期間のうちに投入されている状況は、何らかの理由によって、城内の瓦葺き建築物(建築木材を全く含まないことから、おそらく塀等であると想定しているが、木材のみ他所へ処分している可能性は否めない。)を撤去した際の廃材がそのまま廃棄されたものと捉えることができる。このことは、各遺構出土瓦の刻銘の違いにも現われている。本書では瓦の刻銘については全く触れることができなかったが、出土瓦に記された刻銘のバリエーションは、遺構ごとに異なる様相を示すという見通しを得ている。そうすると、解体した瓦葺き建築物の箇所によって異なる廃棄坑を掘り、廃材の処分を実施したという状況が想定でき、各遺構は複数の解体作業工程のそれぞれの帰着点として遺されたという理解に到達できる。城内の構築物がある一定まとまって解体された機会としては、廃藩置県を契機として明治6年⁽¹⁾から実施されたものを容易に想起することができるが、御台所屋敷跡に関していえば、昭和25年の高知市立動物園開園の際にも同様の行為がなされた可能性が否定できない。また、SK2からビール缶が出土したこと、SK3が白磁猪口の金文字銘から1898年を遡らないこと等は、それらの形成を明治6年の契機に接近させることを困難にしている。同様に、SD1・SK1についても、埋没年代がどこまで下るのか、現段階では判然とさせ難い。

以上から、I区北半部分に集中する遺構群は、相互に前後関係をもつ可能性は否定できないが、同様の意図に基づいて形成された廃棄行為の跡であると把握できる。それぞれの廃棄坑における大量の出土瓦の分析は、おのおのの構築物の解体前の様相をより明瞭に描出し、更には城内における本来の構築箇所の特定制をも実現させる可能性を有している。今次調査箇所に瓦等の廃材が投棄されたという記録は、現時点において見出せていない⁽²⁾が、あるいは伝御台所屋敷跡東側に存在した瓦葺き塀⁽³⁾の用材が持ち込まれた可能性も浮上する。遺構出土瓦の型式学的検討と併せて、再考の必要を痛感している。

(2) I区出土遺物について

I区では、遺構外のものも含めて、多種多様な遺物が出土している。それらは近世の所産のものを中心としているが、その中でも夥しい量が出土した瓦については、上述したように各種の情報抽出の可能性を秘めた資料として評価できよう。瓦に関しては、刻銘、瓦当文様、製作技法等、多くの課題のあることは認識されるが、本書ではこれらの課題についての検討等はいかに及ばず、出土瓦の図示すら十分になし得なかった。前節と重複するが、再考を期したい。

また遺構外出土のものであるが、中世以前の所産とみられる須恵器甕片の出土がみられた。中世以前にまで遡る遺物の確認は、従来の高知城跡の年代幅に対する認識を改めさせるものであり、今後の高知城跡（大高坂山）の調査に際しては、高知城以前の遺跡の存在にも注意を払わねばならないであろう。

(3) III区中世遺構群について

III区では15～16世紀代の柱穴等の遺構が、遺物を伴って検出できた。高知城内において、中世に遡る遺物の出上例は知られていたが、当該期の遺構が確認できたのは初めてのことである。建物跡としての復元はなし得ていないが、立地等の状況からすれば、中世城郭の空間の一部ではないかとみられる。

遺物包含層も含めた出土遺物には、青磁・染付・備前焼等の15～16世紀代に帰属させ得るものと、それ以前にまで遡る石鍋等の遺物の2群が存在する。前者は戦国時代の本山氏あるいは長宗我部氏支配下にあった当時の大高坂城に相当する年代の所産であり、後者は更に戦国時代以前の遺跡の存在をも示唆する資料である。後者について、南北朝時代の高坂氏に直結させられるほどに詳細な検討はできていないが、上述したI区出土の須恵器片のように、大高坂城以前の遺跡の傍証となる資料の出土もみられた。

今次調査において、戦国期に位置づけることのできる遺構が明瞭に検出できたことは、最も重要な成果の一つといえるが、加えてそれ以前の遺跡存在の一端がみえたことは、今後の調査研究に向けた貴重な指針が獲得できたものと評価されよう。

(4) III区近世遺構群とその出土遺物について

III区では上述の中世遺構群に加えて、近世の遺構も確認された。それらは、南西部のピット状遺構については中世遺構との重複・混在がみとめられるが、主に北部・東部には土坑状遺構等の大型のものを含む近世遺構が集中する傾向がある。中でもSK3～SK5からは多量の出土遺物が得られており、比較的近接して存在するこれら3基の土坑状遺構の検出は、今次調査成果の中でも、特に重要な位置を占めるものと評価できる。以下、3基の遺構に関する現時点での所見を記しておく。

SK3は、III区北部に位置しており、遺構の平面形はほぼ東西を指向する長方形で、東側に不整形舟形で掘り込みの浅い部分がある。この浅い掘り込み部分は、本来の掘り方ではない可能性が考えられる。遺物の大半は深い掘り込みの長方形部分から出土している。出土遺物には、土師質土器・焼塩壺・唐津・陶磁器・瓦があり、出土量では土師質土器が圧倒的多数を占める。瓦については遺

構面上部からの混入の可能性があるが、その他の出土遺物については一定の短期間のうちに埋没した一括性の高いものと捉えられる。土師質土器はいわゆるかわらけで、すべてロクロ成形のものとみられる。器形は环形ないしは皿形を呈するが、いずれの形態にすべきか帰属の不明瞭なものも認められる。現段階でこれらの土器群に形態・製作技法の異なる二者が存在することを確認している。一つは器厚が比較的薄手のもので、口縁端部は尖らせることが多く、内底面中央部分は押圧によって凹ませる傾向があり、成形時のロクロ回転方向が右回りにほぼまとまっているもの。今一つは、厚手の器厚で口縁端部は丸くおさめ、内底面中央部を凹ませる指向はみられず、左回りのロクロによって形成されたものである。一方、共伴する唐津は胎土目積み段階のもので、1600～1610年代に位置づけられ、焼塩壺も、蓋・身ともに少なくとも17世紀段階の形態のものといえることができる。従って、共伴遺物の年代から17世紀初頭の一括遺物として評価することができよう。

S K 4 は平面形が不整楕円形を呈する土坑状遺構で、検出面から1 m余りの掘り込みを有する。出土遺物には、土師質土器・青磁・白磁・唐津・瓦等があり、取り上げ時の混入とみられる瓦を除いて、一括性の高い資料群と認められる。遺物の組成をみると、土師質土器（かわらけ）が圧倒的に多数を占め、あたかも一括投棄という状況を呈す。これらの土師質土器は、S K 3 出土土器で前者とした特徴のもの（器壁は薄手、口縁部は尖る傾向で、内底面中央部は凹み、ロクロは右回り）で占められる。共伴した胎土目積み段階の唐津碗により、1600～1610年代に位置付けられる土器群と理解される。

S K 5 は平面形が東西に長い不整長方形状を呈し、S K 3 の東方延長戦上にほぼ同一の長軸方向を指向して存在する。出土遺物には土師質土器・唐津・陶磁器等があり、僅かな混入がみられるものの、一括資料としての有用性の高い土器群と評価できる。出土遺物は、土師質土器・唐津・陶磁器があるが、ここでも土師質土器（かわらけ）が圧倒的多数を占める。土師質土器の構成をみると、上述したS K 3 における二者の共存が認められ、共伴する唐津碗・皿によって1600～1610年代という帰属年代が導き出される。

以上の記述から知れるように、これら3基の土坑状遺構はほぼ同時代の所産の可能性の高いものであり、各遺構で大量に出土している土師質土器をみても、相互に大きな隔絶を感じさせるものではない。現時点で指摘しえた土師質土器の二者については、同時期における2系統の製作主体の存在のみならず、器形による用途の別を示唆する可能性のあることも認識されよう。本章では漠然としか示せなかった土師質土器における二者については、各遺構での両者の組成比を定量的に把握し、更に異なる土器群の抽出等を試みたのちに、当該期の器種構成の様相として、改めて論ずべきものと考えられる。また、そうすることによってS K 3・5間の類似性や、3つの遺構間の相互関係（ともすると性格までも）が導き出され、そのことが近世初頭の「御台所屋敷」曲輪の性格・機能へと接近させるものとなろう。いずれにしても、肥前系陶器の伴出によって埋没年代が特定できる、当該期の数少ない一括遺物として、3基の土坑状遺構出土の土器群は慎重に扱われるべき資料といえよう。

註

- (1)武市佐市郎「高知公園史（續）」1931年（高知県教育委員会「史跡高知城跡 保存管理計画策定報告書」1982年 所収）
- (2)武市佐市郎著「高知公園史（續）」（註(1)文献）の明治7年7月の項には、公園整備に際して生じた割れ瓦・石等の搬出先について、「…舊御屋敷御門東脇南北之湟東西堤見通を限り、瓦石等捨場に御渡相成候は、…」という記録がみられる。
- (3)獅子の段（現在は「梅の段」として親しまれている）南西部分に相当する。この部分の瓦葺き堀は慶安4（1651）年7月の「高知城跡古図」（高知市民図書館蔵）をはじめとする古絵図に記載されており、明治6年の解体に至るまでは存在したことがしられる。
- (4)木戸雅寿氏の型式分類編年（木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会 1993年）によれば、Ⅲ類-a-2あるいはⅢ類-bとされるものであり、12～13世紀代という年代が導かれる。一方、木戸氏の年代比定に関しては他の器種との間に齟齬をきたすことも指摘されている。（中鉢賢治「石成遺跡出土の石鍋について」『研究所報』No.52 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994年）
- (5)村上伸之氏に御教示いただいた。
- (6)渡辺 誠「物資の流れ—江戸の焼塩壺—」『季刊考古学』第13号 雄山閣出版 1985年
渡辺 誠「焼塩壺」『江戸の食文化』吉川弘文館 1993年
- (7)村上伸之氏に御教示いただいた。
- (8)村上伸之氏に御教示いただいた。

土師質土器観察表 1

採集番号	出土地点	器形	法量 口径	(cm) 器高	底径	文様・調整	外面/内面	色調	外面/内面	備考
関7-1	1区・I層	坏	6.80	1.90	3.80	ヨコナデ?/ヨコナデ、木目圧痕		橙5YR6/6		手捏ね成形?
2	2	2	7.80	2.30	5.40	回転ナデ		にぶい橙7.5YR7/4		スス付者
3	3	3	9.20	2.20	6.40			橙5YR6/5		回転糸切り
4	4	4	10.20	2.30	6.60			浅黄橙7.5YR8/4		
5	5	5	9.80	2.00	6.80			にぶい橙7.5YR6/4		
6	6	II層	10.40	2.50	6.80			浅黄橙7.5YR8/3		
7	7	I層	9.70	1.80	6.00			橙5YR7/6		
8	8	8	10.80	2.20	6.80			橙7.5YR7/6		回転糸切り?
9	9	9	9.80	1.60	6.40	ヨコナデ?		浅黄橙7.5YR8/3/にぶい橙5YR7/4		スス付者
10	10	10	10.00	1.70	6.00	ヨコナデ?/回転ナデ?		淡橙5YR8/3/淡橙5YR8/4		回転糸切り+ナデ
11	11	11	11.30	2.10	7.40	回転ナデ		浅黄橙10YR8/4		回転糸切り、スス付者
12	12	12	13.80	1.60	8.00			にぶい橙7.5YR7/4		
13	13	13	13.00	1.80	9.00	ヨコナデ		橙5YR6/6		底面ナデ
14	14	14	11.80	1.80	8.00	回転ナデ?		にぶい黄橙10YR7/3		
15	15	15	13.80	2.00	10.20			浅黄橙7.5YR8/6		外面に指爪圧痕
16	16	16	13.60	2.20	10.00			にぶい黄橙10YR6/3		回転糸切り
17	17	坏?	17.00	(3.20)				橙7.5YR6/6		
18	18	皿?		(1.00)	6.00			浅黄橙10YR8/3		回転糸切り
19	19	19		(1.10)	8.00			にぶい黄橙7.5YR8/4		
20	20	20		(1.40)	10.00	ナデ/回転ナデ?		にぶい橙7.5YR7/4		底面ナデ
21	21	21		(1.90)	11.00	ヨコナデ?/回転ナデ?		にぶい橙5YR6/4/褐7.5YR4/3		
22	22	22		(2.80)	12.40	ナデ?		橙7.5YR6/8		
23	23	23	19.20	(5.60)		ミガキ/ヨコナデ		にぶい赤褐5YR5/4		火鉢に近似した胎土、スス付者
24	24	24		(3.60)		ヨコナデ/回転ナデ?		浅黄橙10YR8/4		焼塩漬に近似した胎土
25	25	25		(3.50)		ヨコナデ/回転ナデ?		褐7.5YR4/3/橙5YR6/6		(24)と同じ個体?
26	26	26	30.00	(4.30)		沈線2、ヘラ描き文、ヨコナデ/ヨコナデ		オリーブ黒5Y3/1/浅黄橙2.5Y7/3		
関20-143	関20-143	SD1 坏	12.60	(3.10)		回転ナデ		浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
関24-166	関24-166	SK1 皿	13.40	2.40	9.80			にぶい橙7.5YR7/4		
167	167	坏	16.60	4.50	8.20	回転ナデ、ミガキ?/回転ナデ		にぶい橙7.5YR7/3		底部ナデ・ミガキ
168	168	鉢?	14.00	(5.20)		沈線4条、ナデ/回転ナデ?		橙5YR7/2/灰褐7.5YR5/2		
関28-185	関28-185	SK2		(3.50)		回転ナデ?		にぶい橙7.5YR7/4		
関37-218	関37-218	皿区・II層 坏	10.30	2.70	5.60			にぶい黄橙10YR7/2/同10YR7/3		回転糸切り
219	219	I層	10.20	2.40	5.00			橙5YR7/6		内底面中央凹み、回転糸切り
220	220	II層	10.90	2.80	5.40			にぶい黄橙10YR7/4		
221	221	221	10.40	2.60	5.40			浅黄橙10YR8/3		
222	222	222	10.50	2.90	5.40			浅黄橙10YR8/3		
223	223	223	10.60	2.60	5.60			にぶい橙7.5YR7/3		
224	224	224	9.90	2.40	5.00			にぶい黄橙10YR7/2/褐灰10YR6/1		回転糸切り、灯明皿?
225	225	I層	10.60	3.90	5.80	回転ナデ/回転ナデ、斜位条線		にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り、底面に木目圧痕
226	226	皿層	11.00	2.50	5.20	回転ナデ		浅黄橙10YR8/4		回転糸切り、底面に植物基部圧痕
227	227	I層	7.00	1.80	4.80			浅黄橙10YR8/3		回転糸切り?
228	228	皿層	12.80	(3.60)		ナデ、指頭押圧		浅黄橙10YR8/4		
229	229	I層		(1.80)	5.80	回転ナデ		浅黄橙10YR8/3		回転糸切り
230	230	皿層		(1.50)	5.00			浅黄橙10YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
231	231	I層		(2.50)	4.80			浅黄橙10YR8/4		
232	232	皿層		(2.20)	6.00			にぶい黄橙10YR7/3		内底面中央凹み、回転糸切り
233	233	TR		(2.30)	6.00			黄橙7.5YR8/8		回転糸切り
234	234	皿層		(1.50)	4.80			にぶい黄橙10YR7/4		内底面中央凹み、回転糸切り
235	235	235		(2.20)	5.40			にぶい黄橙10YR7/3		
236	236	II層		(2.50)	8.00			浅黄橙7.5YR8/6		回転糸切り、底面に木目圧痕
237	237	皿層		(2.60)	4.80			浅黄橙7.5YR8/4/褐灰10YR5/1		回転糸切り
関38-238	関38-238	I層 皿	12.60	1.80	9.20			にぶい橙7.5YR7/4		
239	239	239	13.00	2.30				橙7.5YR7/4		スス付者(灯明皿?)
240	240	皿層	14.30	2.30	7.80			にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り
241	241	I層 坏?	10.20	(2.30)		回転ナデ/回転ナデ、縄目状圧痕		浅黄橙2.5Y7/4		
242	242	皿?	14.00	(2.20)		回転ナデ		にぶい橙7.5YR7/4		
243	243	皿層	10.80	(1.90)		回転ナデ/回転ナデ、縄目状圧痕		浅黄橙10YR8/4		
244	244	I層	11.00	(2.20)		回転ナデ		にぶい黄橙10YR7/4		
245	245	坏		(2.20)	6.60			にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り
246	246	皿層		(1.80)	5.40			浅黄橙7.5YR8/4		
247	247	I層		(1.50)	10.80			浅黄橙10YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
248	248	皿層		(2.40)	8.00			浅黄橙10YR8/4		回転糸切り
249	249	皿?		(1.90)	4.80			浅黄橙10YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
250	250	I層		(1.80)	6.80			にぶい橙7.5YR7/3		回転糸切り
251	251	251		(1.40)	6.00			にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り、底面に植物基部圧痕
252	252	252		(1.50)	5.60			にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り
253	253	皿層		(1.20)	6.40			浅黄橙10YR8/4/にぶい黄橙10YR6/3		内底面中央凹み、回転糸切り
254	254	I層		(0.70)	5.60			にぶい黄橙10YR7/3		
255	255	皿層		(1.10)	5.40			浅黄橙10YR8/3		回転糸切り
256	256	皿層		(1.50)	8.40			褐灰10YR5/1/にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り、底面に縄目状圧痕
257	257	257		(0.90)	4.20			にぶい黄橙10YR7/3		内底面中央凹み、回転糸切り
258	258	I層		(1.00)	5.00			橙5YR6/6		回転糸切り、底面に木目圧痕
259	259	TR 鉢?	27.00	(1.60)		ヨコナデ?/?		赤橙10R6/6		片鉢?
関43-291	関43-291	SD1 皿?	15.40	(1.80)		回転ナデ		にぶい橙7.5YR7/4		
292	292	292	15.80	(1.20)				灰白2.5YR/2		
293	293	坏?		(2.10)	9.80			浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
294	294	294		(1.30)	6.00	回転ナデ?		浅黄橙10YR8/4		
295	295	295		(1.80)	8.40			浅黄橙7.5YR8/4		
関45-298	関45-298	SK1	11.70	(3.10)				橙7.5YR6/6		
299	299	299	13.20	(2.60)				浅黄橙10YR8/3/同7.5YR8/4		
300	300	300		(2.30)	5.50					回転糸切り、P20出土片と接合
301	301	301		(1.80)	5.40			浅黄橙10YR8/4		回転糸切り
302	302	302		(1.80)	7.40			浅黄橙7.5YR8/4		
306	306	SK2		(1.90)	4.60			橙7.5YR7/6/にぶい橙7.5YR7/4		

土師質土器観察表 2

採掘番号	出土地点	器形	法量 (cm)			文様・調整	外面/内面	色調	外面/内面	備考	
			口径	器高	底径						
図48	307	皿区・SK3	坏	10.00	2.80	5.00	回転ナデ	浅黄橙10YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	308	〃	〃	10.10	2.70	5.40	〃	浅黄橙10YR8/4	〃		
	309	〃	〃	10.40	2.80	5.40	〃	にぶい橙7.5YR6/3	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑・赤変		
	310	〃	〃	10.00	2.90	5.00	〃	浅黄橙10YR8/3	内底面中央凹み、回転系切り+ナデ、黒斑		
	311	〃	〃	10.60	2.60	5.60	〃	にぶい黄橙10YR6/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑		
	312	〃	〃	10.20	2.50	4.80	〃	にぶい黄橙10YR7/4	〃		
	313	〃	〃	10.70	3.00	4.70	〃	にぶい橙7.5YR7/3	内底面中央凹み、回転系切り		
	314	〃	〃	10.60	2.90	6.10	〃	にぶい橙7.5YR7/4	〃		
	315	〃	〃	9.60	2.50	5.10	〃	浅黄橙7.5YR8/3	〃		
	316	〃	〃	10.30	2.60	5.80	〃	橙7.5YR7/6	静止系切り?		
	317	〃	〃	10.80	2.90	5.60	〃	浅黄橙7.5YR8/3	〃		
	318	〃	〃	11.00	2.60	5.40	〃	にぶい黄橙10YR6/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	319	〃	〃	10.60	3.40	5.70	〃	にぶい橙7.5YR7/3/浅黄橙7.5YR8/3	回転系切り、黒斑?		
	320	〃	〃	11.00	2.40	5.40	〃	にぶい黄橙10YR6/3	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑 (スズ?)		
	321	〃	〃	12.20	2.50	5.60	〃	にぶい黄橙10YR7/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑?		
	322	〃	〃	10.50	2.70	5.40	〃	にぶい黄橙10YR6/3	回転系切り、黒斑		
	323	〃	〃	10.60	2.70	5.00	〃?	浅黄橙10YR7/4	回転系切り+ナデ?		
	324	〃	〃	13.80	(2.40)		〃	にぶい橙7.5YR7/4	〃		
	325	〃	〃	12.00	(2.00)		〃	にぶい黄橙10YR6/4	〃		
	326	〃	〃	坏?	(2.90)		〃?	にぶい黄橙10YR6/4	〃		
図49	327	〃	〃	(2.70)	5.20	〃	浅黄橙10YR7/4	内底面中央凹み、回転系切り			
	328	〃	〃	(2.10)	4.40	〃?	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑			
	329	〃	〃	(1.60)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り			
	330	〃	〃	(2.00)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	〃			
	331	〃	〃	皿?	(1.80)	5.20	〃	浅黄橙10YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑		
	332	〃	〃	坏?	(2.00)	5.60	〃	にぶい橙7.5YR7/4/浅黄橙10YR8/4	回転系切り、黒斑?		
	333	〃	〃	〃	(1.70)	5.60	〃?	浅黄橙10YR8/4	回転系切り		
	334	〃	〃	〃	(1.60)	5.60	〃?	浅黄橙10YR8/4	回転系切り、黒斑?		
	335	〃	〃	皿?	(1.30)	5.40	〃	浅黄橙10YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	336	〃	〃	〃	(1.50)	5.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4/黒斑7.5YR3/1	回転系切り、黒斑?		
	337	〃	〃	〃	(1.50)	6.00	〃	浅黄橙10YR8/4	回転系切り		
	図51	345	〃	SK4	坏	11.40	2.90	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り	
		346	〃	〃	〃	10.20	3.00	4.50	にぶい橙7.5YR7/4	〃	
347		〃	〃	〃	11.60	3.10	5.40	浅黄橙7.5YR8/3	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑		
348		〃	〃	〃	10.60	2.50	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
349		〃	〃	〃	10.80	3.20	5.00	浅黄橙7.5YR8/3	回転系切り、黒斑?		
350		〃	〃	〃	10.40	2.80	5.00	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り		
351		〃	〃	〃	10.30	2.90	4.00	浅黄橙7.5YR8/3	内底面中央凹み、回転系切り		
352		〃	〃	〃	10.40	2.80	5.00	浅黄橙7.5YR8/3	〃		
353		〃	〃	〃	10.20	2.50	4.20	浅黄橙7.5YR8/3	〃		
354		〃	〃	〃	10.40	2.90	4.80	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
355		〃	〃	〃	10.20	2.40	5.00	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
356		〃	〃	〃	10.40	3.30	5.20	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑?		
357		〃	〃	〃	10.30	2.70	4.80	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
358		〃	〃	〃	10.00	2.80	4.80	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
359		〃	〃	〃	9.40	2.80	4.20	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
360		〃	〃	〃	10.60	2.90	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
361		〃	〃	〃	10.80	3.40	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
362		〃	〃	〃	9.80	2.90	5.40	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
図52		363	〃	〃	10.60	2.80	4.40	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り		
	364	〃	〃	9.80	2.90	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り			
	365	〃	〃	10.80	3.10	5.20	にぶい黄橙10YR7/4	回転系切り、黒斑?			
	366	〃	〃	10.50	2.70	4.60	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り			
	367	〃	〃	9.60	2.60	4.80	にぶい橙7.5YR7/3	内底面中央凹み、回転系切り			
	368	〃	〃	10.20	2.70	4.60	にぶい橙7.5YR7/3	回転系切り			
	369	〃	〃	10.60	3.20	5.60	にぶい橙5YR6/4	〃			
	370	〃	〃	11.40	2.60	6.20	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り			
	371	〃	〃	10.40	2.80	4.80	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り			
	372	〃	〃	11.00	2.70	4.80	浅黄橙7.5YR8/4	〃			
	373	〃	〃	10.60	2.80	4.60	にぶい黄橙7.5YR7/3	〃			
	374	〃	〃	11.10	3.30	4.60	にぶい橙7.5YR7/3	内底面中央凹み、回転系切り+板目圧痕			
	375	〃	〃	10.20	3.10	5.00	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り			
	376	〃	〃	11.40	2.70	5.60	にぶい黄橙10YR7/4	〃			
	377	〃	〃	10.80	2.70	5.00	浅黄橙7.5YR7/3	〃			
	378	〃	〃	9.80	3.40	4.80	にぶい黄橙10YR7/4	〃			
	379	〃	〃	11.60	2.70	5.40	にぶい黄橙10YR7/4	〃			
380	〃	〃	18.20	4.50	9.30	にぶい橙7.5YR7/3	内底面中央凹み、回転系切り				
図53	381	〃	〃	皿?	14.60	(2.20)		にぶい橙7.5YR7/4	〃		
	382	〃	〃	坏	(2.70)		〃	にぶい橙7.5YR7/4	回転系切り		
	383	〃	〃	〃?	(4.40)		〃	浅黄橙7.5YR7/3	〃		
	384	〃	〃	〃?	(2.10)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	385	〃	〃	〃?	(2.00)	4.40	〃	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
	386	〃	〃	〃?	(1.70)	5.00	〃	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り		
	387	〃	〃	〃	(2.30)	5.00	〃	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
	388	〃	〃	〃	(2.30)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	389	〃	〃	〃	(2.00)	4.40	〃	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
	390	〃	〃	〃	(2.10)	5.40	〃	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り、黒斑?		
	391	〃	〃	〃?	(1.80)	4.80	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	392	〃	〃	皿?	(1.30)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	〃		
	393	〃	〃	坏?	(1.50)	4.60	〃	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り		
	394	〃	〃	〃	(1.70)	4.40	〃	浅黄橙7.5YR8/4	回転系切り、黒斑?		
	395	〃	〃	〃	(2.60)	5.20	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り、黒斑?		
	396	〃	〃	皿?	(1.60)	5.00	〃	浅黄橙7.5YR8/4	内底面中央凹み、回転系切り		
	397	〃	〃	坏?	(2.20)	5.20	〃	にぶい黄橙10YR7/4	回転系切り		

土師質土器観察表 3

種別番号	出土地点	器形	法量 口径	(cm) 器高	底径	文様・調整	外面/内面	色調	外面/内面	備考
図53-398	Ⅲ区・SK4	坏?	—	(1.50)	5.60		回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り
399	〃	〃	—	(2.00)	6.00		〃	浅黄橙7.5YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
400	〃	皿?	—	(2.30)	7.80		〃	にぶい黄橙10YR7/4		回転糸切り、黒斑?
401	〃	〃	—	(1.70)	5.60		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃、〃?
402	〃	坏?	—	(1.90)	6.60		〃	にぶい黄橙10YR7/4		回転糸切り
図55-404	〃・SK5	〃	11.00	3.10	4.60		〃	浅黄橙7.5YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
405	〃	〃	11.40	2.90	5.20		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り、黒斑?
406	〃	〃	12.40	3.10	5.00		〃	にぶい黄橙10YR7/4		〃、〃?
407	〃	〃	11.30	3.30	5.20		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
408	〃	皿?	15.20	3.10	6.80		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
409	〃	坏	10.30	2.30	5.40		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
410	〃	皿?	13.80	(2.40)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/3		〃
411	〃	坏?	14.60	(4.00)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
412	〃	皿?	17.40	(2.30)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
413	〃	〃	13.00	3.40	6.60		〃	にぶい黄橙10YR7/4		高台状、内底面中央凹み、回転糸切り
414	〃	〃	13.40	2.20	7.00		〃	浅黄橙7.5YR8/3		内底面中央突出、回転糸切り
415	〃	〃	13.50	2.50	7.00		〃	にぶい橙7.5YR7/4		内底面中央凹み、回転糸切り
416	〃	〃	13.60	3.40	6.70		〃	にぶい橙7.5YR7/3		高台状、内底面中央突出、回転糸切り
417	〃	〃	13.20	2.90	6.80		〃	にぶい黄橙10YR7/2		高台状、内底面中央凹み、回転糸切り、黒斑?
418	〃	〃	14.40	2.60	7.00		〃	にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り
419	〃	〃	13.20	2.70	7.00		〃	にぶい橙7.5YR6/4		〃
図56-420	〃	坏?	—	(2.30)	4.20		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り、黒斑
421	〃	〃	—	(1.80)	4.40		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
422	〃	〃	—	(2.20)	4.60		〃	にぶい黄橙10YR7/4		内底面中央凹み、回転糸切り、黒斑
423	〃	〃	—	(1.60)	4.80		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
424	〃	皿?	—	(1.70)	4.80		〃	浅黄橙7.5YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
425	〃	〃	—	(1.30)	4.20		〃	にぶい橙7.5YR6/4/浅黄橙7.5YR8/4		〃
426	〃	〃	—	(1.70)	5.60		〃	橙5YR6/6		回転糸切り、板目圧痕
427	〃	〃	—	(1.30)	6.40		〃	橙7.5YR6/6		回転糸切り
428	〃	坏?	—	(2.30)	7.00		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
429	〃	皿?	—	(1.80)	6.40		〃	浅黄橙7.5YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
430	〃	〃	—	(2.20)	8.50		〃	浅黄橙7.5YR8/4		回転糸切り
431	〃	〃	—	(2.40)	8.20		〃	浅黄橙7.5YR8/4		内底面中央凹み、回転糸切り
図58-435	〃・P1	〃	15.80	(2.30)	—		〃	淡黄2.5YR3		〃
436	〃・P2	坏	—	(2.50)	7.40		〃	浅黄橙10YR8/3		回転糸切り
437	〃	〃	—	(1.10)	5.00		〃	浅黄橙10YR8/3		〃
438	〃・P3	〃	10.40	(1.80)	—		ナデ	浅黄橙10YR8/3		手捏ね成形?
439	〃・P4	皿	15.40	2.50	11.00		回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/3		回転糸切り+ナデ
440	〃	〃	19.00	2.60	14.00		〃	にぶい橙7.5YR7/3		回転糸切り+沈澱状圧痕
441	〃・P5	坏	—	(2.70)	—		〃	浅黄橙10YR8/4		〃
442	〃・P6	〃	12.20	4.20	6.40		〃	浅黄橙7.5YR8/4/橙7.5YR7/6		回転糸切り
443	〃	〃	12.30	3.40	7.20		〃	にぶい黄橙10YR5/3		〃
444	〃	〃	15.80	4.30	9.60		〃	橙5YR7/6		回転糸切り、底面中心に小孔1・外周に指頭押圧4
445	〃	〃	11.80	(2.60)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
446	〃	〃	—	(1.80)	5.00		〃	浅黄橙7.5YR8/6		〃
447	〃	〃	—	(2.60)	7.00		〃	にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り+植物基部圧痕、スス付着
448	〃	〃	—	(1.50)	5.60		〃	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り+沈澱状圧痕2
449	〃	〃	—	(2.20)	7.00		〃	にぶい黄橙10YR7/4		回転糸切り
450	〃・P7	〃	15.00	2.50	—		〃	橙5YR6/6		〃
451	〃・P8	〃	10.20	3.20	3.80		〃	橙7.5YR7/6/橙5YR6/6		回転糸切り+ナデ
452	〃・P9	〃	—	(1.80)	4.40		〃	にぶい橙7.5YR7/3		回転糸切り
454	〃・P11	〃	—	(2.10)	5.40		〃	にぶい橙7.5YR6/4/黒褐7.5YR3/1		底面に沈澱状圧痕、黒色箇所・タール(灯明?)
455	〃	〃	—	(1.80)	6.20		〃	浅黄橙10YR8/4		回転糸切り
456	〃	〃	—	(1.40)	5.80		〃	にぶい橙7.5YR7/3		〃
図60-457	〃・P12	〃	14.00	(3.10)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/4/橙7.5YR7/6		〃
459	〃・P14	〃	—	(2.60)	8.80		〃	橙5YR6/6		内底面にナデ、回転糸切り
460	〃・P15	〃	—	(1.70)	7.40		〃	浅黄橙10YR8/4		回転糸切り
461	〃	〃	10.00	(2.20)	—		〃	浅黄橙7.5YR8/4		〃
463	〃・P16	〃	12.60	3.75	8.00		〃	橙7.5YR6/6		内底面にナデ、回転糸切り、黒色箇所
464	〃	〃	—	(1.70)	8.00		〃	浅黄橙7.5YR8/6		回転糸切り、タール(スス?)付着
465	〃・P17	〃	12.60	4.10	7.80		〃	橙7.5YR6/6		回転糸切り、黒色箇所
466	〃・P18	〃	13.40	4.70	7.80		〃	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り+粘土貼付?(補修?)
467	〃・P19	〃	—	(2.20)	5.40		〃	浅黄橙10YR8/3		回転糸切り
468	〃・P20	〃	—	(3.20)	—		〃	灰NS//灰白10YR7/1		焼成不良の須患部?
469	〃	〃	—	(1.10)	7.80		〃	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り
470	〃・P21	皿?	—	(1.10)	4.80		〃	にぶい橙7.5YR7/3		〃
471	〃・P22	坏?	—	(1.80)	5.20		〃	浅黄橙10YR8/3		〃
472	〃	〃	12.40	(2.90)	—		〃	浅黄橙10YR8/3		〃
473	〃	〃	—	(1.50)	6.20		〃	浅黄橙10YR8/3		回転糸切り?
474	〃・P23	〃	15.60	(2.80)	—		回転ナデ、縄川圧痕/回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4		〃
475	〃	〃	14.80	4.50	8.20		〃	橙5YR7/6		焼け歪み(平面撚円形)、回転糸切り+板目圧痕
476	〃・P24	皿?	—	(1.00)	10.30		〃	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り?
図63-477	〃・P25	坏?	10.40	(2.70)	—		〃	にぶい黄橙10YR7/3		〃
478	〃	〃	10.60	(2.60)	—		〃	黒褐10YR3/1/褐7.5YR4/3		スス・タール付着
479	〃	〃	—	(1.60)	6.60		〃	にぶい黄橙10YR7/3		回転糸切り
483	〃・P27	皿?	—	(0.90)	4.80		〃	浅黄橙10YR8/4		内底面中央凹み、底面切り離し後回転ナデ?
485	〃・P29	坏?	—	(2.30)	8.10		〃	橙2.5YR6/8		〃
486	〃	皿?	—	(1.10)	6.50		回転ナデ?	にぶい橙7.5YR6/4		内底面中央凹み、回転糸切り
491	〃・P32	坏	—	(3.60)	—		?/ヨコナデ	にぶい橙7.5YR7/4		〃
493	〃・P34	〃	—	(1.30)	4.50		回転ナデ	にぶい橙7.5YR7/4		回転糸切り+植物基部圧痕
494	〃・P35	皿	11.00	(2.00)	—		〃	にぶい橙7.5YR7/4		〃
495	〃	〃	10.50	1.60	5.60		〃	浅黄橙7.5YR8/6		〃
496	〃	〃	—	(0.70)	6.40		ナデ?/回転ナデ?	にぶい橙7.5YR7/4		手捏ね成形、底面ナデ・指頭押圧
図76-508	Ⅲ区	坏?	8.80	(2.40)	—		回転ナデ、口縁部に凹線?/回転ナデ	にぶい黄橙10YR6/4		〃

須恵器・瓦質土器観察表

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量 (cm)			文様・調整	外面/内面	色調	外面/内面	備考
			口径	器高	底径					
図8-42	I区・I層	須恵器・甕		(5.70)	—	平行タタキ/同心円当て具痕	灰白12.5Y8/1			
〃-43	〃	〃	24.40	(2.10)	—	回転ナデ	灰N6/0		口縁部に自然釉、東播磨系	
図28-186	〃・SK2	瓦質土器・鍋	20.00	(5.00)	—	ナデ、指頭押圧/ナデ	灰5Y6/1		手捏ね成形、端面に細沈線	
図39-267	III区・I層	須恵器?	10.60	(1.70)	—	ヨコナデ	灰白5Y7/1			
〃-268	〃	瓦質土器・鍋?	16.60	(2.60)	—	ヨコハケ?/ナデ?	灰白5Y7/1			
〃-269	〃	〃	22.80	(2.80)	—	ヨコナデ、指頭押圧/ナデ、播目(幅2mm)	灰N6/1			
〃-270	〃	〃	21.00	(3.50)	—	指頭押圧、ナデ?/ヨコナデ、播目(幅1mm)	灰白7.5Y7/1		焼成不良	
〃-271	〃	〃	23.20	(5.60)	—	指頭押圧、ナデ?/ナデ、播目(幅1mm)	橙5YR7/6			
〃-272	〃・III層	〃	18.60	(4.10)	—	ナデ、指頭押圧/ナデ	灰5Y6/1			
〃-273	〃・I層	〃	20.60	(7.50)	—	指頭押圧、ナデ/ナデ	灰白5Y7/1		口縁部内面にスス付着	
〃-274	〃・II層	〃	31.80	(4.40)	—	ヨコナデ、指頭押圧/ヨコナデ	灰N5/0			
図45-303	〃・SK1	須恵器・甕?	7.40	(5.00)	—	ヨコナデ、指頭押圧/ナデ	灰5Y6/1		外面にタール付着	
図60-462	〃・P15	瓦質土器・播鉢	25.20	(7.60)	—	指頭押圧、ナデ/ナデ?、播目(5本/1.8cm)	灰白10Y7/1/同7.5Y7/1		表面に赤変部分	
図63-481	〃・P26	〃		(1.80)	7.20	ミガキ?/?	赤灰2.5YR6/1/灰5Y6/1		底面にスス・タール付着	
〃-482	〃	須恵器・皿?		(1.10)	13.00	回転ナデ?/回転ナデ	灰白5Y7/1		内底面きわめて平滑(靱に転用?)	
〃-492	〃・P33	瓦質土器・鍋	29.00	(4.10)	—	指頭押圧/ヨコナデ	灰白2.5Y7/1			

焼塩壺観察表

挿図番号	出土地点	器形	法量 (cm)			文様・調整	外面/内面	色調	外面/内面	備考
			口径	器高	底径					
図8-27	I区・I層	蓋	6.80	1.70	7.80	回転ナデ?/布目圧痕		橙5YR6/6		型成形?
〃-28	〃	〃	7.00	2.00	8.10	回転ナデ/布目圧痕		橙7.5YR6/8		
〃-29	〃	〃	6.00	1.70	7.00	回転ナデ?/布目圧痕		橙7.5YR6/6		型成形?
〃-30	〃	〃	—	(1.50)	—	回転ナデ?/布目圧痕		橙5YR6/6		型成形?
〃-31	〃	身	5.60	(4.50)	—	ミガキ?、指頭押圧/布目圧痕		橙7.5YR6/6		型成形?
〃-32	〃	〃	5.60	(4.00)	—	ナデ?/布目圧痕?、ナデ		橙7.5YR7/6		型成形?
〃-33	〃	〃	4.80	(2.60)	—	ナデ/縦方向平行条線		にぶい黄橙10YR7/4		型成形?
〃-34	〃	〃	(6.20)	(3.10)	—	ナデ/縦線圧痕?		橙5YR6/6		型成形?
〃-35	〃	〃	—	(2.20)	—	?/ナデ?		にぶい橙7.5YR6/4		型成形?
〃-36	〃	〃	—	(3.60)	—	隅丸方形区画内「伊織」銘、ナデ/ナデ		橙5YR6/6		型成形?
〃-37	〃	〃	—	(4.50)	—	隅丸方形区画、ナデ/布目圧痕?		橙5YR6/6		型成形?
〃-38	〃	〃	—	(4.00)	5.40	ナデ、指頭押圧痕/縄紐圧痕?、ナデ		浅黄橙7.5YR8/6		型成形?、底部は円形粘土板充填 底面糸切り?・指頭押圧痕
〃-39	〃	〃	—	(3.90)	6.80	ナデ?、ミガキ?/布目圧痕、ナデ?		にぶい黄橙10YR7/3/橙7.5YR6/6		型成形?、底面は指頭押圧
〃-40	〃	〃	—	(3.60)	4.60	ナデ?/ナデ		橙5YR6/6		型成形?、底面は指頭押圧痕・ナデ
〃-41	〃	〃	—	(2.70)	8.00	指頭押圧、ナデ/ナデ		橙5YR7/6		底部は粘土板充填?
図20-144	〃・SD1	〃	8.00	(5.10)	—	ナデ、指頭押圧		橙2.5YR6/6		手捏ね成形
図24-169	〃・SK1	蓋	7.50	2.00	7.80	回転ナデ/布目圧痕		橙7.5YR6/8		型成形
図39-260	III区・I層	〃	6.60	(1.90)	5.00	ヨコナデ/ヨコナデ、布目圧痕		橙7.5YR7/6		
〃-261	〃	身	5.40	8.20	5.60	指頭押圧、ナデ		にぶい橙5YR6/4		手捏ね成形、底面に木目圧痕
〃-262	〃	〃	5.00	8.90	—	?/ナデ、指頭押圧		にぶい橙2.5YR6/4/橙7.5Y6/6		手捏ね成形、底面に植物繊維圧痕
〃-263	〃	〃	6.00	(6.90)	—	ヨコナデ/ヨコナデ、指頭押圧、蓆目状圧痕		明赤灰2.5YR7/2/橙2.5YR6/6		手捏ね成形(型成形?)
図49-338	〃・SK3	蓋	6.40	1.90	—	ヨコナデ、指頭押圧		橙2.5YR6/8		手捏ね成形?
〃-339	〃	身	5.40	9.00	3.60	?/指頭押圧、ヨコナデ?		にぶい橙7.5YR7/4/赤橙10R6/6		手捏ね成形

陶器観察表

神岡番号	出土地点	器種・器形	法量 口径	(cm) 器高	底径	文様 (外面/内面)	色調	外面/内面 (断面)	備考
図9 49	I区・I層	灰釉・蓋	7.70	(1.70)	—	草花文? (鉄絵) /— (ロクロ目)	灰白5Y8/2/同2.5Y8/2 (同5Y8/2)		
◇ -50	◇	◇・碗	10.80	7.00	4.40	(ロクロ目) /—	灰白5Y7/2		高台部は無釉、貫入
◇ -51	◇	◇?・◇	10.20	6.60	4.80	?文 /—	灰7.5Y6/1/にふい楊7.5YR5/4 (にふい楊7.5YR5/4)		貫入、見込・高台部は無釉
◇ -52	◇	◇・◇	11.20	7.80	5.20	四方輝文? /—	明オリープ灰5G7/1 (同5G7/1)		貫入、高台外面に界線1、磁器?
◇ -53	◇	◇・◇	12.20	8.40	5.40	?文 /—	灰7.5Y6/1 (にふい楊7.5YR5/3)		貫入、高台外面に界線1
◇ -54	◇	◇・◇	12.70	8.50	5.20	— /—	浅黄5Y7/3 (灰白5Y8/1)		貫入、京焼系
◇ -55	◇	◇・◇	12.00	(5.90)	—	唐草文、?文 (鉄絵) / (ロクロ目)	明緑灰7.5G8/1 (同7.5G8/1)		貫入
◇ -56	◇	◇?・◇	11.60	(5.80)	—	草文?、帯線2 /—	灰白N7/1		磁器?
◇ -57	◇	◇・◇	—	(3.10)	6.30	— /—	灰白7.5Y7/2 (同2.5Y8/2)		貫入、見込部に砂粒附着、高台内無釉
◇ -58	◇	◇・鉄釉・蓋?	6.40	1.50	3.00	— /—	黒褐7.5YR3/2/にふい黄褐10YR6/3 (にふい黄褐10YR6/3)		上面のみ施釉、底面に回転糸切り痕
◇ -59	◇	◇	7.00	2.05	7.00	— /—	にふい橙5YR6/4/暗赤灰白2.5YR3/1		突出部以下の外面は無釉
◇ -60	◇	◇・鉄釉	—	(2.60)	(7.00)	ヘラ描き文 /—	暗オリープ5Y4/3/にふい黄橙10YR5/4 (灰白10Y7/1)		底部・内面は無釉
◇ -61	◇	◇・鉄釉	—	(1.70)	8.00	— /—	にふい黄橙10YR7/2/灰褐5YR4/2 (にふい黄橙10YR7/2)		底部外面は無釉
◇ -62	◇	◇・鉄釉	3.40	(4.30)	—	— /—	オリープ黄5Y6/3		貫入、口縁部内面・外面段部以下は無釉
◇ -63	◇	◇・把手	—	—	—	— /—	灰白10Y8/1 (同5Y8/2)		貫入
◇ -64	◇	◇・ひょうそく?	4.30	2.00	3.30	— /—	浅黄橙7.5YR8/4/浅黄7.5YR8/4 (灰白7.5YR8/1)		手捏ね成形?
◇ -65	◇	◇・鉄釉	—	(1.60)	9.20	— /—	灰白2.5Y8/1 (同2.5Y8/1)		蓋寄底、見込部に砂目痕2、高台内無釉
図10 66	◇	◇・摺鉢	35.00	(11.00)	—	口縁部凹線?4/口縁部凹線?2~3	赤褐10YR5/4/にふい赤褐2.5YR5/4 (明赤褐2.5YR5/6)		口縁部に内外面からの押圧箇所(注口?) 9本単位の摺目(3本/1cm)
◇ -67	◇	◇	33.60	(7.40)	—	口縁部凹線?2/口縁部凹線?1	にふい赤褐5YR5/4 (明赤褐2.5YR5/6)		9本単位以上の摺目(3本/1cm)
◇ -68	◇	◇	32.50	(11.30)	—	口縁部凹線?2/口縁部凹線?1	にふい赤褐2.5YR4/3 (明赤褐2.5YR5/6)		8本単位の摺目(3本/1cm)、口縁部内面に 刻印(ヘラ記号?)
◇ -69	◇	◇	33.00	(3.90)	—	口縁部凹線?2/口縁部凹線?1	赤橙10R6/6 (にふい赤褐2.5YR4/3)		8本単位の摺目(3本/1cm)
◇ -70	◇	◇	—	(5.20)	—	2重突帯状 /—	赤褐10R4/4 (橙2.5YR6/6)		8本単位以上の摺目(3本/1cm)
図11-71	◇	◇・鉄釉・壺	39.40	(11.20)	—	— / (ロクロ目)	にふい楊5YR4/4 (黄灰2.5Y6/1)		
◇ -72	◇	◇・鉄釉	—	(13.00)	22.20	— / (ロクロ目)	にふい赤褐2.5YR4/4		底部付近は無釉、内底面に砂目痕6、 (71)と同一形体?
図20-145	◇	◇・SD1 皿	11.80	(2.00)	—	— /—	にふい赤褐2.5YR4/4 (同2.5YR4/4)		口縁部にタール附着(灯明皿?)
◇ -146	◇	◇・◇	29.00	(6.60)	—	— / (自然釉)	明赤褐5YR5/6/にふい赤褐5YR4/4 (褐灰7.5YR6/1)		備前?
◇ -147	◇	◇・壺?	—	(8.80)	—	連続凹線 /—	にふい赤褐5YR4/3 (にふい橙5YR6/4)		備前?
図24-171	◇	◇・SK1 灰釉・碗	—	(3.10)	4.40	(ロクロ目) /—	灰白7.5Y7/2 (淡黄2.5Y8/3)		高台部無釉
◇ -172	◇	◇・◇	11.60	(2.30)	—	(口縁部のみ施釉) /—	灰白5Y7/2 (同5Y7/2)		内面に条線4本(幅1mm、4本/1cm)
◇ -173	◇	◇・大壺	66.00	(7.50)	—	(凹線状凹み3) /—	極暗赤褐2.5YR2/2 (灰褐5YR5/2)		傾き?、備前
図28-189	◇	◇・SK2 灰釉?・碗	—	(4.30)	4.60	(ロクロ目) /—	灰5Y6/1 (同5Y5/1)		貫入
◇ -190	◇	◇・◇	10.40	(2.40)	—	(体部下半無釉) /—	灰オリープ5Y4/2		肥前系?
◇ -191	◇	◇・鉄釉・片口鉢	14.40	11.00	7.20	(ロクロ目、体部下半無釉) /—	暗赤褐5YR3/2/黒褐5YR2/1		口縁部内面・高台部は無釉
◇ -192	◇	◇・◇	14.60	(4.40)	—	— /—	灰オリープ楊2.5Y3/3/暗褐10YR3/3 (黄灰2.5Y5/1)		口縁部内面は無釉
◇ -193	◇	◇・鉄釉	12.20	(4.00)	—	(ロクロ目) / (口縁部のみ 施釉、ロクロ目)	黄褐2.5Y5/4/にふい黄橙10YR6/4		
図40 275	III区・TR	蓋	18.20	(2.20)	—	— /—	灰黄2.5Y7/2		備前?
◇ 276	◇	◇・I層 灰釉・片口鉢	12.00	(2.80)	—	— /—	灰オリープ7.5Y6/2 (にふい黄褐10YR7/3)		貫入、瀬戸・美濃系
◇ 277	◇	◇・II層 灰釉?・碗?	—	(3.40)	4.00	鉄絵? /—	灰オリープ7.5Y6/2 (灰白7.5Y7/1)		見込に胎上目痕?、高台部は無釉
◇ -278	◇	◇・I層 鉄釉	—	(5.40)	6.00	(ロクロ目) / (無釉、ロクロ目)	褐灰10YR5/2/灰白5Y8/2 (灰白5Y8/2)		底面にササ?軸着
◇ -279	◇	◇・摺鉢	—	(3.00)	—	(凹線?2) / (凹線?2)	にふい赤褐2.5YR5/4 (同2.5YR5/4)		13本以上を単位とする摺目(3本/1cm)
◇ -280	◇	◇	—	(8.00)	—	(沈線?1) /—	にふい赤褐2.5YR5/3 (にふい橙5YR6/2)		備前?
◇ 288	◇	◇・大壺	39.40	(9.30)	—	(口縁部凹線3) /—	赤灰2.5YR4/2 (明赤褐2.5YR5/6)		摺目(幅3mm、) 備前
図49-340	◇	◇・SK3 灰釉・碗	11.20	(3.00)	—	— /—	にふい黄橙10YR6/3 (同10YR6/3)		唐津
◇ -341	◇	◇	—	(3.80)	4.00	— /—	にふい橙5YR6/4/明オリープ灰2.5G7/1 (にふい橙5YR6/4)		細かい貫入、高台内無釉、唐津
◇ -342	◇	◇	—	(2.80)	4.80	— /—	にふい橙5YR6/4/明オリープ灰5G7/1 (灰白7.5Y7/1)		細かい貫入、高台内無釉、唐津
◇ -343	◇	◇	11.60	3.70	3.90	— / 直線文 (鉄絵)	にふい橙5YR6/4/オリープ灰10Y5/2		見込に胎上目痕4、細かい貫入、高台内 無釉、唐津
◇ -344	◇	◇	13.80	(1.30)	—	— /—	にふい黄橙10YR6/3 (にふい黄橙10YR6/3)		唐津
図56-432	◇	◇・SK5 鉄釉・碗	11.00	6.50	4.00	— /—	にふい橙7.5YR7/4/黒褐2.5Y3/2		高台内無釉、唐津
◇ -433	◇	◇	—	(1.60)	4.80	— /—	にふい赤褐10YR6/3/灰オリープ5Y6/2		見込に砂目痕1、高台内無釉、唐津
◇ -434	◇	◇	14.00	(3.00)	—	— /—	暗赤褐5YR3/3 (灰白10Y7/1)		
図58-453	◇	◇・P10 灰釉・皿	3.60	(1.20)	—	— /—	暗オリープ5Y4/4/同5Y4/3		細かい貫入、唐津?
図63 484	◇	◇・P28 摺鉢	—	(7.00)	—	— /—	暗赤褐5YR3/3 (にふい赤褐5YR5/4)		1.5-1.8cm間隔の摺目3、備前?
◇ 488	◇	◇・P31 壺?	—	(1.00)	10.00	(横線圧痕?) /—	暗赤褐5YR3/3/赤褐2.5YR4/8 (赤褐2.5YR4/8)		備前?
◇ 489	◇	◇・摺鉢	—	(4.20)	—	— /—	暗赤褐5YR3/3 (にふい楊7.5YR6/3)		12本単位の摺目(12本/3.3cm)、備前?
図68 500	IV区・TR1	灰釉・壺?	—	(7.50)	13.30	縦位ヘラ描き文 / (無釉)	灰白2.5Y8/2 (同2.5Y8/2)		高台部は無釉、磁器?
◇ -501	◇	◇・TR2 摺鉢	—	(4.60)	27.20	— /—	灰赤2.5YR4/2 (明赤褐2.5YR5/6)		8本以上を単位とする摺目(12本/3.3cm)
◇ 502	◇	◇・TR3 鉄釉・皿?	—	(1.80)	4.60	— /—	にふい橙7.5YR6/4/灰黄褐10YR4/2 (灰黄褐10YR6/2)		備前?
図76-510	III区	壺	10.60	(5.90)	—	ヘラ描き曲線文(連続凹線?) /—	灰オリープ5Y6/2/灰黄褐10YR4/2		備前
◇ -511	◇	◇?	—	(10.10)	12.20	(底部付近に浅沈線1?) /—	黄灰2.5Y4/1/赤褐5YR4/6 (灰白5Y7/1)		底面に植物基部圧痕?、備前?
◇ -512	◇	◇?	—	(1.60)	7.60	— /—	黄灰2.5Y6/1 (灰5Y6/1)		高台内平滑(碗に転川?)・無釉、 備前?、須恵器?

磁器観察表 1

神田番号	出土地点	器種・器形	法量 口径 器高 底径	文様 (外面/内面)	高台内 (圈線/銘)	色調	外面/内面 (断面)	備考
図8 44	Ⅰ区・Ⅰ層	青磁・碗	13.00 (2.20)	/			緑灰7.5GY6/1	中国製
45	〃	〃・椀花皿	11.60 (1.80)	/線描き文			オリーフ灰10Y5/2 (灰オリーフ5Y6/2)	〃
46	〃	〃・皿?	(2.40) 5.60	/線描き文	一部施軸		灰オリーフ2.5Y5/2 (灰白N7/)	〃
PL.29 47	〃	〃・碗	(2.80)	鎮蓮弁文/ 線描き細蓮弁文			オリーフ灰5GY6/1 (灰N6/)	〃
48	〃	〃・鉢	(1.90) (4.50)	草花・蓮弁文/松竹梅文	(/ 「富貴長春」)		オリーフ灰2.5GY6/1 (灰白N8/)	〃
図12 73	〃	染付・蓋	9.00 (2.00)	葱絵・丸文			灰白5GY8/1 (灰白5GY8/1)	端部無軸、端部 内面沈線状凹み 内面白釉?
74	〃	〃・鉢	(3.90) (3.10)	/			明緑灰5GY7/1/灰白N8/0	貫入
75	〃	白磁・鉢	7.90 3.50 3.00	(ロクロ目) /			灰白5Y8/1	
76	〃	〃・猪口?	9.70 5.10 4.00	船文(ロクロ目) /			灰白7.5Y7/1	
77	〃	染付・碗	12.10 6.10 5.00	/唐草・四方禪文	/ [福]		緑灰5GY6/1/灰白7.5Y7/1	肥前系?
78	〃	染付青磁・鉢	11.40 6.00 4.60	和歌?・梅花文/松葉文、[] 字銘	/ [福]		灰白N8/0/明緑灰7.5GY8/1	肥前系
79	〃	染付・鉢	11.40 (5.00)	和歌?・梅花文/松葉文			明青灰10BG7/1 (灰白7.5Y8/1)	(79)と同一個 体?、肥前系
80	〃	〃・鉢	11.10 6.05 4.70	(ロクロ目) / 四方禪文			明緑灰7.5GY7/1/灰白10Y8/1 (灰白7.5Y7/1)	肥前系?
81	〃	染付青磁・鉢	9.80 5.20 5.40	筒文 /	/ ?		灰白N8/0	
82	〃	染付・鉢	12.00 6.10 4.70	(ロクロ目) / 四方禪・五弁花文 (コンニャク印判)	/ ?		緑灰7.5GY6/1/灰白5GY8/1	肥前系
83	〃	染付青磁・鉢	8.00 (3.10)	唐草文 /			灰白N8/0	貫入、肥前系?
84	〃	染付・鉢	10.80 (5.10)	牡丹唐草文 / 四方禪文			灰白N8/0	肥前系?
85	〃	〃・鉢	14.80 (3.20)	唐草文 / 四方禪文			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
86	〃	〃・鉢	(3.80)	花文 (コンニャク印判) /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
87	〃	〃・鉢	12.20 (5.00)	唐草・蓮弁文 / 四方禪文			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
88	〃	〃・鉢	11.80 (3.60)	帯線・梅花文 / 四方禪文			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
89	〃	〃・鉢	12.80 (3.90)	牡丹文? /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
90	〃	〃・鉢	11.60 (3.40)	変形字文? /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
91	〃	〃・鉢	11.60 (2.50)	/ 四方禪文			明緑灰10GY7/1/灰白N8/0 (灰白N8/0)	肥前系?
92	〃	染付青磁・鉢	7.80 (4.10)	花卉文 /			明緑灰10GY8/1 (灰白N8/0)	口縁部内面無軸
93	〃	染付・鉢	9.40 (6.30)	雲?・如盧頭文 /			灰白10Y8/1 (灰白10Y8/1)	
94	〃	〃・鉢	10.40 (2.80)	草花文 /			灰白5Y8/1	肥前系
95	〃	色絵・鉢	(3.70) 4.00	菊花・網目文 /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	貫入、肥前系?
図13 96	〃	染付・鉢	(5.70) 4.50	/ 四方禪?・五弁花文	/ [筒江] (二重方形枠)		緑灰7.5GY8/1 (灰白N8/0)	肥前系
97	〃	染付青磁・鉢	(5.00) 5.40	?文 / 五弁花文 (コンニャク印判)	1 / [福]		灰白5GY8/1	肥前系
98	〃	染付・鉢	(3.80) 5.80	波濤文 / 虫文	2 / [福] ? (方形枠)		灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃 ?
99	〃	〃・鉢	(3.40) 4.80	/ 五弁花文	/		緑灰7.5GY6/1/灰白N8/0	肥前系
100	〃	染付青磁・鉢	(3.70) 4.60	唐草・蓮弁文 / ?文	/ ?		灰白5GY8/1 (灰白5GY8/1)	
101	〃	染付・鉢	(3.50) 5.00	/ (無軸、ロクロ目)	/ ?		灰白5GY8/1/灰黄2.5Y7/2	
102	〃	白磁・鉢	(2.30) 6.00	?文 /	/		灰白N8/0	
103	〃	染付・鉢	6.90 2.20 2.70	草花文 /			明緑灰7.5GY8/1 (明緑灰7.5GY8/1)	
図14 104	〃	〃・小杯	13.00 3.60 7.60	蔓草文 / 花卉文	1 / ?		灰白5GY8/1	
105	〃	〃・皿	14.90 2.50 9.30	蔓草文 / 花卉文	1 / ?		灰白N8/0 (灰白N8/0)	
106	〃	〃・皿	10.60 (2.10)	変形字文? /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	貫入
107	〃	〃・輪花皿	14.20 3.30 6.20	/ 草文?	/ ?		灰白N8/0 (灰白N8/0)	口縁 (鉄軸)
108	〃	〃・輪花皿	9.50 2.30 5.60	菱文 / 葉文	/		灰白5GY8/1 (灰白5GY8/1)	
109	〃	〃・皿	9.60 (2.20)	蔓草文 / 四方禪文			灰白5Y8/1	肥前系?
110	〃	〃・鉢	(3.00)	唐草文 / 草花文			明青灰5B7/1 (灰白)	
111	〃	〃・輪花皿?	(2.70) 4.40	草花文 / 四方禪・五弁花文 (コンニャク印判)	1 / [福] (方形枠)		灰白5GY8/1 (灰白N8/0)	肥前系
112	〃	〃・皿	(1.70) 4.00	/ 五弁花文	/ [福] ? (二重方形枠)		明緑灰10GY7/1/灰白5GY8/1	肥前系
113	〃	染付青磁・鉢	(1.30) 4.80	?文 / 五弁花文	/		灰白N8/0 (灰白N8/0)	肥前系
114	〃	染付・鉢	(2.20) 3.60	松文? / 五弁花文	/ ?		灰白N8/0	〃 ?
115	〃	〃・鉢	(3.20) 8.00	?文 /	1 / ?		灰白2.5GY8/1	
116	〃	〃・鉢	(2.40) 4.20	草文 / 四方禪・花文	/		灰白5GY8/1	肥前系?
117	〃	〃・鉢	(2.20) 5.00	?文 / 水草文?	無軸		灰白5GY8/1 (灰白5GY8/1)	
118	〃	〃・鉢	(1.60) 8.00	/ 花文	/ [福] ? (二重方形枠)		灰白5GY8/1	
119	〃	〃・鉢	(1.90) 8.50	?文 / 十字花?・網目文	/ (蛇ノ目状)		灰白N8/0 (灰白N8/0)	
図15 120	〃	白磁?・紅皿	4.60 1.65 2.00	放射状条線 (口縁部以外無軸) /	無軸		灰白N8/0 (灰白N8/0)	型成形、肥前系?
121	〃	染付・猪口	5.20 (3.50)	松竹梅文 /			灰白N8/0 (灰白N8/0)	
122	〃	〃・猪口	(2.50) 3.60	草文 /	/		明緑灰7.5GY7/1	
123	〃	青磁・瓶?	7.80 (3.20)	/			明緑灰5GY7/1 (灰白7.5Y7/1)	
124	〃	染付・鉢	11.80 (5.40)	丸・幾何文? / (口縁部以外無軸)			灰白N8/0 (灰白N8/0)	
125	〃	白磁・瓶?	(4.30) 12.00	/	/ (胎上日装2)		灰白2.5Y8/1 (灰白2.5Y8/1)	
126	〃	青磁・鉢?	(3.40) 9.00	/ (無軸)	/ (蛇ノ目状)		明オリーフ灰5GY7/1/灰白2.5Y7/1 (明オリーフ灰5GY7/1)	
127	〃	〃・鉢	10.40 3.15 4.40	/ 四方禪・五弁花文 (コンニャク印判)			明オリーフ灰5GY7/1/灰白5GY8/1	肥前系
図20 148	〃・SD1	染付青磁・皿	(1.30) 3.80	唐草文 / 五弁花文	/ ?		灰白N8/0	〃
149	〃	染付・鉢	(2.80) 4.60	?文	1 / ?		灰白N8/0	
150	〃	〃・碗	(0.60)	?文	? / [福] (二重方形枠)		明緑灰7.5GY8/1 (灰白N8/0)	肥前系?
151	〃	〃・鉢						

磁器観察表 2

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量 (cm)			文様 (外面/内面)	高台内 (圈線/銘)	色調	外面/内面 (断面)	備考
			口径	器高	底径					
図24-174	I区・SK1	染付・碗	9.80	5.10	4.20	唐草文/亀?	/「サ」	灰白N8/0	能茶山焼	
〃 -175	〃	〃	10.60	2.40	5.00	粟路文?/	/?	灰白N8/0	肥前系?	
〃 -176	〃	〃	10.20	2.60	4.00	七宝繁文/四方標・?文	/?	灰白N8/0	〃?	
〃 -177	〃	青磁・〃	11.00	2.00	6.30	/	/?	明緑灰7.5GY8/1 (灰白N8/0)		
〃 -178	〃	染付青磁・〃		(2.30)	5.00	/五弁花文 (コンニャク印判?)	?/「福」 (二重方形枠)	オリープ灰2.5GY6/1 (灰白5Y8/1)	肥前系	
〃 -179	〃	色絵・〃		(1.50)	7.30	/丸・松竹梅・扇・雲・草花文 (プリント)	/	灰白N8/0 (灰白N8/0)	鹿児島?	
〃 -180	〃	白磁	2.60	(5.80)	-	(口縁部のみ施軸) / (布目E痕)		灰白N8/0		
PL.29-188	〃	青磁・碗		(3.40)	-	/陽刻文		オリープ灰10Y5/2 (灰白5Y8/2)	中国製	
図28-194	〃	染付?・蓋	9.40	(1.60)	-	丸文/		灰白N8/0 (灰白N8/0)	身受部無軸	
〃 -195	〃	染付・碗	9.80	4.50	3.20	菊花・網目文/菊花・網目文	/	灰白N8/0 (灰白N8/0)	肥前系?	
〃 -196	〃	〃		(2.90)	4.60	梅花・蓮弁文/	/?	灰白N8/0 (灰白N8/0)	〃?	
〃 -197	〃	赤絵・皿		(1.70)	-	斜格子内に梅花・蓮弁文/?文	/?	灰白N8/0 (灰白N8/0)		
〃 -198	〃	染付・〃		(2.20)	4.40	/?・五弁花文 (コンニャク印判)	/	明緑灰7.5GY7/1/灰白5Y8/1	肥前系	
〃 -199	〃	〃		(2.50)	8.70	唐草文/唐草文	1/?	灰白N8/0 (灰白N8/0)		
〃 -200	〃	〃		(2.10)	4.00	?・葉弁文/五弁花文 (コンニャク印判)	/	灰白5GY8/1	肥前系	
〃 -201	〃	〃		(2.40)	3.90	牡丹文/?五弁花文 (コンニャク印判)	/「福」 (二重方形枠)	灰白5GY8/1	〃	
図29-207	〃	SK3 色絵・〃	10.00	(2.00)	-	草花・四方標文/四方標文		灰白N8/0 (灰白N8/0)	肥前系?	
〃 -208	〃	白磁・猪口	5.60	3.05	2.10	/菱形文 (社章?)、 [「二十周年記念」 「土師新聞」 (金文字)]	/	灰白N8/0 (灰白N8/0)		
図40-281	Ⅲ区・Ⅲ層	染付・碗		(3.20)	-	唐草文/		灰白5GY8/1	中国製?	
〃 -282	〃	白磁?・瓶?	26.80	(2.00)	-	/ (口縁部に内線?)		灰白5Y8/1		
〃 -283	〃	I層 染付・碗	10.60	(2.90)	-	菊花・網目文/菊花・網目文		灰白N8/0	肥前系?	
〃 -284	〃	〃	14.60	(2.20)	-	/?文		灰白10Y8/1	〃	
〃 -285	〃	TR 〃	13.00	3.90	7.50	?文/草花・五弁花文 (コンニャク印判)	1/?銘	灰白10Y7/1	〃	
図43-296	〃	SD1 青磁・碗	16.20	(2.70)	-	帯線文/		灰オリープ5Y5/2/同5Y5/3	中国製	
PL.29-403	〃	SK4 〃		-	-	印花文? (陰刻) /		明緑灰10GY7/1 (灰白7.5Y8/1)	〃	
図60-458	〃	P13 〃	10.40	(1.90)	-	紙蓮弁文 (線描き) /		オリープ灰10Y5/2 (淡黄2.5Y8/3)	〃	
図68-497	Ⅴ区	染付青磁・猪口	11.20	(6.30)	-	/四方標文		明緑灰5GY7/1/灰白N7/0	ソバ猪口	
〃 -499	〃	TR1 青磁・碗	14.00	(4.50)	-	葉弁文 (線描き) /		緑灰7.5GY6/1 (灰黄2.5Y7/2)	中国製	
〃 -503	〃	染付・皿	9.20	2.10	3.60	唐草文/四方標・松竹梅文	1/「富」長	灰白N8/0 (灰白N8/0)	肥前系	
〃 -504	〃	〃		(5.00)	5.20	雲文/?五弁花文 (コンニャク印判)	1/「巳」	明青灰5GY7/1 (灰白N8/0)	〃	
〃 -505	〃	白磁・皿?		(2.00)	3.10	/		灰白5Y7/2 (灰白5Y8/1)	貫入	
図76-509	Ⅵ区	青磁・碗?		(1.75)	5.80	/		緑灰5GY6/1 (灰白N7/0)	中国製	
〃 -513	〃	白磁・碗		(2.90)	3.00	/		無軸	高台部無軸	
〃 -514	〃	染付・猪口	7.80	5.30	3.80	草文/?	/「宣明年製」	灰白N8/0	肥前系?	

土錘計測表

挿図番号	出土地点	法量 (cm)				(g)		色調	備考
		全長	全幅	全厚	孔径	重量			
図39-264	Ⅲ区・Ⅲ層	5.10	1.10	1.00	0.50	3.90	にぶい橙5YR7/4	土師質	
〃 -265	〃	(3.90)	1.20	1.20	0.40	4.60	淡赤橙2.5YR7/4	〃	
〃 -266	〃	(3.50)	1.30	1.10	0.60	3.20	にぶい赤橙7.5R5/3	〃	
図45-304	〃	4.60	1.30	1.20	0.40	5.30	赤橙10R6/6	〃	
〃 -305	〃	(3.60)	1.30	1.30	0.40	4.80	橙2.5YR6/6	〃	
図63-480	〃	(2.70)	1.00	1.00	0.40	2.10	赤橙10R6/8	〃	
〃 -487	〃	(3.40)	1.20	1.10	0.40	3.50	浅黄橙10YR8/3	〃	

土製品計測表

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量 (cm)			色調	備考
			全長	全幅	全厚		
図24-170	I区・SK1	窯道具・ハリ?	3.60	3.35	3.00	橙5YR6/6	一部面取り
図25-181a	〃・〃	火鉢	14.50	10.30	残高 16.80	明赤褐5YR5/6	厚さ1.1cmの板状粘土素材から成形
〃-181b	〃・〃	〃	12.20	11.80	残高 19.00	明赤褐5YR5/6	外面はミガキ、内底面にスス付着
図28-187	〃・SK2	瓦質獣面把手	4.70	6.40	2.50	灰N4/	獣面部はヘラ描き、釜の把手部か?
図63-490	Ⅲ区・P31	土製品	(5.10)	(2.20)	(1.70)	浅黄橙10YR8/4	鍋の突出部か?

石製品計測表

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量 (cm)			(g) 重量	石材	備考
			全長	全幅	全厚			
図20-152	I区・SD1	砥石	4.90	4.20	1.40	30	泥岩	
図40-286	Ⅲ区・I層	石硯	(15.20)	(6.00)	(1.50)	170	粘板岩	
〃-289	〃・Ⅲ層	石鍋	口径 (52.60)	残高 (10.70)	—	—	滑石	西北九州産

銭貨計測表

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量 (cm)			(g) 重量	材質	備考
			直径	孔径	全厚			
図15-128	I区・I層	銅銭・寛永通宝	2.45	0.60	0.10	2.6	銅	
〃-129	〃・〃	〃・〃	2.40	0.65	0.10	1.9	銅	
図43-297	Ⅲ区・SD1	銅銭・永楽通宝	2.50	0.60	0.10	2.4	銅	明銭?
図68-498	Ⅳ区	鉄銭?	2.25	0.60	0.10	1.8	鉄	銘文不明

金属製品計測表

挿図番号	出土地点	器種・器形	法量			(g)		材質	備考
			全長	(cm) 全幅	全厚	重量	重量		
図15-130	I区・I層	鉄釘	3.50	頭部幅	1.25	0.45	3.25	鉄	
図20-153	〃・SD1	鉄製品	3.90		0.50	0.35	4.20	鉄	釘?
〃-154	〃・〃	〃	4.30		0.70	0.60	4.00	鉄	
〃-155	〃・〃	〃	6.10		0.40	0.45	5.10	鉄	釘?
〃-156	〃・〃	〃	5.40		0.30	0.20	2.00	鉄	
図29-202	〃・SK2	鉄釘	15.40	頭部幅	1.35	0.55	25.00	鉄	五寸釘?
〃-203	〃・〃	〃	18.60	頭部幅	2.00	0.60	40.00	鉄	瓦釘?
〃-204	〃・〃	〃	20.40	頭部幅	2.05	0.70	55.00	鉄	瓦釘?
〃-205	〃・〃	〃	24.60	頭部幅	2.10	0.65	53.50	鉄	瓦釘?
〃-206	〃・〃	〃	20.50	頭部幅	1.95	0.60	55.00	鉄	瓦釘?
図40-287	Ⅲ区・Ⅲ層	煙管・雁首部	(4.40)	(3.20)		0.70	6.80	銅	火皿部径:0.7cm

軒丸瓦計測表

単位 (cm)

挿図番号	出土地点	主文様	直径	文様部径	珠文 数(個)	周縁			瓦当厚	色調	備考
						径	幅	高			
図16-131	I区・I層	三ツ葉柏文	16.60	12.80	—	1.90	0.40	1.90	灰白		
〃-132	〃・〃	三つ巴文(左巻)	17.00	13.20	9(16)	1.10	1.60	0.70	2.20	灰	瓦当裏面に弧線圧痕 丸瓦凹面に布目圧痕・横位条線
〃-133	〃・〃	三つ巴文(右巻)	16.00	11.80	6(12)	1.10	2.10	1.00	2.60	灰	丸瓦凹面に縦位条線・文様面に木目圧痕 一部銀化
〃-134	〃・〃	三つ巴文(右巻)	16.00	11.20	10(16)	1.20	2.10	0.70	2.30	灰	
〃-135	〃・〃	三つ巴文(左巻)	17.00	12.70	9(16)	1.20	2.10	0.60	2.20	灰	
図21-157	〃・SD1	三ツ葉柏文	15.60	11.60	—	—	2.00	1.00	2.50	灰	
〃-158	〃・〃	三ツ葉柏文	—	—	—	—	—	(2.90)	灰白		
〃-159	〃・〃	三つ巴文(左巻)	17.00	11.80	15	1.30	2.60	0.70	2.40	灰	文様面に木目圧痕
〃-160	〃・〃	三つ巴文(左巻)	17.60	13.20	9(11)	1.30	1.80	0.60	2.00	灰	
図26-182	〃・SK1	三つ巴文(右巻)	15.30	11.40	12	1.10	1.70	0.60	2.20	灰	丸瓦凹面に布目圧痕・瓦当面一部銀化
図30-209	〃・SK2	三つ巴文(左巻)	16.00	11.60	12	1.30	2.20	0.80	2.40	灰	丸瓦部に釘孔1、釘孔内に鉄片付着 表面一部銀化
〃-210	〃・〃	三つ巴文(左巻)	15.60	11.40	16	1.20	2.10	0.60	2.30	灰	文様面に木目圧痕・瓦当面一部銀化
〃-211	〃・〃	三つ巴文(右巻)	16.40	12.00	12	1.20	1.80	0.65	2.20	灰	
〃-212	〃・〃	三つ巴文(左巻)	15.20	11.00	12	1.40	2.00	0.50	2.00	灰	丸瓦凹面に布目圧痕・横位条線 表面一部銀化
図41-290	Ⅲ区・I層	三ツ葉柏文	16.30	12.00	—	—	2.30	0.80	3.00	灰	
図68-506	Ⅳ区・TR3	三つ巴文(左巻)	14.70	10.60	13	1.10	2.10	0.50	2.50	灰	文様面に布目圧痕・一部銀化
〃-507	Ⅳ区	三つ巴文(右巻)	15.90	12.40	9(12)	1.10	2.00	1.20	2.20	灰	文様面に布目・木目圧痕 瓦当面一部銀化
図76-515	Ⅵ区	三ツ葉柏文	16.20	11.90	—	—	2.15	0.90	2.70	灰	
〃-516	〃	三つ巴文(右巻)	15.90	11.90	12	1.20	2.10	1.10	2.70	灰	文様面に布目・木目圧痕 瓦当面・側面一部銀化
〃-517	〃	三つ巴文(左巻)	17.40	13.40	17	1.00	2.20	0.40	2.60	灰白	文様面に木目圧痕

軒平瓦計測表

挿図番号	出土地点	上文様	上弦幅	弦深	下弦幅	全厚	文様高	瓦当厚	周縁幅			周縁高	色調	備考	
									上	左	右				
図16-136	I区・I層	桃花・唐草文	(5.00)		(16.00)	2.13	3.20	1.90	0.90	0.80	-	0.46	灰	瓦当面に木目圧痕・一部銀化	
〃-137	〃	三つ巴・唐草文	19.00	(2.30)	17.80	1.53	2.90	1.50	1.10	0.50	-	0.50	灰	瓦当面に木目圧痕・一部銀化、切隅瓦?	
〃-138	〃	唐草文	(21.80)	2.60	(30.50)	1.93	2.20	2.20	0.70	0.70	3.80	0.39	灰白		
〃-139	〃	〃	(21.00)	2.50	(22.50)	1.83	2.60	1.50	1.30	1.10	3.80	0.45	灰	瓦当面に木目圧痕、平瓦凹面に(7)キ1筋、一部銀化	
図21-161	〃・SD1	〃	(15.00)		(5.00)	2.43	2.70		0.90			0.60	灰白	平瓦凸面に蓆目圧痕	
図30-213	〃・SK2	三つ巴・唐草文	(12.50)	(0.80)	(12.80)	1.73	2.60	1.50	1.05	0.80	-	0.40	暗灰	表面銀化あり、切隅瓦?	
〃-214	〃	唐草文	(14.00)		(12.50)	2.20	3.10	1.60	1.03	(1.10)	5.20	0.50	灰白		
〃-215	〃	〃	(19.50)	2.70	(19.50)	1.70	2.70	1.90	0.80	0.80	7.10	0.40	灰	平瓦凹面に横位条線1、平瓦部は一部銀化	
〃-216	〃	〃	(22.30)	2.40	(21.00)	1.90	3.00	2.00	0.80	1.10	5.80	0.30	灰	瓦当裏面に布目圧痕、瓦当面・平瓦凸面一部銀化	
図70-518	Ⅷ区	〃	(18.30)	2.30	(13.50)	1.90	3.40	2.00	1.30	0.60	4.80	-	0.50	灰白	

丸瓦計測表

挿図番号	出土地点	法量			色調	備考
		全長	全幅	全厚		
図16-140	I区・I層	(6.30)	(4.00)	1.70	橙	凹面に蓆目圧痕、凸面に沈線(?)1条
〃-141	〃	(14.50)	15.00	1.90	灰	凹面に縦位条線(圧痕)
図21-162	〃・SD1	(29.40)	16.20	2.30	灰	釘孔2、凹面に蓆目圧痕
〃-163	〃	(23.80)	16.20	2.30	灰	釘孔2、凹面に布目圧痕・斜位条線
図22-164	〃	(16.30)	15.75	2.00	灰	凹面に蓆目圧痕・横位条線
図26-183	〃・SK1	(17.50)	(16.30)	2.20	灰白	凹面に蓆目(布目?)圧痕
図30-217	〃・SK2	(27.20)	14.80	2.00	灰	釘孔2(酸化鉄付着)、凹面に布目圧痕 玉縁凸面に横位沈線1

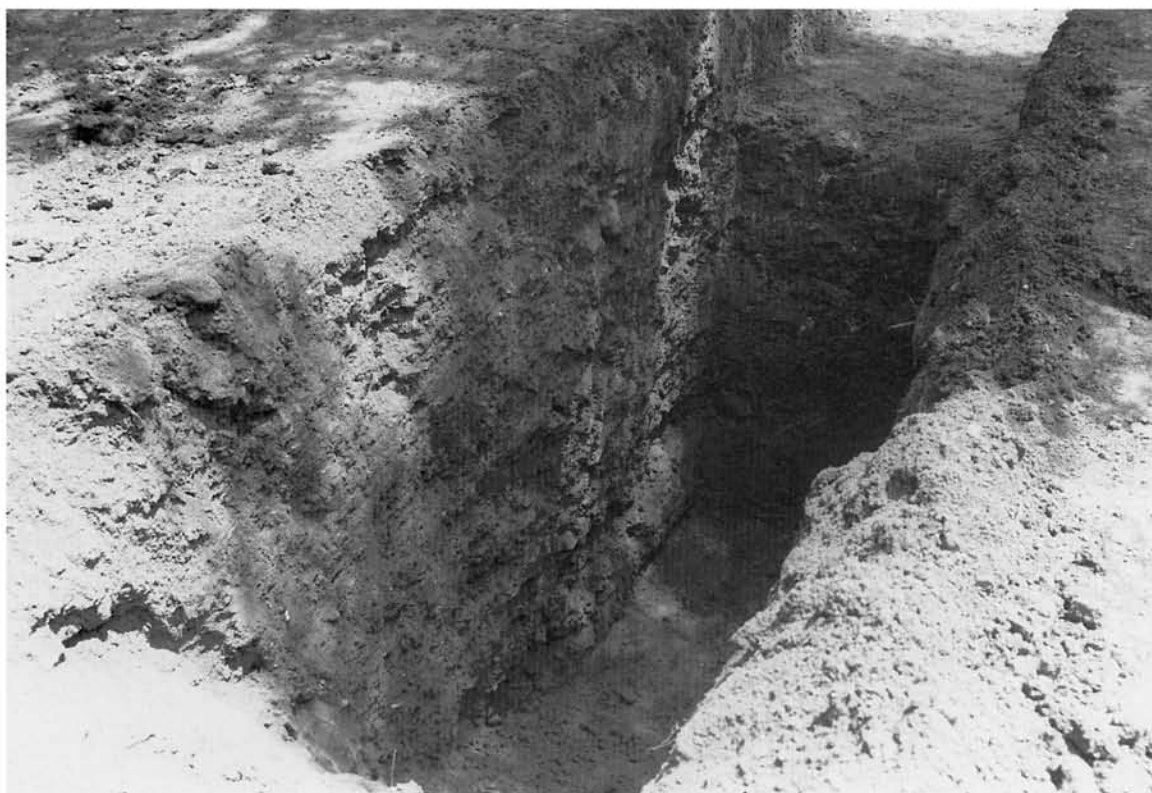
平瓦計測表

挿図番号	出土地点	法量			色調	備考
		全長	全幅	全厚		
図17-142	I区・I層	29.80	25.80	1.70	灰	表面一部銀化
図22-165	〃・SD1	(17.00)	26.20	2.20	灰	
図26-184	〃・SK1	26.00	(21.00)	1.60	灰	表面一部銀化

圖 版



I区調査前状況（南西より）



I区トレンチ北壁断面（南西より）



I区北半部遺構検出状況（南西より）



I区完掘状況（南より）



I区SX1礎石・石列状遺構（南より）



I区SD1検出状況（南より）



I区SD1完掘状況（南西より）



I区北半部完掘状況（南西より）



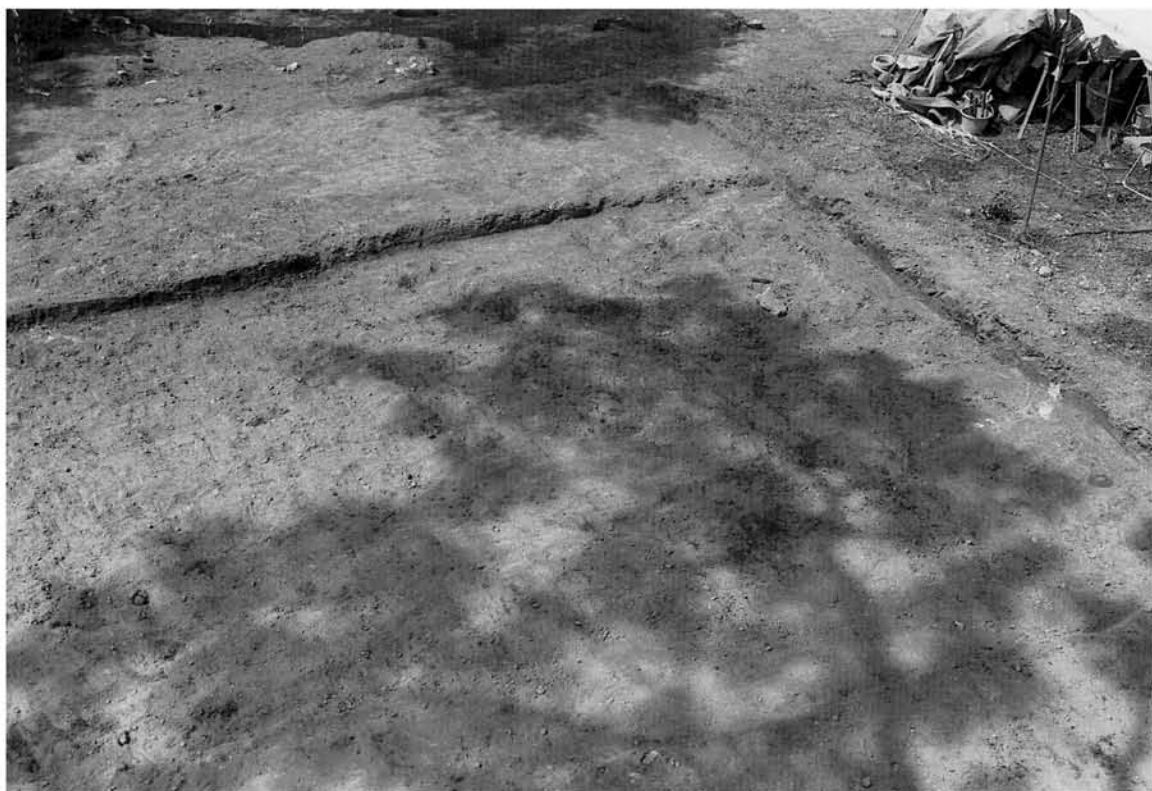
I区SK2半截土層断面（南より）



I区SK1完掘状況（西より）



I区SK3完掘状況（南より）



II区遺構検出状況（南西より）



Ⅲ区調査前状況（東より）



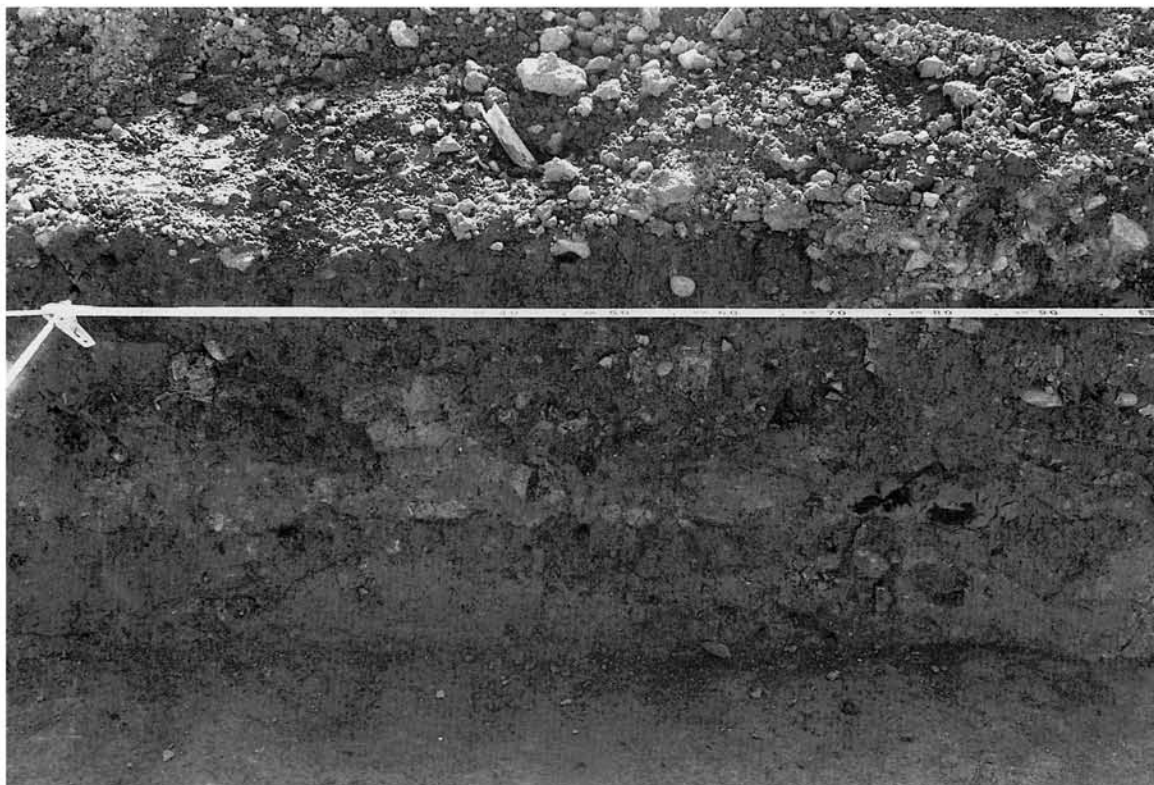
Ⅲ区完掘状況（東より）



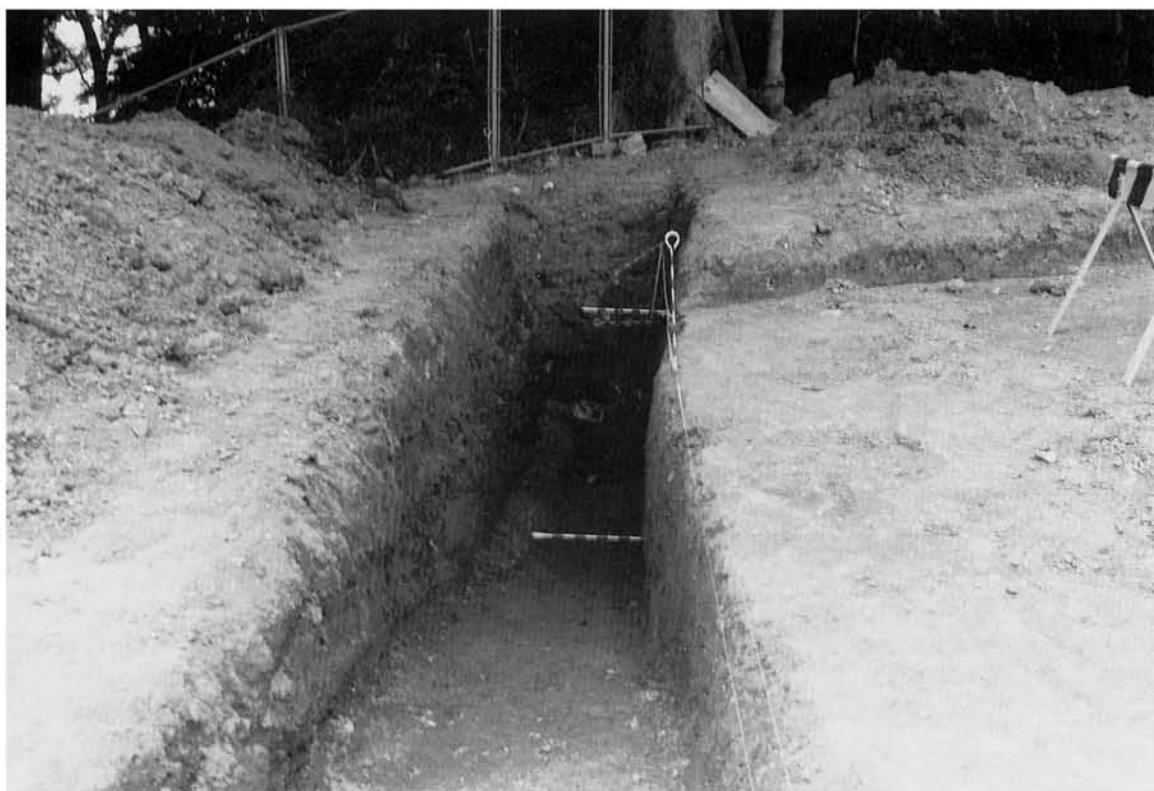
Ⅲ区遺構検出及び完掘状況（東より）



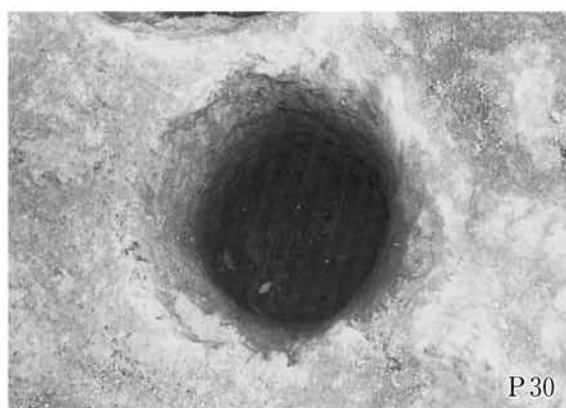
Ⅲ区完掘状況（北より）



Ⅲ区西壁土層断面（東より）



Ⅲ区北西部トレンチ（南より）



III区ピット状遺構及び遺物出土状況



III区SK3 遺物出土状況



III区SK3 遺物出土状況（東より）



同完掘状況（東より）



III区SK4・5 完掘状況（東より）



Ⅲ区S K 4 完掘状況（南東より）



Ⅲ区S K 5 完掘状況（南より）



IV区TR1 (南より)



IV区TR2~4 (南西より)



IV区TR 2 (南より)



IV区TR 3 (南より)



IV区TR4 (南より)



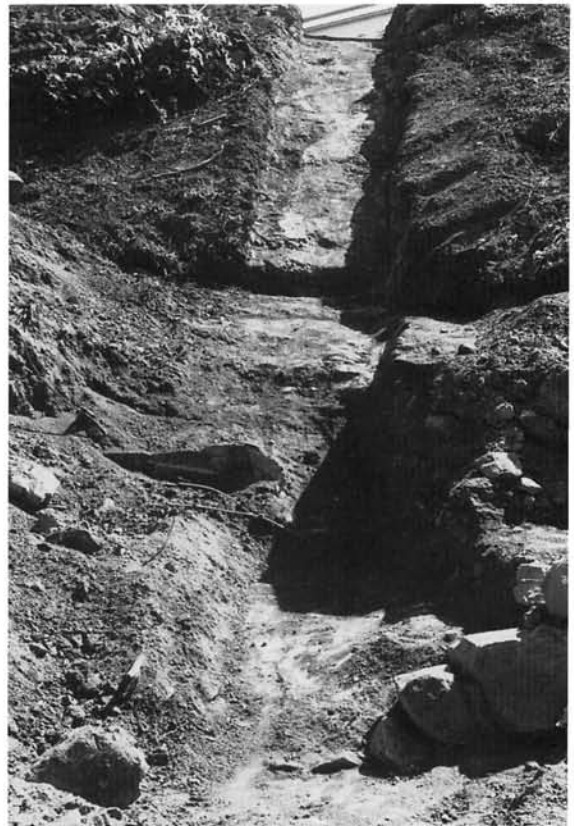
V区TR1 (北東より)



V区TR2 (北より)



VI区TR1 (西より)



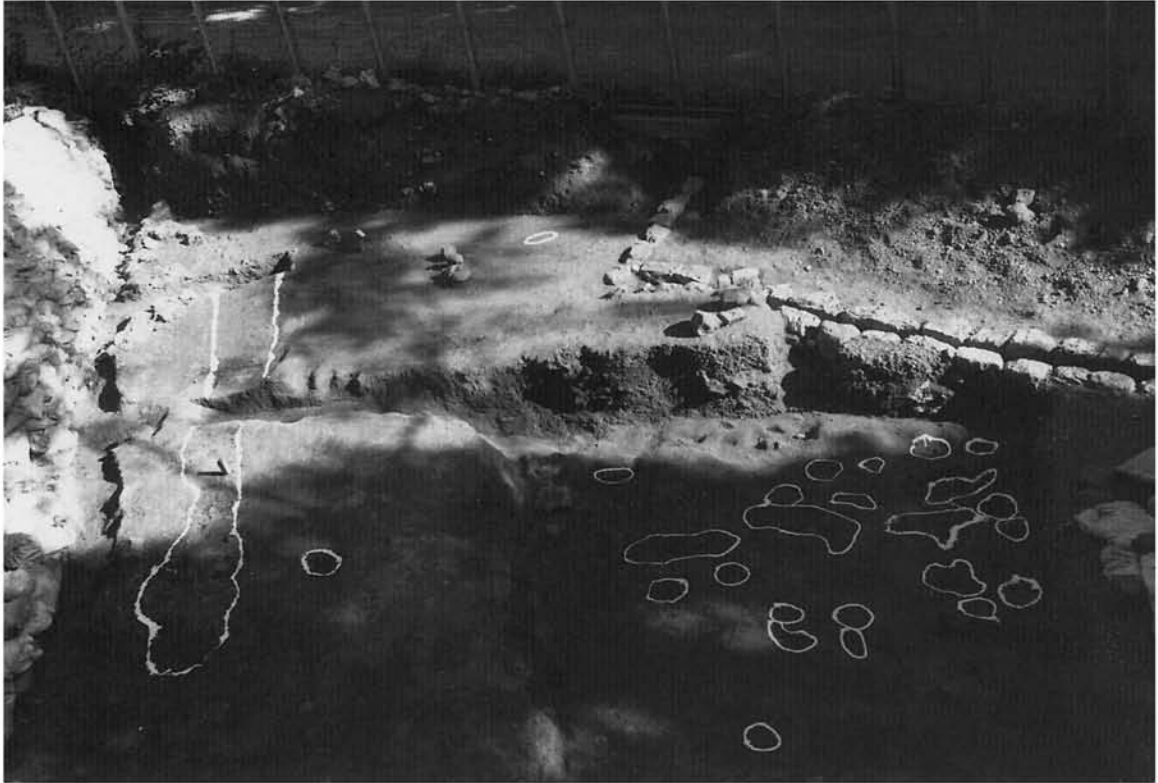
VI区TR2 (西より)



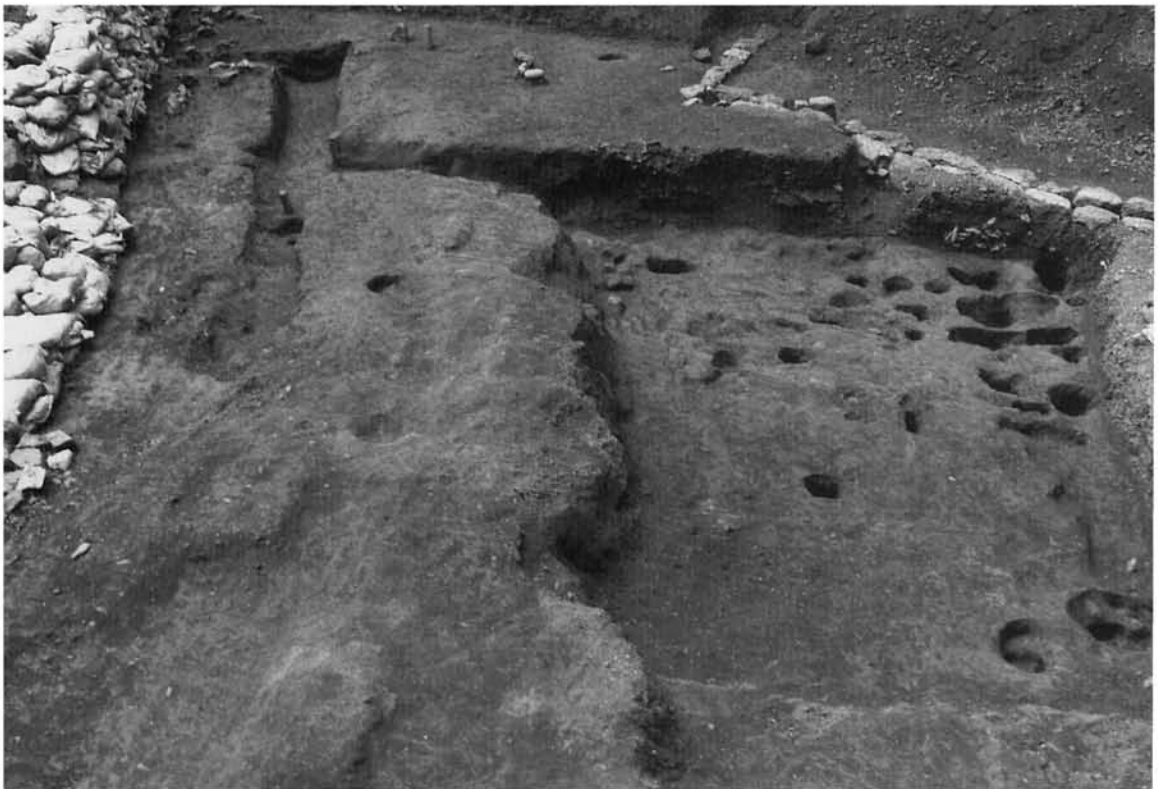
VI区TR1 下半部南壁土層断面（北より）



VI区TR2 下端部南壁土層断面（北より）



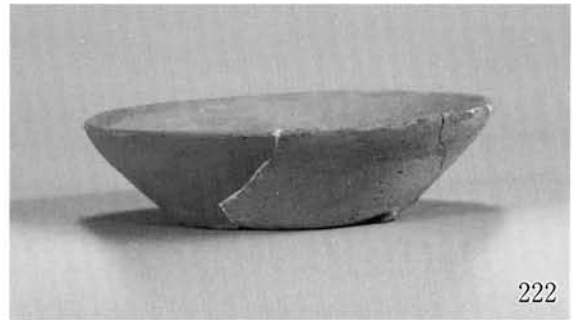
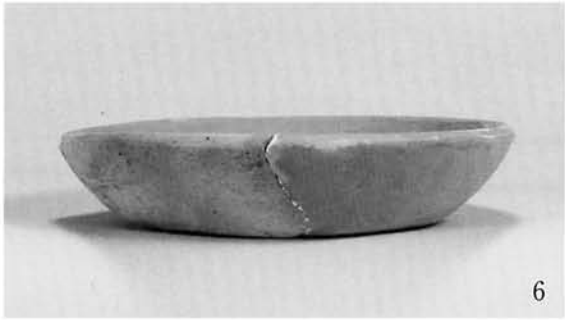
VII区遺構検出状況（北より）

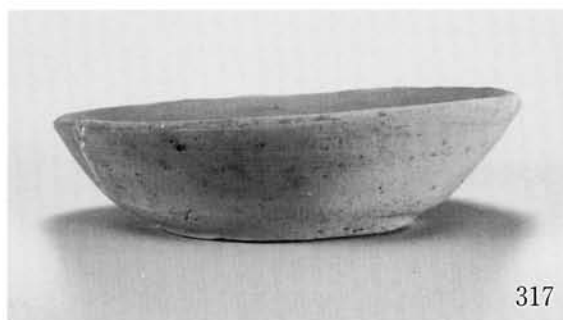
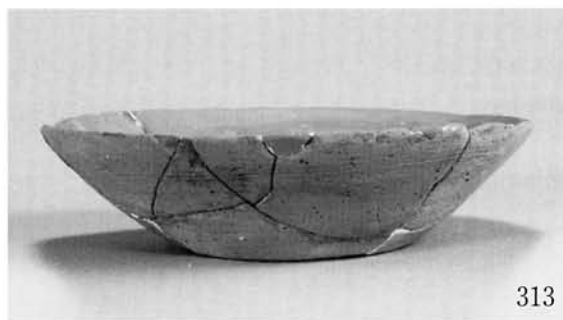
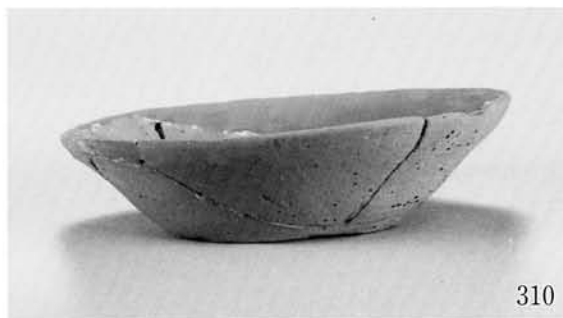


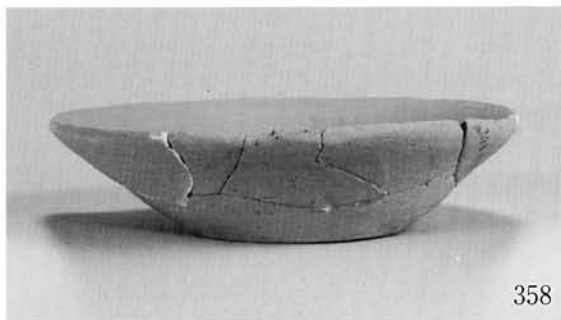
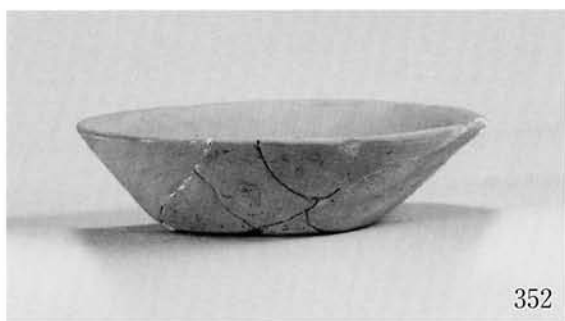
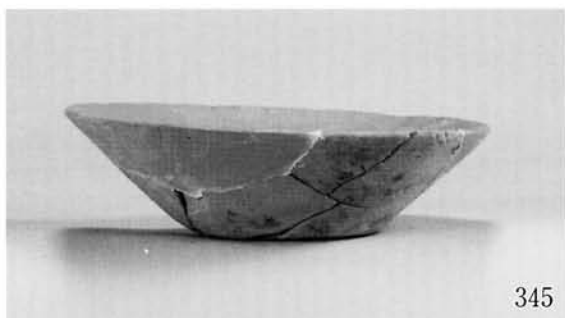
VII区完掘状況（北より）

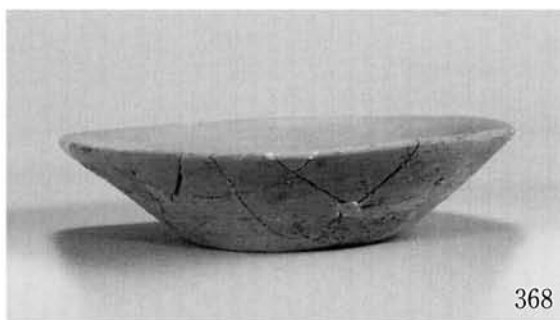
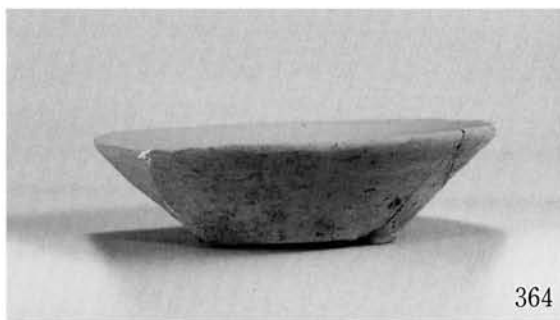
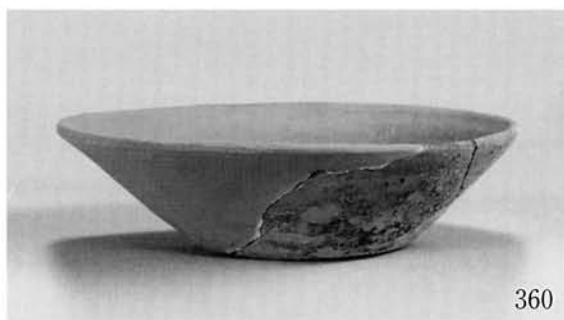


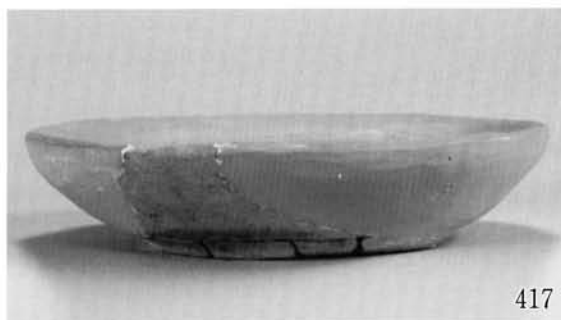
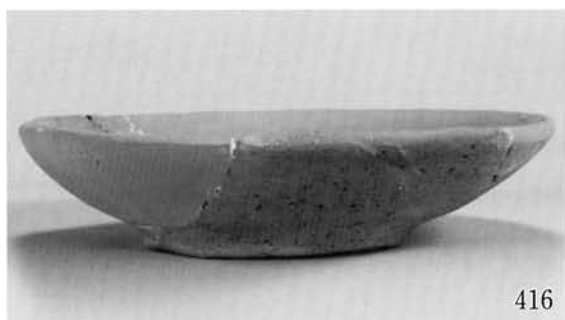
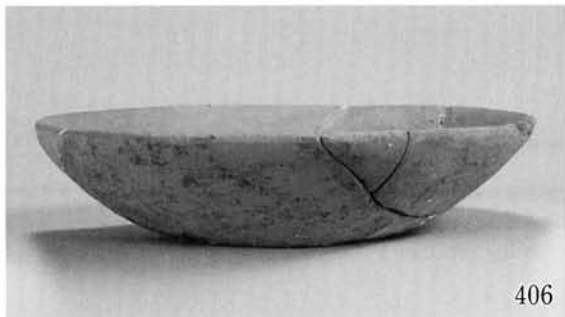
Ⅶ区S D 1 完掘状況

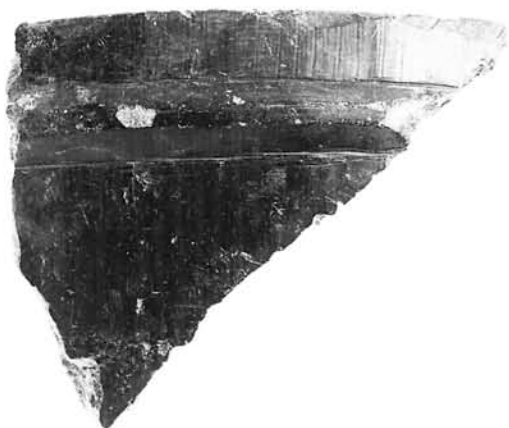
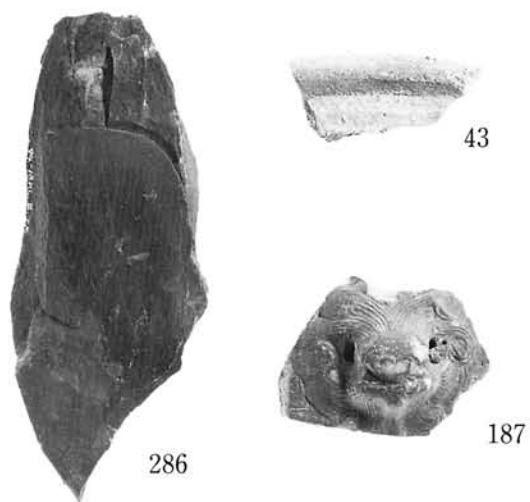
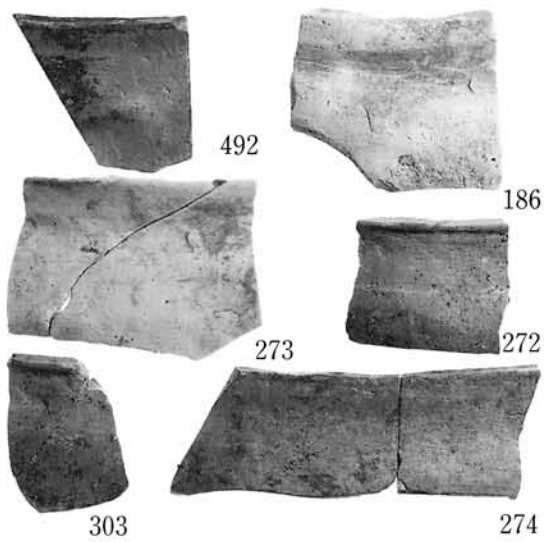








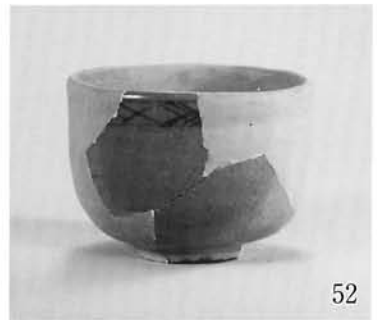
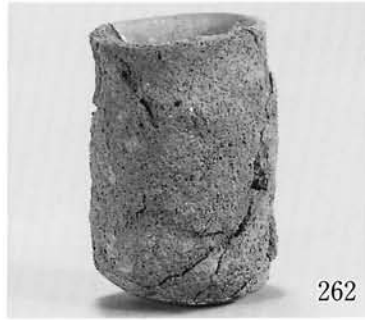
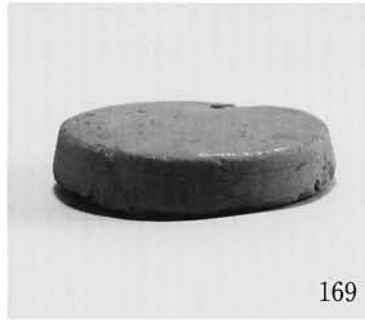


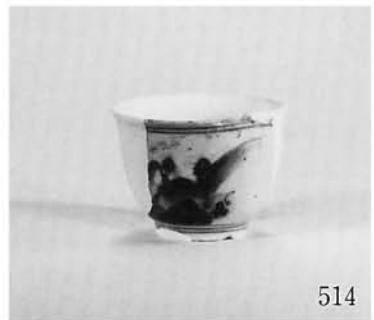
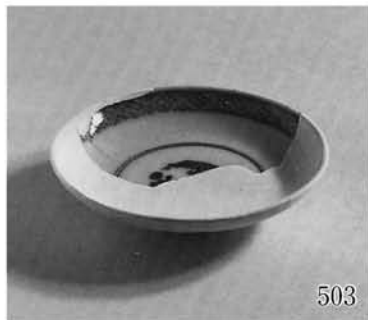
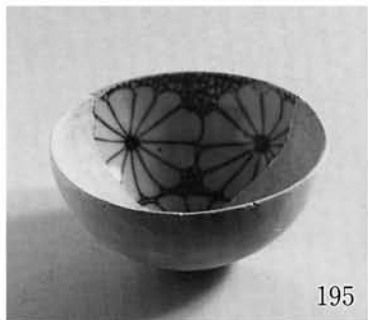
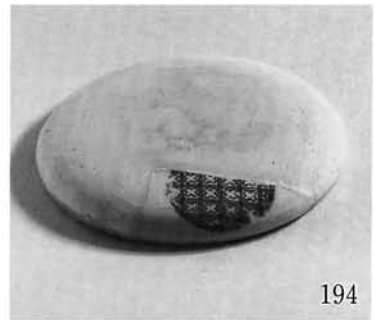
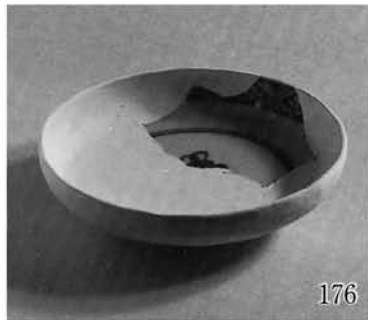
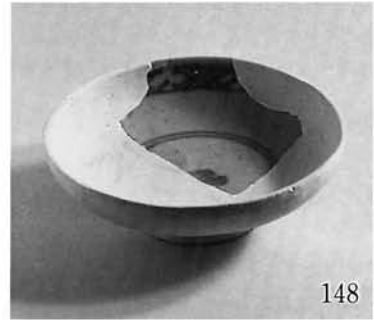
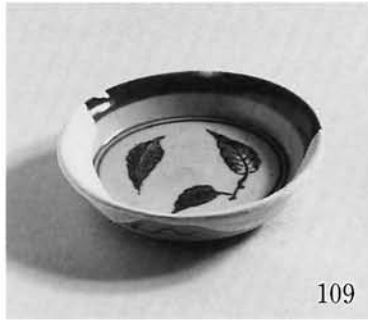
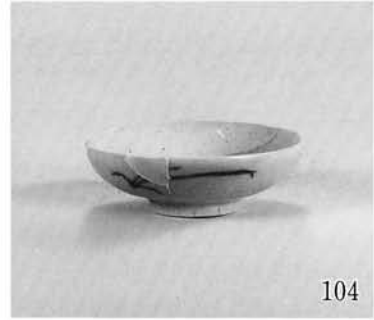
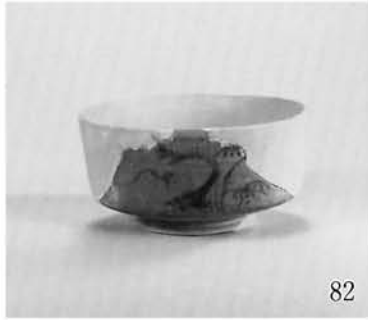
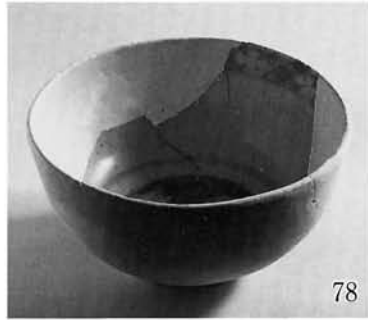
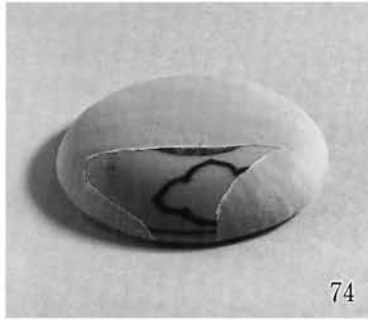


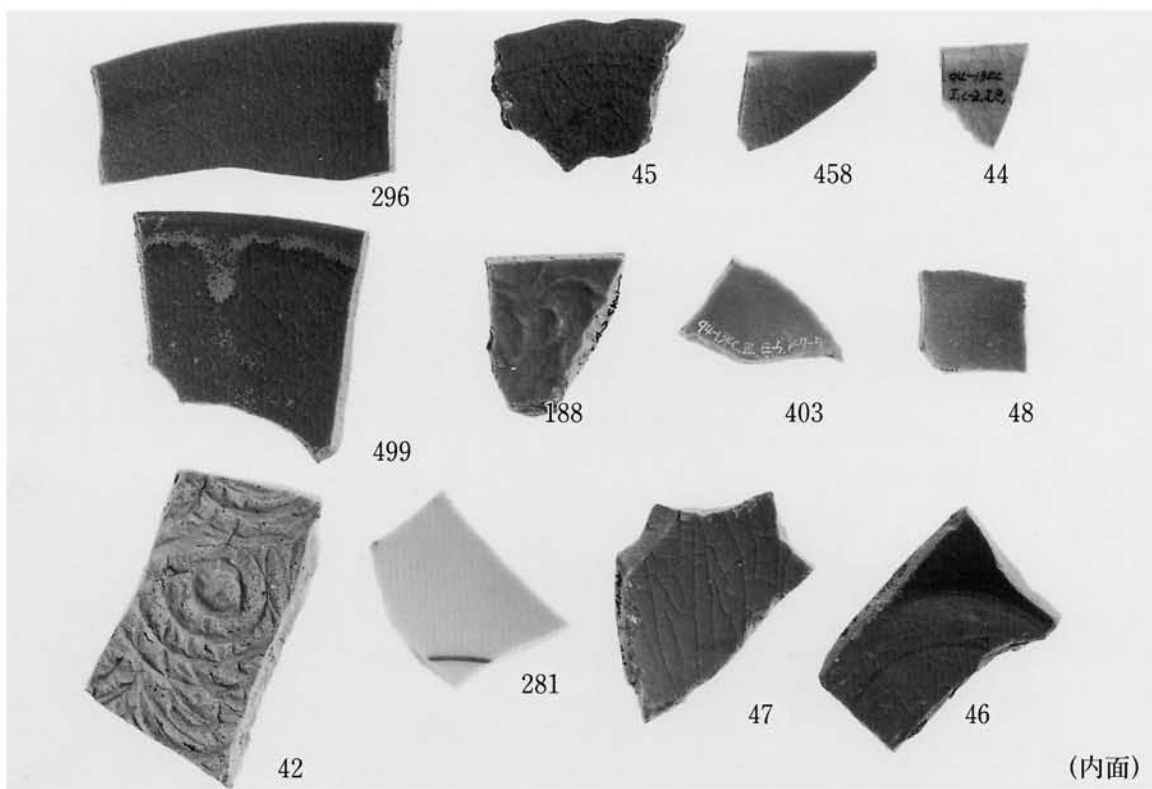
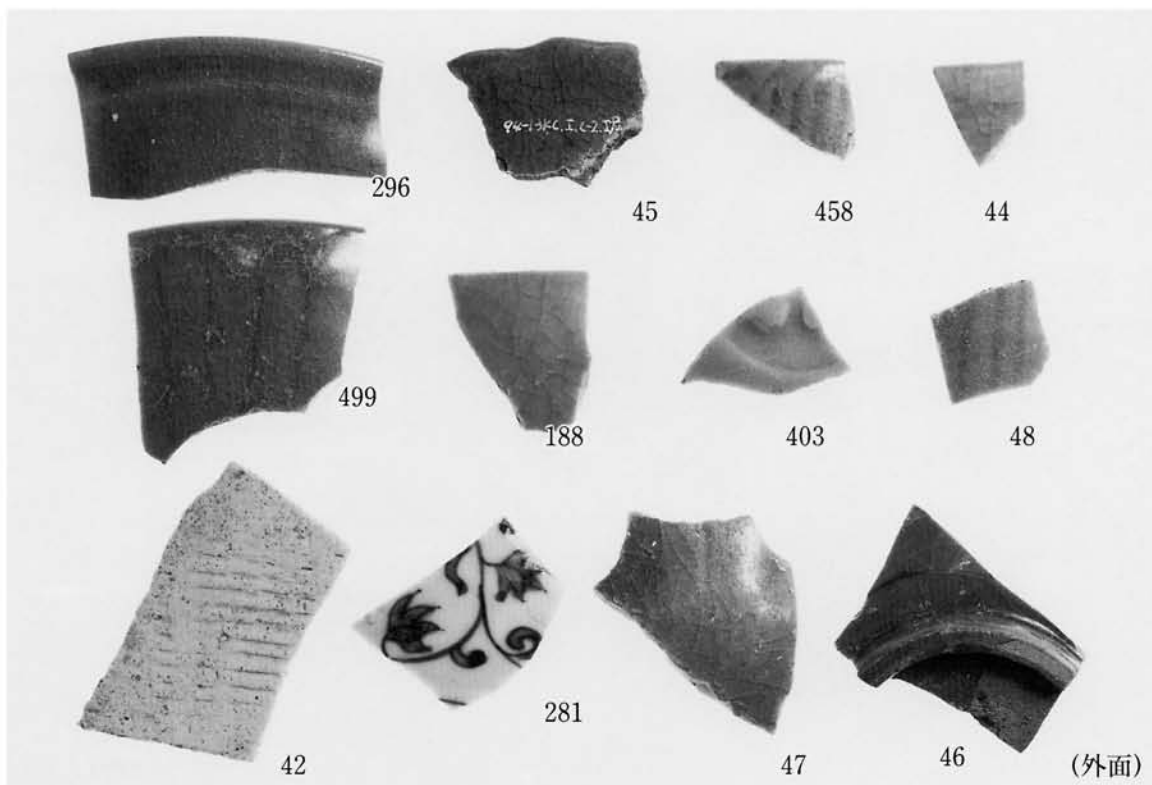
289(外面)

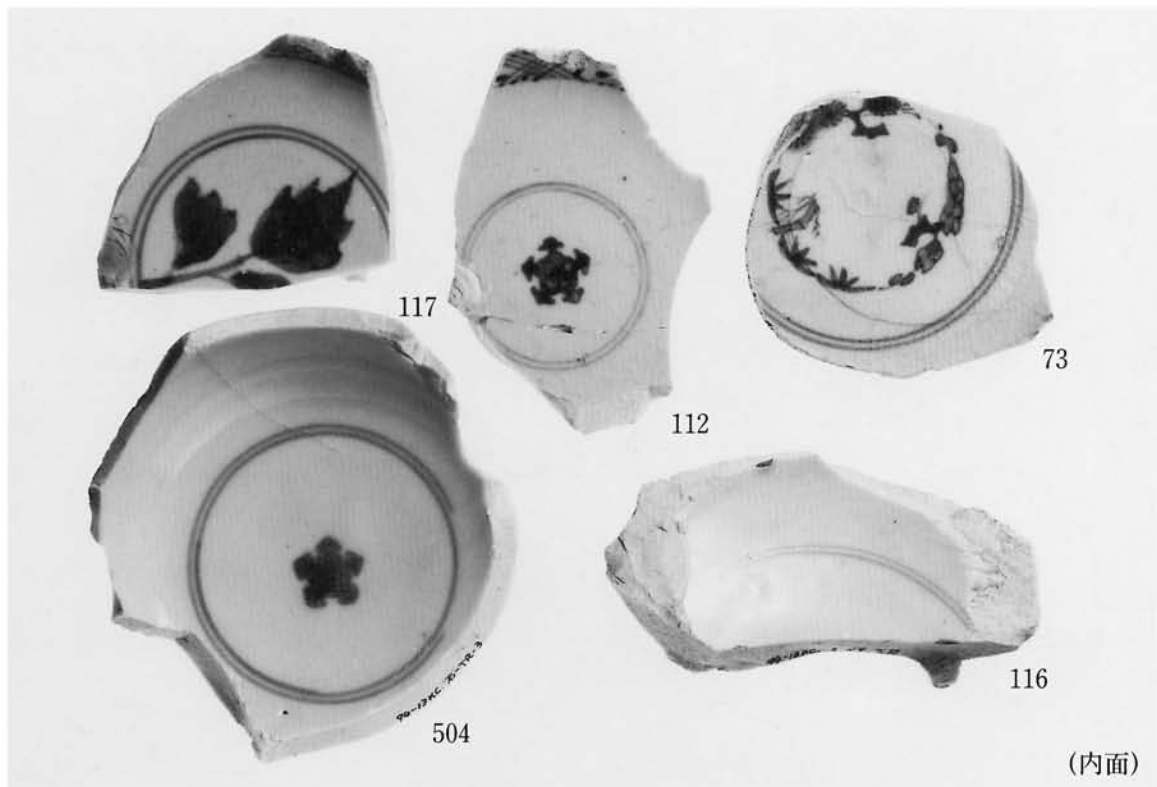
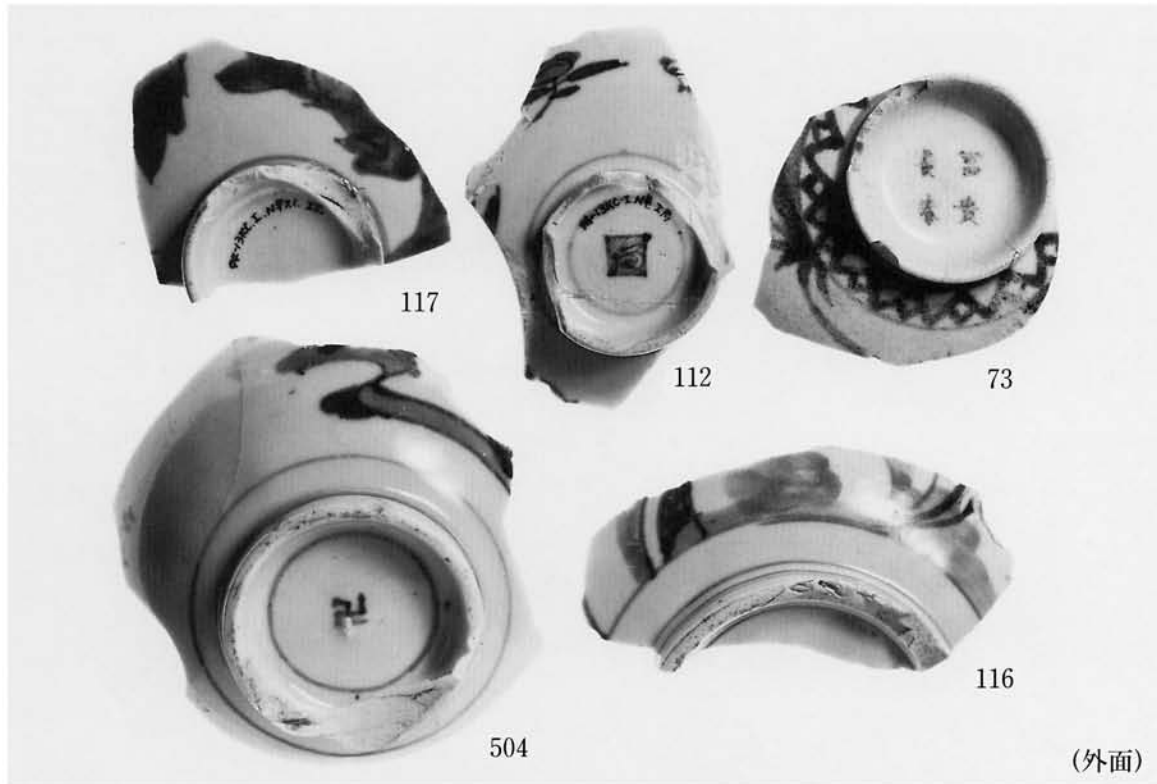


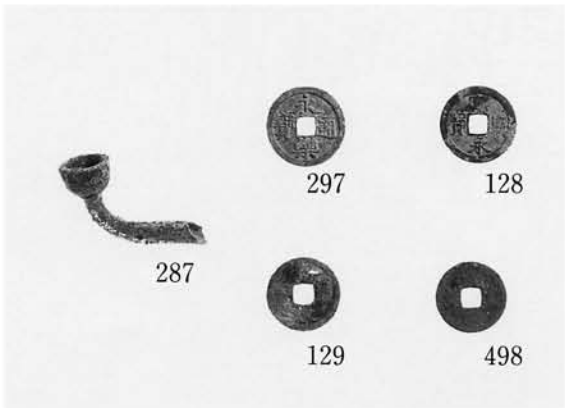
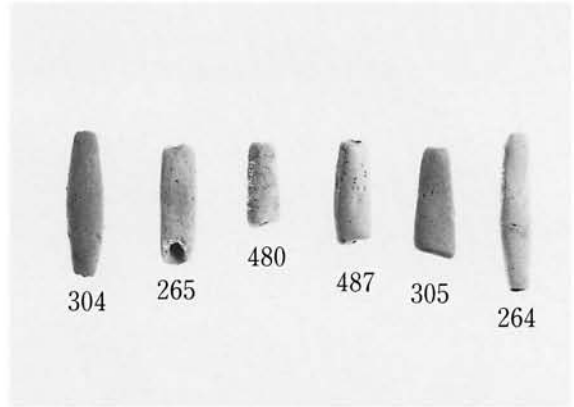
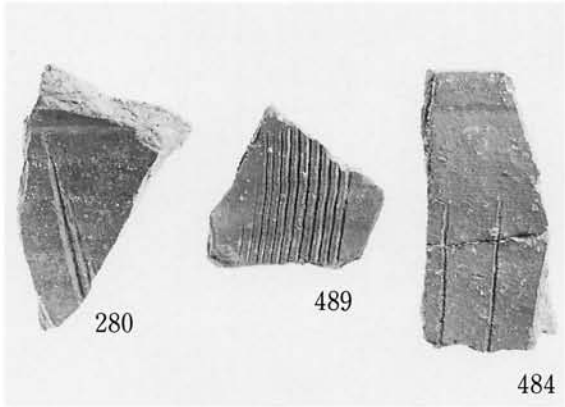
289(内面)













182



210



211



290



506



517

報告書抄録

ふりがな	こうちじょうせき							
書名	高知城跡							
副書名	伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	宮地早苗・曾我貴行							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 Tel0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうちじょうせき 高知城跡	こうちけんこうちし 高知県高知市 まるのうち 丸ノ内	39201	010081	33度	133度	19940704	930	伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査
			010082	33分	32分	1		
				30秒	00秒	19941006		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高知城跡	城館	中世 近世	溝状遺構 3 土坑状遺構 8 礎石 2 石列状遺構 1 ピット状遺構 多数	土師質土器、須恵器、瓦 質土器、土錘、焼塩壺、 青磁、白磁、染付、備前 鉢、陶磁器、瓦（軒丸 瓦、軒平瓦、丸瓦、平 瓦）、石鍋、石硯、砥 石、永楽通宝、寛永通 宝、煙管、鉄釘	中世に遡る遺構を確認。 近世初頭の土師質土器の一括資料が土坑状遺構から出土。			

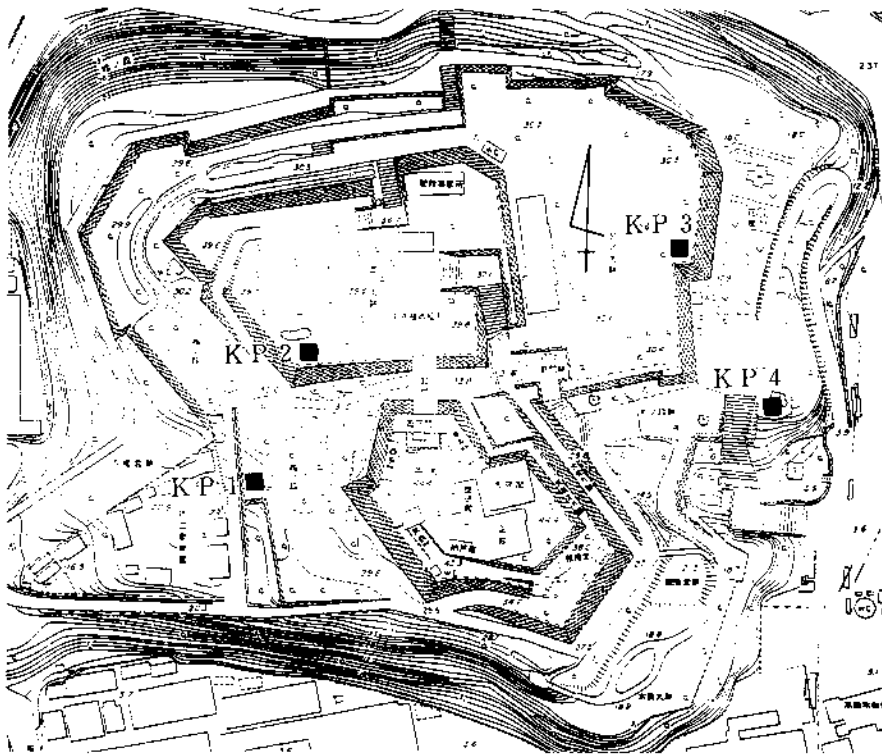
(附) 高知城跡基準点一覧

平成6年度の調査に関連して、高知城内に3級基準点4点を設置した。今後の調査に際しては、公共座標に基づく測量を実施することにより、調査地点・検出遺構等の相互関係をより鮮明に把握することが可能となろう。以下に各点（KP-1～KP-4）の、第IV系におけるX・Y座標、及び海拔高を記す。なお、基準点の設置はアジア航測株式会社へ委託し、GPS測量によって実施した。

基準点座標一覧

(単位：m)

名称	X	Y	H
KP-1	+61811.654	+3079.645	30.352
KP-2	+61853.172	+3106.659	39.500
KP-3	+61887.723	-3224.499	30.145
KP-4	+61834.739	-3258.692	17.088



基準点配置図

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第21集

高知城跡

伝御台所屋敷跡史跡整備事業
に伴う発掘調査報告書

1995. 3

発行 財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
TEL 0888-64-0671

印刷 川北印刷(株)